岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第489集

飯岡沢田遺跡第9・10次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県盛岡市

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第489集

飯岡沢田遺跡第9・10次発掘調査報告書　正誤表

頁	写真図版番号	行	誤	正
171	37	左上から3番目	89	84
178	44		140	190
179	45		152	252

飯岡沢田遺跡第９・10次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成16年度に発掘調査された盛岡市飯岡沢田遺跡第9・10次調査の成果をまとめたものであります。今回の調査では、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡を中心とする多くの遺構が見つかり、当時の集落の一部であったことが明らかとなりました。従来本遺跡は古墳時代末頃の墓域を中心とする遺跡でしたが竪穴住居跡の調査により奈良・平安の2時期にわたる集落としての性格もあわせもつことが分かりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　　言

1　本書は岩手県盛岡市飯岡新田1地割81－1ほかに所在する飯岡沢田遺跡の発掘調査報告書である。調査次数は第９・10次である。

2　発掘調査は「盛岡南新都市土地区画整理事業」に伴って行われた緊急発掘調査である。

3　発掘調査は独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所（第９次）と盛岡市都市整備部盛岡南整備課（第10次）の委託を受け、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査に関わる期間・面積は以下の通りである。

発掘調査　第９次　平成16年６月６日～７月６日
　　面積1,179㎡
　　第10次　平成16年４月12日～７月６日
　　面積4,626㎡
整理作業　第９次　平成16年11月１日～11月30日
　　第10次　平成16年12月１日～平成17年１月31日

5　現地調査は須原拓と亀澤盛行が担当した。整理作業及び本書の執筆は須原拓・西澤正晴・川又晋が担当し、編集は須原が行った（分担は本文中に記載）。

6　本書で用いる方位は座標北を示す。レベル高は海抜である。

7　遺物番号は種別にかかわりなく、連番を付した。写真図版に示した番号は本文中の遺物番号に対応する。

8　土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。

9　調査にあたり以下の機関・方々の協力、教示を得た。

石川日出志、日下和寿、神原雄一郎、工藤雅樹、今野公顕、佐々木亮二、佐藤敏幸、佐藤祐輔、品川欣也、高橋誠明、盛岡市教育委員会

10　調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過…… 1
2　調査の方法と経過…… 2

Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境…… 4
2　周辺の遺跡と過去の調査…… 4

Ⅲ　調査成果

1　調査の概要と基本層序…… 11
2　調査内容
(1)　竪穴住居跡…… 13
(2)　竪穴状遺構…… 38
(3)　掘立柱建物跡…… 40
(4)　土　　坑…… 46
(5)　溝　　跡…… 68
(6)　「古　墳」…… 75
(7)　旧　河　道…… 81
(8)　不明遺構…… 98
(9)　遺構外出土遺物 …… 100

Ⅳ　自然科学分析

1　炭化種子同定 …… 102
2　出土骨鑑定 …… 105

Ⅴ　考古学分析

1　弥生時代の遺物について…… 106
2　竪穴住居出土の土師器について……109
3　飯岡沢田遺跡のいわゆる「古墳」について ……113

Ⅵ　総　　括……118

報告書抄録…… 186

図版目次

第１図　遺跡位置…… 1
第２図　調査区地形図…… 2
第３図　周辺の遺跡…… 5
第４図　遺構配置図(1) …… 7
第５図　遺構配置図(2) …… 9
第６図　基本層序 …… 11
第７図　RA020竪穴住居跡出土遺物 …… 13
第８図　RA020竪穴住居跡カマド …… 14
第９図　RA022竪穴住居跡 …… 15
第10図　RA022竪穴住居跡カマド……16
第11図　RA022竪穴住居跡出土遺物……17
第12図　RA023竪穴住居跡……18
第13図　RA023竪穴住居跡カマド……19
第14図　RA023竪穴住居跡出土遺物……20
第15図　RA024竪穴住居跡出土遺物……21
第16図　RA024竪穴住居跡……22
第17図　RA024竪穴住居跡カマド……23
第18図　RA025竪穴住居跡……25
第19図　RA025竪穴住居跡カマド……26
第20図　RA025竪穴住居跡出土遺物……27
第21図　RA026竪穴住居跡出土遺物……27
第22図　RA026竪穴住居跡……28
第23図　RA026竪穴住居跡カマド……29
第24図　RA027・RA027竪穴住居跡カマド……30
第25図　RA028竪穴住居跡……31
第26図　RA028竪穴住居跡カマド……32
第27図　RA028竪穴住居跡出土遺物……33
第28図　RA029竪穴住居跡……34
第29図　RA029竪穴住居跡カマド……35
第30図　RA029竪穴住居跡出土遺物……36
第31図　RA031竪穴住居跡……37
第32図　RE006竪穴状遺構…… 38
第33図　RE006竪穴状遺構出土遺物１…… 39
第34図　RE006竪穴状遺構出土遺物２…… 39
第35図　RB003掘立柱建物跡出土遺物…… 40
第36図　RB004掘立柱建物跡出土遺物…… 40
第37図　RB003掘立柱建物跡…… 41
第38図　RB004掘立柱建物跡…… 42
第39図　RB005掘立柱建物跡…… 43
第40図　RB006掘立柱建物跡…… 44
第41図　RB006掘立柱建物跡出土遺物…… 44
第42図　RB007・008掘立柱建物跡 …… 45
第43図　RB007掘立柱建物跡出土遺物…… 45
第44図　RD090～RD098土坑…… 47
第45図　RD099～RD107土坑…… 50
第46図　RD108～RD118土坑…… 54
第47図　RD119～RD129土坑…… 57
第48図　RD130～RD138土坑…… 59
第49図　RD139～RD148土坑…… 62
第50図　RD149～RD151・RD154・RD155土坑…… 63
第51図　RD152・153 土坑…… 65
第52図　RD土坑出土遺物 …… 66
第53図　RD153土坑出土遺物…… 66
第54図　RG013溝跡…… 68
第55図　RG014・008溝跡(1)…… 69
第56図　RG014・008溝跡(2)…… 70
第57図　RG014溝跡出土遺物…… 70
第58図　RG015溝跡…… 71
第59図　RG016溝跡…… 72
第60図　RG017溝跡…… 73
第61図　RG016溝跡出土遺物…… 74
第62図　RG017溝跡出土遺物…… 74
第63図　RZ044古墳…… 76
第64図　RZ044古墳(合成)…… 77
第65図　RZ044古墳出土遺物…… 78
第66図　RZ048古墳…… 79
第67図　RZ048古墳出土遺物…… 80
第68図　旧河道……83
第69図　弥生土器１……85
第70図　弥生土器２……86
第71図　弥生土器３……87
第72図　弥生土器４……88
第73図　弥生土器５……89
第74図　出土石器１……92
第75図　出土石器２……93
第76図　出土石器３……94
第77図　出土石器４……95
第78図　出土石器５……96
第79図　出土石器６……97
第80図　RZ049不明遺構…… 98

第81図　RZ049不明遺構断面…… 99
第82図　RZ049不明遺構出土遺物 ……100
第83図　遺構外出土遺物 …… 101
第84図　飯岡沢田遺跡より出土した炭化種実…… 104
第85図　RA025竪穴住居跡カマド燃焼部出土焼骨…105
第86図　坏の分類 …… 109
第87図　甕の分類 …… 110
第88図　遺物の出土位置…… 110

写真図版目次

写真図版１　航空写真１ …… 135
写真図版２　航空写真２ …… 136
写真図版３　遺跡状況・基本層序 …… 137
写真図版４　RA020竪穴住居跡 …… 138
写真図版５　RA022竪穴住居跡 …… 139
写真図版６　RA023竪穴住居跡 …… 140
写真図版７　RA024竪穴住居跡 …… 141
写真図版８　RA025竪穴住居跡 …… 142
写真図版９　RA026竪穴住居跡 …… 143
写真図版10　RA027竪穴住居跡 …… 144
写真図版11　RA028竪穴住居跡 …… 145
写真図版12　RA029竪穴住居跡 …… 146
写真図版13　RA030竪穴住居跡 …… 147
写真図版14　RE006竪穴状遺構 …… 148
写真図版15　RG013・014溝跡…… 149
写真図版16　RG008・014溝跡…… 150
写真図版17　RG016～018溝跡…… 151
写真図版18　RB003～005掘立柱建物跡…… 152
写真図版19　RB006～008掘立柱建物跡…… 153
写真図版20　RZ044古墳 …… 154
写真図版21　RZ048・049古墳…… 155
写真図版22　旧河道 …… 156
写真図版23　現地説明会 …… 157
写真図版24　RD090～097土坑…… 158
写真図版25　RD098～107土坑…… 159
写真図版26　RD108～115土坑…… 160
写真図版27　RD116～123土坑…… 161
写真図版28　RD124～136土坑…… 162
写真図版29　RD138～153土坑…… 163
写真図版30　出土土器１ …… 164
写真図版31　出土土器２ …… 165
写真図版32　出土土器３ …… 166
写真図版33　出土土器４ …… 167
写真図版34　出土土器５ …… 168
写真図版35　出土土器６ …… 169
写真図版36　出土土器７ …… 170
写真図版37　出土土器８ …… 171
写真図版38　出土土器９ …… 172
写真図版39　出土弥生土器１ …… 173
写真図版40　出土弥生土器２ …… 174
写真図版41　出土弥生土器３ …… 175
写真図版42　出土弥生土器４ …… 176
写真図版43　出土弥生土器５ …… 177
写真図版44　出土弥生土器６ …… 178
写真図版45　出土弥生土器７・出土石器１ ……179
写真図版46　出土石器２ …… 180
写真図版47　出土石器３ …… 181
写真図版48　出土石器４ …… 182
写真図版49　出土石器５ …… 183
写真図版50　出土土製品・石製品 …… 184
写真図版51　出土陶磁器・鉄器 …… 185

表 目 次

第１表　過去の調査歴 …… 6
第２表　飯岡沢田遺跡第10次調査出土炭化種実 … 102
第３表　トゥールの内訳 …… 108
第４表　母岩別重量 …… 108
第５表　剥片の分類 …… 108
第６表　組成表 …… 111
第７表　出土遺物一覧表 …… 115
第８表　重複例 …… 116
第９表　古代土器観察表 …… 122
第10表　陶磁器観察表 …… 126
第11表　縄文・弥生土器観察表 …… 126
第12表　石器観察表 …… 131
第13表　土製品・石製品観察表 …… 132
第14表　金属製品観察表 …… 132

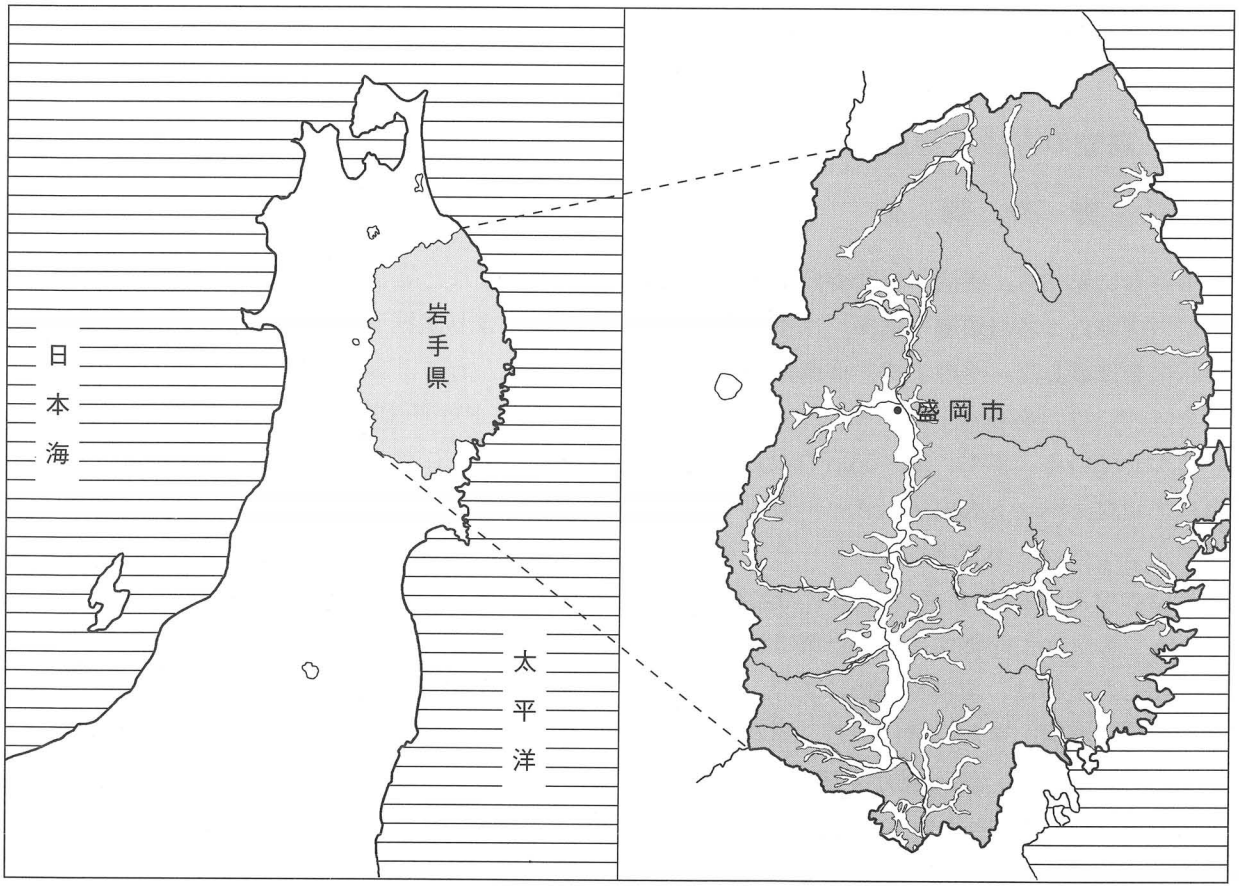
Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成２年９月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。その結果、平成３年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積約313 haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられ、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定した上で、(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として、当埋蔵文化財センターが本調査を行っている。

本遺跡第９・10次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業として確定した。その内訳は、第９次調査が独立行政法人都市再生機構委託分の都市計画道路用地内1,099㎡を平成16年６月６日から７月６日まで、第10次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分の宅地用地内4,794㎡を、平成16年４月12日から７月６日までとなっている。なお終了確認の際、調査区を拡張するよう要請されるなどの経緯を経て、最終的な調査面積は第９次が1,179㎡、第10次が4,626㎡となっている。



第1図　遺跡位置

第2図　調査区地形図

2　調査の方法と経過

（1）野　外　調　査

本調査に先立ち、盛岡市教育委員会により試掘調査が実施され、第９・10次調査区が設定された。

担当調査員２名（須原・亀澤）は本調査開始時に、任意により試掘トレンチを設定し、表土下の地層状況を確認した。その上で、重機使用による表土除去後、人力による遺構検出作業を行っている。調査区内には、あらかじめグリッドを設定している。グリッドは平面直角座標第Ｘ系（日本測地系）にあわせている。まず、50×50ｍの大区画に区割りし、北から南にアラビア数字（１～）を、西から東にアルファベット大文字（Ａ～）を付した。さらに大区画を２×２ｍの小区画に細分し、西から東にアルファベット小文字（ａ～ｙ）を、北から南にアラビア数字（１～25）を付した（第４図遺構配置図脇のマス目参照）。各グリッドの名称については、大区画と小区画の組み合わせで、例えば「４Ｆ１ａ」のように呼称する。また第３次、５次調査の際に設定したものに準じている。

検出した遺構は、規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し、精査を行った。各遺構について、平面、断面、また必要に応じ、遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。

写真撮影は主に、35㎜判カメラ2台（モノクロ・カラーリバーサル）を使用し、必要に応じ、６×７㎝判カメラ1台（モノクロ）を使用した。

普及活動の一環として、平成16年６月26日（土）に現地説明会を行い、第９・10次、それぞれの調

査成果を公表した。

平成16年６月28日（月）に委託者、県教育委員会、盛岡市教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。第10次調査区について、南東側の調査区外に遺構が広がっており、その範囲を確認するため、調査区を拡張するよう指示を受けた。そこで遺構の見受けられる箇所まで拡張した。

平成16年７月６日（火）に再度、終了確認を受け、この日をもって調査を終了した。

（２）遺構の名称

盛岡市教育委員会の調査・整理方法に準じ、遺構の名称には以下のような略号を付している。

竪穴住居跡・・・ＲＡ　掘立柱建物跡・・・ＲＢ　土坑・・・ＲＤ　竪穴状遺構・・・ＲＥ
溝跡・・・ＲＧ　古墳、周溝および性格不明遺構・・・ＲＺ

（３）室内整理

第9次調査分は、平成16年11月1日から11月30日に、また第10次調査分は、平成16年12月1日から平成17年１月31日に室内整理作業を行った。

遺物は野外作業の段階で水洗を終えており、室内作業ではそれ以降の工程（注記、接合復元、実測、トレース、図版作成）を作業員が分担して行った。なお、石器の実測、トレースは（株）アルカに委託した。

遺構図版については、野外調査時に作成した図面を基に、（株）セビアスに図版作成を委託した。

調査員は、その間、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。

なお、図面の縮尺については、各図版内に縮尺とスケールを提示している。

Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境

飯岡沢田遺跡が所在する盛岡市は地理的に区分すると、北上川、雫石川を境として大きく３分される。このうち遺跡が所在する雫石川以南・北上川以西の地域は、奥羽山脈から供給された多量の土砂により広大な平野部が形成されている。ここはさらに雫石川による開析によっていくつかの段丘面が形成されている。古代の遺跡が立地するのはこのうちもっとも低位の段丘となっている。

これら段丘は旧雫石川およびその中小支流により、いくつかに区分されており、この状況は現地表面の観察からも読みとることができ、網の目状にこれらの旧河川が入り組んでいる状況が窺える。旧河川跡は現在でも地形的に低い部分となっており、水田として利用されている。いくつかに区分された段丘はおもに住宅地として利用されている。こういった土地の利用形態は今回の土地開発が行われるまで、古代から続く普遍的な状況であったようである。

このような旧河川によって取り残された微高地上の高まり（自然堤防）に古代の集落は立地しているのであり、今回報告する飯岡沢田遺跡についても同様である。なお、現在の雫石川は遺跡の北方1.5㎞を東流する。本遺跡の標高は123～124ｍを測る。

2　周辺の遺跡と過去の調査

（1）周辺の遺跡

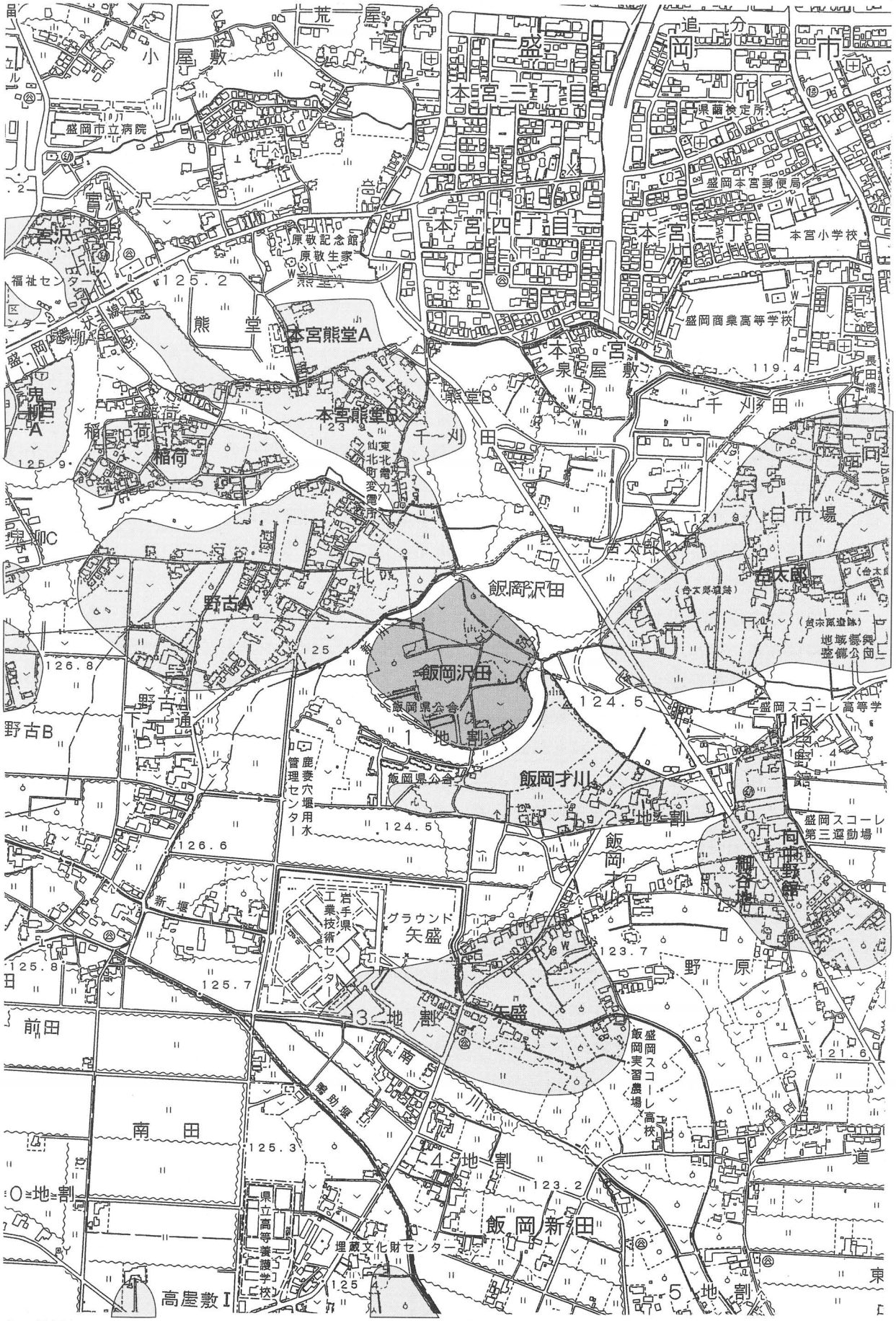
飯岡沢田遺跡周辺には前節で述べたように、いくつかの旧河川によって小さく区切られた自然堤防ごとに古代の集落が存在する。本遺跡を中心にみると、北側には野古Ａ遺跡が、南側には飯岡才川遺跡が、西側には台太郎遺跡がそれぞれ所在し、それぞれの遺跡は旧河道たる低地部分により区分されていると考えられる。

鹿妻堰を挟んですぐ北側に隣接する野古Ａ遺跡はこれまで22次にわたる調査が行われてきた。その結果、７世紀後半～８世紀後半と９世紀後半～10世紀前半を中心とする２時期の集落であることが判明している。

東側に位置する台太郎遺跡はこれまで53次にわたる調査が行われている。中世や近世の痕跡も確認されているが、遺跡の中心は古墳時代～平安時代となる。この時期を詳しくみると野古Ａ遺跡と同様７世紀後半～８世紀後半、９世紀後半～10世紀前半の２時期に分かれる。この遺跡最大の特徴は７世紀後半～８世紀代にかけての集落であろう。最近の調査では、湖西産の須恵器やいわゆる「関東系」土師器が出土するなど他地域との関連が考えられるようになっている。また、それにともなって土器の年代観がひきあげられつつあり、集落の開始時期が少なくとも７世紀中葉までひきあげられる可能性が高くなった。したがって、周辺ではもっとも古い集落となり、遺構数、「関東系」土師器などの搬入遺物などあわせて他の遺跡では追随を許さない拠点的な集落であったことが伺える。

南に位置する飯岡才川遺跡は現地表からも観察される旧河道をはさんで南側に位置する自然堤防上にある。これまで６次にわたる調査が行われ、その結果、９世紀を中心とする集落跡であることが判明しており、７・８世紀にわたる遺構は今のところ発見されていない。注目されるのは小型ながらも総柱式掘立柱建物跡が４棟検出されている点である。このほか１辺が７ｍ以上の竪穴住居跡も複数検

盛岡市教育委員会（2000）を基に作成



第3図　周辺の遺跡

出されている。該期における総柱式掘立柱建物跡は、地域における拠点的な遺跡からしか検出されていないことから（西澤・小針2005）、今後の調査によっては、平安期における地域の拠点集落になり得る可能性がある。

このように飯岡沢田遺跡は、古代の各時期における拠点的な集落にはさまれた地域に立地しているのである。この点は本遺跡の形成過程や性格を考える上では重要になるものと思われる。

（2）過去の調査歴

当センター・盛岡市教育委員会によって、表１のように過去８度にわたる調査が行われている（試掘を含む）。遺跡推定範囲の面積は約75,000㎡であり、今回報告分を含めると、推定遺跡範囲全体の約30%を調査したことになる。

これまでの調査によって、本遺跡から７世紀末～10世紀にかけての集落、７世紀から８世紀にかけての墓域、18～19世紀にかけての集落が確認されている。このうち、中心である飛鳥時代～奈良時代にかけての集落・墓域について以下簡単に触れておきたい。

竪穴住居はこれまで30軒調査されている（今回報告分を含む）。このうち７世紀末～８世紀にかけてのものが20軒と大半を占める。立地・占地をみると、墓域を挟んでその両側に展開する。墓域の北側に展開する住居群はやや散在し、規則性がない。墓域の南側に位置する住居群は、今回見つかった７棟の住居で、墓域から一段低くなった場所に、南北方向に並ぶように位置していた。いずれも、古墳や墳墓と重複することはない。

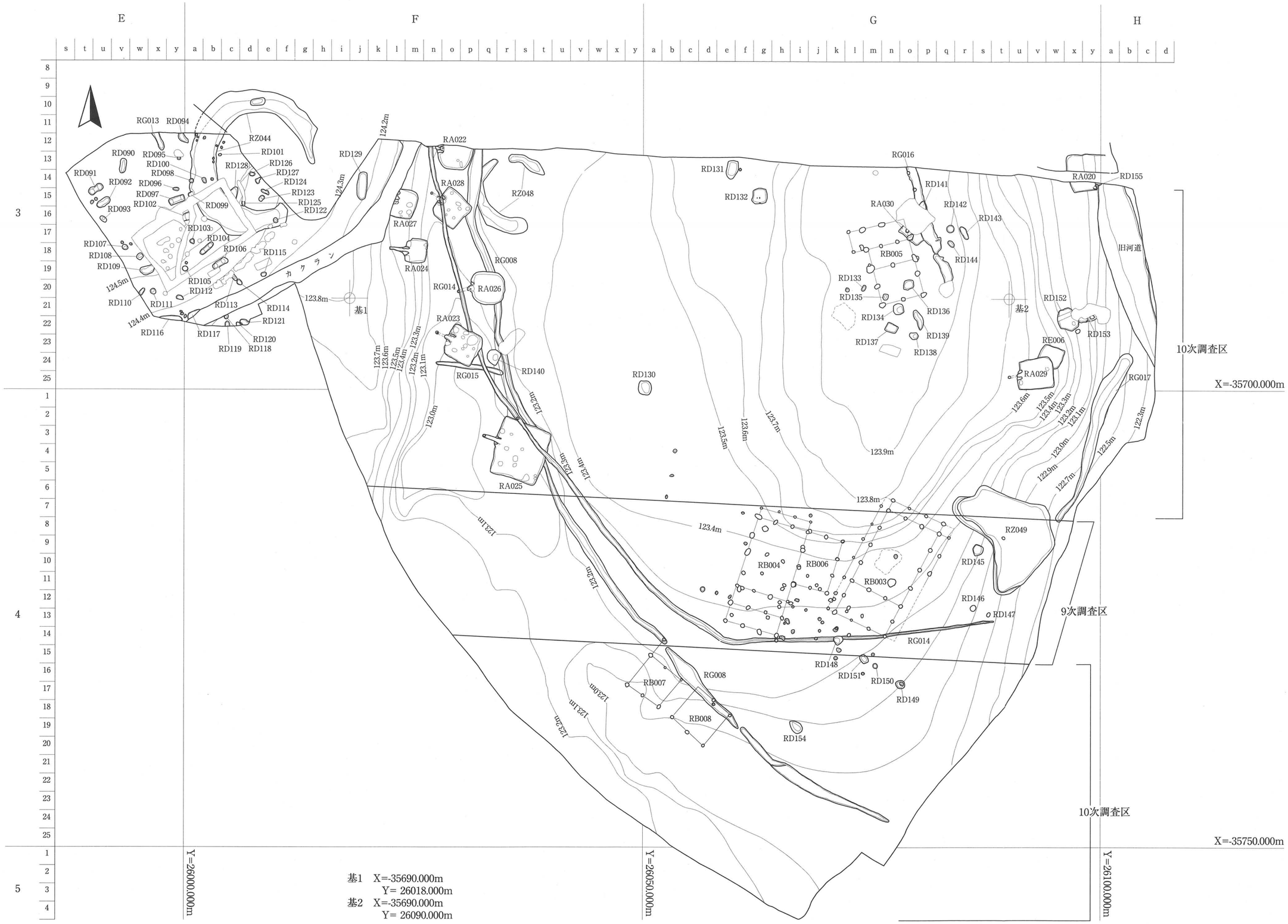
「古墳」は主体部が削平されたものを含めるとこれまでに21基調査されている。このうち主体部をもつものは５基、それ以外が16基である。他に、比較的小型で、円形や方形に周溝が巡るものが7基、不整形に周溝が巡るものも17基確認されており、これらの類もまた墳墓であると考えるなら、合わせて45基が確認されており、非常に大規模な墓域であったことが伺える。これらの時期は過去の報告では９世紀代と考えられているが、おもに周溝からの出土であるため決定的ではない。このほか平安期以降の墳墓と考えられる大型の方形周溝が１基確認されている。この遺構は内容的にも不明であるが、時期は古墳よりも降る可能性が考えられている。また、火葬骨をおさめた蔵骨器も１点検出されるなど、本遺跡は古墳時代から平安時代にかけて継続して墓域、祭祀域として存在していたことが考えられている。

このように飯岡沢田遺跡は、周辺では稀な墓域を有する遺跡であり、該期の社会構成を探る上では欠くことのできない重要な遺跡であることが判明しつつある。問題点として、集落と古墳、墳墓との時期関係の把握がある。この地域では細かな土器編年が存在しないため、集落と古墳（墳墓）が同時に存在していたか時期差があるかは明らかとなっていない。また、古墳の時期決定にも課題が残るなど年代に関しては多くの問題が残っているのである。

第１表　過去の調査歴

次数	調査主体	期　間	面　積	試／本	調査原因	文　献
1	市教委	H7. 9. 21～9. 22	384	試掘	盛南開発	
2	市教委	H8. 10. 28～11. 1	2, 965	試掘	盛南開発	
3	センター	H13. 4. 16～11. 12	10, 670	本調査	盛南開発	1
4	市教委			試掘	盛南開発	
5	センター	H14. 4. 9～6. 5	1,773	本調査	盛南開発	2
6	市教委	H14. 7. 22	10	本調査	盛南開発	
7	市教委	H14. 11. 12～11. 14	171	試掘	盛南開発	
8	市教委	H15. 5. 8～5. 30	2, 638	本調査	盛南開発	
9	センター	H16. 6. 1～7. 6	1, 179	本調査	盛南開発	本書
10	センター	H16. 4. 12～7. 6	4, 626	本調査	盛南開発	〃

＊ 文献１　半澤武彦2003『飯岡沢田遺跡第3次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第418集
　文献２　半澤武彦2003『飯岡沢田遺跡第5次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第419集


E
F
G
H
RG013
RD094
RZ044
RD101
RD090
RD095
RD100
RD098
RD128
RD126
RD127
RD091
RD092
RD096
RD124
RD097
RD123
RD102
RD099
RD125
RD122
RD093
RD103
RD104
RD107
RD106
RD115
RD108
RD109
RD105
RD112
RD110
RD111
RD113
RD114
RD121
RD116
RD117
RD120
RD119
RD118
124.5m
124.4m
124.2m
124.3m
RD129
カクラン
123.8m
基1
RA022
RA028
RZ048
RA027
RA024
RG008
RG014
RA026
RA023
RD140
RG015
RA025
123.7m
123.6m
123.5m
123.4m
123.3m
123.2m
123.1m
123.0m
122.3m
RD131
RD132
RD130
RG016
RD141
RA030
RD142
RD143
RB005
RD144
RD133
RD135
RD136
RD134
RD139
RD137
RD138
123.5m
123.6m
123.7m
123.9m
123.8m
123.4m
RB004
RB006
RB003
RD145
RZ049
RD146
RD147
RG014
RD148
RD151
RD150
RD149
RG008
RB007
RB008
RD154
RA020
RD155
旧河道
基2
RD152
RD153
RE006
RA029
RG017
122.3m
122.5m
122.9m
122.7m
10次調査区
9次調査区
10次調査区
X=-35700.000m
X=-35750.000m
Y=26000.000m
Y=26050.000m
Y=26100.000m
基1　X=-35690.000m
Y= 26018.000m
基2　X=-35690.000m
Y= 26090.000m
0
(1：400)
20m

第4図　遺構配置図（1）

第５図　遺構配置図（2）　第3・5・9・10次調査

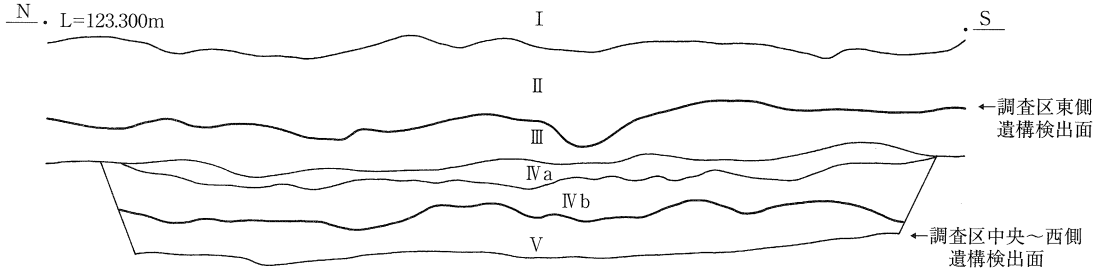
Ⅲ 調 査 成 果

1 調査の概要と基本層序

今回の調査区は第３次調査区の東南側、第5次調査区の南側に位置する。調査区内の地形については第２図を参照されたい。調査区北西隅は第3次調査区から続く、古代の墓域に相当する。平坦地で、今回の調査区内で最も標高が高く、124.5m付近を測る。墓域から東に至ると１～1.5m低くなる。調査区中央からやや東側にかけ、標高123.9mを計る平坦面が見受けられ、また、調査区東端ではやや傾斜が急になり、旧河道へと続く。調査区西、南側は比較的緩やかに傾斜している。調査区中央から東側にかけては、もともとの地形が高いためか、削平をうけ、表土直下にⅤ層が露出していた。この付近では近世を中心とする遺構が発見されているが、さらに多くの遺構があった可能性がある。

古代を中心とする遺構は調査区の西側に集中している。地形がゆるやかな窪地状を呈する地形に奈良時代の竪穴住居跡が並んでいるのが確認された。この場所は第３・５次調査において、旧河道とされていた部分の延長に位置している。今調査で、トレンチを入れ、土層を確認したが、旧河道として認知する根拠に乏しい。恐らく古代以前に沢状地形であった場所にⅡ層土が堆積したものと思われる。従って、今回は旧河道としては表記していない。また、前回の調査で発見されたいわゆる「古墳」についても一部が調査区北西端で見つかっている。なお、注目すべき点として、調査区東端にあった旧河道から弥生土器や石器がまとまって出土していることが挙げられる。

今回の調査では、合計67.8kgの遺物が出土している。その内訳は、土師器が25.4kg、須恵器が12.7kg、弥生土器が25.6kg、石器は2.7kg、その他、陶磁器0.7kg、古代の土製品・石製品が0.2kg、鉄製品が0.2kgとなっている。



第6図 基本層序

基本層序

Ⅰ層　灰黄褐色土（10YR4/2）　粘性弱　しまり密　白色の細砂、礫を少量含む　表土

Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/2）　粘性強　しまりやや密　土壌粒子は緻密。シルト質で、φ５㎜の火山灰（To-a）がブロック状で散在。この火山灰の有無から２層に細分できる部分もある。遺構の堆積土に近似する。

Ⅲ層　暗褐色土（10YR3/3）　粘性強　しまり密　土壌粒子は緻密。シルト質で、φ５～10㎜の黄褐色ロームブロック少量、赤色・白色の粒子が全体に散在。調査区の西側はこの上面が検出面としている。

Ⅳa層　褐色ローム漸移層（10YR4/4）　粘性やや強　しまり密　土壌の粒子は緻密だが、Ⅲ層よりは粗い。下部に黄褐色ローム土が少量偏在。

Ⅳb層　黄褐色ローム（10YR5/6）　粘性やや弱・しまりやや密　土壌の粒子やや粗く、Ⅴ層を少量含む。

Ⅴ層　明黄褐色砂礫（10YR6/6）　粘性弱・しまりやや密　土壌の粒子は非常に粗い。下層に向かうほど土壌の粒子は粗くなる。下部に10～100㎜大の礫を多量に偏在。調査区中央から東側はⅣb層下部からⅤ層にかけて検出。

第３・５次調査の層序と対比すると以下のようになる。

３・５次	９・10次
１層	Ⅰ・（Ⅱ層）
２層	Ⅲ層
３層	Ⅳa・Ⅳb層
４層	Ⅴ層

2　調　査　内　容

（1）竪穴住居跡（RA）

10棟検出した。過去の調査で、21棟の竪穴住居跡が確認されており、それらに続く、ＲＡ022～030とした。

RA020竪穴住居跡（第７・８図）

調査区北西隅、３H14aグリッドに位置する。検出面はＶ層上面で、黒褐色土の広がりとして検出した。北側半分は第5次調査区内にあり、既に報告されている。今回の調査では、遺構の南側約半分を確認することができた。東側は旧河道の範囲内にあり、その影響のため、残存状況が悪い。

平面形は長方形で、規模は65×125cmである。第5次調査で確認した北半分と合わせると、遺構の全体は方形で、4.2×4.4mの規模であったことが伺える。

床面は、旧河道のある東側に向かってやや下がり気味に傾斜している。住居壁は外傾し立ち上がる。確認面から床面までの深さは、西壁で25cmである。東壁は残存しない。

堆積土は３層に分けられる。黒褐色土を主体とする。床面直上に焼土を確認しているが、原位置を保っているものではない。また貼り床は確認できなかった。

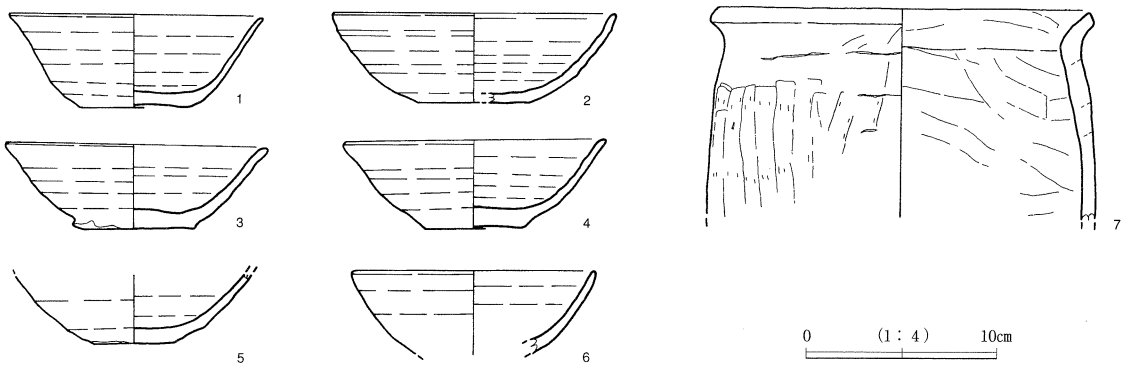
カマドは、南東隅に位置する。袖の一部と燃焼部焼土を確認したが、煙道は確認できなかった。旧河道の影響で流失した可能性が高い。カマドが住居の隅に位置することから、煙道は壁に直交せず斜め方向に取り付けられていた可能性も考えられる。袖は黒色土で構築される。床面から最高14cmの高さまで残存していた。礫数点が袖に刺さった状態で出土しており、芯材として使われたものと考えられる。燃焼部焼土は30×20cmの範囲で広がり、床面から深さ4cmまで焼成していた。袖・焼土の下には深さ20cmの掘りかたが確認されており、カマド構築前に掘られたものと考えられる。掘り方の埋土は黒色土で、焼土・炭化物粒を含む。

ピットは確認していない。また南壁際から完形の坏２点（１・４）が口縁部を合わせた状態で重なって出土した。床下8cmまで掘り込み、下の坏が完全に床下に埋まっていた。従って、上の坏４は床面上からは伏せた状態で検出した。

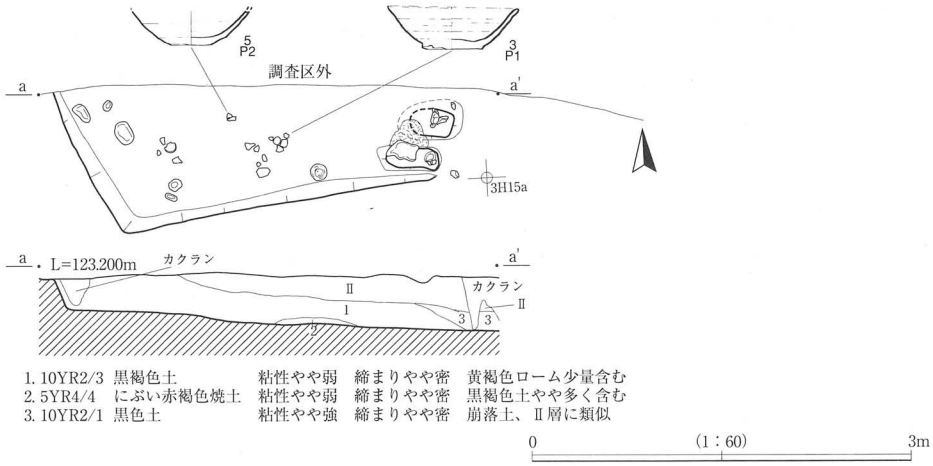
遺物は、埋土・床面を中心に土師器が1,725ｇ出土している。そのうち７点（927ｇ）を図示した。

１～６は坏形土器（以下、坏と略す。）である。３・５は床面上から出土している。１・３・４は直線気味に開く体部をもち、口縁部がわずかに外反する特徴を持つ。４のみは体部下半がほかよりもゆるやかであり、器形が異なる。２・６は内湾気味に立ち上がる体部をもつ。いずれも調整は内外面とも回転ナデである。７は甕形土器（以下、甕と略す。）であり、底部を欠損している。短く外反する口縁部をもち、端部に広い面が形成される。頸部付近には粘土紐痕が残る。調整は口縁部にヨコナデ、体部に縦位のヘラケズリが施される。

時期は遺構の状況および出土遺物から９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。　（川又）

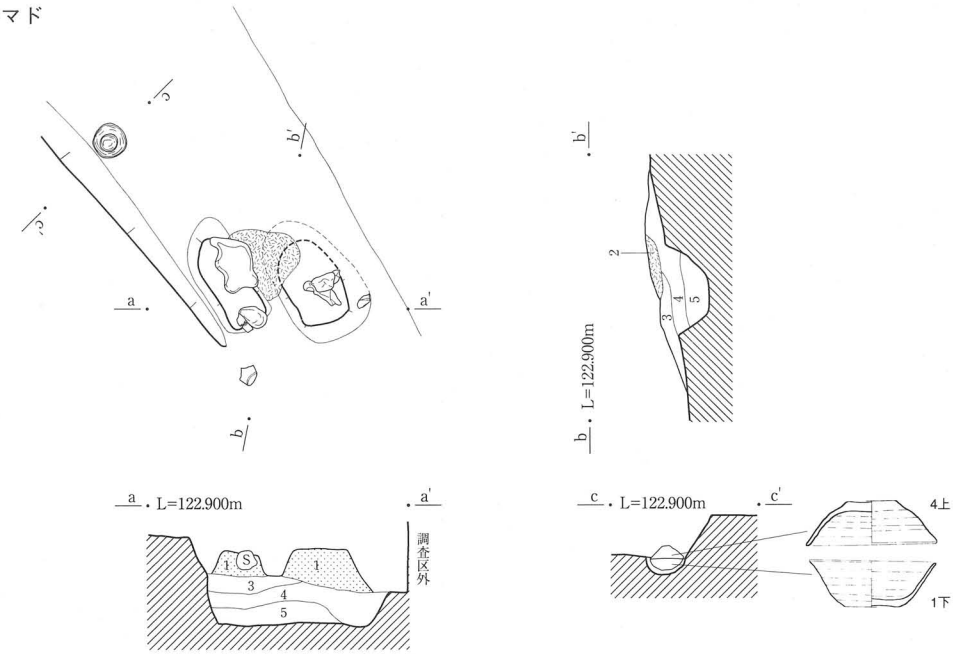


第7図　RA020竪穴住居跡出土遺物



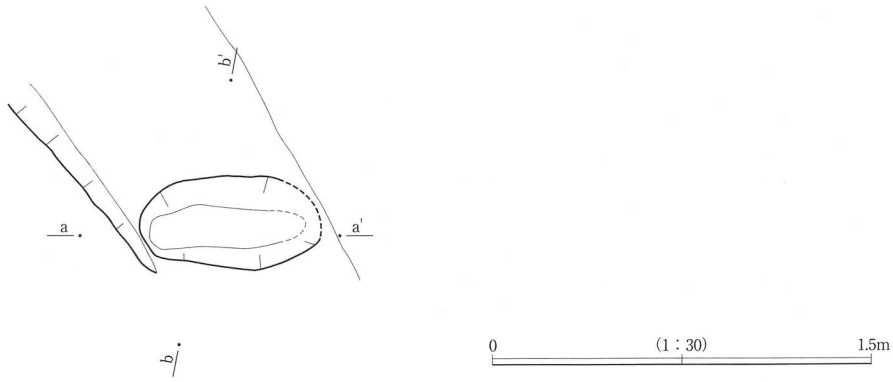
1. 10YR2/3　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　黄褐色ローム少量含む
2. 5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性やや弱　締まりやや密　黒褐色土やや多く含む
3. 10YR2/1　黒色土　粘性やや強　締まりやや密　崩落土、Ⅱ層に類似

RA020カマド



1. 10YR2/1　黒色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒・炭化物微量、黄褐色ローム少量含む（袖部）
2. 5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性やや弱　締まりやや密　黒色土微量含む
3. 10YR2/1　黒色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒多量、炭化物少量含む
4. 10YR2/1　黒色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒微量含む
5. 10YR2/1　黒色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒中量、炭化物微量含む

カマド掘りかた



第8図　RA020竪穴住居跡カマド

RA022竪穴住居跡（第６～８図）

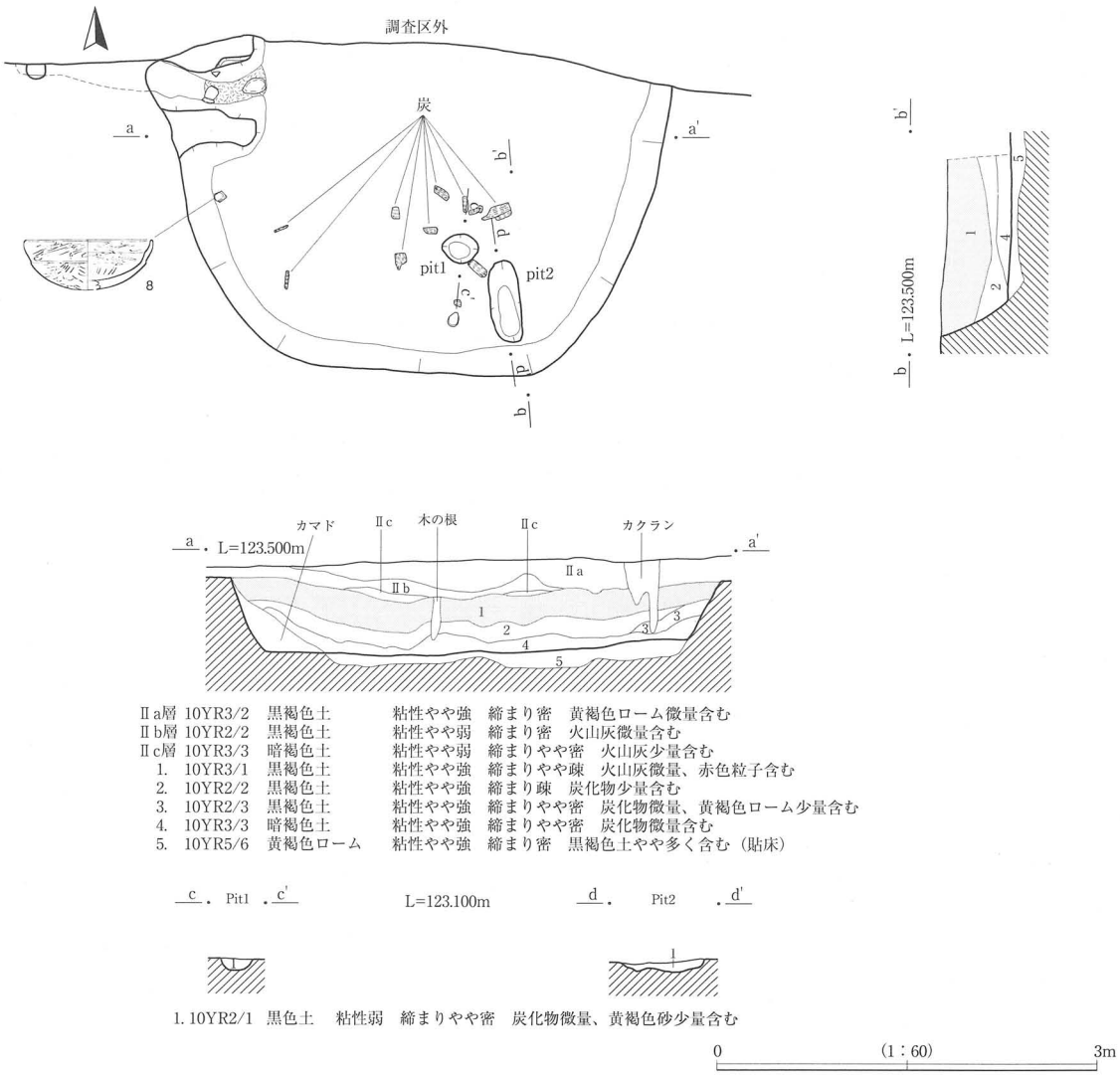
調査区北端、３Ｆ13ｏグリッドに位置する。北半分が調査区外へ広がるため完掘していない。現状で本遺構からはカマドが１基、ピット２個が確認される。ＲＧ008・014と重複しており、本住居跡が最も新しい。

検出はⅢ層上面であり、黒褐色土と灰白色火山灰の広がりをもって確認した。

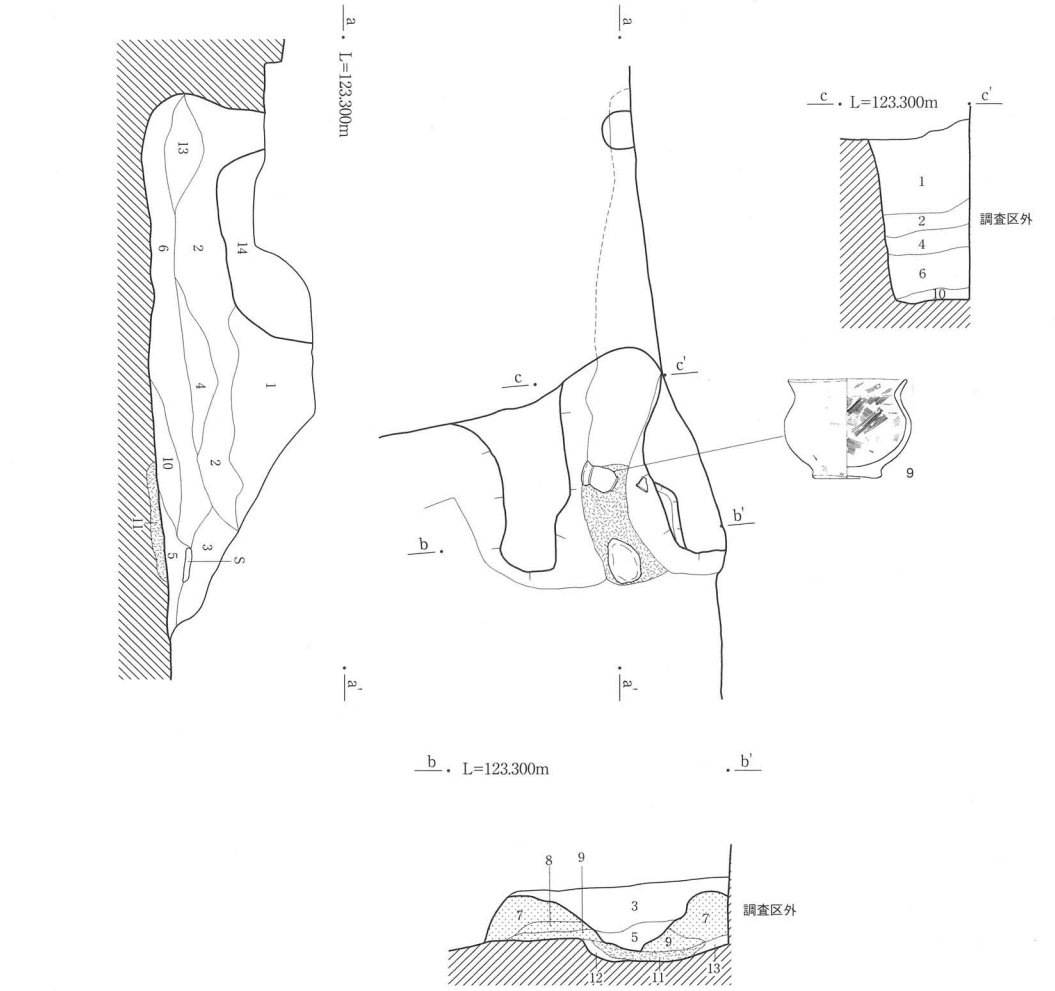
平面形は調査区内で確認できた範囲で推定すると、方形を基調とするものの、隅が丸く明瞭でない形状を呈する。規模は確認できた西壁と東壁間では3.7ｍである。住居方位はカマド主軸を基準とするとＮ－85°－Ｗであり、ほぼ西にむく。

住居壁は斜位に立ち上がり、床面までの深さは確認面より55cmであり、良く残存している。床面は調査区内においてはほぼ平坦であるが、全体的に東側の方がやや高い。また、床面から炭化材が12点確認された。ただし、焼土は検出していないので、焼失住居の可能性は低い。検出した炭化材のうち１点の鑑定を行い、その結果ケヤキと判明した。貼り床は黄褐色ロームと黒褐色土との混合土で強く締まる。

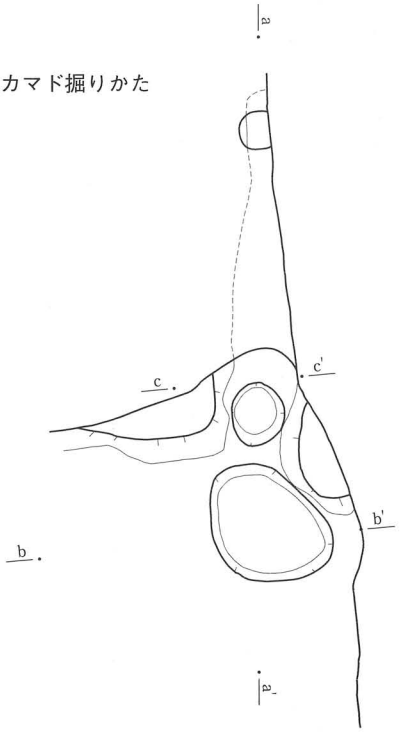
堆積土は４層に分層できる。１～３層は黒褐色土層であり、４層は暗褐色土である。上層である１層中には灰白色火山灰粒子がブロック状に含まれていた。



第９図　RA022竪穴住居跡



カマド掘りかた

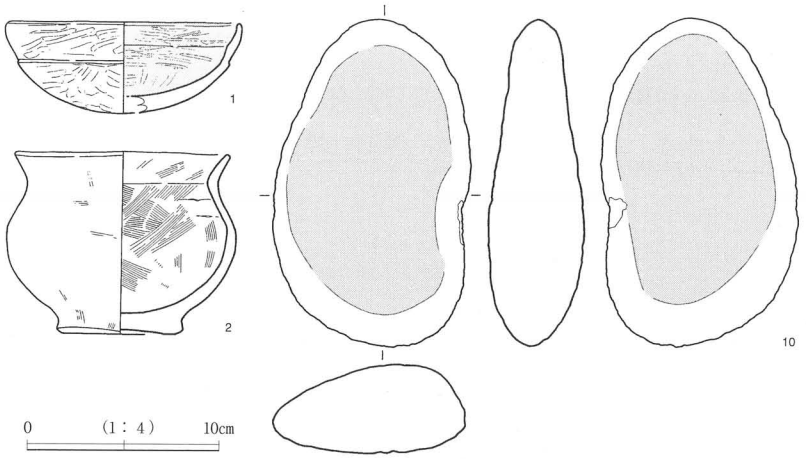


1. 10YR3/1	黒褐色土	粘性やや弱	締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
2. 10YR3/3	暗褐色土	粘性やや弱	締まりやや密　焼土粒微量、黄褐色ローム少量含む
3. 10YR3/4	暗褐色土	粘性やや強	締まり疎　粒径20mmの黄褐色ロームブロック少量含む
4. 10YR5/4	にぶい黄褐色ローム	粘性やや弱	締まり疎　黒褐色土少量含む
5. 10YR3/1	黒褐色土	粘性やや強	締まりやや密　黄褐色ローム少量含む
6. 10YR4/4	褐色土	粘性やや弱	締まりやや密　焼土粒中量、黒褐色土少量含む
7. 10YR5/6	黄褐色ローム	粘性強	締まり密　焼土粒・炭化物微量、暗褐色土少量含む（袖部）
8. 10YR4/6	褐色ローム	粘性強	締まりやや密　焼土少量含む（袖部）
9. 7.5YR6/6	橙色ローム	粘性やや強	締まりやや弱　焼土粒微量含む（袖部）
10. 10YR5/6	黄褐色ローム	粘性やや弱	締まりやや疎　暗褐色土がやや多く含む
11. 5YR4/8	赤褐色焼土	粘性やや弱	締まり疎　黒褐色土少量含む（燃焼部）
12. 10YR5/6	黄褐色砂	粘性やや弱	締まりやや疎　黒褐色土やや多く含む
13. 10YR2/3	黒褐色土	粘性やや弱	締まり密　炭化物微量、礫少量含む
14. 10YR2/3	黒褐色土	粘性やや強	締まり密　礫少量含む（天井部）

0　(1：30)　1.5m

第10図　RA022竪穴住居跡カマド

カマドは住居西壁にほぼ直交して設置されるが、その位置は不明である。右袖の一部、煙道、煙出しピットの一部が調査区外に広がる。カマド上部は削平のため残存せず下部のみとなり、左右袖、燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。袖間の幅は現状で最大84cm、残存する長さは左袖が76cmである。両袖とも床面から18cmの高さが残存している。



第11図　RA022竪穴住居跡出土遺物

袖間には50×18cmの範囲で燃焼部焼土が広がる。袖はローム土で構築されており、少量の暗褐色土が混じる。袖下部は燃焼部に近いためか、ローム土が橙色に変色していた。

煙道は住居北壁より西に102cm延び、先端に径15cmの煙出しピットが付設される。底面は住居床面より徐々に下がっていく。

カマド堆積土は12層が確認できる。暗褐色～黒褐色系のシルト層が大半である。袖間の堆積は２層が確認でき、３層が暗褐色土、５層が黒褐色土である。この５層の下位に焼土（11層）が広がり燃焼面となる。なお、この５層をサンプル採取し、水洗選別を行っている。15層は基本土層Ⅲ層であることから、煙道は地山をトンネル状に刳りぬいて構築されていることがわかる。

ピットは床面に２個構築されている。いずれも住居南東に位置する。

遺物は、堆積土を中心に1,891ｇ出土し、そのうち３点（1,794ｇ）を図示した。

８は坏である。西壁際の床面上から出土した。全体的に半球状を呈し、口縁端部が内側に屈曲する。口縁部と体部との境界には段が形成され、その痕跡は内面にも及ぶ。調整は内外面とも横位から斜位のミガキであり、内面に黒色処理が施される。９は小型の甕である。カマド燃焼部上に横倒しの状態で出土した。安定した底部をもち、体部中位に最大径をもつ。調整は磨滅が激しいがハケメが施されているのが確認できる。10の磨石はカマド燃焼部上から出土している

時期は遺構の状況および出土遺物から７世紀後葉～８世紀前葉に位置づけられる。

RA023竪穴住居跡（第12～14図）

調査区北西部、３Ｆ22ｏ～ｐグリッドに位置する。カマドが１基、ピットが11個付設される。ＲＧ014・015と重複しており、本住居跡が最も新しい。

検出はⅢ層上面であり、黒褐色土と灰白色火山灰の広がりをもって確認した。

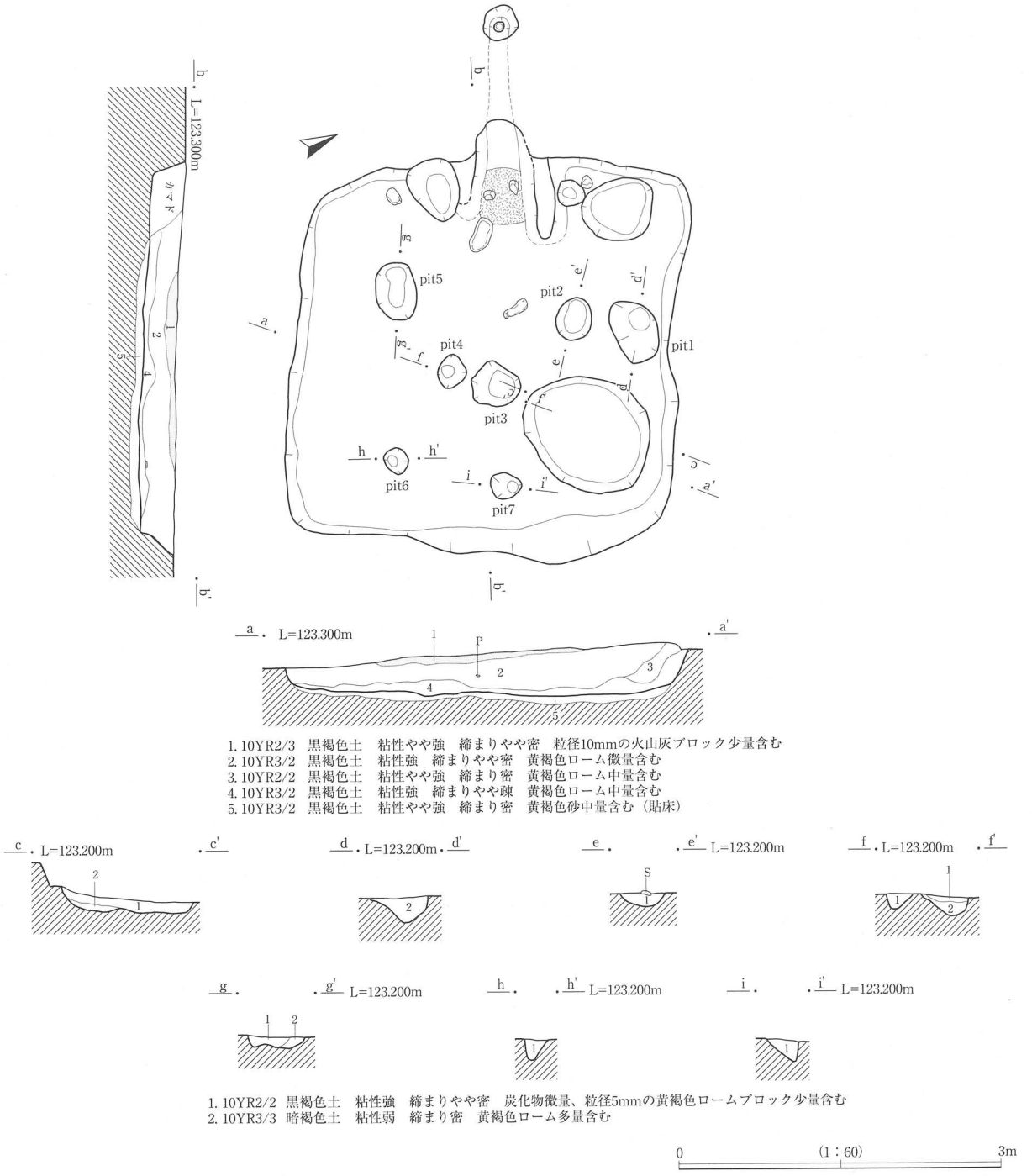
平面形は方形を基調とするもので、規模は確認できた南北壁間が3.8m、東西壁間が3.65m、床面までの深さが確認面から45cmである。住居方位はカマド主軸を基準とするとＮ－66°－Ｗである。

住居壁は、残存度の良い北壁をみると、床面からゆるやかに立ち上がり、床面は調査区内においてはほぼ平坦であるが、全体的に東側の方がやや低い。貼り床は黄褐色ロームと黒褐色土との混合土で強く締まる。

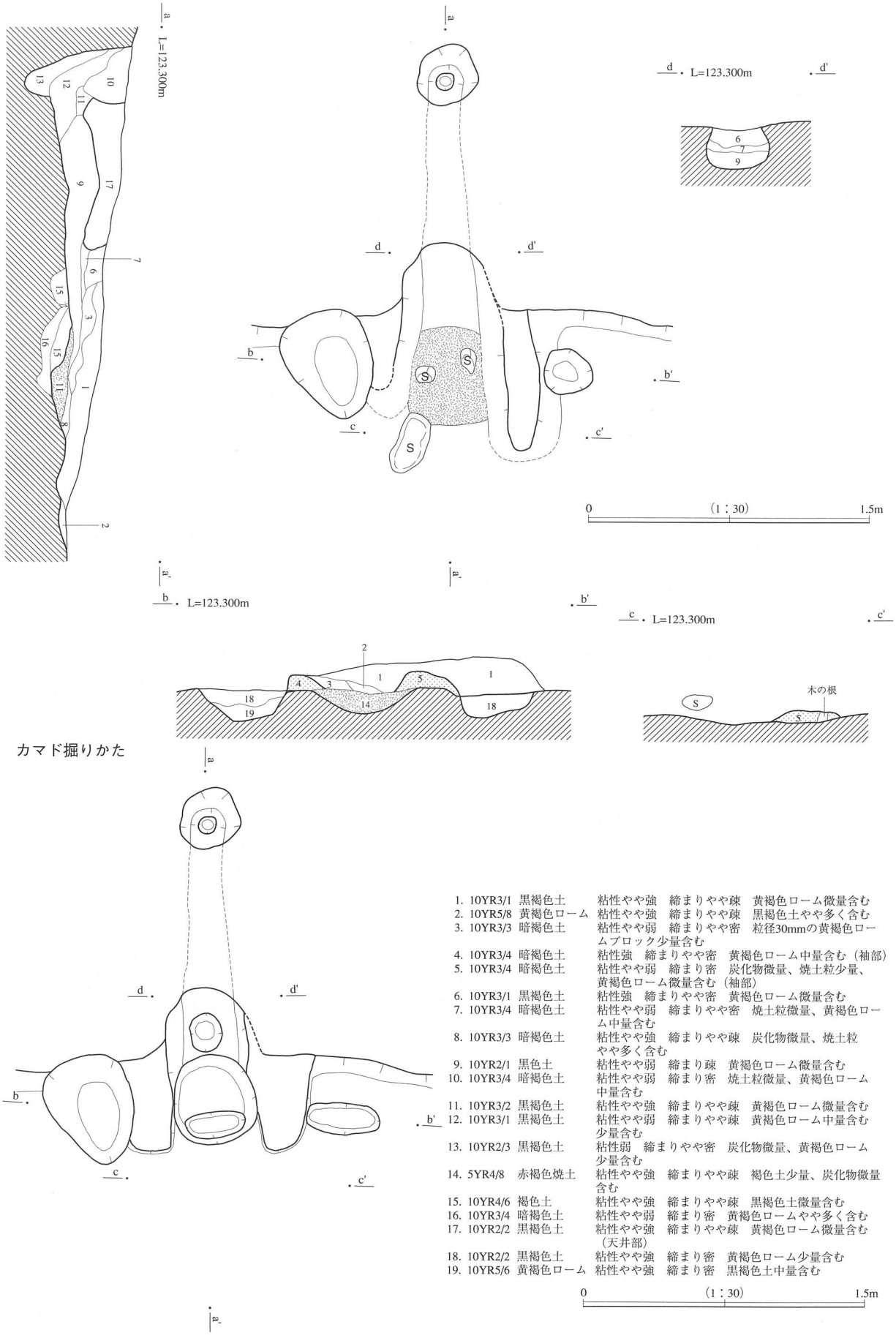
堆積土は４層に分層できる。４層とも黒褐色土層である。上層の１層中には灰白色火山灰粒子がブ

ロック状に含まれていた。一部削平されているものの、いわゆる三角堆積を呈することから自然堆積であると考えられる。

カマドは住居西壁の中央部にほぼ直交して設置される。カマド上部は削平のため残存せず下部のみの検出となる。左右袖、燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。



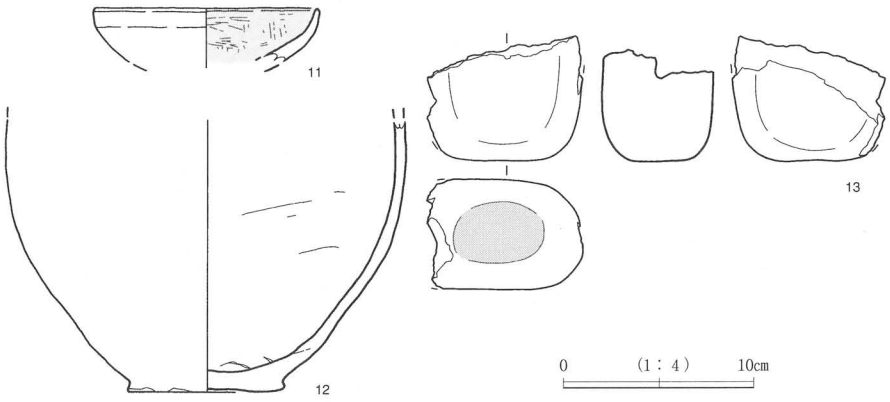
第12図　RA023竪穴住居跡



1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
2. 10YR5/8 黄褐色ローム　粘性やや強　締まりやや疎　黒褐色土やや多く含む
3. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　粒径30mmの黄褐色ロームブロック少量含む
4. 10YR3/4 暗褐色土　粘性強　締まりやや密　黄褐色ローム中量含む（袖部）
5. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや弱　締まり密　炭化物微量、焼土粒少量、黄褐色ローム微量含む（袖部）
6. 10YR3/1 黒褐色土　粘性強　締まりやや密　黄褐色ローム微量含む
7. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　焼土粒微量、黄褐色ローム中量含む
8. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　炭化物微量、焼土粒やや多く含む
9. 10YR2/1 黒色土　粘性やや弱　締まり疎　黄褐色ローム微量含む
10. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや弱　締まり密　焼土粒微量、黄褐色ローム中量含む
11. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
12. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　黄褐色ローム中量含む少量含む
13. 10YR2/3 黒褐色土　粘性弱　締まりやや密　炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
14. 5YR4/8 赤褐色焼土　粘性やや強　締まりやや疎　褐色土少量、炭化物微量含む
15. 10YR4/6 褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黒褐色土微量含む
16. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色ロームやや多く含む
17. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む（天井部）
18. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　黄褐色ローム少量含む
19. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや強　締まり密　黒褐色土中量含む

0　(1：30)　1.5m

第13図　RA023竪穴住居跡カマド



第14図　RA023竪穴住居跡出土遺物

袖間の幅は、土坑やピットとの重複のため両袖の一部が破壊されているものの、おおよそ100cm、右・左袖の長さそれぞれ80・54cmである。両袖とも床面から8cmの高さが残存している。袖間には38×53cmの範囲で焼土が広がり燃焼部となる。燃焼部中央には支脚と考えられる自然礫が2個横に配置されていることから2つ掛けのカマドかもしれない。左袖の前方には長さ32cmの円礫が床面よりやや浮いた状態で確認されている。袖は台状に地山を削りだした上に、暗褐色土を盛り構築していた。

煙道は住居北壁より西に108cmのび、先端に径30cmの煙出しピットが付設される。底面は住居床面から燃焼部付近でいったん高くなり、住居外に至って煙出しピットまで徐々に下がっていく。

カマド堆積土は15層が確認できる。暗褐色～黒褐色土を主体とする。袖間の堆積はそのうち3つが確認できるが、1層は住居埋土の2層に類似し、本来のカマド堆積土は2・3層の2つである。これらの層の下位には焼土層があり、上面が燃焼面となる。煙道にはおもに9層黒色土が堆積している。6・7層は天井部の崩落の可能性がある。17層は基本土層Ⅲ層であることから、煙道は地山をトンネル状に刳りぬいて構築されていることがわかる。10～13層は暗褐色～黒褐色土であり、おもに煙出しピット堆積土である。

ピットは床面に11個構築されている。床面全域にわたり構築されている。いずれも黒褐色を主体とする堆積土をもち、深さも床面から約10cmと浅い。

遺物は、堆積土・床面を中心に出土するが原位置を保つものはない。総量は1,008gであり、そのうち3点（789g）を図示した。11は、復元口径が12cmとやや小型の坏である。器形は底部を欠損しており不明であるが、ゆるやかに内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部が直立気味に短く立ち上がる。調整は内面にはミガキと黒色処理が施され、外面は磨滅しているもののミガキの痕跡がわずかに認められる。この土器は調整・胎土等は在地のものに類似しているものの、器形はその中には見出せないものであり、あるいは、「関東系土師器」を模倣したものかもしれない。12は壺であり、体部上半以上が欠損している。内外面とも磨滅が激しく調整は観察できない。13は敲磨器である。小口面と表裏面がスリ面である。

時期は遺構の状況および出土遺物から8世紀前半に位置づけられる。

RA024竪穴住居跡（第15～17図）

調査区北西部、３Ｆ17mグリッドに位置する。他遺構との重複はないが、２ｍ東にはＲＧ014が位置する。カマドが１基、ピットが４個付設される。

検出は遺跡範囲確認の際の試掘トレンチ底面で本住居跡を確認した。試掘トレンチは本住居跡の西側半分に及んでいるが、住居東側はⅢ層上面で黒褐色土の広がりから確認できた。

平面形は方形を基調とするものの、北西角がややいびつである。規模は南北壁間が2.4m、東西壁間が2.6m、床面までの深さが確認面から33cmである。住居方位はカマド主軸を基準とするとＮ－82°－Ｗである。

住居壁は、床面からゆるやかに立ち上がっており、上端と下端の差が大きい。床面は調査区内においてはほぼ平坦であるが、全体的に南側の方がやや低い。貼り床は黄褐色砂と黒褐色土との混合土で強く締まる。

堆積土は５層に分層できる。５層とも黒褐色土を主体とし、これらはいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈することから自然堆積であると考えられる。

床面から埋土下位にかけ、焼土、炭化物が堆積し、特に床面の中央部には焼土が240×60cmの範囲で広がっており、炭化材がいくつか確認される。これらはナラとケヤキという同定結果が得られている。本住居跡は焼失住居である可能性が高い。

カマドは住居西壁の中央部にほぼ直交して設置される。カマド上部は削平のため残存せず下部のみの検出となる。左右袖、燃焼部、煙道から構成される。

袖間の幅は、最大で104cm、右・左袖の長さそれぞれ92・118cmである。両袖とも床面から10cmの高さが残存している。袖間には28×56cmの範囲で焼土が広がり燃焼部となる。袖は両方とも黒褐色粘質土の２つの層から構成される。

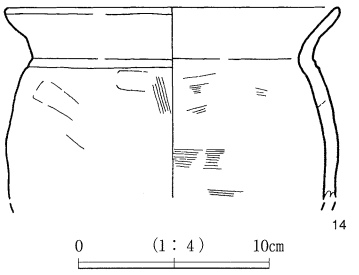
煙道は試掘トレンチにより、上部が削平されていた。住居北壁より西に122cmのび、先端はほぼ直角に立ち上がっており、明確な煙出しピットは確認できない。煙道先端をそのまま煙出しとしているのであろう。底面は住居床面から燃焼部付近にかけていったん下がるが、その後徐々に高くなっていく。

カマド堆積土は焼土を含めて７層が確認できる。暗褐色～黒褐色系のシルト層が大半である。袖間の堆積はそのうち３つが確認できる（１・２・５層）。いずれも焼土粒子が含まれる。５層の下位には焼土層（９層）があり、上面が燃焼面となる。煙道にはおもに１・３～６層が堆積している。貼り床は煙道の歪にまで及んでいる状況が窺える。カマド掘りかたをみると袖の下部にあたる部分が袖状に掘り残されている。この部分の上に貼り床が施され、いったん平坦にされ袖（カマド本体）が盛土により構築されているのが確認された。カマドの位置が掘りかた構築時からある程計画されていた可能性がある。

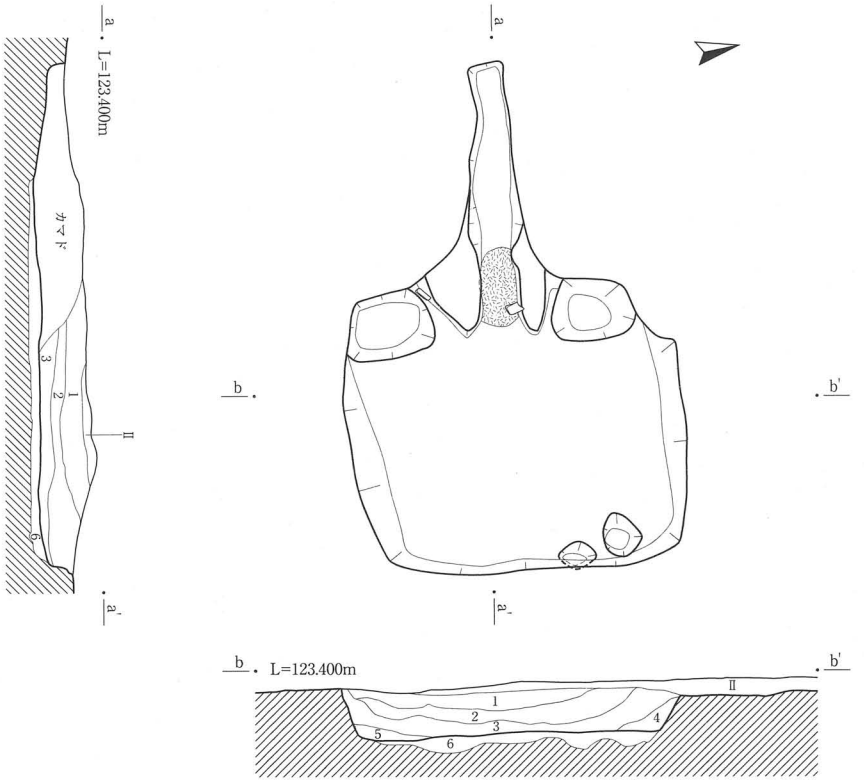
ピットはカマド両脇に２個、対面の東壁下に２個が構築されている。カマド両脇のピットはその位置や規模から貯蔵穴と考えられる。

遺物は、堆積土・床面を中心に出土するが原位置を保つものはない。総量は330ｇであり、そのうち１点（150ｇ）を図示した。14は甕であり、体部中位以下が欠損している。口縁部はゆるやかに外反する形態で、端部がわずかに内湾する。調整は内外面ともハケメが施される。

時期は出土遺物が少なく判断が難しいが、８世紀代であろう。

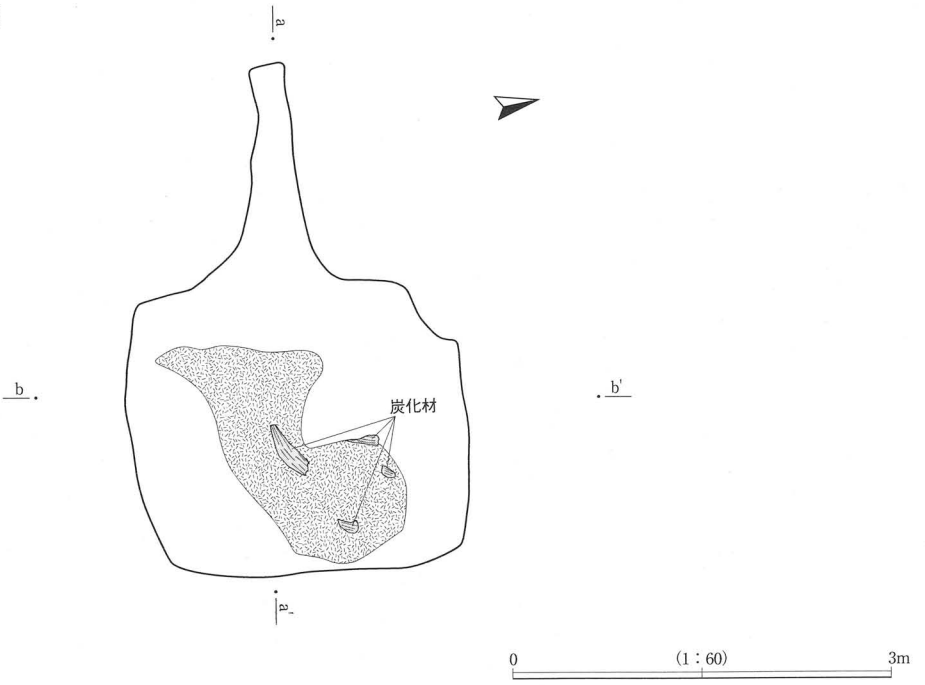


第15図　RA024竪穴住居跡出土遺物

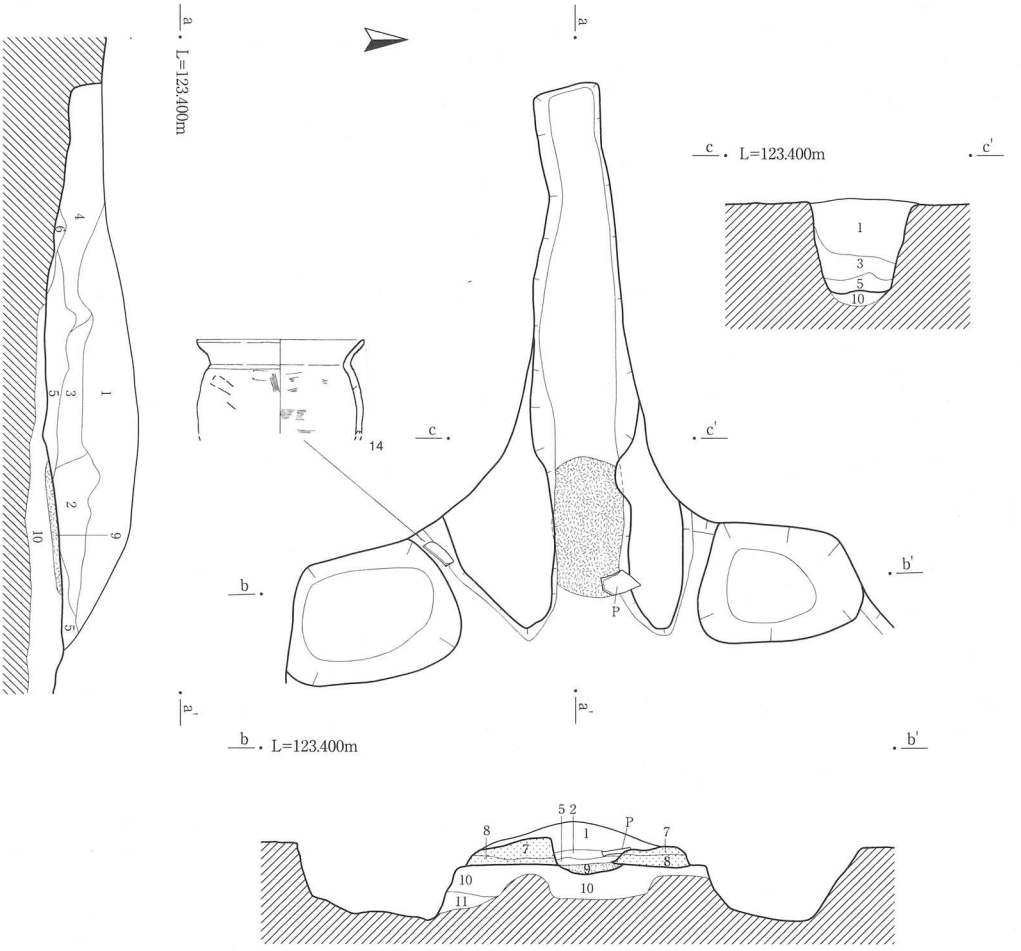


1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　炭化物微量含む
2. 10YR2/2　黒褐色土　粘性強　締まりやや密　炭化物少量、黄褐色ローム微量含む
3. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや強　締まり密　炭化物微量、黄褐色ローム中量含む
4. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　黄褐色ローム微量含む
5. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まり密　粒径20mmの黄褐色ロームブロック中量含む
6. 10YR2/1　黒色土　粘性強　締まり密　黄褐色砂中量含む（貼床）

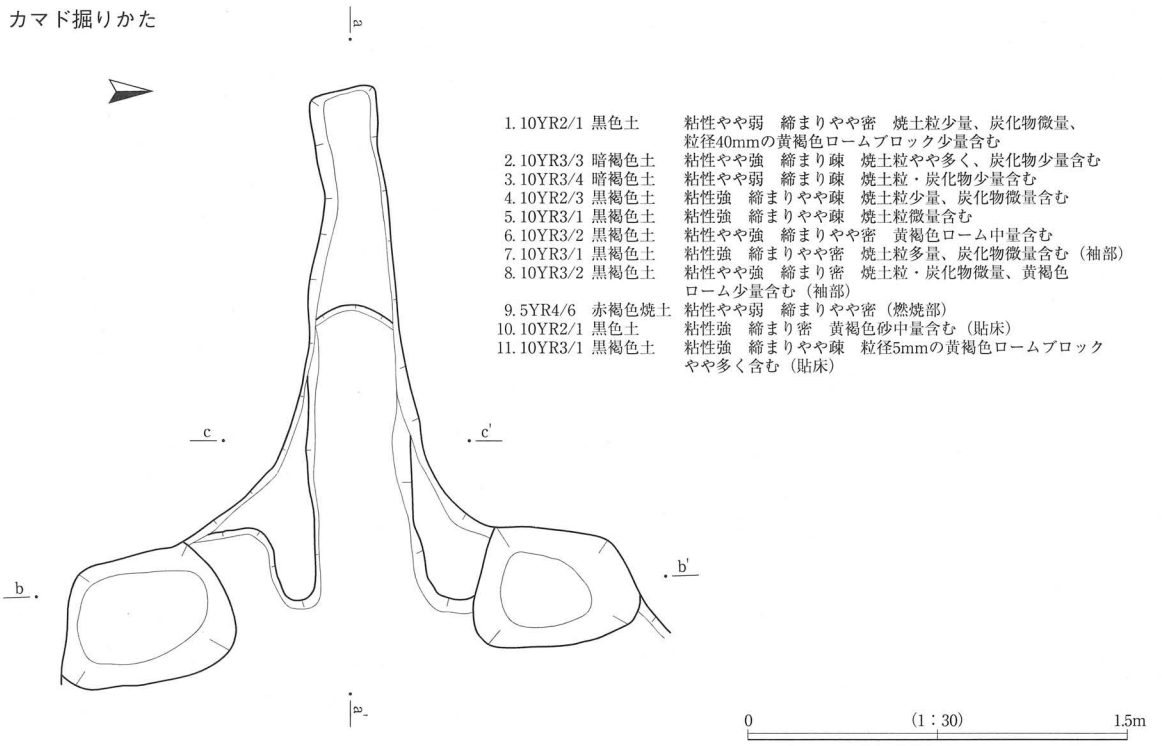
焼土・炭化物範囲



第16図　RA024竪穴住居跡



カマド掘りかた



1. 10YR2/1 黒色土　粘性やや弱　締まりやや密　焼土粒少量、炭化物微量、粒径40mmの黄褐色ロームブロック少量含む
2. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや強　締まり疎　焼土粒やや多く、炭化物少量含む
3. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや弱　締まり疎　焼土粒・炭化物少量含む
4. 10YR2/3 黒褐色土　粘性強　締まりやや疎　焼土粒少量、炭化物微量含む
5. 10YR3/1 黒褐色土　粘性強　締まりやや疎　焼土粒微量含む
6. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　黄褐色ローム中量含む
7. 10YR3/1 黒褐色土　粘性強　締まりやや密　焼土粒多量、炭化物微量含む（袖部）
8. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　焼土粒・炭化物微量、黄褐色ローム少量含む（袖部）
9. 5YR4/6　赤褐色焼土　粘性やや弱　締まりやや密（燃焼部）
10. 10YR2/1 黒色土　粘性強　締まり密　黄褐色砂中量含む（貼床）
11. 10YR3/1 黒褐色土　粘性強　締まりやや疎　粒径5mmの黄褐色ロームブロックやや多く含む（貼床）

第17図　RA024竪穴住居跡カマド

RA025竪穴住居跡（第18～20図）

調査区中央部４Ｆ５～６ｓグリッドに位置する。ＲＧ008・014と重複しており、本住居跡はＲＧ008よりは新しく、ＲＧ014よりは古い。本住居跡にはカマドが１基、ピットが10個付設される。

検出はⅢ層上位であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。遺構検出の際、Ⅲ層上面をやや深く掘削しており、本住居跡の上部を削平してしまった可能性がある。従って掘り込み面（生活面）は不明である。

平面形は方形を基調とするもので、規模は確認できた南北壁間が最大で6.4m、東西壁間が最大で5.6m、床面までの深さが確認面から26cmである。住居方位はカマド主軸を基準とするとＮ－71°－Ｗである。

住居壁は、どの壁も削平を受けているが、床面からゆるやかに立ち上がっている。床面は調査区内においてはほぼ平坦である。貼り床は確認できなかった。

堆積土は３層に区分できる。１～２層は黒褐色土を主体とする。２層中には灰白色火山灰粒子が少量ブロック状に含まれていた。一部削平されているものの、いわゆる三角堆積を呈することから自然堆積であると考えられる。

カマドは住居西壁のやや北寄りの部分に、壁とほぼ直交して設置される。カマド上部は削平のため残存せず下部のみの検出となる。カマドは、左右袖、燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。袖間の幅は最大で96cm、右・左袖の長さそれぞれ64・60cmである。袖間には92×58cmの範囲で焼土が広がっており、燃焼部となる。燃焼部内には礫が２点確認されるが、袖を構成するものか支脚なのか判断がつかなかった。袖は盛土によって構築されていると考えられるが、良好な断面が得られなかった。カマド周辺には遺物が出土するが床面から浮いた状態のものが多い。

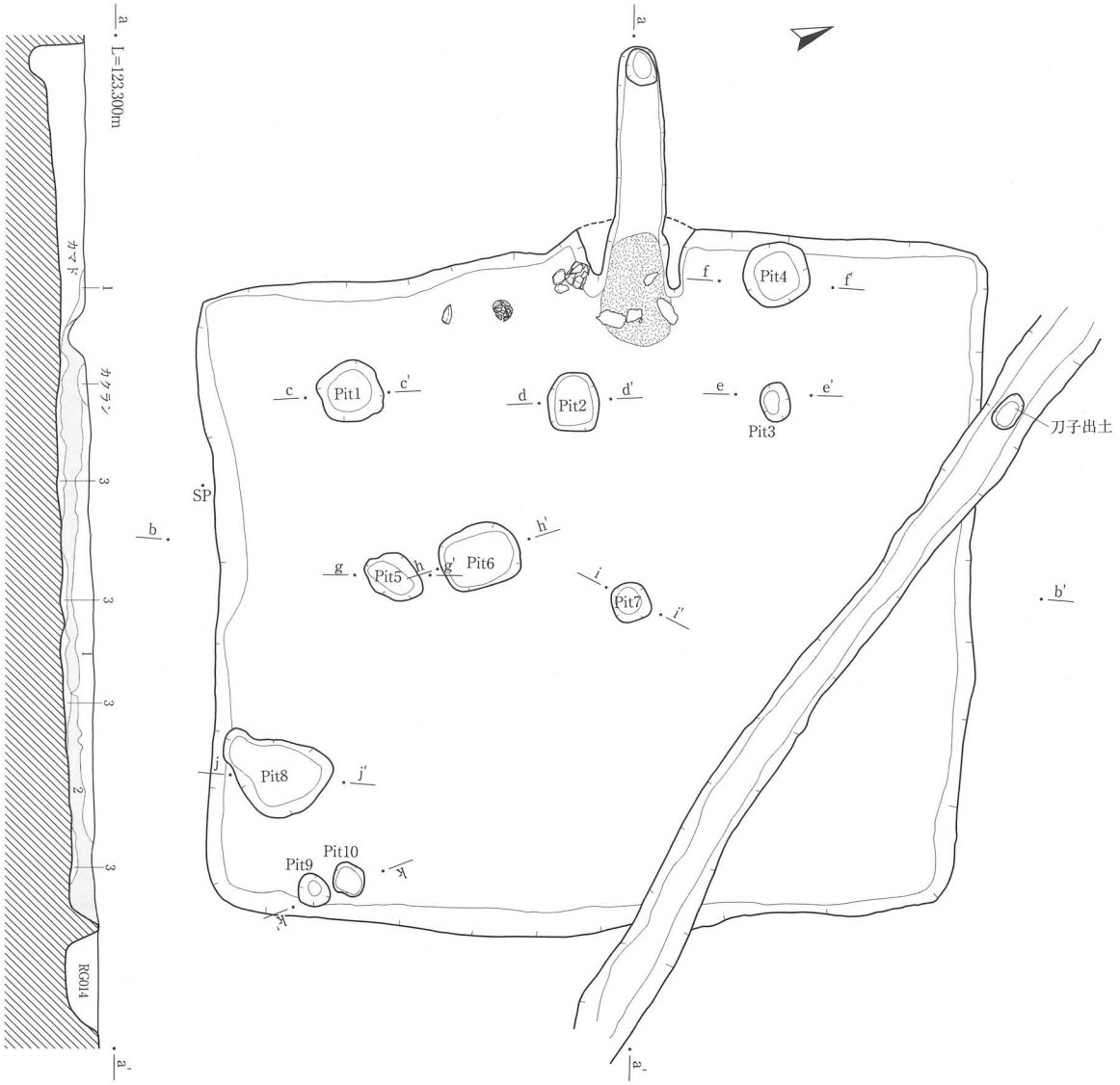
煙道は削平により上部が消失している。住居北壁より西に150cmのび、先端に径30cmの煙出しピットが付設される。煙道の断面形は、燃焼部付近から外に向かって徐々に下がっていく形態を呈する。カマド堆積土は焼土を含めて15層が確認できる。袖間の堆積はおもに１・４・12層であり、黒褐色粘質土が堆積している。12層の下位には焼土層があり、上面が燃焼面となる。煙道にはおもに９・10層の黒褐色土が堆積している。上部が削平されているため煙道の構築方法は不明である。

ピットは床面に10個構築されている。床面の南半分に多くが偏り、北東側からは検出していない。従って上屋を支える柱穴であったかどうか定かではない。いずれも深さが床面より10～15cmであり、黒褐色土が堆積している。

遺物は、土師器が堆積土・床面を中心に出土するが原位置を保つものはない。総量は3,489ｇであり、そのうち６点（3,036ｇ）を図示した。15～17は坏で、16は左袖脇から出土している。15・17は比較的扁平で、平底風の底部をもつが、16は丸底である。17の器形は頸部で屈曲して立ち上がる口縁部をもつが、15・16は外面に稜を持つものの、頸部で屈曲せずゆるやかに立ち上がる。外面調整はいずれも口縁部はヨコナデ、内面にミガキと黒色処理が施される。外面底部の調整はハケメ様に観察されるが、ミガキ用の工具で施されたものであり、一応ミガキとした。通常のミガキ調整とは異なって、凹凸が著しく、光沢感が乏しい。

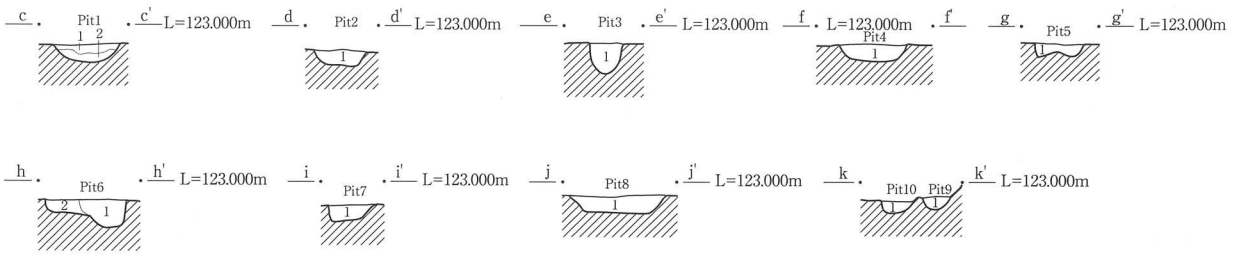
18～20は甕である。18はカマド左袖脇から、20は燃焼面上から出土している。19は西壁際の床面から約15cm上から、逆さの状態で出土した。それぞれ小・中・大の大きさ（容量）に対応する。いずれも頸部に段を有し、口縁部は外反するものであるが、その度合いは様々である。18は口縁端部に面が形成される。調整は口縁部にヨコナデが、体部内外面ともハケメが施される。

時期は遺構の状況および出土遺物から７世紀末～８世紀前葉に位置づけられる。



1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　炭化物微量、黄褐色ローム少量，礫少量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　火山灰ブロックで少量、炭化物微量、黄褐色ローム微量含む
3. 10YR3/3 暗褐色土　粘性強　締まり密　黄褐色ローム中量含む

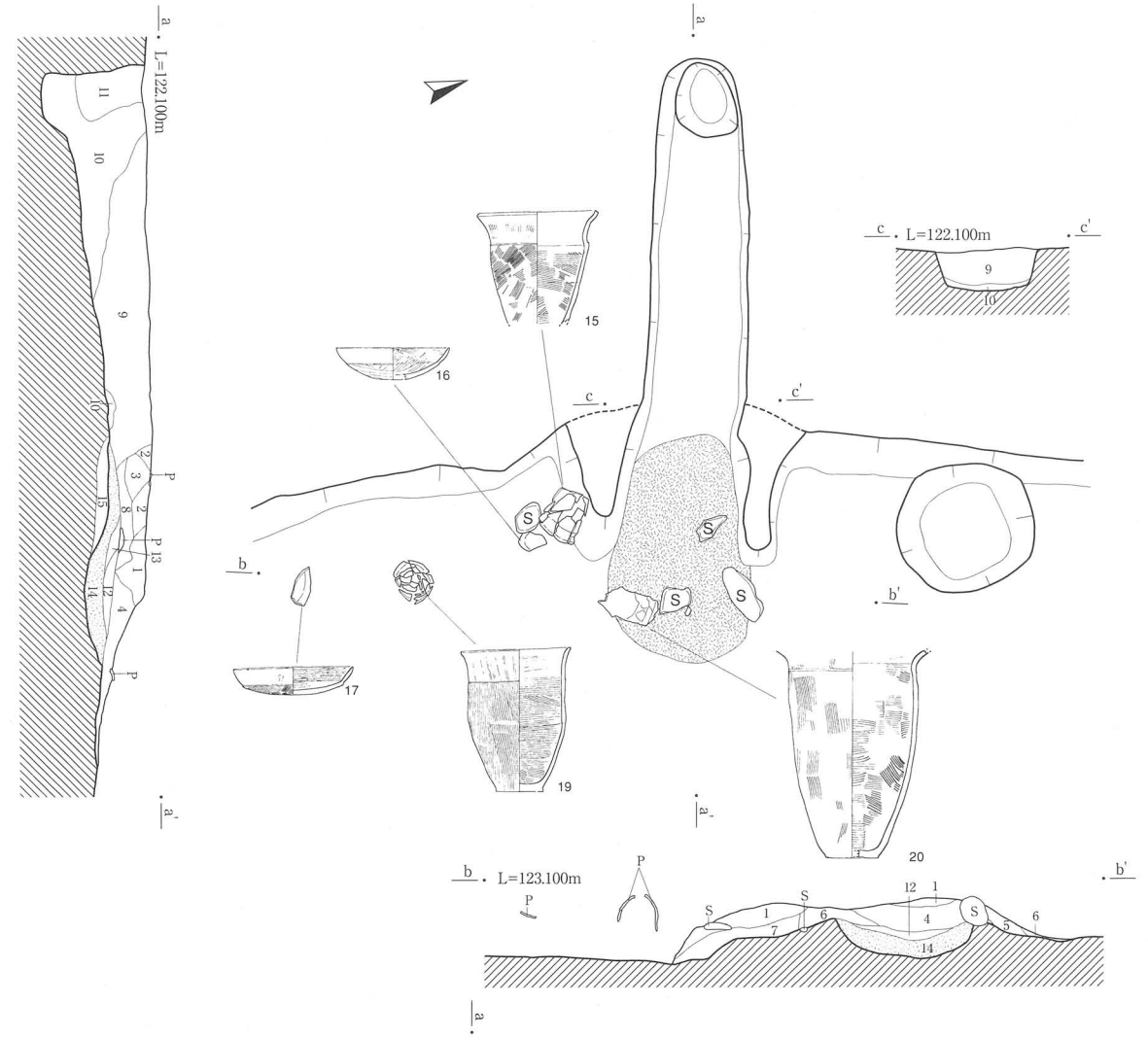
RA025柱穴



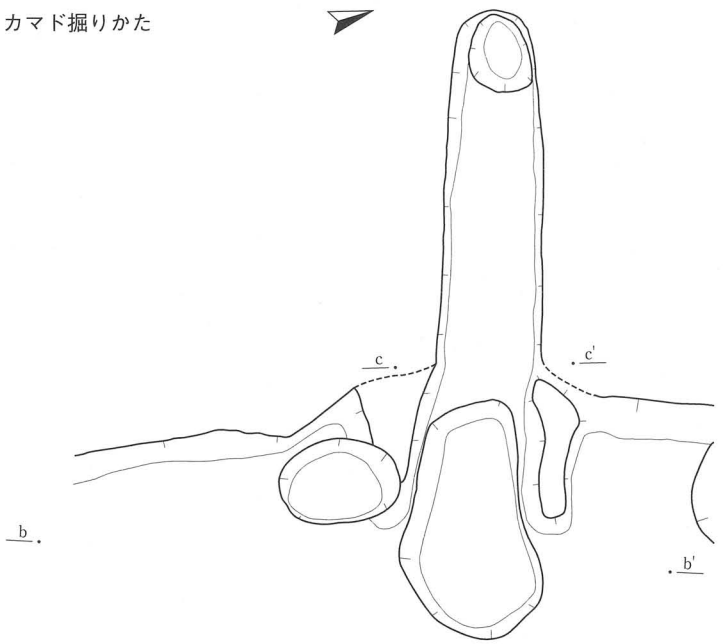
1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
2. 10YR4/4 褐色ローム　粘性やや弱　締まりやや密　黒褐色土中量含む

0　(1：60)　3m

第18図　RA025竪穴住居跡



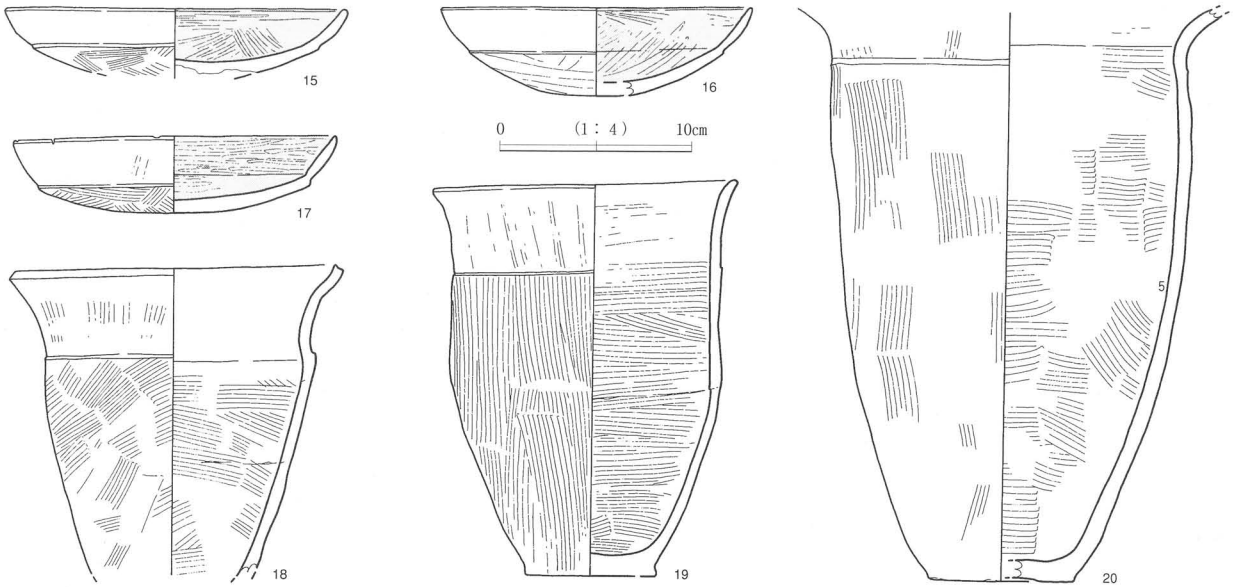
カマド掘りかた



1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　焼土粒・炭化物微量含む
2. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　焼土粒微量含む
3. 10YR3/4　暗褐色土　粘性弱　締まり密　焼土粒少量、黄褐色ロームやや多く含む
4. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物微量、粒径20mmの黄褐色ロームブロック少量含む
5. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　焼土粒微量、黄褐色ローム少量含む
6. 10YR4/4　褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム少量含む
7. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色ローム中量含む
8. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　焼土粒微量、黄褐色ローム少量含む
9. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　焼土粒・炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
10. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　黄褐色ローム少量含む
11. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒・炭化物微量含む
12. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　焼土粒やや多く、炭化物微量、骨片微量含む
13. 7.5YR6/6　橙色焼土　粘性やや強　締まりやや密　炭化物少量含む
14. 5YR4/8　赤褐色焼土　粘性やや弱　締まりやや密　炭化物微量含む（燃焼部）
15. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒・炭化物微量、黄褐色ローム少量含む

0　(1：30)　1.5m

第19図　RA025竪穴住居跡カマド



第20図　RA025竪穴住居跡出土遺物

RA026竪穴住居跡（第21～23図）

調査区北西部、３Ｆ20ｐグリッドに位置する。RG014とカマド煙道部分で重複しており、本住居跡の方が古い。またＲＧ008とも重複しており、本住居跡の方が新しい。付属施設としてカマドが１基ある。

検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。削平が及んでいるため掘り込み面（生活面）は不明である。

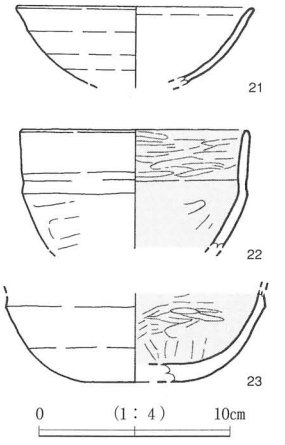
平面形は方形を基調とするものの、隅角が丸く構築されている。規模は南北壁間が最大で3.6m、東西壁間が最大で3.7m、床面までの深さが確認面から43cmである。住居方位はカマド主軸を基準とするとＮ－93°－Ｗである。

住居壁は、床面からゆるやかに立ち上がるが、北壁の一部は直角気味に立ち上がるものの上端付近でさらに外方へ広がる。床面は調査区内においてはほぼ平坦である。貼り床は黄褐色ロームと黒褐色土との混合土で強く締まる。

住居堆積土は７層に区分できる。６層以外は黒褐色土を主体とする。２層中には灰白色火山灰粒子がブロック状に含まれ、その下部で一部層状に堆積しているのを確認した。いわゆる三角堆積・レンズ状堆積が確認できることから自然堆積であると考えられる。

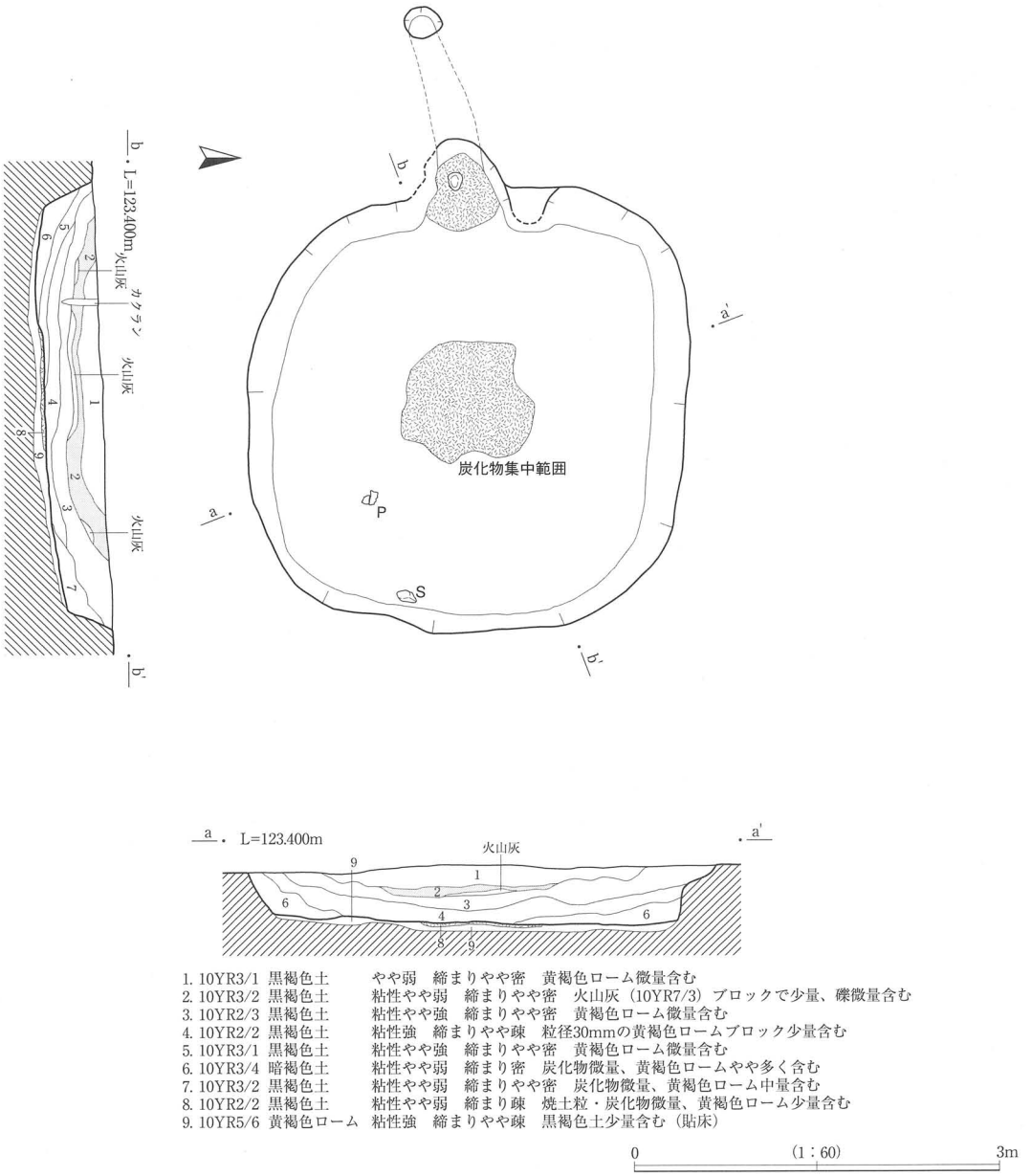
カマドは住居西壁の中央部にやや斜行して設置される。カマド上部は削平のため残存せず下部のみの検出となる。カマドは、右袖、燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。

袖間の幅は、左袖が確認できなかったことから不明である。右袖の長さは約36cm、床面からの高さが６cm残存している。右袖の南には径60cmの範囲で焼土が広がっており、燃焼部となる。この中央には支脚と考えられる自然礫が１点配置されている。右袖は黒褐色土を混合した黄褐色ローム土で構成される。燃焼部は住居北壁よりも外側にはみ出すことから、カマド本体も同様の状態であったと推定される。したがって、左袖は確認できなかったが、本来は住居内には存在しないか非常に短いものであった可能性が高い。

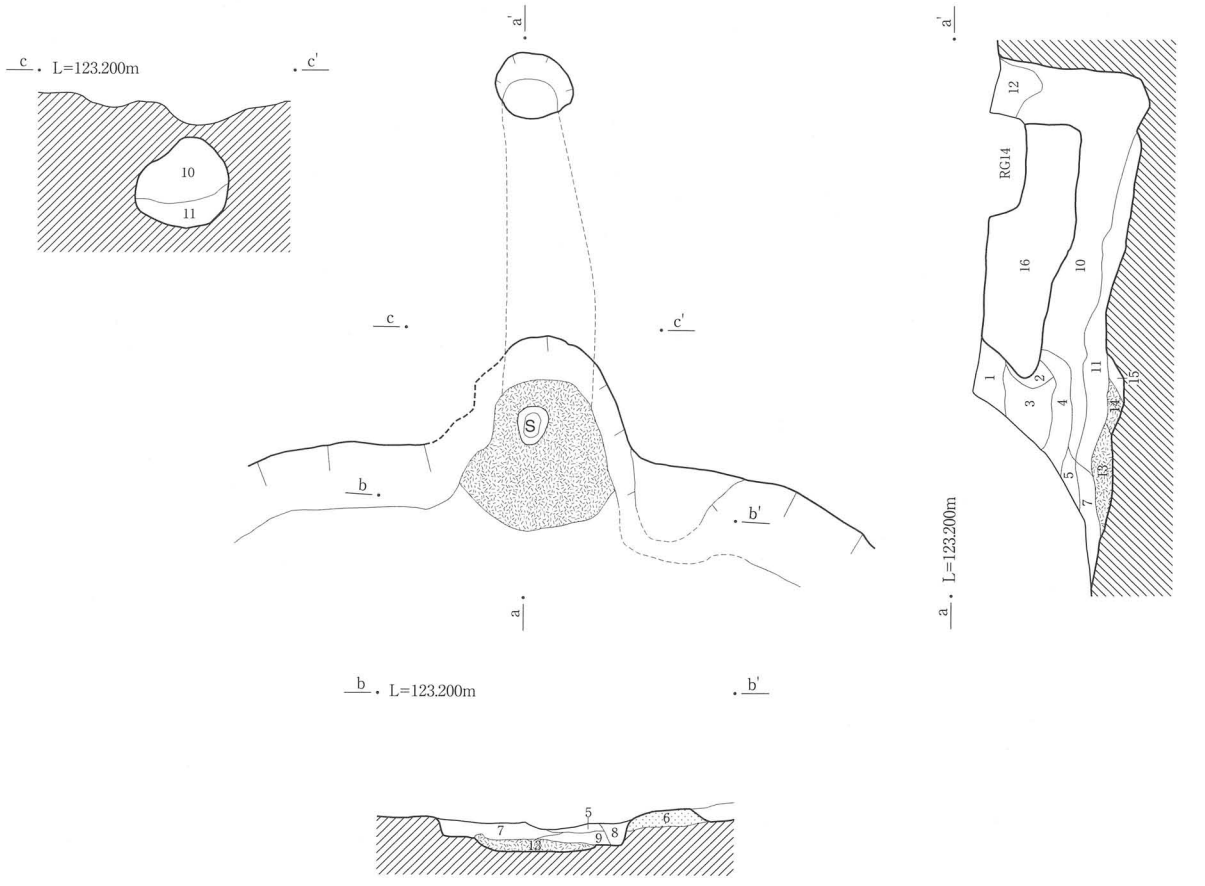


第21図　RA026竪穴住居跡出土遺物

煙道は住居北壁の突出部から西に110cmのび、先端に径30cmの煙出しピットが付設される。煙道底面の状態は住居床面から燃焼部を経て煙道先端まで徐々に下がっていくものである。
カマド堆積土は燃焼部焼土を含めて15層が確認できる。暗褐色～黒褐色系の粘質土が大半である。袖内（本体）の堆積土は１～５・７層の６層であり、上位には黒褐色・暗褐色の粘質土が、下位には黄褐色ローム土が堆積する。煙道はおもに10・11層が堆積している。16層は基本土層Ⅲ層であることから、煙道は地山をトンネル状に刳りぬいて構築されていることがわかる。
そのほか、床面ほぼ中央に110×100cmの範囲で細かい炭化物の広がりを確認した。焼土の混入はなく、したがって、本住居跡が焼失住居である可能性は低い。
遺物は、土師器が堆積土・床面を中心に出土するが原位置を保つものはない。総量は593ｇであり、



第22図　RA026竪穴住居跡



1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性弱　締まりやや密　黄褐色ローム微量含む
2. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
3. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　粒径20mmの黄褐色ロームブロック少量含む
4. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　焼土微量、黄褐色ローム少量含む
5. 10YR2/2 黒褐色土　粘性弱　締まり疎　焼土粒中量、炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
6. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや強　締まりやや疎　黒褐色土少量含む（袖部）
7. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり密　黄褐色ローム中量含む
8. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや強　締まり密　黄褐色ローム少量含む
9. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり密　焼土粒少量含む
10. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒中量、炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
11. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　焼土粒・炭化物少量含む
12. 10YR2/1 黒褐色土　粘性やや強　締まり疎　粒径30mmの黄褐色ロームブロック少量含む
13. 5YR4/6 赤褐色焼土　粘性やや弱　締まり密　（燃焼部）
14. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり疎　焼土粒中量、黒褐色土少量含む（燃焼部）
15. 10YR2/1 黒色土　粘性やや強　締まり疎　炭化物少量、黄褐色砂少量含む
16. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや強　締まり密　黒褐色土少量含む（天井部）

0　(1：30)　1.5m

第23図　RA026竪穴住居跡カマド

そのうち３点（186ｇ）を図示した。21は堆積土中から出土したロクロ調整の坏である。22は鉢ともいうべき器形であるが、定まった名称はない。ここでは鉢としておく。頸部には幅広の段を有し、直立する口縁部と底部に向けて窄まる体部をもつ。調整は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ、内面はミガキが施される。23は坏（あるいは鉢）で口縁部を欠損している。底部が広く安定感のある器形である。

時期は出土遺物が少なく判断が難しいが、遺構の状況などを加味して８世紀代としておく。

（西澤）

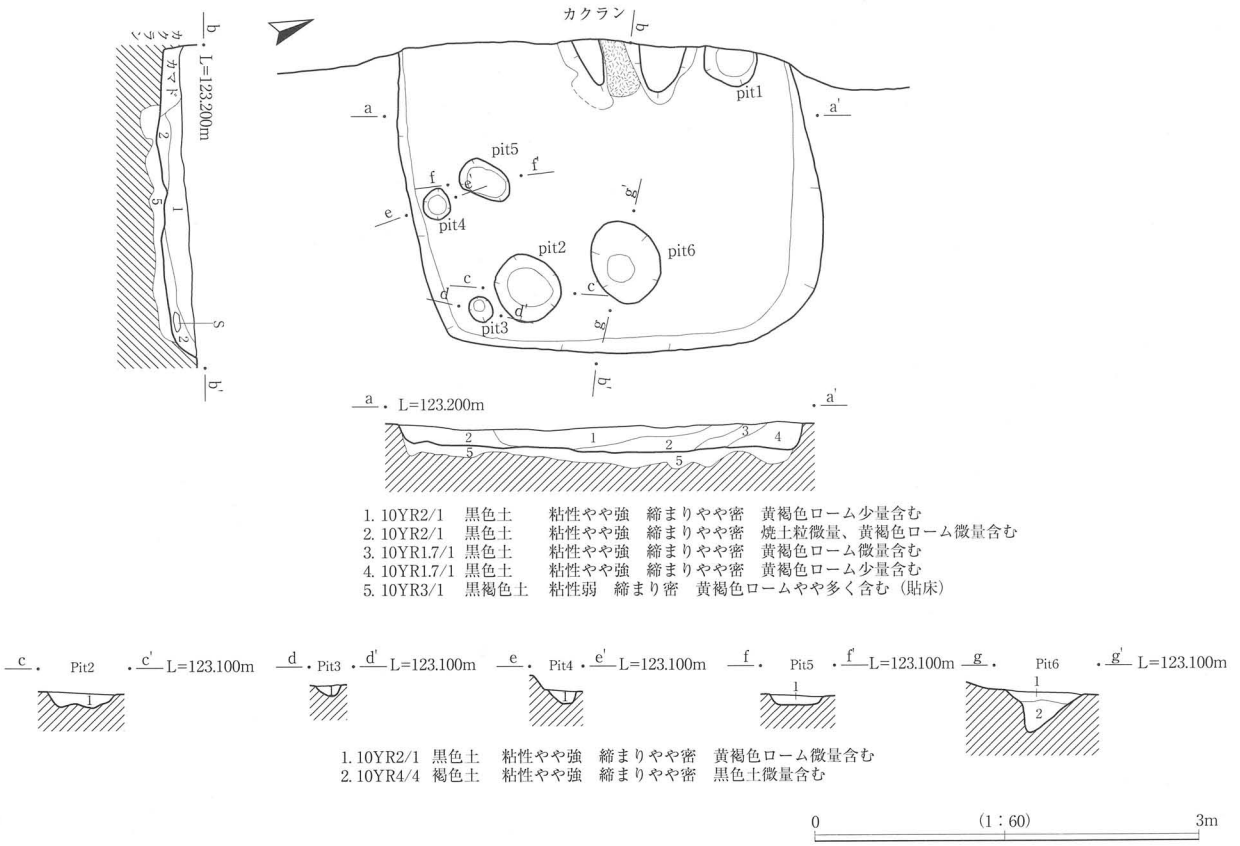
RA027竪穴住居跡（第24図）

調査区北端、３Ｆ16ｌグリッドに位置する。他遺構との重複はない。西側はカクランにより大きく破壊されている。2m東側にはRA028、2m南側にはRA024、西側にはRD129が隣接する。カマドが１基、ピットが６個付設される。

検出は遺跡範囲を確認する試掘トレンチの底面で、黒色土の広がりをもって確認した。従って掘り込み面（生活面）は不明である。

平面形は方形で、隅は丸い形状を呈する。規模は、南壁と北壁間が3.2mである。西壁が残存せず東西壁間は不明であるが、残存する長さは2.5mである。

住居壁は床面から斜位に立ち上る。確認面から床面までの深さは20cmである。床面は概ね平坦であるが、中央付近が周辺に比べてやや窪んでいる。貼り床は、黒褐色土と黄褐色ロームの混合土で固く

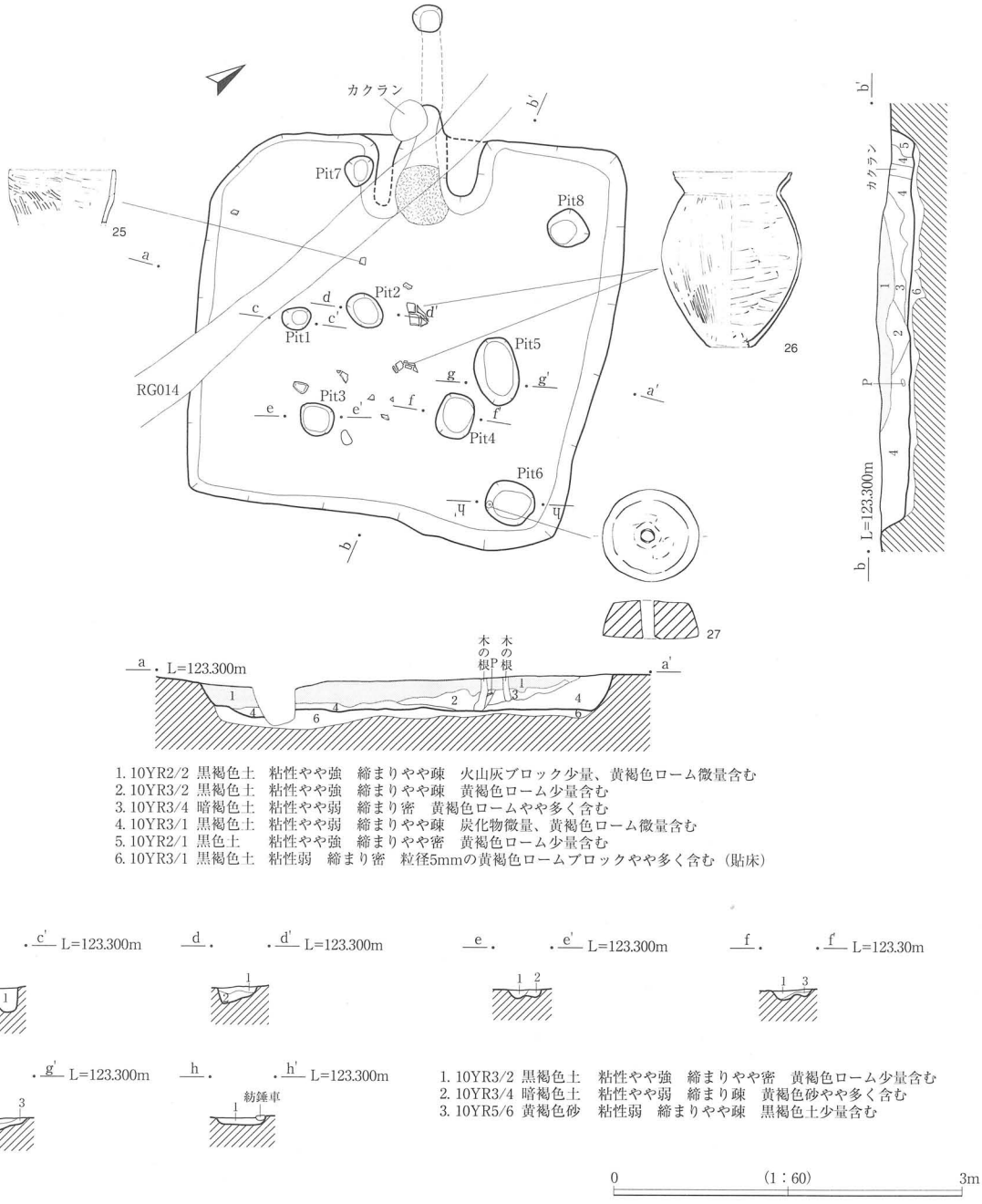


第24図　RA027・RA027竪穴住居跡カマド

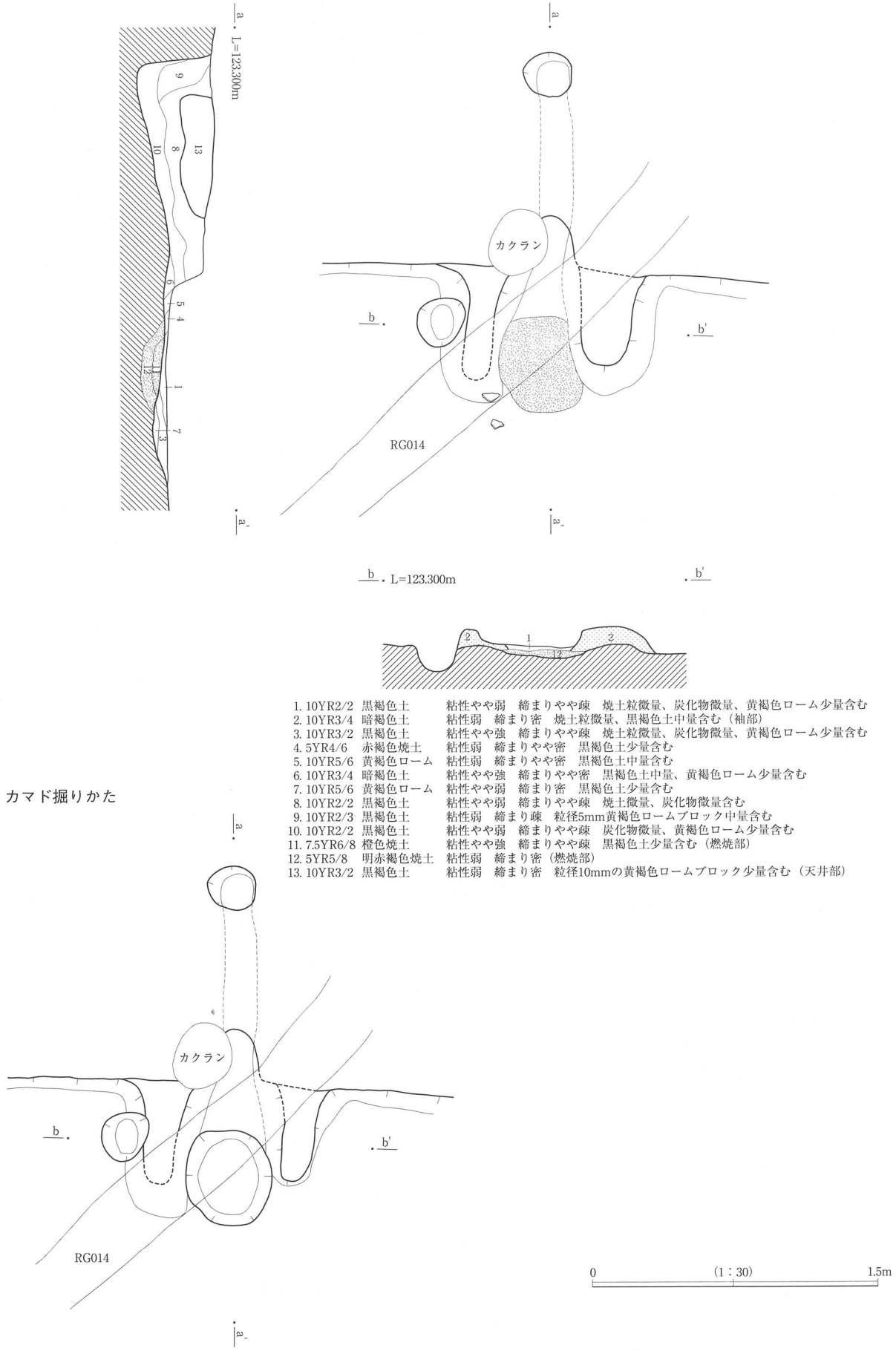
締まる。

堆積土は4層から成る。黒色土を主体とし、黄褐色ロームを微～少量含む。下位には焼土粒も含まれていた。

カマドは袖と燃焼部焼土の一部のみが残存し、煙道は完全に失われている。残存部分の位置から推定すると、西壁のやや北寄りに設置され、煙道は西向きであったと考えられる。袖は褐色土により構築されている。残存部分の規模は、袖間の幅が最大116cm、右袖長42cm、左袖長56cmで、両袖とも床



第25図　RA028竪穴住居跡



1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　焼土粒微量、炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
2. 10YR3/4　暗褐色土　粘性弱　締まり密　焼土粒微量、黒褐色土中量含む（袖部）
3. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　焼土粒微量、炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
4. 5YR4/6　赤褐色焼土　粘性弱　締まりやや密　黒褐色土少量含む
5. 10YR5/6　黄褐色ローム　粘性弱　締まりやや密　黒褐色土中量含む
6. 10YR3/4　暗褐色土　粘性やや強　締まりやや密　黒褐色土中量、黄褐色ローム少量含む
7. 10YR5/6　黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり密　黒褐色土少量含む
8. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　焼土微量、炭化物微量含む
9. 10YR2/3　黒褐色土　粘性弱　締まり疎　粒径5mm黄褐色ロームブロック中量含む
10. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物微量、黄褐色ローム少量含む
11. 7.5YR6/8　橙色焼土　粘性やや強　締まりやや疎　黒褐色土少量含む（燃焼部）
12. 5YR5/8　明赤褐色焼土　粘性弱　締まり密（燃焼部）
13. 10YR3/2　黒褐色土　粘性弱　締まり密　粒径10mmの黄褐色ロームブロック少量含む（天井部）

0　(1：30)　1.5m

第26図　RA028竪穴住居跡カマド

面から18cmの高さまで残存していた。燃焼部焼土は40×18cmの範囲で広がり、床面から6cmの深さまで被熱している。カマド堆積土は黒色土が主体で、５層からなる。袖下には深さ10cmの掘りかたがみられるが、礫など芯材となりうるものは確認していない。床面にはピット６個が構築されている。南東側に偏って分布するが、配置・規模に規則性はみられず、柱穴の可能性は低い。ピットの深さは、床面から10～30cmである。

時期は出土遺物がなく判断が難しいが、住居跡の軸方向から８世紀代に位置づけられるかもしれない。

RA028竪穴住居跡（第25～27図）

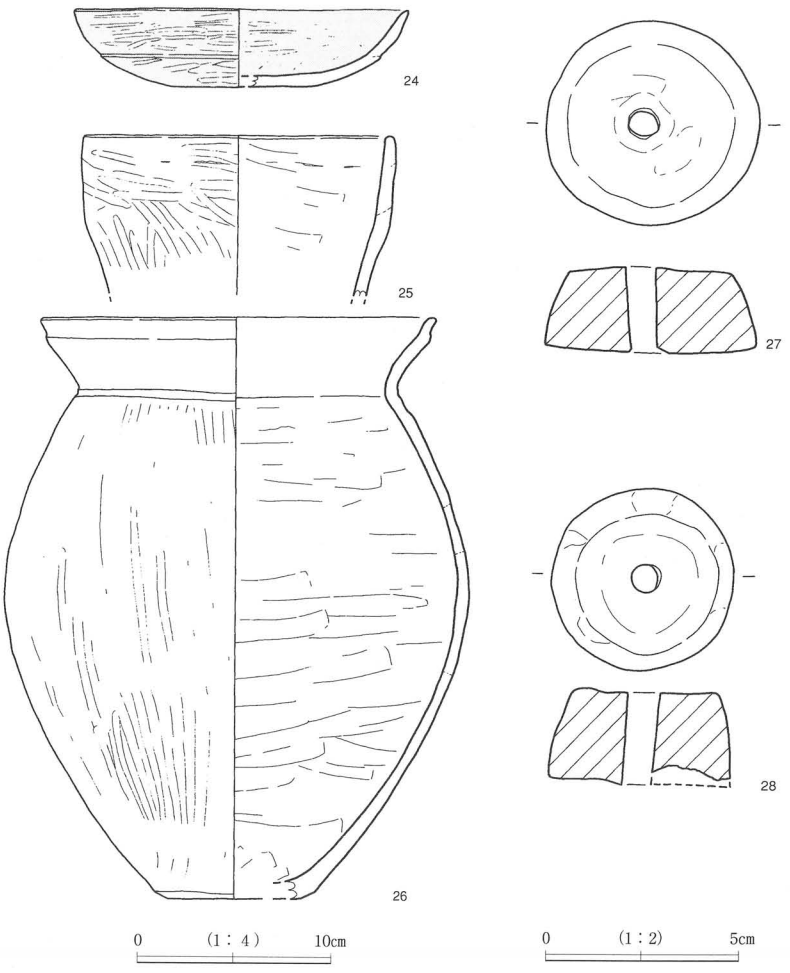
調査区北端、３Ｆ15ｎグリッドに位置する。RG008・014と重複しており、本住居跡はＲＧ008よりも新しく、RG014よりも古い。2m北側にはRA022、2m西側にはRA027が隣接する。検出面はⅢ層上面で、黒褐色土の広がりとして確認した。

平面形は方形で、隅はやや丸い形状を呈する。規模は、北西壁と南東壁間が3.3m、南東壁と北東壁間が3.4mで、床面までの深さは確認面から30cmである。住居方位は、カマド煙道方向を基準とするとＮ－53°－Ｗである。

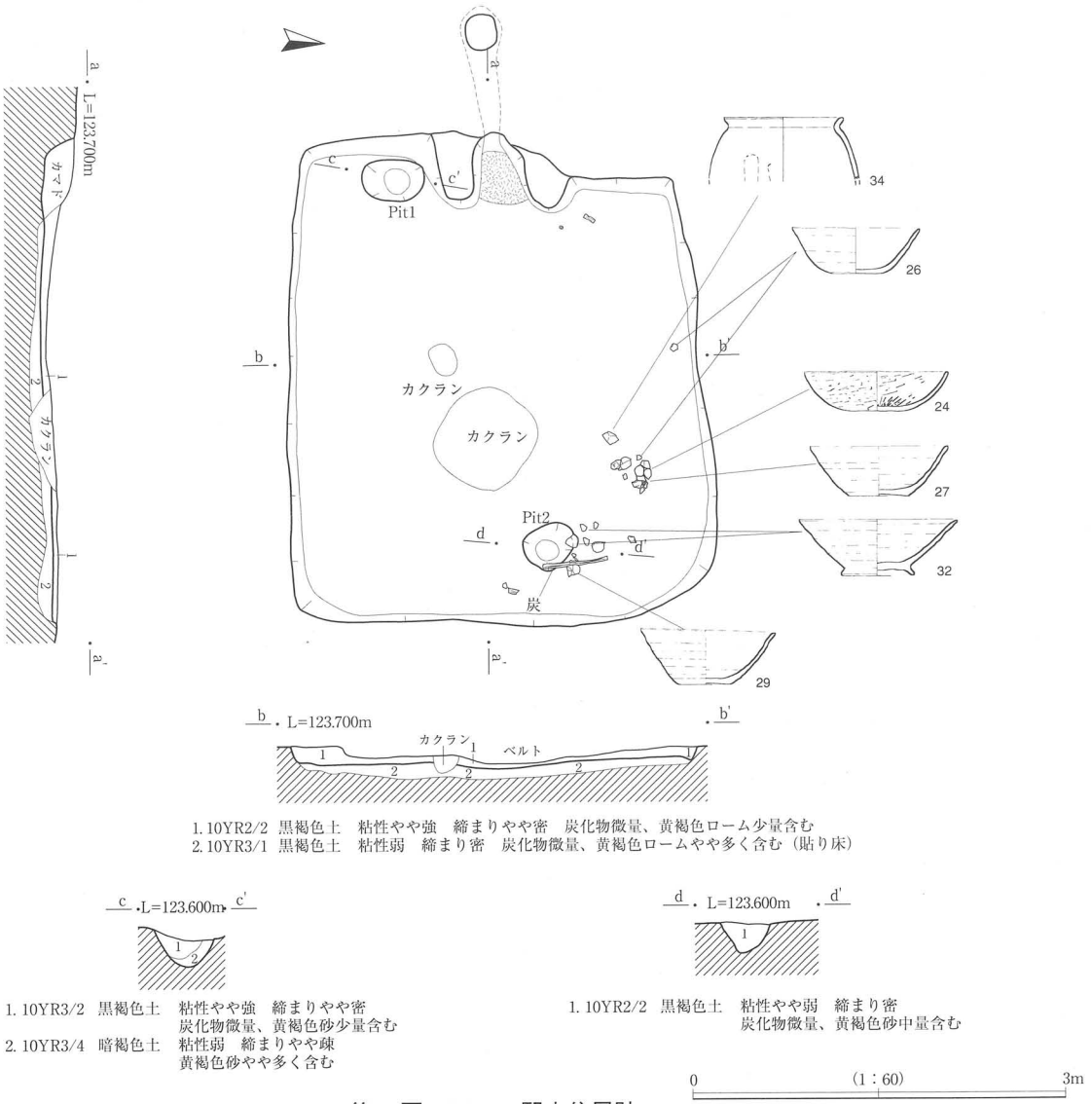
床面は概ね平坦である。住居壁は、床面から斜位に立ち上がる。

堆積土は５層に区分できる。黄褐色ローム土混じりの黒褐色土が主体であり、上位には灰白色の火山灰がブロック状で、下位には炭化物が含まれる。貼り床は黒褐色土と黄褐色ロームの混合土で強く締まる。

カマドは北西壁のほぼ中央に設置され、左右袖、燃焼部、煙道から構成される。煙道は燃焼部から外側に向けて緩やかに下降し、煙出し付近では深さ40cmに達する。先端はほぼ直角に立ち上がっており、明確な煙出しピットは確認できない。煙道先端をそのまま煙出しとしているのであろう。煙道内には黒褐色土が堆積していた。カマド本体付近はRG014に大きく削平されており、堆積土は殆ど残存しなかった。袖は暗褐色土で構築されている。袖の残存規模は、幅120cm、右袖長66cm、左袖長72cm、床面からの高さは両袖とも8cmである。燃焼部焼土は50×40cmの範囲で広がり、床面から10cmの深さまで被熱していた。



第27図　RA028竪穴住居跡出土遺物



第28図　RA029竪穴住居跡

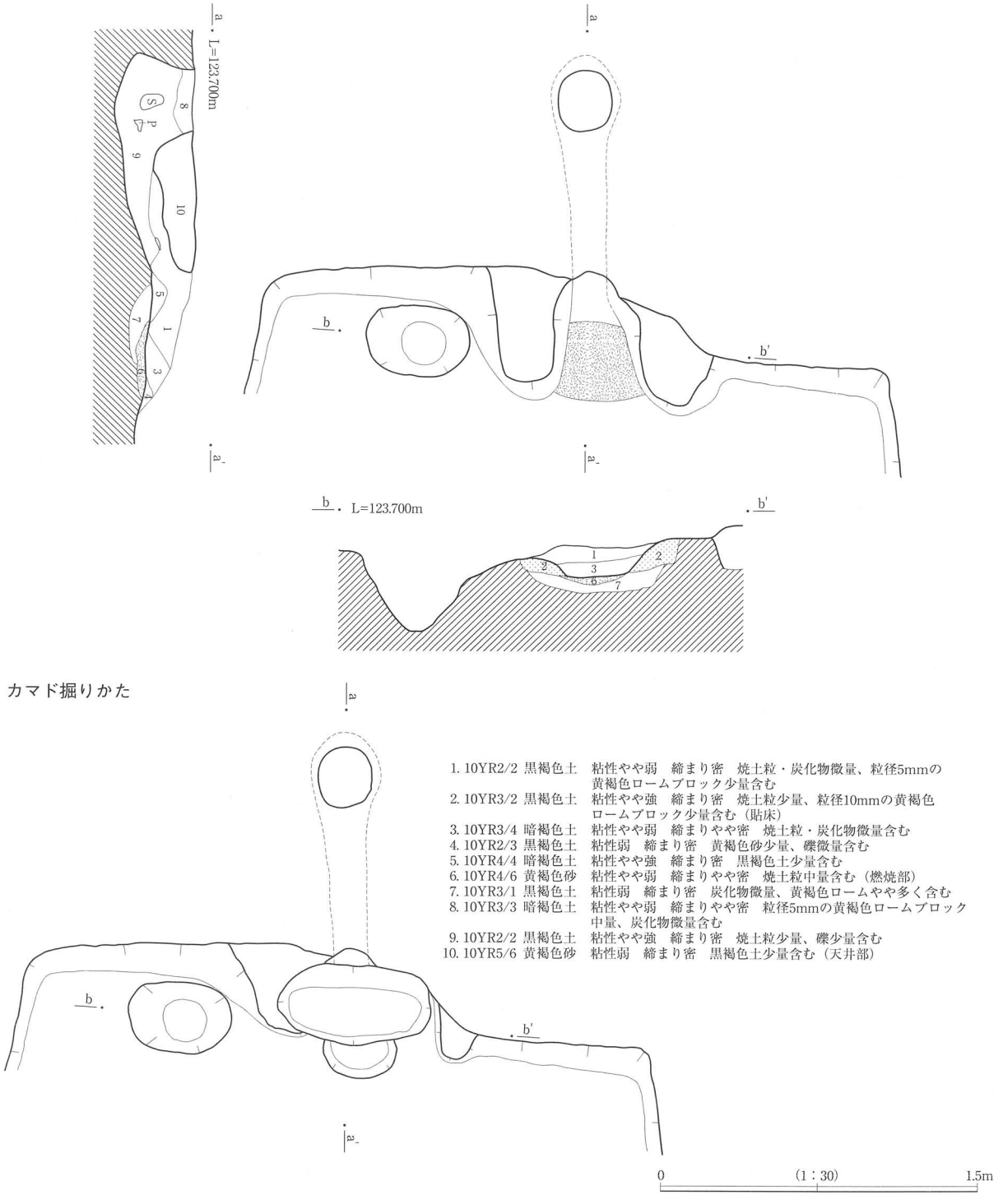
床面ではピット８個を検出した。配置に規則性はみられない。床面からの深さは、5～20cmである。ピット６からの検出面上から紡錘車が出土している。

遺物は、埋土・床面から土師器2,127ｇが出土している。特に、床面ほぼ中央部に多くの土師器片が散在している状況を確認できた。５点（1,601ｇ）を図示した。24は坏である。全体的に扁平で、平底を有する。頸部外面に僅かに稜線がはいる。調整は内外面ともに横位のミガキが施される。25は鉢であり、床面から出土している。直行する口縁部をもつ。26は胴中位に最大径をもつ甕である。床面中央部に土器片で散在していた。口縁部は頸部から外反し、端部でさらに屈曲する形態である。調整は外面に縦位ミガキ、内面にヘラナデが施される。27・28は土製の紡錘車である。27はピット６から出土し、28は埋土中から出土している。27の径は10.5cm、28は9.5cmと後者がやや小さい。上部平坦面と下部平坦面には摩耗した痕跡が認められ、使用痕かもしれない。重量は27が77ｇ、28が62ｇである。時期は遺構の状況および出土遺物から７世紀後葉～８世紀前葉に位置づけられる。

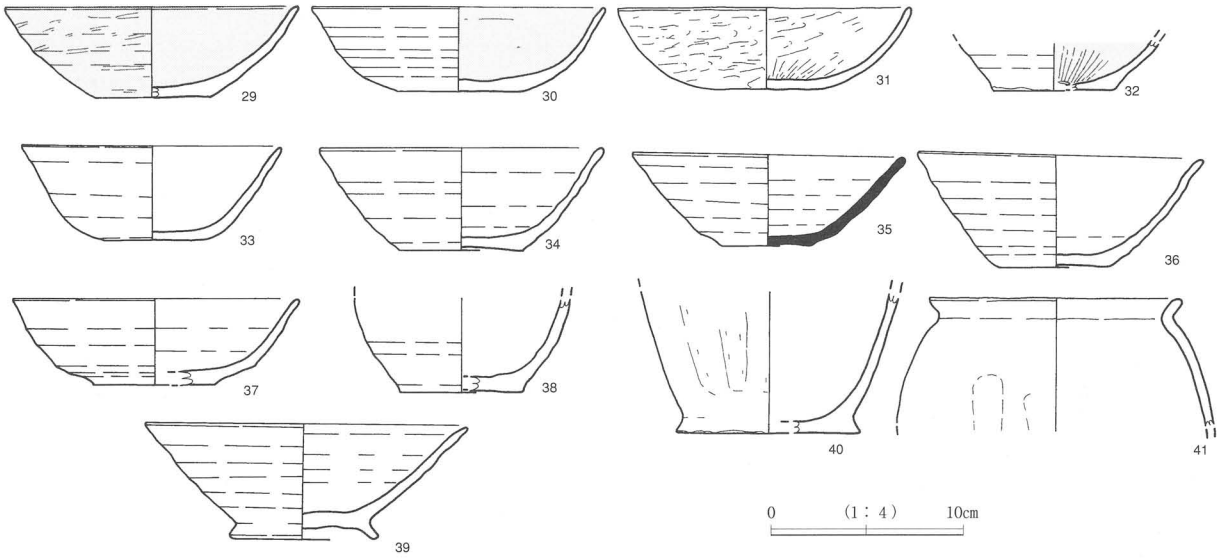
RA029竪穴住居跡（第28～30図）

調査区東側、３G25aグリッド付近に位置する。検出面はⅤ層面で、黒褐色土の広がりとして検出した。RE006と重複し、本住居跡の方が新しい。削平により、掘り込み面（生活面）は不明である。また遺構の中央部分はカクランによって床面下まで削平されている。

平面形は、やや歪な長方形であり、東西方向が南北方向に比べて長い。規模は東壁と西壁間が3.9m、南壁と北壁間が3.4mである。



第29図　RA029竪穴住居跡カマド



第30図　RA029竪穴住居跡出土遺物

床面には若干の凹凸がある。確認面から床面までの深さは、南側で8cmである。
堆積土は単層で、黒褐色土を主体とし、炭化物、黄褐色ロームが含まれる。また図示していないが、床面直上から灰白色火山灰がブロック状で検出した。貼り床は黒褐色土が主体で、黄褐色土をやや多く含み、強く締まる。

床面にはピット２個が構築される。ピット1はカマド袖のすぐ南側に、ピット2は対面の壁付近に位置する。床面からの深さは両方とも20cm程度である。ピット１は位置から、貯蔵穴の可能性が高い。遺物は出土していない。ピット2の周辺では遺物が多く出土している。

カマドは西壁中央に設置され、左右袖、燃焼部、煙道、煙出しピットから構成される。煙道の方向は、S－78°－Eで、壁と直行する方向からやや南にずれる。煙道の長さは106cmで、底部は外側に向けて下降していく。煙出しピットの深さは検出面から36cmで、ややオーバーハング気味に立ち上がる。燃焼部焼土は、両袖の間に38×32cmの範囲で広がる。カマド堆積土は４層に区分できる。黒褐色土が主体で、焼土粒や炭化物が微量含まれる。カマドを断ち割り観察した状況では、カマド本体は、袖の形に地山を削りだし、その上に黒褐色土を盛り構築したものと考えられる。また燃焼部から奥にかけて、ピット状の掘り込みが見受けられ、この上に黒褐色土を盛ってからカマドを構築している。

遺物は、埋土・床面を中心に土師器2,091ｇが出土している。多くは床面の北東側から出土している。そのうち13点（1,464ｇ）を図示した。29～32は内面に黒色処理が施される坏である。いずれもゆるやかに内湾する体部を有するが、32のみは直線的に広がるかもしれない。29・30・32はロクロ調整、31は内外面ともにミガキが施されているが黒色処理はほとんど剥落している。33～34・36・37は内面に黒色処理が施されない坏である。33は体部上半は直線気味に開く形態であるが、下半はゆるやかに調整される。34・36は直線気味に開く体部をもち、口縁部がわずかに外反する。37は体部下端を強くナデられ、高台状に突出している。39は高台坏である。坏部は直線的に大きくひらく形態をし、脚部は「ハ」字状に短く開く。35は須恵器坏で直線的に開く体部をもつ。38は体部下半のみであるが小型壺と推定される。40・41は甕であり、それぞれ下半部・上半部の破片である。41のような短く外反するものはまれである。

時期は遺構の状況および出土遺物から９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。

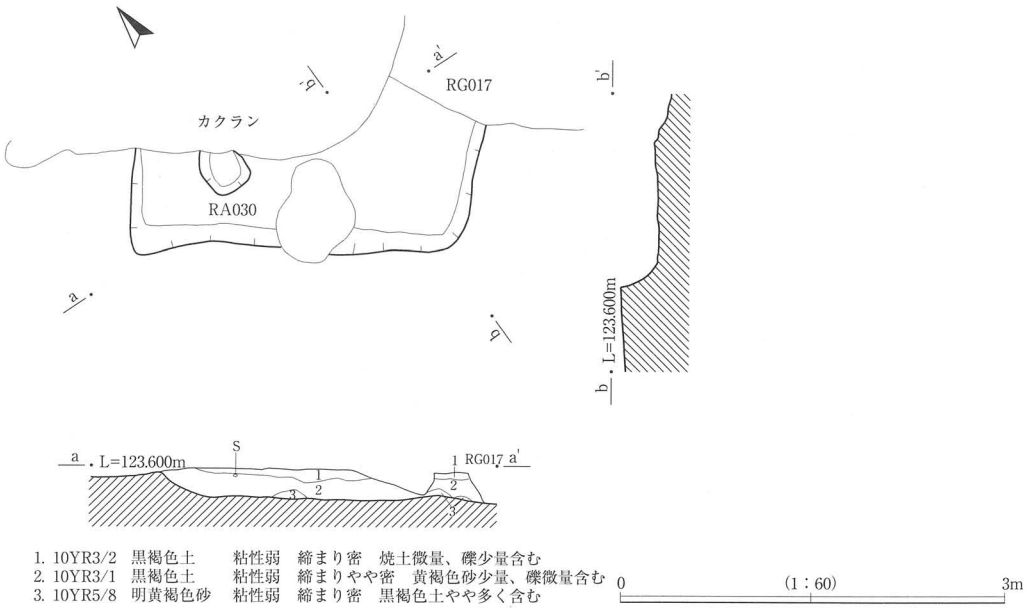
RA030竪穴住居跡（第31図）

調査区北側、3G17oグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面で、黒褐色土の広がりとして検出した。北側はカクランによって大きく削平され、東側はRG017に切られている。そのため、残存するのは遺構の西側一部に過ぎない。カマドは検出していないが、形状、規模から竪穴住居跡と推定した。

残存する３辺はほぼ直交することから、平面形は方形であったと推測される。北西壁と南東壁の間は2.6mである。壁は、床面から緩やかに立ち上がり、確認面から床面までの深さは30cmを測る。
堆積土は３層に分けられる。黒褐色土が主体であり、上位には焼土粒、下位には黄褐色砂を含む。また全体的に、礫が微量～少量含まれる。

カマドは確認していない。削平された東側に本来位置していた可能性が考えられる。
遺物は、堆積土・埋土を中心に104ｇ出土しているが細片のため図示していない。したがって、時期は不明であるが、堆積土の特徴、遺構の形状等から周囲と同様の時期であると考えられる。

（川又）



第31図　RA030竪穴住居跡

（2）竪穴状遺構（RE）

１棟検出した。過去の調査で、５棟の竪穴状遺構が確認されており、それらに続くＲＥ006とした。

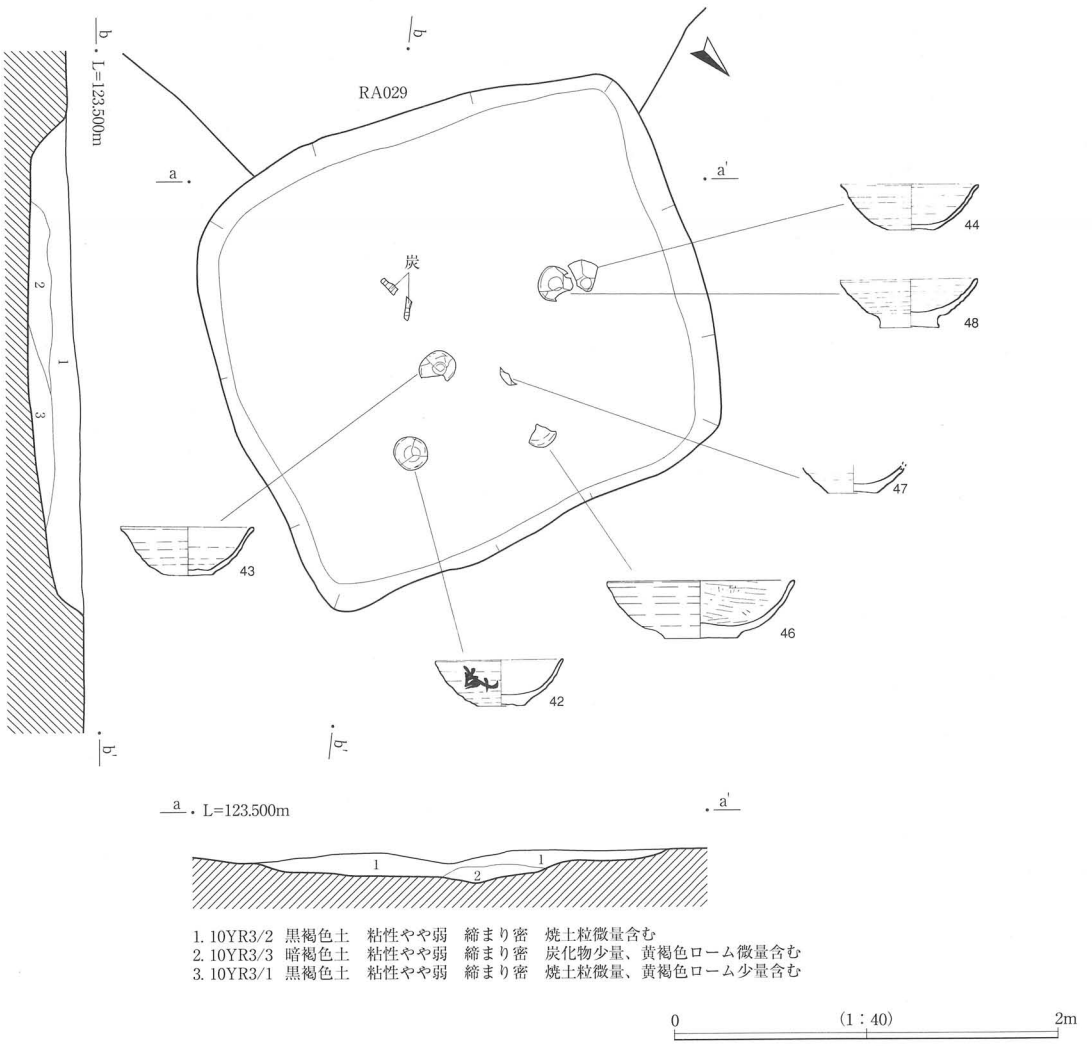
RE006竪穴状遺構（第32・33図）

調査区の東部、3G24wグリッドに位置する。南側においてＲＡ029竪穴住居跡と重複し、本遺構の方が古い。ただし本遺構はＲＡ029の床面より下から検出しているため、削平を受けたのは南壁の一部にすぎない。

検出はＶ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。削平が及んでいるため掘り込み面は不明である。

平面形は正方形状を呈し、規模は南北壁間が最大で2.3m、東西壁間が最大で2.6m、床面までの深さが確認面から26cmである。住居方位は東壁を基準とするとＮ－23°－Ｗである。

壁は床面からゆるやかに立ち上がり、床（底）面はほぼ平坦で、竪穴住居跡ほど、硬くしまっていない。貼り床は確認できなかった。



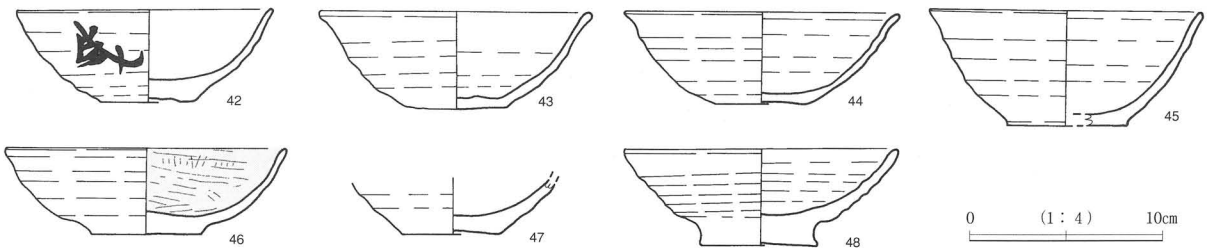
第32図　RE006竪穴状遺構

堆積土は３層に区分できる。２・３層は暗褐色・黒褐色土であり、中央部付近に堆積する。堆積土の大半は１層・黒褐色土で占められることから、人為堆積の可能性が高い。

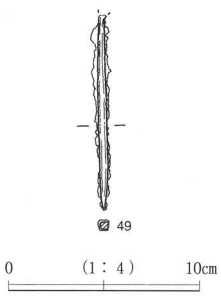
遺物は、堆積土・床面を中心に出土し、床面からは完形に近い坏類が比較的多く出土している。図示した坏類は原位置を保っている（43～48）。出土総量は1,478ｇであり、そのうち８点（913ｇ）を図示した。45を除いて全て床面上から出土している。

42～45はゆるやかに内湾して立ち上がる体部をもち、口縁部がわずかに外反するなど器形的に類似する。45のみは器高が高く別器種に分類されよう。また、42には「成」の墨書が体部上半に正位で確認できる。46～48は底部が突出した特徴をもつ坏である。突出の度合いが大きい48は高台坏に分類されるかもしれない。これらの坏体部は内湾気味に立ち上がる形態である。49は鉄製紡錘車の軸と考えられる。

以上、遺構の特徴及び遺物から本遺構は９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。



第33図　RE006竪穴状遺構出土遺物１



第34図　RE006竪穴状遺構出土遺物２

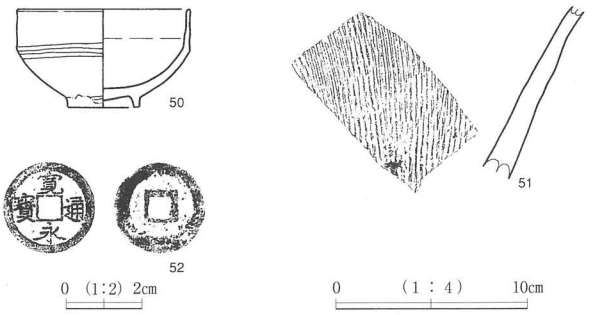
（3）掘立柱建物跡（RB）

6棟検出した。過去の調査で、2棟の掘立柱建物跡が報告されており、それに続くRB003～008とした。

RB003掘立柱建物跡（第35・37図）

4G7m～4G14nグリッドに位置する。V層上面で検出した。柱穴32個（Pit1～32）を使用している。RG014と重複しており、本遺構の方が新しい。また5m西側にRB004、1m西側にRB006が隣接する。

建物の主軸方向は、N－25°－Eである。規模は、桁行き13.6m、梁間8.2mで、面積は111.52㎡である。柱間寸法は、桁行きでは200cmと210cm、梁間では200cmを多用している。



第35図　RB003掘立柱建物跡出土遺物

堆積土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色砂や礫を含む。明確な柱痕は確認できなかったが、Pit4～8にみられる1層は柱痕の可能性が高い。

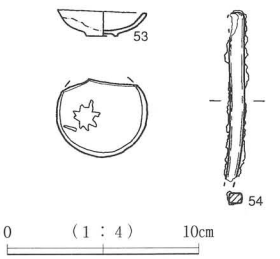
遺物は、175gが出土し、そのうち3点（104g）を図示した。50は腰折碗である。内外面に青緑色の釉がかかる。その釉調・胎土から大堀相馬産と考えられる。51は擂り鉢の体部片である。暗褐色を呈し、焼成も良好であるが、産地は不明である。52は寛永通宝である。

以上、遺物の特徴から近世（18世紀代）の遺構と考えられる。

RB004掘立柱建物跡（第36・38図）

4G7g～4G14hグリッドに位置する。V層上面で検出した。柱穴26個（Pit1～26）を使用している。RB006とプランが重複し、Pit2・Pit3・Pit4・Pit5がそれぞれ、RB006のPit9・Pit8・Pit7・Pit6を切る。従って本遺構の方が新しい。5m東側にRB003が隣接する。

建物の主軸方向は、N－23°－Eである。規模は、桁行き13.0m、梁間6.0mで、面積は78.0㎡である。柱間寸法は、200cmを基準としている。



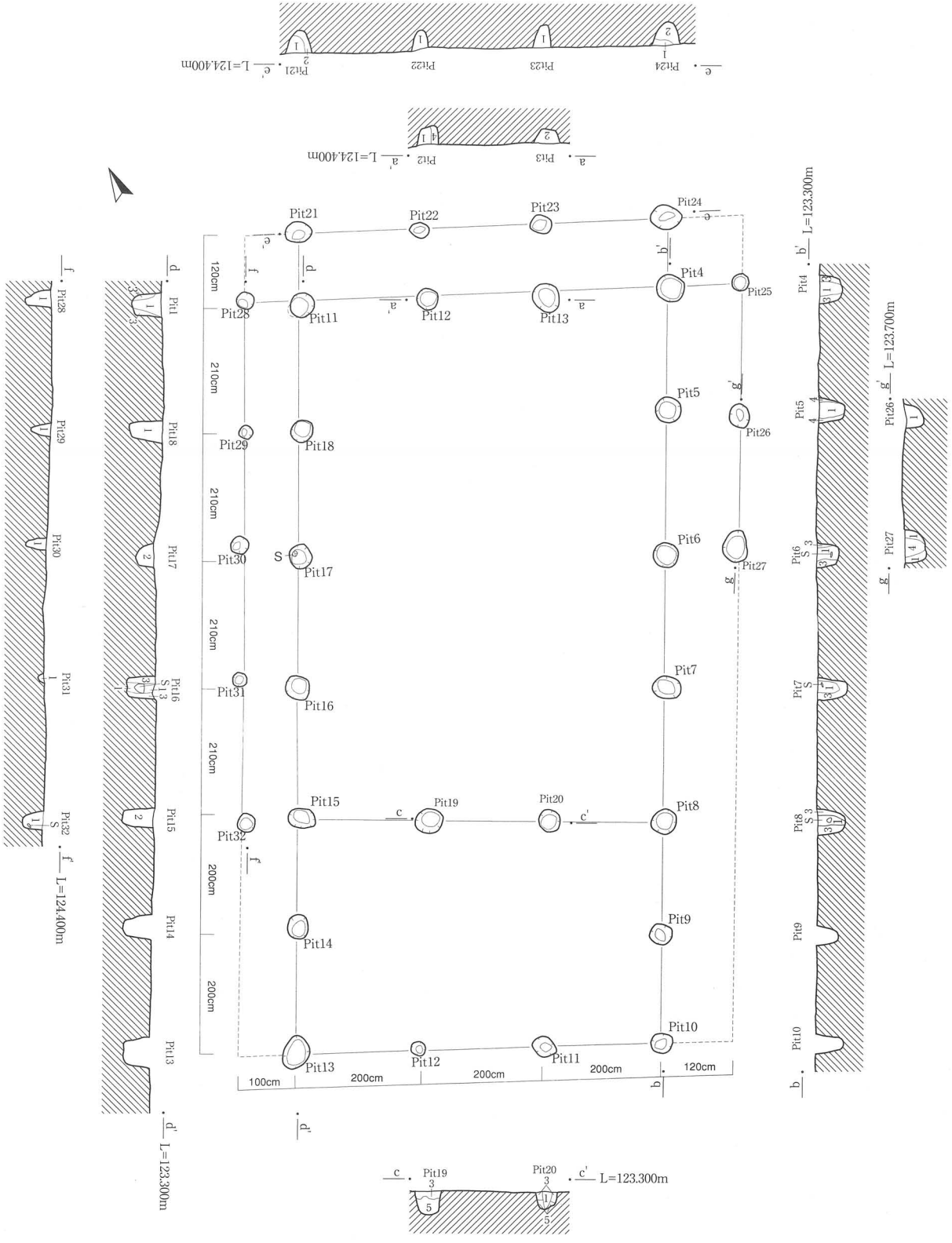
第36図　RB004掘立柱建物跡出土遺物

堆積土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色砂や礫を含む。柱痕は確認できなかった。

遺物は、柱穴より2点（18g）出土した。53は紅皿である。白磁製であり、内面に朱色で紅葉風の文様が施される。54は鉄釘であり、先端を欠損している。以上の出土遺物から近世（18世紀か）の遺構と考えられる。

RB005掘立柱建物跡（第39図）

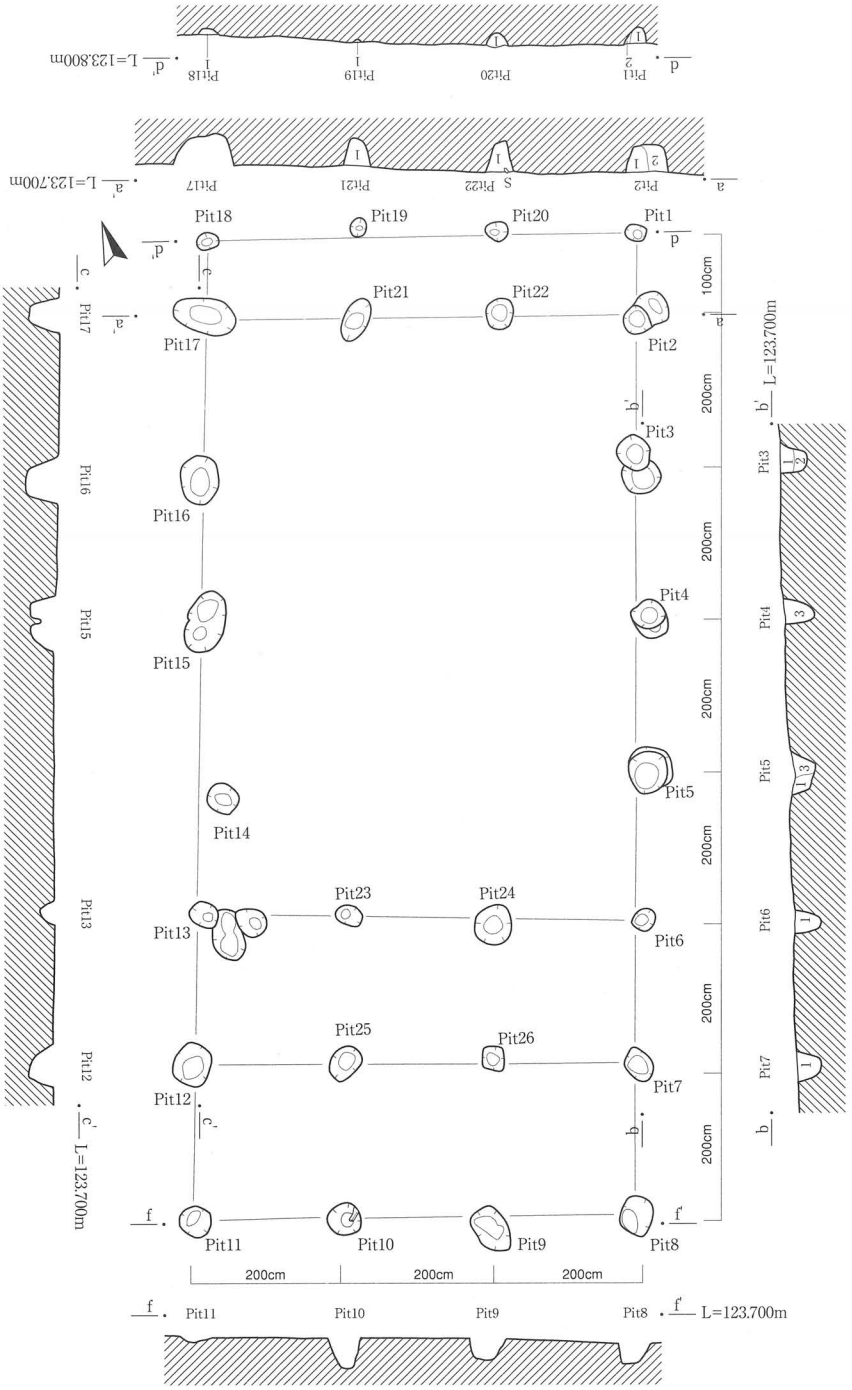
3G16m～3G21mグリッドに位置する。V層上面で検出した。柱穴16個（Pit1～16）を使用している。北東隅はカクランによって大きく削平されているが、他の柱穴の配置から、本来この位置にも柱穴があったと推測される。RA030と重複しており、Pit3がRA030を切っており、本遺構の方が新しい。建物の主軸方向は、N－15°－Wである。規模は、桁行き8.4m、梁間4.6mで、面積は38.64㎡である。



1. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや強　締まり密　粒径5mmの黄褐色ロームブロック少量、礫少量含む
2. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや弱　締まり疎　黄褐色ローム少量、礫少量含む
3. 10YR2/3　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　黄褐色ローム少量、黄褐色砂少量含む
4. 10YR2/3　黒褐色土　粘性弱　締まりやや疎　黄褐色砂やや多く含む
5. 10YR3/3　暗褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色砂やや多く含む

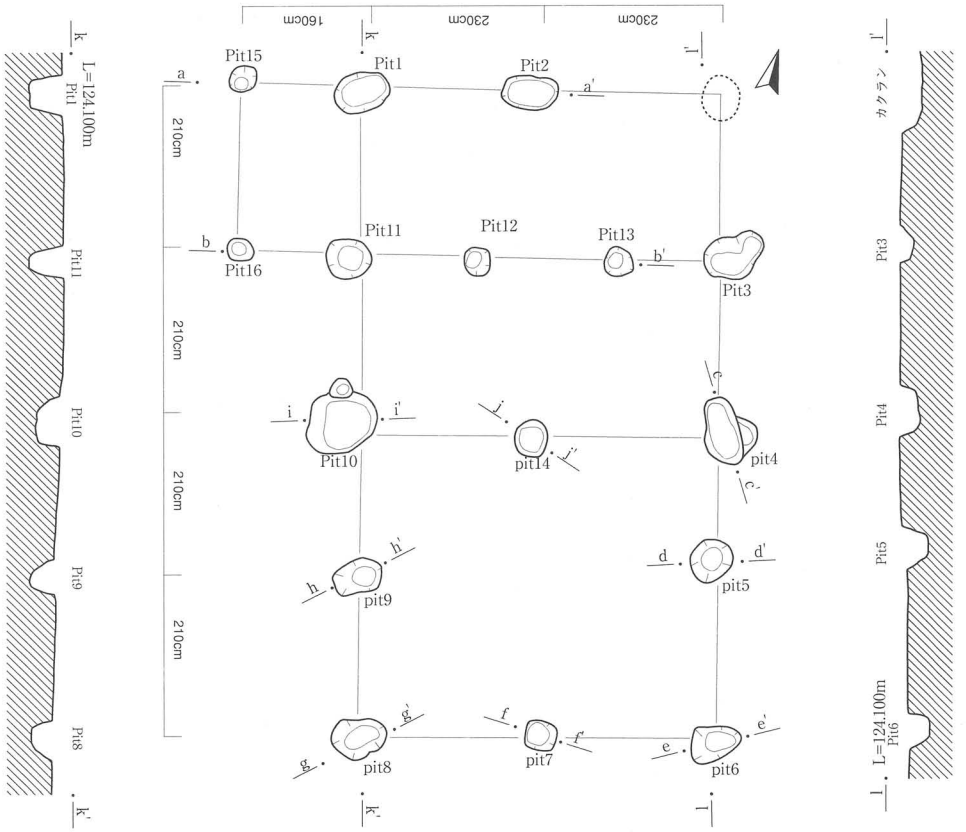
0　(1：100)　5m

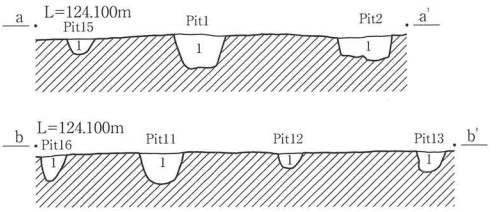
第37図　RB003掘立柱建物跡

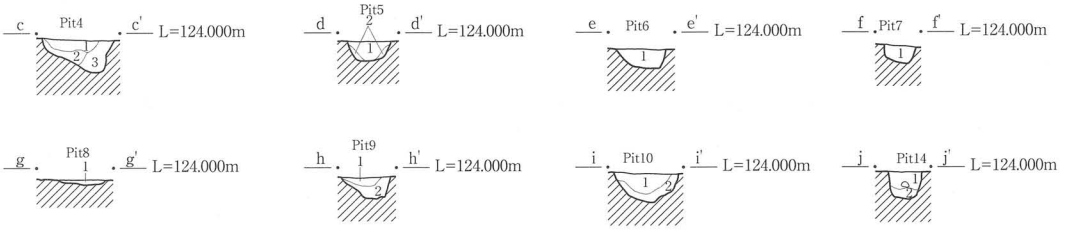


1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色砂微量、礫少量含む
2. 10YR3/4　暗褐色土　粘性弱　締まりやや疎　黄褐色砂中量、礫少量含む
3. 10YR2/3　黒褐色土　粘性強　締まりやや密　黄褐色ローム少量、礫少量含む

第38図　RB004掘立柱建物跡







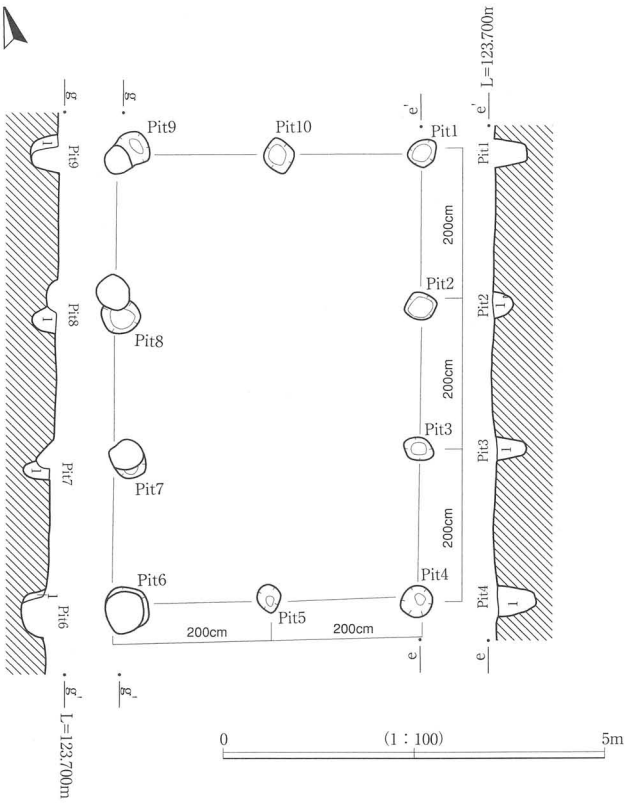
1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性強　締まりやや疎　炭化物微量、黄褐色ローム少量、礫少量含む
2. 10YR2/3 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　黄褐色ローム少量含む
3. 10YR3/3 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　黄褐色ロームやや多く含む

0　(1：100)　5m

第39図　RB005掘立柱建物跡

柱間寸法は、桁行きで210cm、梁間で230cmを基準としている。北西側隅に桁行き160cmのところに柱穴は2個（Pit15・16）がある。南側にはないので、下屋ではなく、建物に付随する施設（縁側？）であろうか。

堆積土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色砂や礫を含む。柱痕は確認されなかった。
遺物は出土しておらず、従って、時期も不明であるが、柱間距離や柱配置から、近世の遺構と考えられる。



1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色砂微量、礫少量含む

第40図　RB006掘立柱建物跡

RB006掘立柱建物跡（第40・41図）

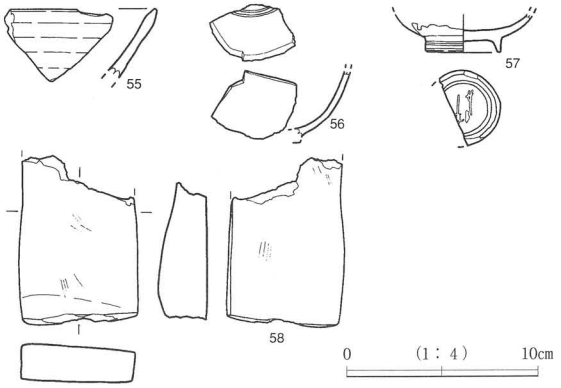
4G８ｊ～４G12ｋグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。柱穴10個（Pit1～10）を使用している。RB004とプランが重複し、Pit6・Pit7・Pit8・Pit9がそれぞれ、RB004のPit5・Pit4・Pit3・Pit2に切られる。従って本遺構の方が古い。1m東側にRB003が隣接する。

建物の主軸方向は、N－20°－Eである。規模は、桁行き6.0m、梁間4.0mで、面積は24.0㎡である。柱間寸法は、200cmを基準としている。

堆積土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色砂や礫を含む。柱痕は確認されていない。

遺物は、４点が柱穴内より出土している。55は、土師器坏の口縁部破片である。56は青磁片である。青磁は外側部分のみであり、内面には染付けの圏線が２本見える。これらの特徴から肥前産と考えられる。57は高台付の碗で、肥前産の染付けである。58はデイサイトを用いた砥石片である。断面形が長方形を呈する扁平な砥石で、表裏面、両側縁、小口面には擦痕や光沢が残る。

以上、遺物の年代から近世の遺構と考えられる。



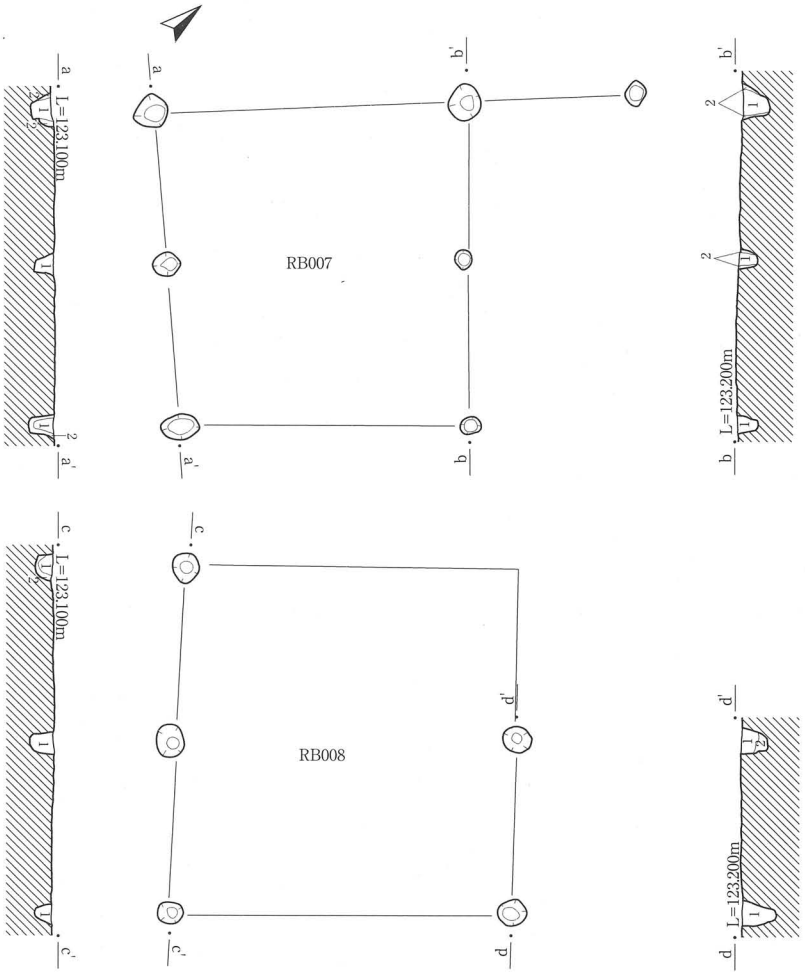
第41図　RB006掘立柱建物跡出土遺物

RB007掘立柱建物跡（第42・43図）

４G14ｂ～４G18ａグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。柱穴７個を使用している。

建物の主軸方向は、N－53°－Wである。規模は、桁行き4.2m、梁間4.0mで、面積は16.8㎡である。桁梁を構成する柱は6個であるが、北東側に1個、ほぼ同じ規模の柱穴が検出し、本遺構の柱間幅と一致するので、本遺構のものとした。

堆積土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色砂を含む。明確な柱痕は確認できなかった。
遺物は、柱穴より寛永通宝が1点出土している（59）。



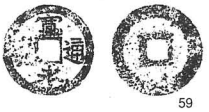
RB007
1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム少量含む
2. 10YR3/3　暗褐色土　粘性強　締まりやや密　黄褐色ローム微量含む

RB008
1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　黄褐色ローム微量含む
2. 10YR3/4　暗褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色ローム少量含む

0　(1：100)　5m

第42図　RB007・008掘立柱建物跡

遺物の年代から、近世の遺構と考えられる。



0　(1:2)　2cm

第43図　RB007掘立柱建物跡出土遺物

RB008掘立柱建物跡（第42図）

４G17ｅ～４G20ｄグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。柱穴５個を使用している。北隅にあたる位置に柱穴は確認できなかったが、他の柱穴の配置から、本来この位置にも柱穴があったと推測される。

建物の主軸方向はN－45°－Wである。規模は、桁行き4.5m、梁間4.5mで、面積は20.25㎡である。

堆積土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色砂を含む。柱痕は確認できなかった。

遺物は、出土していないが、柱間寸法から近世の遺構と考えられる。　（川又）

（4）土　　坑（RD）

65基検出した。過去の調査で、89基の土坑が確認されており、それらに続く、RD090～154とした。

RD090土坑（第44図）

調査区北側、3F13vグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はなく、隣接する遺構もない。平面形は楕円形である。長軸方向はN－9°－Eで、地形の傾斜方向とほぼ直交する。開口部径は160×66cmで、断面形はⅢ形を呈する。底面は中央から外側へ行くにつれ少しずつ高くなり、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは18cmを測る。堆積土は黒褐色土が主体の単層で、黄褐色ローム・礫を微量含む。底面には礫が多く露出している。遺物は、土師器68gが出土している。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から古代と考えられる。

RD091土坑（第44図）

調査区北西端、3E15uグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m南東側に本遺構と規模・主軸方向がほぼ同じRD092が並行する。平面形はひょうたん形で、中央がくびれている。長軸方向はN－60°－Eである。開口部径は、長軸方向が170cm、短軸方向が80cmで、くびれの部分は58cmである。底面は、中央部分が高く、それを挟んで両側が深くなる。壁はほぼ直立する。確認面から底面までの深さは、北西側の深い所で46cmを測る。堆積土は黒褐色土が主体で、黄褐色ローム・礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、RD092と一対をなして、何らかの機能を有すると考えられる。時期は不明であるが、埋土の様相から古代と考えられる。

RD092土坑（第44図）

調査区北西端、3E15uグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m北西側にRD091が本遺構と並行して位置する。平面形はやや歪な楕円形を呈し、RD091とはやや異なる。長軸方向はN－61°－E、開口部径は160×78cmである。底面には僅かにうねりがあるものの概ね平坦で、壁はほぼ直立する。確認面から底面までの深さは36cmを測る。堆積土は3層に分けられる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームや礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、RD091と一対をなし、機能したものと考えられる。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD093土坑（第44図）

調査区北西端、3E16uグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m北側にRD092が隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はN－49°－W、開口部径は80×50cmである。底面は開口部に比べ狭く、壁は緩い角度で立ち上がる。確認面から底面までの深さは20cmを測る。堆積土は単層で黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム・礫を少量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明。時期は埋土の様相から古代と考える。

RD094土坑（第44図）

調査区北西端、3E12yグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。遺構の北端は調査区外にあり確認できなかった。他遺構との重複はない。1m東側にRZ044が隣接する。平面形は楕円形基調で、長軸方向はN－41°－Wである。規模は、長軸方向の残存長が134cm、短軸方向が70cmである。底面は

RD090

a・　・a'

a・L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密
黄褐色ローム微量、礫微量含む

RD091

a・　・a'

RD093

a・　・a'

a・L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性強　締まりやや密
黄褐色ローム微量、礫少量含む

RD092

b・　・b'

a・L=124.800m　・a'

RD091
1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや強　締まり中
黄褐色ローム微量、礫少量含む

b・L=124.800m　・b'

RD092
1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まり中　礫少量含む
2. 10YR2/3　黒褐色土　粘性中　締まり密
黄褐色ローム少量、径5～40mmの礫中量含む
3. 10YR3/1　黒褐色土　粘性中　締まり中
黄褐色ローム少量、礫中量含む

RD094

a・　・a'

調査区外

a・L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎
黄褐色ローム少量含む
2. 10YR3/3　暗褐色土　粘性やや強　締まりやや疎
黄褐色ローム少量含む
3. 10YR5/6　黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり疎
黒褐色土中量含む
4. 10YR3/4　暗褐色土　粘性やや強　締まりやや密
黄褐色ローム少量含む

RD095

カクラン

a・　・a'

a・L=124.800m・a'

1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや弱
黄褐色ローム微量、礫少量含む
2. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや弱
黄褐色ローム少量含む

RD096

a・　・a'

a・L=124.800m　・a'

1. 10YR3/2　黒褐色土　粘性強　締まりやや密
黄褐色ローム少量含む
2. 10YR4/4　褐色土　粘性強　締まりやや密
黒褐色土少量含む

RD097

カクラン

a・L=124.800m　・a'　　b・L=124.800m　・b'

1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性強　締まりやや疎
粒径30mmの黄褐色ロームブロック少量、礫少量含む
2. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎
黄褐色ロームやや多く、礫少量含む

RD098

a・　・a'

a・L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎
火山灰ブロックで少量含む
2. 10YR3/3　褐色土　粘性やや強　締まりやや疎
粒径20mmの黄褐色ロームブロック中量含む

0　(1：40)　2m

第44図　RD090～RD098土坑

概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは30cmを測る。堆積土は４層に分けられ、上位は黒褐色土、下位は黄褐色ロームを主体とする。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD095土坑（第44図）

調査区北西、3E13yグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。北側の一部はカクランに削平されている。1m東側にRZ044が隣接する。平面形は円形で、開口部径は残存する東西方向で37cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは36cmであり、開口部径に比べ比較的深く、柱穴状である。堆積土は２層に分けられる。黒褐色土が主体で、黄褐色ロームなどを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるがRZ044の溝を挟んで東側に、本遺構と同様な形状をしたRD101が位置しており、これら２基はRZ044に関連するものではないかと考える。時期は埋土の様相から古代と考える。

RD096土坑（第44図）

調査区北西、3E15yグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m東側にRZ044、60cm南側にRD097が隣接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN－90°－E、開口部径は68×36cmである。底面は概ね平坦であるが、東側が若干高くなる。壁は外傾する。確認面から底面までの深さは20cmを測る。堆積土は２層に分けられる。上位は黒褐色土、下位は褐色土が主体である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD097土坑（第44・52図）

調査区北西、3E15yグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。120cm南側にRD102が隣接する。平面形は長方形を呈する。長軸方向はN－72°－E、開口部径は176×72cmである。壁はやや外傾して立ち上がる。確認面から底面までの深さは50cmを測る。堆積土は２層からなる。黒褐色土主体で、黄褐色ローム・礫少量を含む。遺物は、土師器28gが出土しており、そのうち１点を図化した。60は甕の口縁部片である。端部には面が形成されている。遺構の性格は不明であるが、RD091・092同様に、RD102と一対をなし機能するものと思われる。時期は出土した土師器から平安時代以前に構築されたと考えられる。

RD098土坑（第44図）

調査区北西、3F14aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。RZ044を切る。60cm西側にRD100が隣接する。平面形は円形で、開口部径は48×46cmである。壁は緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは12cmを測る。堆積土は２層に区分できる。上位の黒褐色土には灰白色火山灰がブロック状で少量混在していた。遺物は出土していない。遺構の性格は不明。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD099土坑（第45図）

調査区北西、3F15aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東側をRZ044に切られ、南側をカクランに削平されているため、残存するのは北壁と西壁の周辺のみである。40cm西側にRD097が隣接する。平面形は不明である。残存部分の規模は、開口部で60×42cmである。底面は平坦で、壁は外傾

して立ち上がる。確認面から底面までの深さは8cmを測る。堆積土は２層からなる。黒褐色土主体で、黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格・時期は不明である。埋土の様相から古代のものと推定される。

RD100土坑（第45図）

調査区北西、3F14bグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。RZ044の周溝底面に黒褐色の広がりで検出した。RZ044の埋土からは本遺構のプランは検出しなかったので、RZ044より古い。平面形は楕円形で、長軸方向はN－9°－W、開口部径は60×40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。確認面から底面までの深さは18cmを測る。堆積土は２層からなる。黒褐色土が主体で、炭化物・黄褐色ローム少量を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。RZ044に付随する遺構の可能性がある。時期は埋土の様相から、古代と考えられる。

RD101土坑（第45図）

調査区北西、3F18bグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。30cm西側にRZ044が隣接する。平面形は方形に近い円形で、開口部径は32×26cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。確認面から底面までの深さは44cmで、開口部径に対し比較的深く、柱穴状である。堆積土は２層からなる。黒褐色土が主体であり、黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、RZ044を挟んで西側に位置するRD095と一対で、RZ044に付随するものである可能性がある。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD102土坑（第45図）

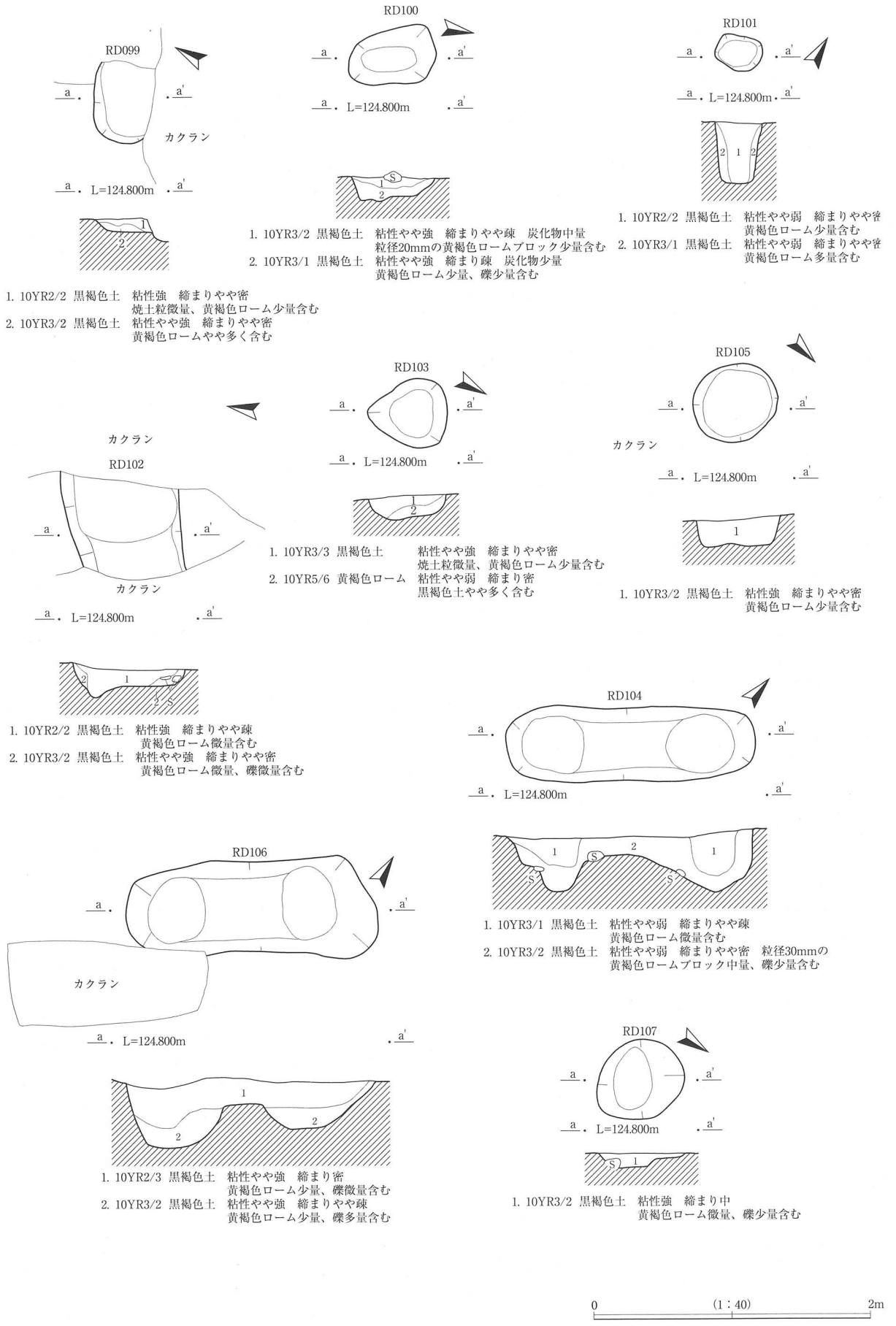
調査区北西、3F16aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東側と西側はカクランにより削平されており、本来の形状・規模は不明である。ただし残存部は120cm北側に隣接するRD097に類似する。残存部分の規模は、南北×東西で80×70cmである。床面は概ね平坦であり、底面までの深さは10cmを測る。ただし、北壁際付近の一部はこれよりも若干落ち窪んでいる。壁は外傾して立ち上がる。堆積土は２層からなる。黒褐色土が主体で、黄褐色ロームを微量含む。下位には礫も微量含まれる。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、RD097と一対をなすものと思われる。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD103土坑（第45図）

調査区北西、3F17aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m南東側にRD104が隣接する。平面形は円形を基調とし、南東側がやや尖った形状をしている。長軸方向はN－30°－W、開口部径は58×50cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに直立する。確認面から底面までの深さは16cmを測る。堆積土は２層に分かれる。上位は黒褐色土が主体で、焼土粒を微量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD104土坑（第45図）

調査区北西、3F18bグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。160cm南東側に本遺構と規模や主軸方向がほぼ同じRD106が並行する。平面形は長方形で、長軸方向はN－50°－E、開口部径は180×52cmである。中央が浅く、両端が深い。壁はほぼ直立する。確認面から



第45図　RD099～RD107土坑

底面までの深さは、北東側の深い所で42cmを測る。堆積土は２層からなる。黒褐色土が主体で、黄褐色ロームを含む。下位には礫少量を含む。床面には礫が多くみられる。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、RD106と一対をなして機能するものと考えられる。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD105土坑（第45図）

調査区北西、3F19aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は円形で、開口部径は62×56cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。確認面から底面までの深さは18cmを測る。堆積土は単層である。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームを少量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD106土坑（第45図）

調査区北西、3F19bグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。160cm北西側に本遺構と規模や主軸方向がほぼ同じであるRD104が並行する。南壁の一部はカクランによって削平されている。平面形は長方形で、長軸方向はN－59°－E、開口部径は180×70cmである。断面は中央が浅く、それを挟んで両端が深くなっている。壁はやや外傾して立ち上がる。確認面から底面までの深さは、南西側の深い方で44cmを測る。堆積土は２層からなる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム・礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、RD104と一対をなし機能するものと考えられる。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD107土坑（第45図）

調査区北西、3E18vグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形で、長軸方向はN－65°－W、開口部径は66×56cmである。底面は平坦である。東側壁は外傾して立ち上がるが、西側は階段状になっている。確認面から底面までの深さは8cmを測る。堆積土は単層で、黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム・礫を少量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD108土坑（第46・52図）

調査区北西、3E18wグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。80cm南東側にRD109が隣接する。平面形は不整な方形で、長軸方向はN－56°－E、開口部径は72×64cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは20cmを測る。堆積土は黒褐色土の単層で、黄褐色ローム・礫を少量含む。遺物は、土師器15gが出土した。61は坏の口縁部片である。内面に黒色処理が施されない。

時期は、遺物の特徴から少なくとも９世紀以前に位置づけられよう。

RD109土坑（第46図）

調査区北西、3E19wグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。東側の一部はカクランにより削平されている。他遺構との重複はない。80cm北西側にRD108が隣接する。北壁と南壁が平行し、北壁が南壁よりも長いため、平面形は台形に近いと推定される。長軸方向はN－76°－Eである。開口部径は、長軸方向の残存長が154cm、短軸方向が88cmである。底面は東側がやや低くなるものの、概

ね平坦である。壁は外傾し、断面形は皿状を呈する。確認面から底面までの深さは18cmを測る。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色ロームを微量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、墓壙の可能性がある。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD110土坑（第46図）

調査区北西、3E20wグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。60cm東側にRD111が隣接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN－25°－E、開口部径は88×44cmである。底面は南側が低く、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは、深い方の南側で18cmを測る。堆積土は単層で黒褐色土を主体とし、炭化物を微量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD111土坑（第46図）

調査区北西、3E20xグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。60cm西側にRD110が隣接する。平面形は円形で、開口部径は64×58cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。底面から壁にかけての立ち上がりは明瞭ではなく、丸みを帯びている。断面形は椀形を呈する。確認面から底面までの深さは22cmを測る。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は褐色土が主体である。上位には骨片や炭化材も含まれていた。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代以降と考えられる。

RD112土坑（第46図）

調査区北西、3E21yグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形で、長軸方向はN－70°－W、開口部径は82×46cmである。断面形は皿状を呈する。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは14cmを測る。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は黄褐色ロームを主体とする。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD113土坑（第46図）

調査区北西、3F19cグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。北西側の一部はカクランにより削平されている。他遺構との重複はない。南東側にRD114が隣接する。平面形は楕円形と推定され、長軸方向はN－40°－W、開口部径は、長軸方向の残存長が60cm、短軸方向が38cmである。底面は平坦ではなく、壁は遺構の中央付近から緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは20cmを測る。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は黄褐色ロームを主体とする。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD114土杭（第46図）

調査区北西、3F20dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。北西側にRD113が隣接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN－30°－W、開口部径は70×50cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは10cmを測る。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は黄褐色ロームを主体とする。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD115土坑（第46図）

調査区北西、3F19eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形で、長軸方向はN－87°－E、開口部径は60×44cmである。底面は、西側が平坦であるが、東側は一段下がっている。壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは、西側の深い方で20cmを測る。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD116土坑（第46図）

調査区北西、3E22yグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。遺構の南側は調査区外にあり、正確な形状・規模は不明である。他遺構との重複はない。60cm東側にRD117が隣接する。北壁は直線的で、西側でやや回り始めた所までを確認している。北壁を長辺とすれば、平面形は楕円形を呈するものと推定され、長軸方向はN－90°－E付近である。確認できる範囲は東西が256cm、南北が48cmで、全体の規模はこれよりも大きいと思われる。底面は最深部が平坦で、その外側は階段状に一段高くなる。壁は外傾する。確認面から最深部までの深さは14cmを測る。堆積土は2層からなる。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とし、全体に黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、形状や規模から墓壙の可能性がある。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD117土坑（第46図）

調査区北西、3F21aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。遺構の南側は調査区外にあり、全体の正確な規模・形状は不明である。他遺構との重複はない。60cm西側にRD116が隣接する。残存する北壁は直線的である。北壁を長辺とすれば、平面形は隅丸の長方形に近い形で、長軸方向はN－70°－E付近と考えられる。確認できる範囲は東西が90cm、南北が80cmで、全体の規模はこれよりも大きい。底面は外側にいくにつれ徐々に高くなっていく。壁は外傾する。確認面から底面までの深さは10cmを測る。堆積土は2層からなる。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とし、全体に黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、形状・規模から墓壙の可能性がある。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD118土坑（第46図）

調査区北西、3F21cグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。北側の一部がカクランにより削平されている。他遺構との重複はない。40cm南側にRD119が隣接する。平面形は円形と考えられ、長軸方向はN－31°－E、残存部分の規模は、長軸方向の残存長が50cm、短軸方向が40cmである。底面は概ね平坦である。東壁は緩やかに立ち上がり、西壁は直立する。確認面から底面までの深さは16cmを測る。堆積土は3層からなる。黒褐色土が主体で、中位に暗褐色土層をはさむ。全体に黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD119土坑（第47図）

調査区北西、3F22cグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。南側は調査区外にあり、遺構全体の正確な規模・形状は不明である。他遺構との重複はない。40cm北側にRD118、60cm東側にRD120が隣接する。長軸方向はN－0°－Eで、真北を向く。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。確認できる範囲は、長軸方向が56cm、短軸方向が50cmで、全体の規模はこれよりも大きい。底面は平坦で、

RD108

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密
黄褐色ローム少量、礫少量含む

RD109

カクラン

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

カクラン　カクラン

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性強　締まり密
黄褐色ローム微量含む

RD110

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密
炭化物微量、黄褐色
ロームやや多く含む

RD111

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　20mm大の
炭化材やや多く、骨片中量含む
2. 10YR3/3 褐色土　粘性やや弱　締まりやや疎　粒径30mm
の黄褐色ロームブロックやや多く含む

RD112

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり疎
黄褐色ロームやや多く含む
2. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや強　締まりやや密
黒褐色土少量含む

RD113

カクラン

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

カクラン

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密
粒径40mmの黄褐色ローム
ブロック少量含む
2. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まりやや疎
黒褐色土多量含む

RD114

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密
黄褐色ローム少量含む
2. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり密
黒褐色土やや多く含む

RD115

a・　・a'

a・ L=124.600m　・a'

1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密
粒径30mmの黄褐色ロームブロック少量含む
2. 10YR3/4 暗褐色土　粘性強　締まり密
粒径30mmの黒褐色土ブロック中量含む

RD116

a・　・a'

調査区外

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR3/2 黒褐色土　粘性強　締まり密
粒径30mmの黄褐色ローム
ブロック少量含む
2. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや強　締まり密
黄褐色ローム多量含む

RD117

調査区外

a・　・a'

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密
黄褐色ローム微量含む
2. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや弱　締まり密
黄褐色ローム少量含む

RD118

a・　・a'

カクラン

a・ L=124.800m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎
粒径20mmの黄褐色
ロームブロック多量含む
2. 10YR3/3 暗褐色土　粘性強　締まりやや密
黄褐色ロームやや多く、
礫少量含む
3. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密
黄褐色ローム少量含む

0　(1：40)　2m

第46図　RD108～RD118土坑

壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは20cmを測る。堆積土は２層からなる。黒褐色土が主体で、黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD120土坑（第47図）

調査区北西、3F22cグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。南側は調査区外にあり、遺構全体の正確な規模・形状は不明である。他遺構との重複はない。60cm西側にRD119、すぐ東側にRD121が隣接する。長軸方向はN－29°－Wで、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。確認できた範囲は長軸方向が50cm、短軸方向が44cmである。底面には段差があり、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは、西側の深い方で14cmを測る。堆積土は３層からなり、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。全体に黄褐色ロームを多く含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD121土坑（第47・52図）

調査区北西、3F22dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。南側が調査区外にあり、遺構の全体は確認できない。他遺構との重複はない。東側にRD120が隣接する。長軸方向はN－56°－Wで、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。確認できた範囲は、長軸方向が96cm、短軸方向が70cmである。底面は西側が平坦で、東側が一段下がる。西壁はほぼ直立し、東壁は外傾する。確認面から底面までの深さは、西側の浅い所で20cm、東側の深い所で28cmである。堆積土は３層からなる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームを含む。遺物は、土師器１点（7g）が出土している。62は坏の口縁部片である。ロクロ調整であり、内面に黒色処理が施されない。

遺構の性格は不明であるが、形状・規模から墓壙の可能性がある。時期は出土した土師器から９世紀以前に位置づけられる。

RD122土坑（第47図）

調査区北西、3F16eグリッドに位置する。RZ044の底面で検出した。平面形は円形である。開口部径は56×46cmである。底面は波打っており、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは14cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色ロームをやや多く含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、RZ044の埋土からは本遺構のプランは確認されなかったので、RZ044に付随する遺構である可能性がある。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD123土坑（第47図）

調査区北西、3F15eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。RZ044の周溝内側にあり、20cm北側にRD124が隣接する。平面形は楕円形であるが、中央がやや凹んだ形状である。長軸方向はN－40°－Eで、開口部径は68×46cmである。底面は西向きに傾斜しており、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは24cmである。堆積土は３層からなり、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。全体に黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD124土坑（第47図）

調査区北西、3F15eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。RZ044の周溝内側にあり、20cm南側にRD123が隣接する。平面形は楕円形基調であるが、中央付近は凹んだ形状をしている。長軸方向はN－65°－Wで、開口部径は94×38cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは16cmである。堆積土は2層からなる。黒褐色土が主体で、黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD125土坑（第47図）

調査区北西、3E15dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。北側がカクランによって削平されており、遺構の全体を確認することはできない。RZ044の周溝内側にあり、南側が周溝と接する。長軸方向はN－0°－Eで、真北を向く。平面形は楕円形に近いと推定される。長軸方向の残存長は48cmで、短軸方向は36cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは18cmである。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。全体に炭化物・黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD126土坑（第47図）

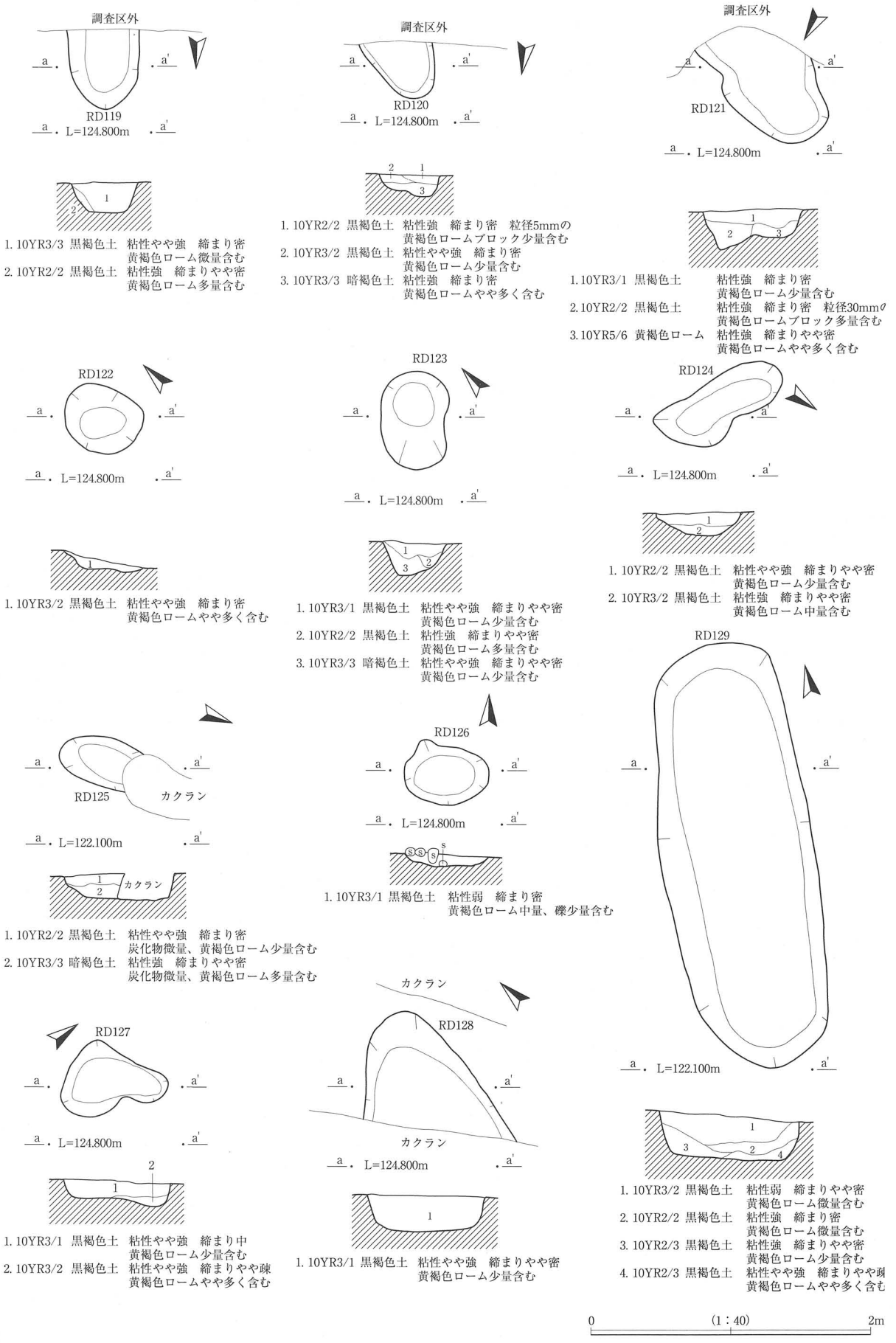
調査区北西、3F14dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。RZ044の周溝内側にあり、40cm南東側にRD127が隣接する。他遺構との重複はない。平面形は楕円形である。長軸方向はN－89°－Eで、開口部径は60×40cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは10cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色ローム・礫少量を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD127土坑（第47図）

調査区北西、3F14eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。RZ044の周溝内側にあり、40cm北西側にRD126が隣接する。平面形は歪な楕円形である。長軸方向はN－25°－Eで、開口部径は76×54cmである。底面は、南側は平坦であるが、北側がやや凹む。壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは、南側の浅い方で10cm、北側の深い所で16cmである。堆積土は2層からなり、黒褐色土を主体とする。黄褐色ロームを含むが、下位の層の混入量が多い。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD128土坑（第47図）

調査区北西、3F15cグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。南側がカクランにより削平され、遺構の全体は不明である。他遺構との重複はない。RZ044の周溝内側に位置している。残存する東壁は直線的で、形状は細長い楕円形を呈するものと推定される。東壁と西壁の接線のなす角度は37°である。確認できた範囲では、東壁の120cmが最長である。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは24cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色ロームを少量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。



第47図　RD119～RD129土坑

RD129土坑（第47図）

調査区北西、3F14jグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は隅丸の長方形である。長軸方向はN－5°－Eで、開口部径は306×110cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは30cmである。堆積土は4層からなる。黒褐色土が主体で、黄褐色ロームを含む。下位の層ほど混入量が多い。黄褐色ローム以外は何も含まれないので、人為堆積であろう。遺物は出土していない。遺構の性格は不明だが、形状・規模から墓壙の可能性が高い。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD130土坑（第48図）

調査区中央、3G25aグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。周辺に遺構はみられない。平面形は方形に近い。開口部径は150×140cmである。底面には傾斜があり、東側が低くなる。壁は外傾する。確認面から底面までの深さは、最も深い東側で30cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色砂・礫などを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD131土坑（第48図）

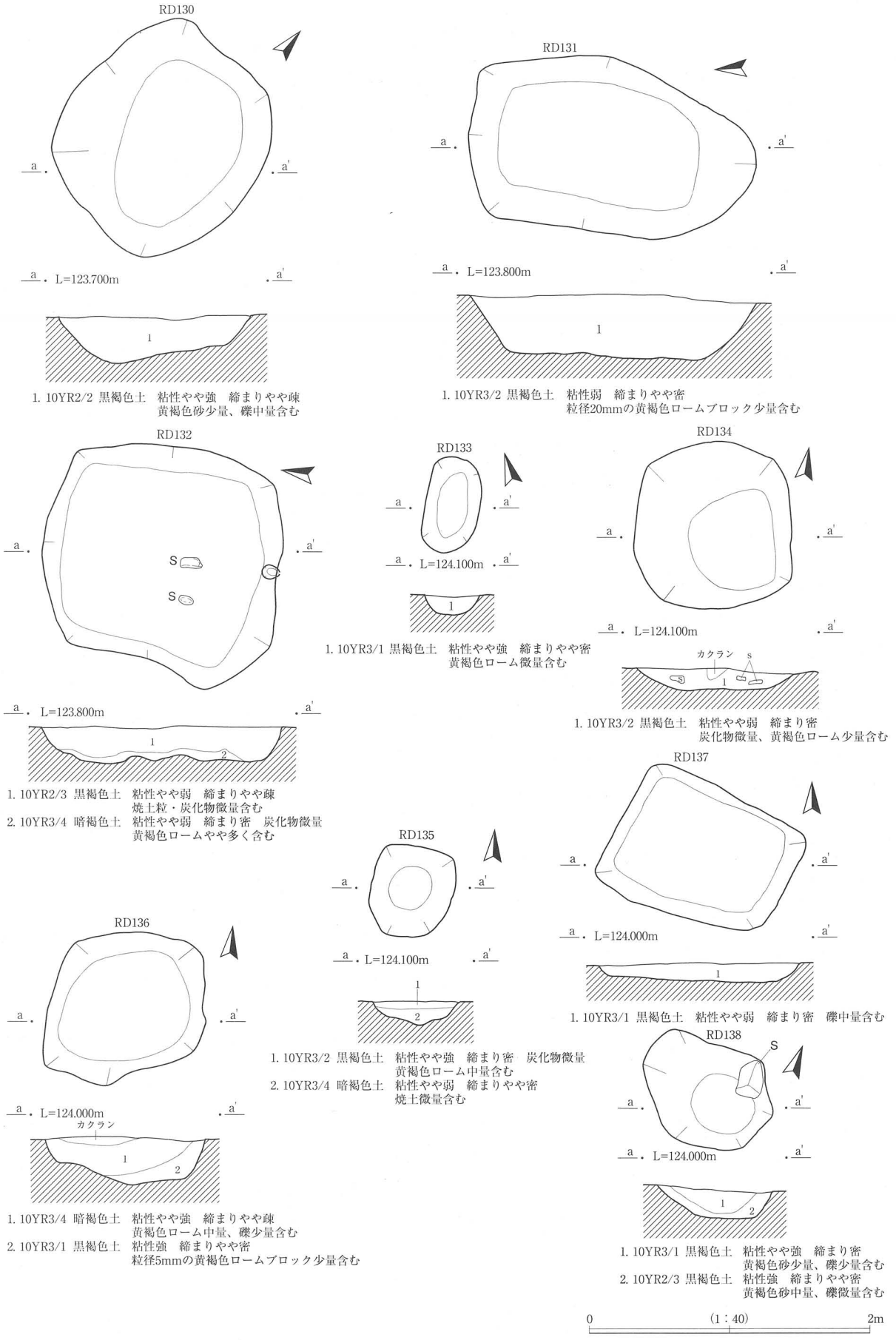
北側調査区境付近、3G13eグリッド付近に位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は長方形である。長軸方向はN－8°－Eで、開口部径は230×126cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは44cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色ロームを少量含む。遺物は、土師器・弥生土器が178gが出土している。図化遺物は弥生土器2点のみである（第72図171・203）。ただし、これらの弥生土器は流れ込みによるものと推定され、遺構に伴うものだとは考えられない。遺構の性格は不明であるが、形状・規模から墓壙の可能性が高い。時期は出土した土師器から古代と考えられる。

RD132土坑（第48・52図）

調査区北、3G15gグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は概ね方形であるが、南東隅がやや外へ張り出す。開口部径は、南東隅の張り出し部分を除くと166×150cmである。底面は凹凸が激しい。壁は外傾する。確認面から底面までの深さは26cmである。堆積土は2層からなり、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土が主体で、全体に炭化物を微量含む。上位には焼土粒も含まれる。遺物は土師器が2点（38g）出土している。63は徳利の体部片である。その色調から切込産の可能性がある。64は土師器ナベの口縁部片である。大きく外反する口縁部をもち、調整は体部にヘラケズリが施される。遺構の性格は不明であるが、形状・規模から墓壙の可能性が高い。古代と近世の遺物が出土するため時期を決定しがたいが、10世紀以前に位置づけられよう。

RD133土坑（第48図）

調査区東、3G20mグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。80cm東にはRB005が隣接する。平面形は楕円形である。長軸方向はN－25°－Eで、開口部径は68×38cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは12cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色ロームを微量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。



第48図　RD130～RD138土坑

RD134土坑（第48・52図）

調査区東、3G21nグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。北側にRB005が隣接する。平面形は隅丸の方形を呈し、開口部径は118×112cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは14cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、炭化物を微量含む。遺物は、土師器136gが出土している。そのうち１点を図化した。65は直線気味に開く体部をもち、口縁部はわずかに外反する。

遺構の性格は不明である。時期は、出土した土師器から平安時代以前と推定できる。

RD135土坑（第48図）

調査区東、3G20nグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。RB005のプラン範囲内に位置するが、柱穴との直接の切り合い関係はなく、別の遺構である。平面形は方形基調で、開口部径は64×58cmである。底面は中央に窪みがある。壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは、中央の最深部で16cmである。堆積土は２層からなり、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。上位には炭化物、下位には焼土を微量含む。遺物は土師器8gが出土しているが小片のため、図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物や埋土の様相から古代と考えられる。

RD136土坑（第48図）

調査区東、3G20oグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。RB005のプラン範囲内にあるが、柱穴との直接の切り合い関係はなく、規模からも柱穴の可能性は低い。平面形は菱形に近い楕円形である。長軸方向はN－48°－Eで、開口部径は134×110cmである。底面には段差があり、北東側が1段低い。壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは、北東側の深い所で34cmである。堆積土は2層から成り、上位は暗褐色土、下位は黒褐色土を主体とする。全体に黄褐色ロームを含み、上位には礫も少量含む。遺物は土師器156gが出土しているが小片のため図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物や埋土の様相から古代と考えられる。

RD137土坑（第48図）

調査区東、3G22nグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は台形に近い。東壁と西壁はほぼ平行で、南北の壁間は西側ほど広くなる。長軸方向はN－64°－Wで、開口部径は126×98cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。確認面から底面までの深さは12cmを測る。堆積土は黒褐色土による単層で、礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD138土坑（第48図）

調査区東、3G23oグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。40cm北側にRD139が隣接する。平面形は六角形に近い。長軸方向はN－65°－Wで、開口部径は98×84cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは19cmである。堆積土は2層から成り、黒褐色土を主体とする。全体に黄褐色砂・礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD139土坑（第49図）

調査区東、3G22pグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。40cm南側にRD138が隣接する。平面形は細長い楕円形で、S字状に緩くカーブする。長軸方向はN－20°－Wで、開口部径は220×90cmである。底面は概ね平坦であるが、東側には段差がある。壁は外傾する。確認面から底面までの深さは20cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、礫少量を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD140土坑（第49図）

調査区中央、3G24qグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。東側でRG015が隣接し、40cm南側にRG015、40cm西側にRG014が隣接する。平面形は楕円形基調で、南側が突き出た形である。長軸方向はN－12°－Wで、開口部径は168×148cmである。底面は平坦である。西壁は外傾し、東壁は階段状に立ち上がる。確認面から底面までの深さは42cmである。堆積土は6層から成る。上位3層までは黒褐色土が主体で、焼土粒・炭化物粒を含み、特に明赤褐色焼土がブロック状で混入する（2層）。遺物は土師器54gが出土しているが小片であり、図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物や埋土の様相から古代と考えられる。

RD141土坑（第49図）

調査区東、3G15pグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。RG016と重複し、本遺構の方が新しい。遺構の南側はカクランにより削平されている。確認できた部分では、平面形が三角形で、長軸方向はN－20°－Eである。規模は、南北が70cm、東西が90cmである。底面は、中央が山なりに高くなる。壁は外傾する。確認面から底面までの深さは10cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、灰白色火山灰を粒状に微量含む。火山灰は二次堆積によるものと考えられる。遺物は土師器26gが出土しているが小片であり、図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物や埋土の様相から古代と考えられる。

RD142土坑（第49図）

調査区東、3G17qグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。40cm東側にRD143、60cm南側にRD144が隣接する。平面形は円形で、開口部径は82×82cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは12cmである。堆積土は2層からなる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームを含む。下位の方がやや多い。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD143土坑（第49図）

調査区東、3G17rグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。40cm西側にRD142が隣接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN－35°－W、開口部径は152×62cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは24cmである。堆積土は2層からなる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームを含む。遺物は土師器3gが出土しているが小片であり、図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から古代と考えられる。

RD139

a・　・a'

a・ L=124.000m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや密　礫少量含む

RD140

a・　・a'

a・ L=123.800m　・a'

カクラン

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　焼土粒少量、炭化物微量含む
2. 5YR5/8　明赤褐色焼土　粘性やや強　締まりやや密
3. 10YR3/2 黒褐色土　粘性強　締まり密　焼土粒中量　黄褐色ローム少量含む
4. 10YR3/3 暗褐色土　粘性強　締まりやや密　黄褐色ローム少量含む
5. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
6. 10YR3/4 暗褐色土　粘性強　締まり密　黄褐色ローム多量含む

RD141

a・　・a'

カクラン

a・ L=124.100m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性弱　締まり密　火山灰微量　黄褐色ローム少量、礫少量含む

RD142

a・　・a'

a・ L=124.100m　・a'

1. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色ローム少量含む
2. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム多く含む

RD143

a・　・a'

a・ L=124.100m　・a'

1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
2. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム少量含む

RD144

a・　・a'

a・ L=124.100m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム多く含む
2. 10YR2/2 黒褐色土　粘性弱　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む
3. 10YR3/4 暗褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　黄褐色ローム多く含む

RD145

a・　・a'

a・ L=123.800m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量含む

RD146

a・　・a'

a・ L=123.600m　・a'

1. 10YR2/1 黒色土　粘性やや強　締まり密　黄褐色ローム微量含む
2. 10YR2/2 黒褐色土　粘性弱　締まりやや密　粒径5mmの黄褐色ロームブロック中量、礫少量含む

RD147

a・　・a'

a・ L=123.600m　・a'

1. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色ローム少量含む
2. 10YR2/2 黒褐色土　粘性弱　締まりやや密　黄褐色ローム中量含む

RD148

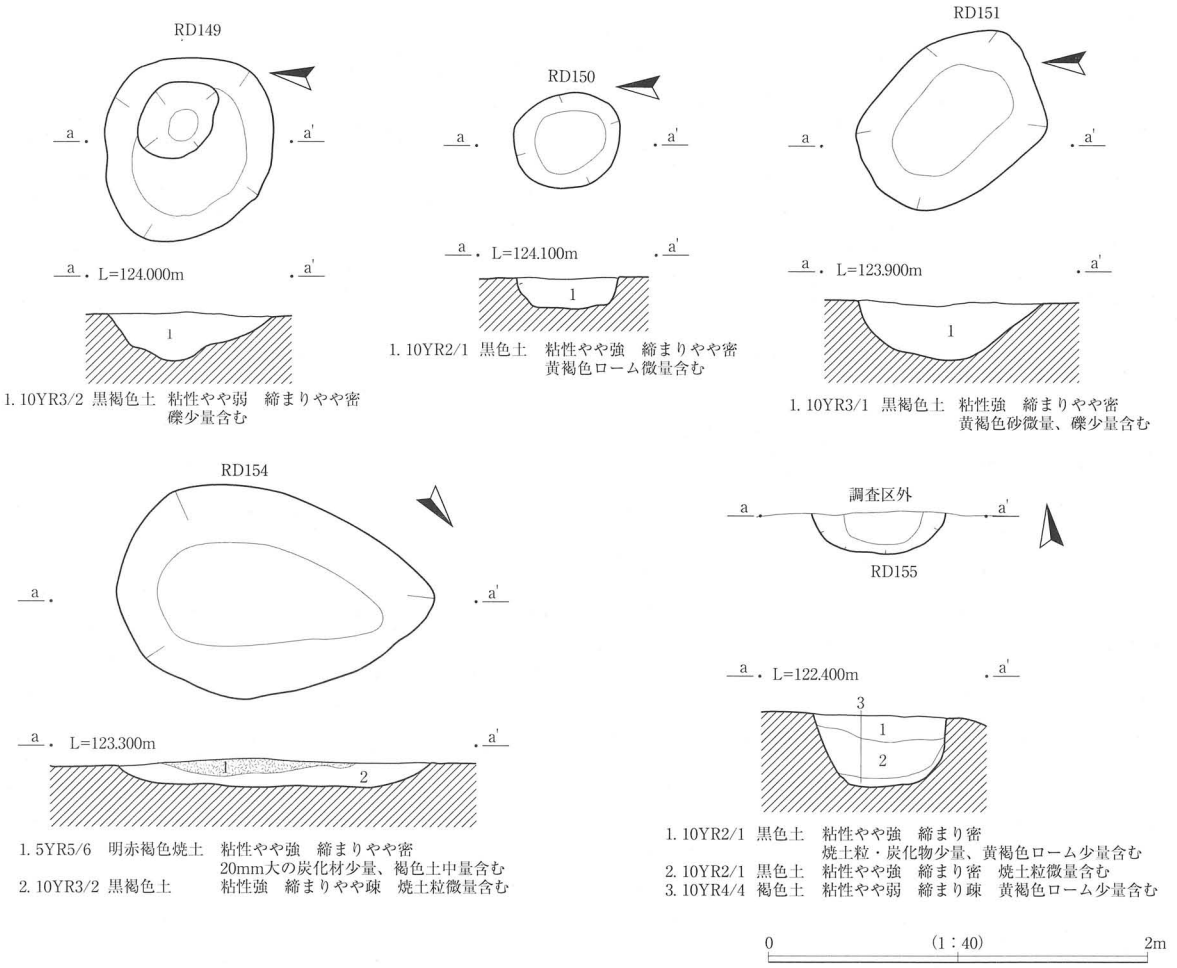
a・　・a'

a・ L=123.600m　・a'

1. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや弱　締まり疎　礫中量含む

0　(1：40)　2m

第49図　RD139～RD148土杭



第50図　RD149～RD151・RD154・RD155土坑

RD144土坑（第49・52図）

調査区東、3G17qグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。60cm北側にRD142が隣接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN－41°－Wで、開口部径は86×48cmである。底面は凹凸が激しく、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは22cmである。堆積土は3層から成り、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。遺物は土師器１点、69gが出土している。66は坏でゆるやかに内湾する体部をもち、端部がわずかに外反する。内面には黒色処理が施されない。遺構の性格は不明である。時期は出土した土師器から平安時代以前に位置づけられる。

RD145土坑（第49図）

調査区南東、4G9sグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m北側にRZ049が隣接する。平面形は五角形に近い。長軸方向はN－22°－Eで、開口部径は120×112cmである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは弱く、断面形は皿状を呈する。確認面から底面までの深さは10cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色土を微量含む。遺物は土師器0.6gが出土しているが小片であり、図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から古代と考えられる。

RD146土坑（第49図）

調査区南東、4G12sグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。1m南側にRG014が隣接する。平面形は楕円形で、長軸方向はN－53°－Eで、開口部径は66×58cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは52cmである。堆積土は2層からなり、上位は黒色土、下位は黒褐色土により構成される。遺物は、土師器6gが出土しているが小片であり、図示していない。遺構の性格は不明である。柱穴状にもみえるが、対応する遺構は他に確認できなかった。時期は出土遺物から古代と考えられる。

RD147土坑（第49図）

調査区南東、4G13sグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。40cm南側にRG014が隣接する。平面形は楕円形である。長軸方向はN－29°－Eで、開口部径は50×34cmである。底面は平坦で、壁は直立する。確認面から底面までの深さは40cmである。堆積土は2層からなる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。柱穴状にもみえるが、対応する柱穴が確認できなかった。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD148土坑（第49図）

調査区南東、4G13kグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。北側がRG014と重複し、これを切っている。平面形は不整方形を呈する。長軸方向はN－66°－Eで、開口部径は、長軸方向が98cm、それと直交する西壁長が94cmである。底面は平坦で、壁は外傾する。確認面から底面までの深さは16cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD149土坑（第50図）

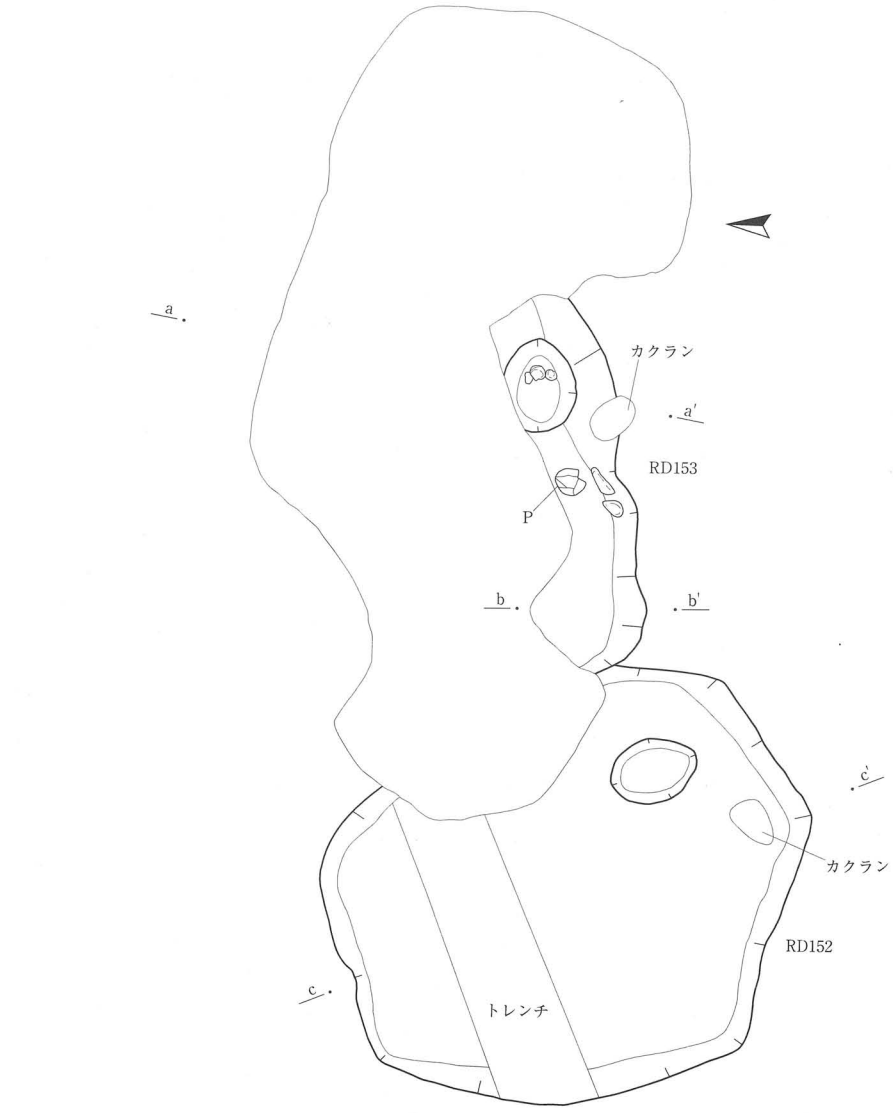
調査区南東、4G17oグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形で、長軸方向はN－84°－Eで、開口部径は98×86cmである。底面は、北側が1段低く掘り込まれており、平坦ではない。壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは、最深部で24cmである。堆積土は単層で黒褐色土を主体とし、礫を少量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代と考えられる。

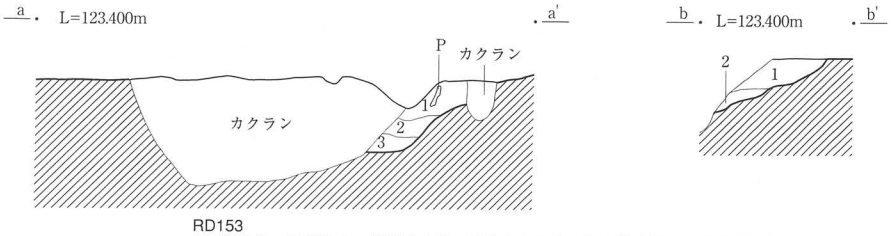
RD150土坑（第50図）

調査区南東、4G16mグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。60cm北西にRD151が隣接する。平面形は円形で、開口部径は54×50cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは16cmを測る。堆積土は単層で黒色土を主体とし、黄褐色ロームを微量含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。時期は埋土の様相から古代である。

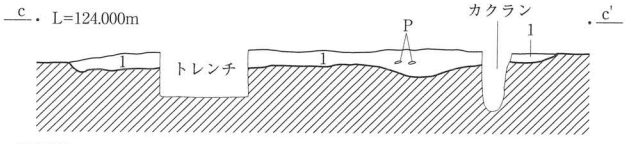
RD151土坑（第50図）

調査区南東、4G15mグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。60cm南東にRD150が隣接する。平面形は長方形である。長軸方向はN－37°－Wで、開口部径は102×78cmである。底面は中央が深く、断面形は椀形を呈する。確認面から底面までの深さは20cmである。堆積土は黒褐色土による単層で、黄褐色砂・礫を含む。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。





RD153
1.10YR3/3　暗褐色土　粘性やや強　締まりやや密　焼土粒少量、炭化物微量含む
2.10YR3/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　焼土粒微量、炭化物微量含む
3.10YR3/3　暗褐色土　粘性やや強　締まりやや密　炭化物微量含む



RD152
1.10YR3/3　暗褐色土　粘性弱　締まり密　炭化物微量、黄褐色ローム少量含む

0　(1：40)　2m

第51図　RD152・RD153土坑

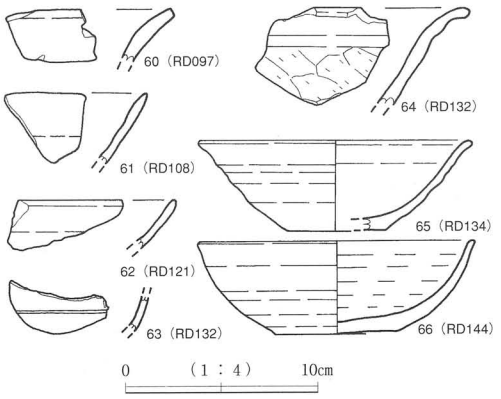
時期は埋土の様相から古代と考えられる。

RD152土坑（第51図）

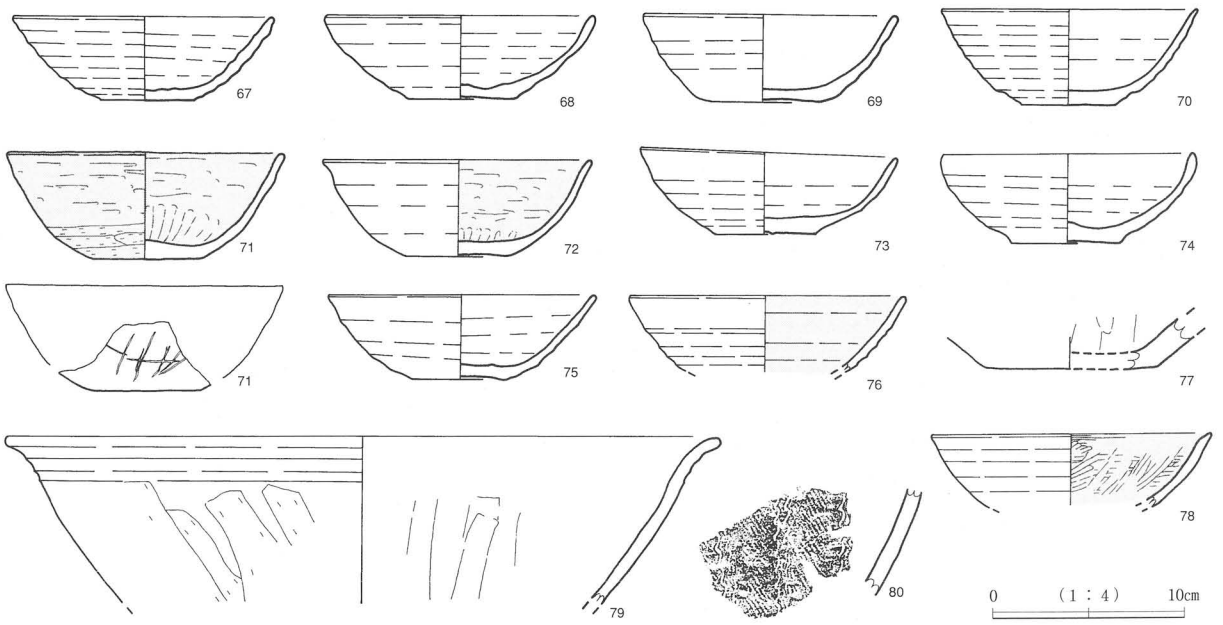
調査区北東、3G22xグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。東側でRD153と重複し、本遺構の方が古い。東壁の大半はカクランにより削平されている。平面形は不整方形を呈し、南北方向にやや長い。長軸方向はN－25°－Wで、開口部径は252×210cmである。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは、深い所で14cmを測る。堆積土は暗褐色土による単層で、炭化物・黄褐色ロームを含む。遺物は出土していない。遺構の性格はRE006と同様の機能を有する可能性も考えられるが、出土遺物がないので、土坑とした。時期は埋土の様相やRD153との切り合い関係から、平安時代以前に位置づけられる。

RD153土坑（第51～53図）

調査区北東、3G22yグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。北側の大半はカクランにより削平されており、残存するのは南壁から西壁にかけての一部のみである。西壁はRD152と重複し、本遺構の方が新しい。南壁の接線方向はN―77°―Eであり、残存する長さは190cmである。壁は緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは38cmを測る。堆積土は3層から成り、1・3層は暗褐色土、2層は黒褐色土を主体とする。全体に炭化物を微量含み、1～2層には焼土粒も含まれる。遺物は土師器2,700gが出土している。遺構の残存率が低い割に遺物量は多く、また本遺構を削平するカクラン内からも、本遺構に伴っていたと考えられる土師器が多く出土している。本来、RE006のよ



第52図　RD土坑出土遺物



第53図　RD153土坑出土遺物

うな竪穴状遺構であった可能性があるが、遺構の残りが悪く、形状が不明なので、土坑とした。遺物は13点（1441ｇ）を図化した。67～70、73～75は内面に黒色処理が施されない坏である。体部が直線気味に開く形状のもの（69・75）とゆるやかに内湾するもの（67・68・70・71～74）の２者に分けられ、そのうち後者は底部が突出するもの（73・74）がさらに分けられる。この底部が突出する器形は９世紀後葉以降に認められる器形である。71・72・76・78は内面に黒色処理が施される坏である。いずれも深身であり、ゆるやかに内湾する体部をもつ。71のみ体部下半にヘラケズリが施される。底部切り離し技法は回転糸切りである。77は甕の底部片である。底面には砂の付着が認められることからいわゆる「砂底土器」に含められる。79は土師器ナベである。頸部には強いナデが２箇所に施され、その間には稜が残る。80の縄文土器は混入と考えられる。以上の出土遺物からみると、本遺構は９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。

RD154土坑（第50図）

調査区南東、4G19iグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は卵形で、長軸方向はＮ－52°－Ｗで、開口部径は166×112cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは12cmである。堆積土は2層から成る。上位に明赤褐色焼土が約10cm堆積し、炭化材を少量含む。遺物は、土師器331gが出土しているが小片であり、図示していない。遺構の性格は不明である。時期は出土遺物から古代と考えられる。

RD155土坑（第50図）

調査区北東、3G14yグリッドに位置する。RA020の床面やや下の、Ⅲ層上面から検出した。北側は調査区外にあり、遺構全体の正確な形状・規模は不明である。RA020よりは古い。確認された範囲では、平面形は半円形を呈し、規模は東西70cm、南北20cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾する。確認面から底面までの深さは38cmを測る。堆積土は3層から成る。１・２層は黒色土、３層は褐色土を主体とし、１・２層には、焼土粒・炭化物粒が含まれる。RA020の床下から検出しているが、検出した位置や検出状況からRA020に付随する遺構ではないものと考える。遺物は、土師器2gが出土しているが小片であり、図示していない。出土遺物から時期はRA020との重複関係から平安時代以前と考えられる。

（川又）

（5）溝　　跡（RG）

６条検出した。そのうち１条は第５次調査区から続くRG008である。過去の調査で溝跡は12条確認されており、したがって、それに続くRG013～017とした。

RG008溝跡（第55・56図）

調査区北端から南端付近、３Ｆ12ｐ～４Ｇ24ｎグリッドの間に位置する。RZ048円形周溝、RA028・026・025竪穴住居跡、RB007・008掘立柱建物跡、RG014溝跡と重複する。新旧関係は、RZ048よりも新しく、それ以外の遺構よりも古い。

検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりと灰白色火山灰の点在をもって確認した。

本溝跡は調査区内においてはRG014と同様に地形の低い区域を通っている。非常にゆるやかで、凸部を東側に向けた弧を描く。北側は調査区外へ延びるが、５次調査分とつながる。南東端部は溝が途切れている。ちょうどRA025の遺構範囲内でRG014と交差している。

調査区内で確認できた長さは直線距離にして85m、上幅は最大で約1.4m、検出面からの深さは確認面より最大で約24cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は一部平坦であるが、多くは「U」次状を呈する。底面のレベルは北側で123.035m、東端で122.88mであることから、溝跡は北から南へ向かってゆるやかに傾斜している。

堆積土は１・２層が確認できる。上層が黒褐色土、下層が暗褐色土であり、このうち１層中には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。一部層として区分できる箇所もある。削平部分が多いため堆積状況は不明である。

時期は、重複関係から住居よりも古く、いわゆる「古墳」よりも新しいため、飛鳥～奈良時代の範疇に含まれると考えることができる。

RG013溝跡（第54図）

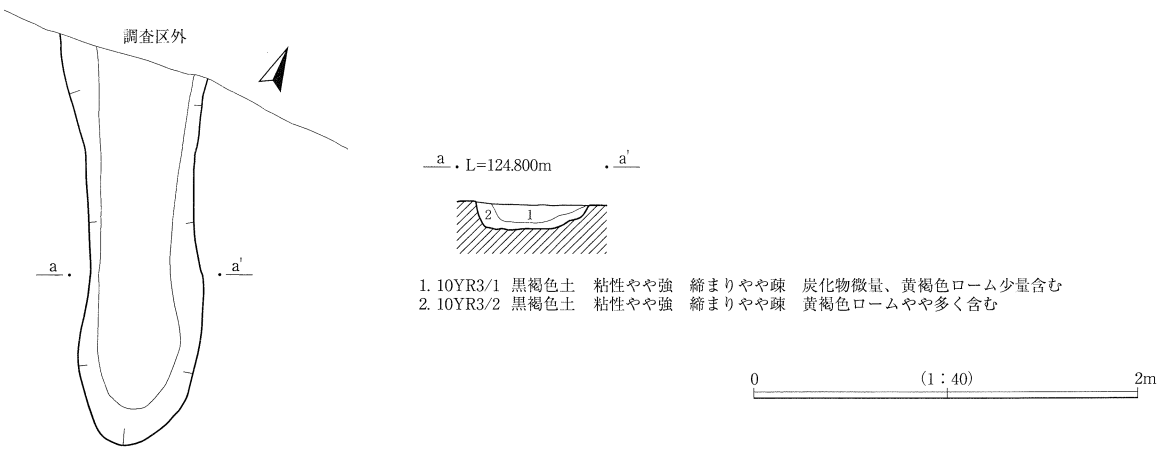
調査区北端、3F12xグリッドに位置する。他遺構との重複は調査区内においては確認できない。遺構の大半が調査区外へ広がると予想されるため、完掘を行っていない。

検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。

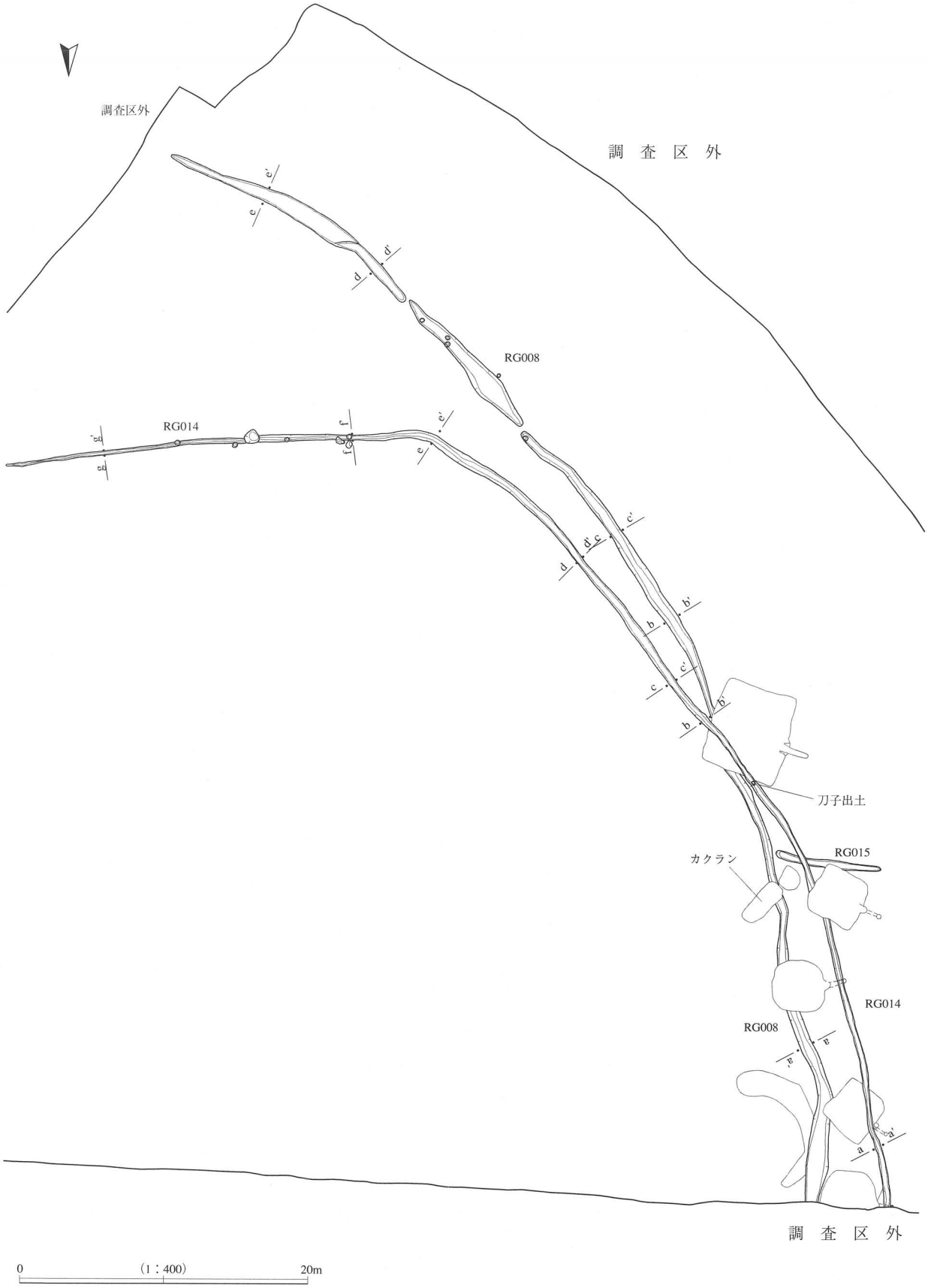
調査区内において確認できた規模は長さが2.1m、上幅が最大で72cm、深さが確認面より12cmである。断面形はゆるやかな半円形である。堆積土は１・２層が確認でき、いずれも黒褐色を呈する。

遺物は土師器を中心に70g出土しているが図化できるものはない。

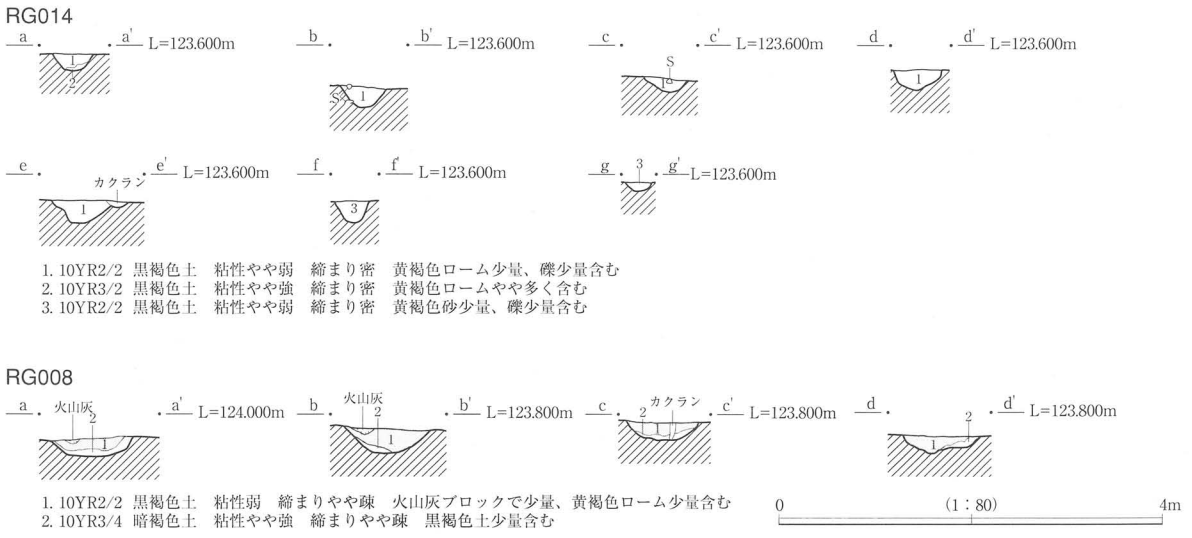
以上、堆積土の特徴から時期は古代であろうと考えられる。



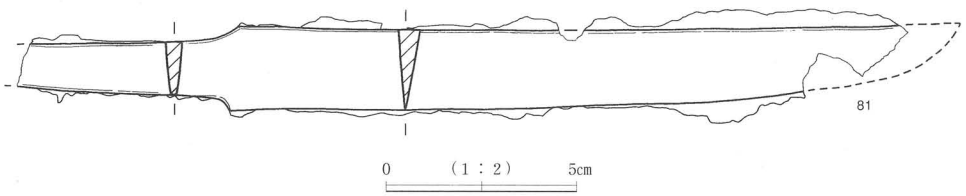
第54図　RG013溝跡



第55図　RG014・008溝跡（1）



第56図　RG014・008(2)断面図



第57図　RG014溝跡出土遺物

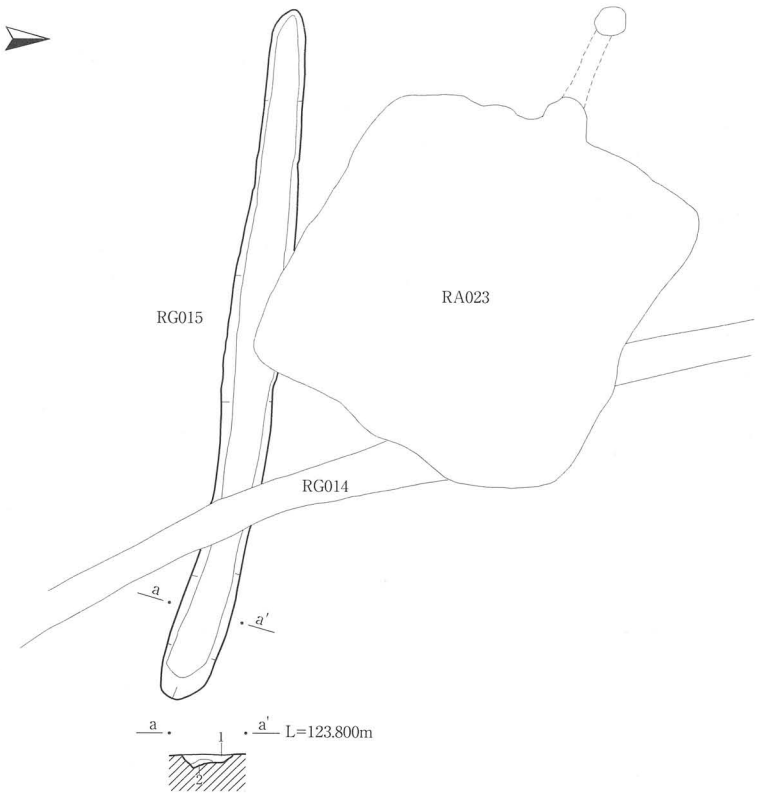
RG014溝跡（第55～57図）

調査区北端から南端付近、３Ｆ12ｎ～４Ｇ13sグリッドの間に位置する。RA022・023・025・026・028竪穴住居跡、RG016溝跡、RB003掘立柱建物跡、RD148と重複している。新旧関係は本溝跡がRA022・025・028、RG016より新しく、それ以外の遺構より古い。検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。

本溝跡は調査区内においては地形の低い区域を通るため、弧を描くように湾曲しているが、４Ｇ14ｅグリッド付近から角度を東に変え、地形を横断するように曲がる。北側は調査区外へ延びている。東端部において溝が途切れているが、この部分は削平が多く及ぶことから、さらに東方へ延びていた可能性がある。調査区内で確認できた長さは直線距離にして75m、上幅は最大で約80cm、検出面からの深さは約20cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は「U」字状を呈する。底面のレベルは北側で122.990m、東端で122.821mであり、北から南へ向かってゆるやかに傾斜している。

堆積土は３層が確認できる。いずれも黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームを含む。断面の土層を7カ所で確認したが、単層が多いため堆積原因は不明である。遺物は鉄製小刀が１点出土している。出土位置はRA025のやや北側で、溝の底面を径約30cmのピット状に掘り窪めた内から出土した。81は切先と茎尻を欠損したもので、現存長25cm、刃部現存長17cmである。区は両区である。

時期は、重複関係から奈良時代の範疇に含まれると考えることができる。大部分が地形に沿って構築されているが、一部地形を横断する状態でめぐるため、あるいは区画溝かもしれない。



1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性弱　締まり密　粒径20mmの黄褐色ロームブロック少量含む
2. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まりやや密　黒褐色土中量含む

0　(1：80)　4m

第58図　RG015溝跡

RG015溝跡（第58図）

調査区西部、３Ｆ24ｎ～ｒグリッド間に位置する。RA023竪穴住居跡、RG014溝跡と重複している。新旧関係は本溝跡がいずれの遺構より古い。

検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。

本溝跡は東西方向に、等高線に対し直交するようにのびている。調査区内で確認できた長さは6.8ｍ、上幅は最大で60cm、検出面からの深さは12cmである。断面形は逆台形状を呈しているが、削平が大きく詳細は不明である。底面のレベルは西端で123.008ｍ、東側で122.922ｍ、であることから、溝跡は西から東へ向かってゆるやかに傾斜している。

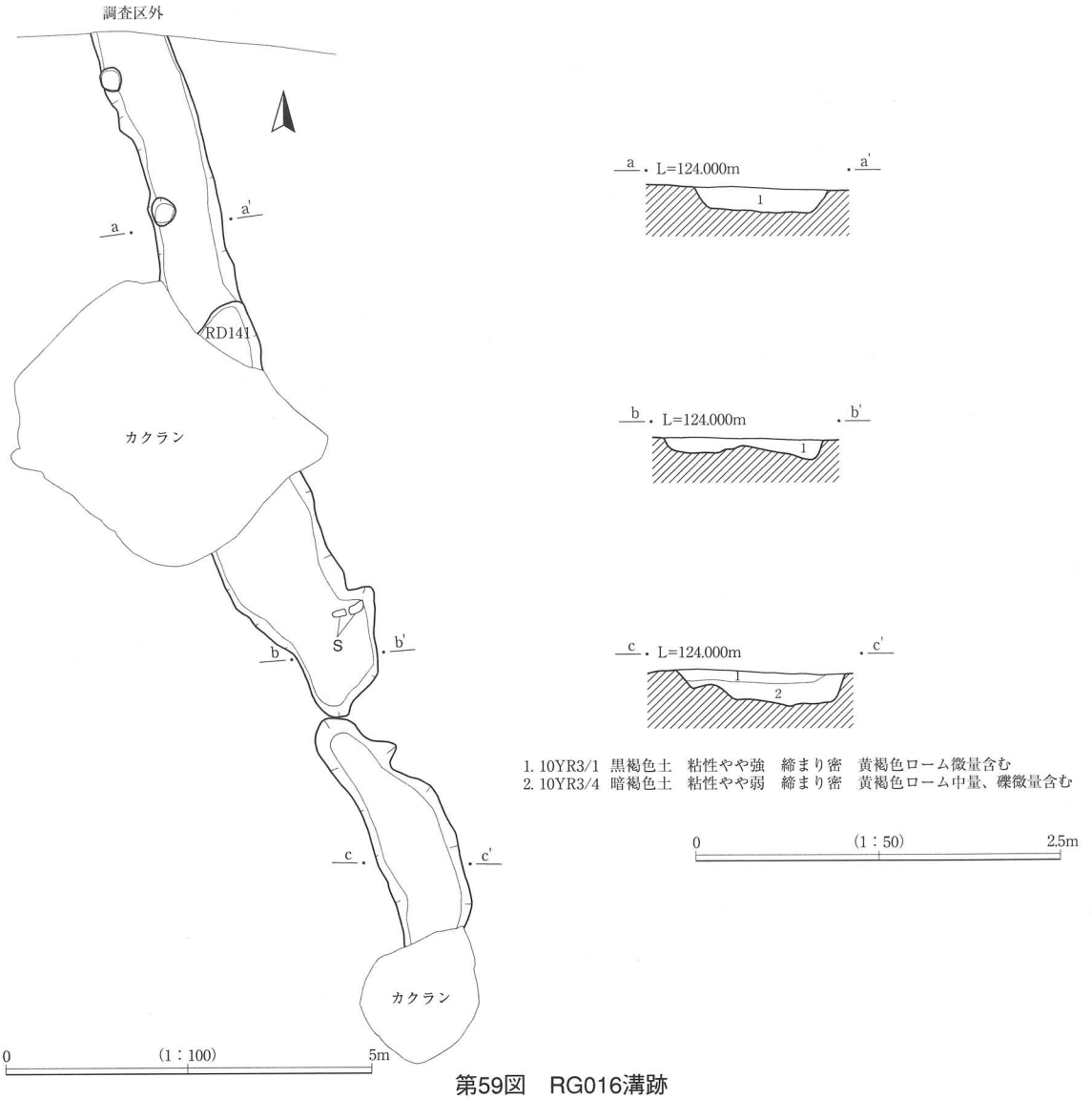
堆積土は１・２層が確認できる。１層が黒褐色土、２層が黄褐色ロームである。削平が多いため堆積原因は不明である。

時期は、重複関係から奈良時代を含むそれ以前と考えることができる。性格は不明である。

RG016溝跡（第59・61図）

調査区北東部、３Ｇ13ｏ～20ｑグリッド間に位置する。RA030・RD141と重複している。また、後世におけるカクランにより、一部が破壊されている。新旧関係は本溝跡がRA031よりも新しく、RD141よりも古い。検出はⅤ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。

本溝跡は調査区内においては南北方向にほぼ直線状に延びているが、北部は調査区外へ延びるため



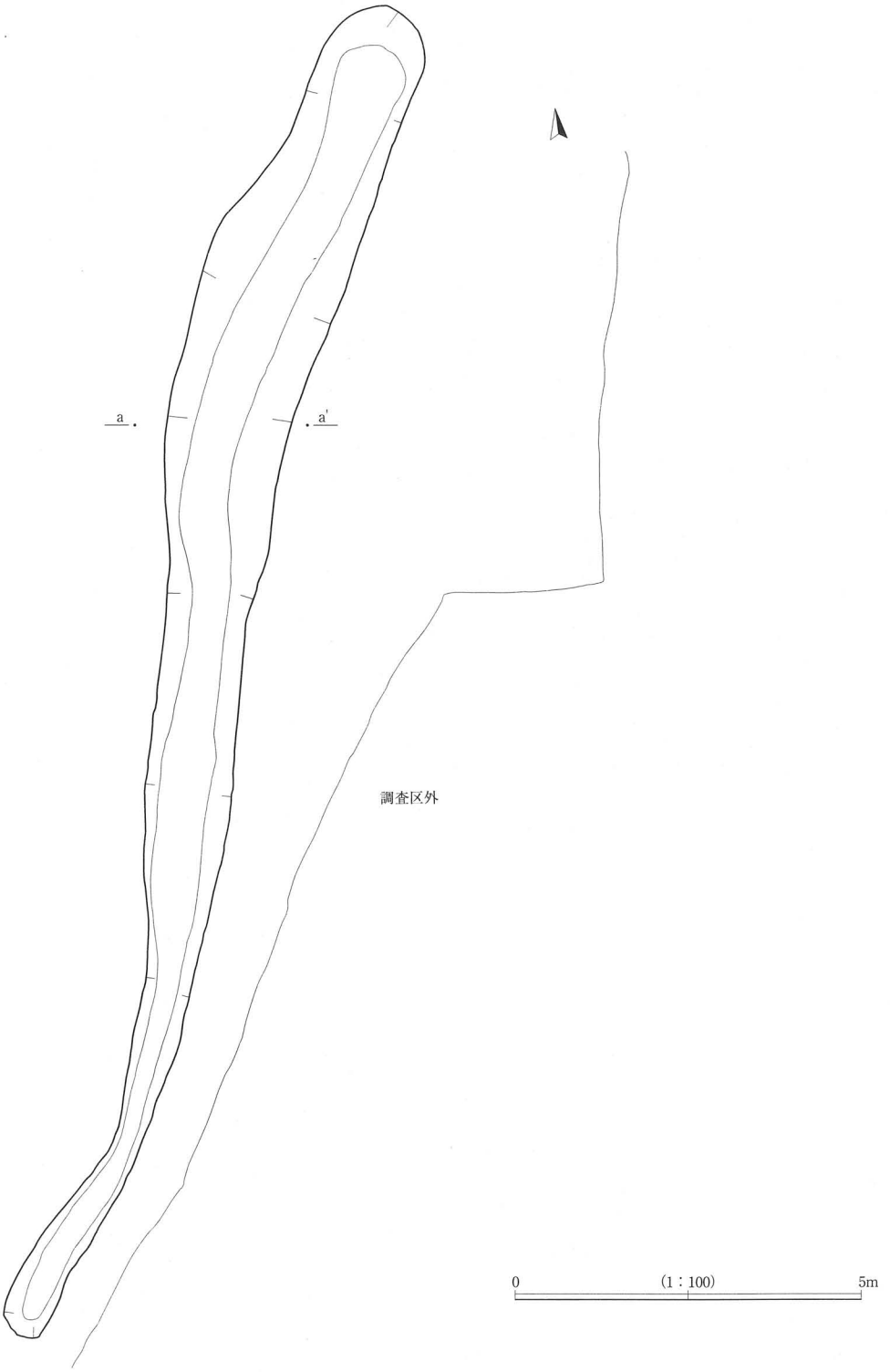
第59図　RG016溝跡

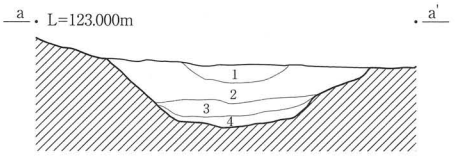
全容は不明である。また、溝跡が立地する区域が調査区内においてもっとも標高が高い部分であり、かなりの部分が削平をうけており、部分的に途切れている。

調査区内で確認できた長さは13m、上幅は最大で約80cm、検出面からの深さは約20cmである。断面形は逆台形状を呈するため、底面はほぼ平坦である。底面のレベルは北側で123.657m、南端で123.663mであり、ほぼ平坦である。

堆積土は1・2層が確認できる。1層は黒褐色土、2層が暗褐色土を呈する。いずれも黄褐色ロームを含む。削平が大部分を占めるため堆積原因は不明である。遺物は土師器979gが出土し、そのうち3点（149g）を図化した。82は坏で、内面に黒色処理が施されない。体部は直線気味に開く形状をもつ。83は壺口縁部片であるが、細片のため詳細は不明である。84は甕である。頸部は筒形状を呈し、口縁部は外反する。

時期は、重複関係・出土遺物から平安時代以降と推定できるが、詳細な時期は不明である。





1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性やや強　締まり密　褐鉄鉱微量含む
2. 10YR3/2　黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色砂少量含む
3. 10YR3/1　黒褐色土　粘性やや強　締まり疎　黄褐色砂少量、褐鉄鉱少量含む
4. 10YR3/4　暗褐色土　粘性弱　締まり密　黄褐色砂やや多く、褐鉄鉱少量含む

0　(1：50)　2.5m

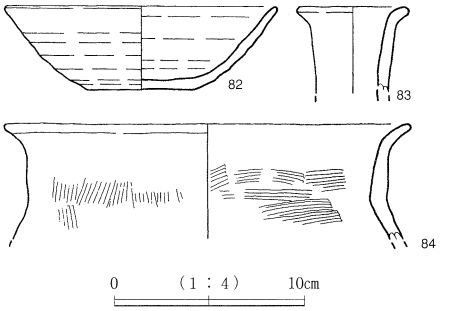
第60図　RG017溝跡

RG017溝跡（第60・62図）

調査区東部、３Ｈ24b～４Ｇ７ｗグリッド間に位置する。他遺構との重複は確認できない。北1.6mには旧河道、南西80cmにRZ049が位置する。

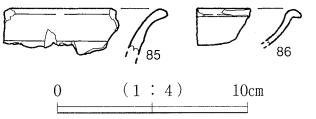
検出はＶ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。

本溝跡は調査区内において完結しており、北東－南西の方向にのびている。ほぼ傾斜地に沿って構築されている。



第61図　RG016溝跡出土遺物

調査区内で確認できた長さは20m、上幅は最大で２m、検出面からの深さは確認面より最大で約42cmである。断面形は逆台形状をすることから、壁は底面から直線的に広がりながら立ち上がる。底面のレベルは北側で122.381m、東端で122.342mであることから、溝跡は北東から南西へ向かって緩やかに傾斜している。



第62図　RG017溝跡出土遺物

堆積土は１～４層が確認できる。１～３層が黒褐色土、４層が暗褐色土を主体とする。である。堆積土の一部にいわゆるレンズ状堆積が認められることから自然に堆積したことが分かる。遺物は1039ｇ出土し、そのうち２点（18ｇ）を図化した。85は土師器甕の口縁部片である。磨滅しているがロクロ調整と思われる。86は陶器碗の口縁部片である。産地は不明ながら近世以降の所産と考えられる。

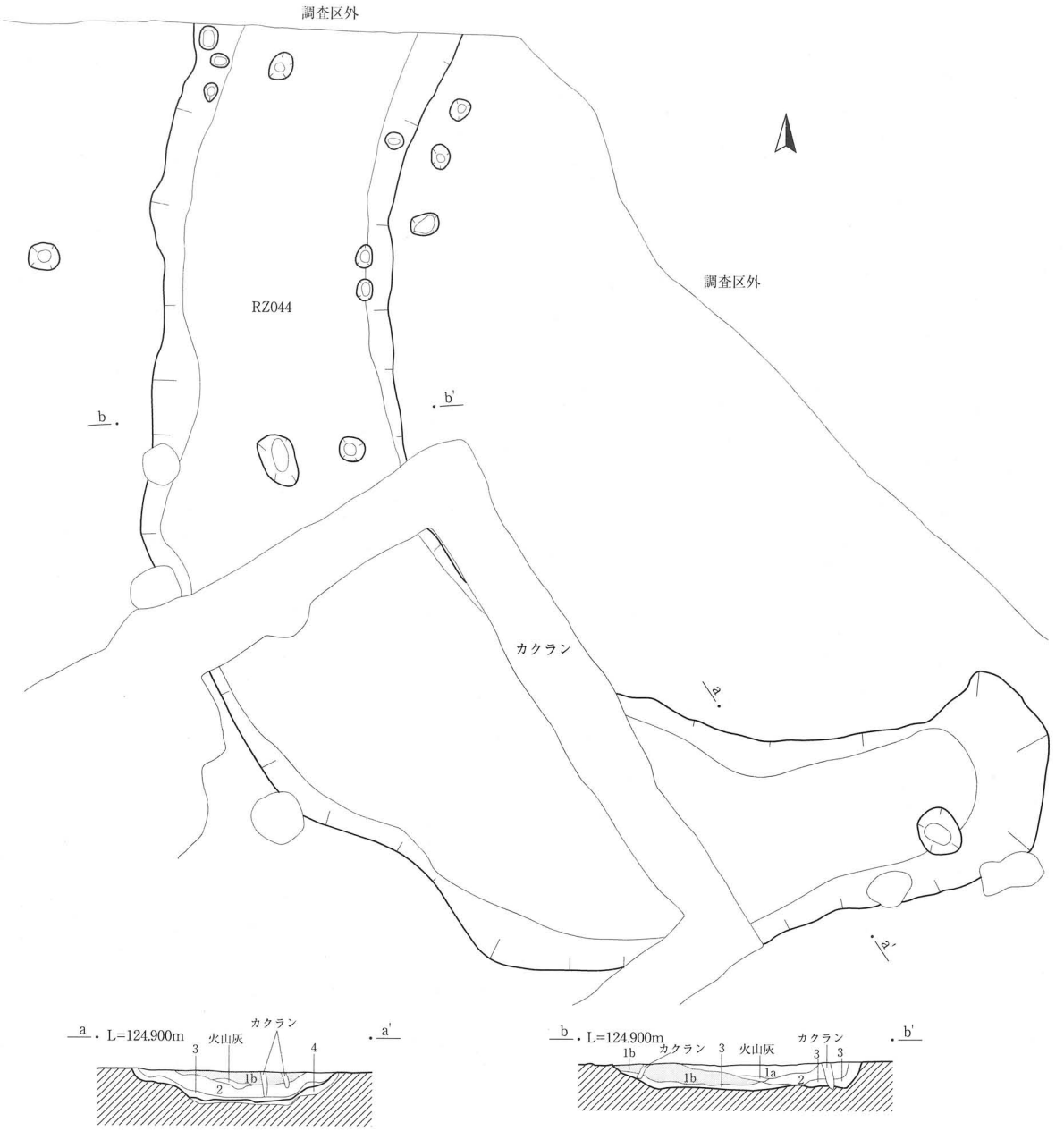
時期は、重複関係がなく、遺物も古代と近世が混在していることから、不明と言わざるを得ない。

（西澤）

（6）古　　墳（ＲＺ）

RZ044古墳（第63～65図）

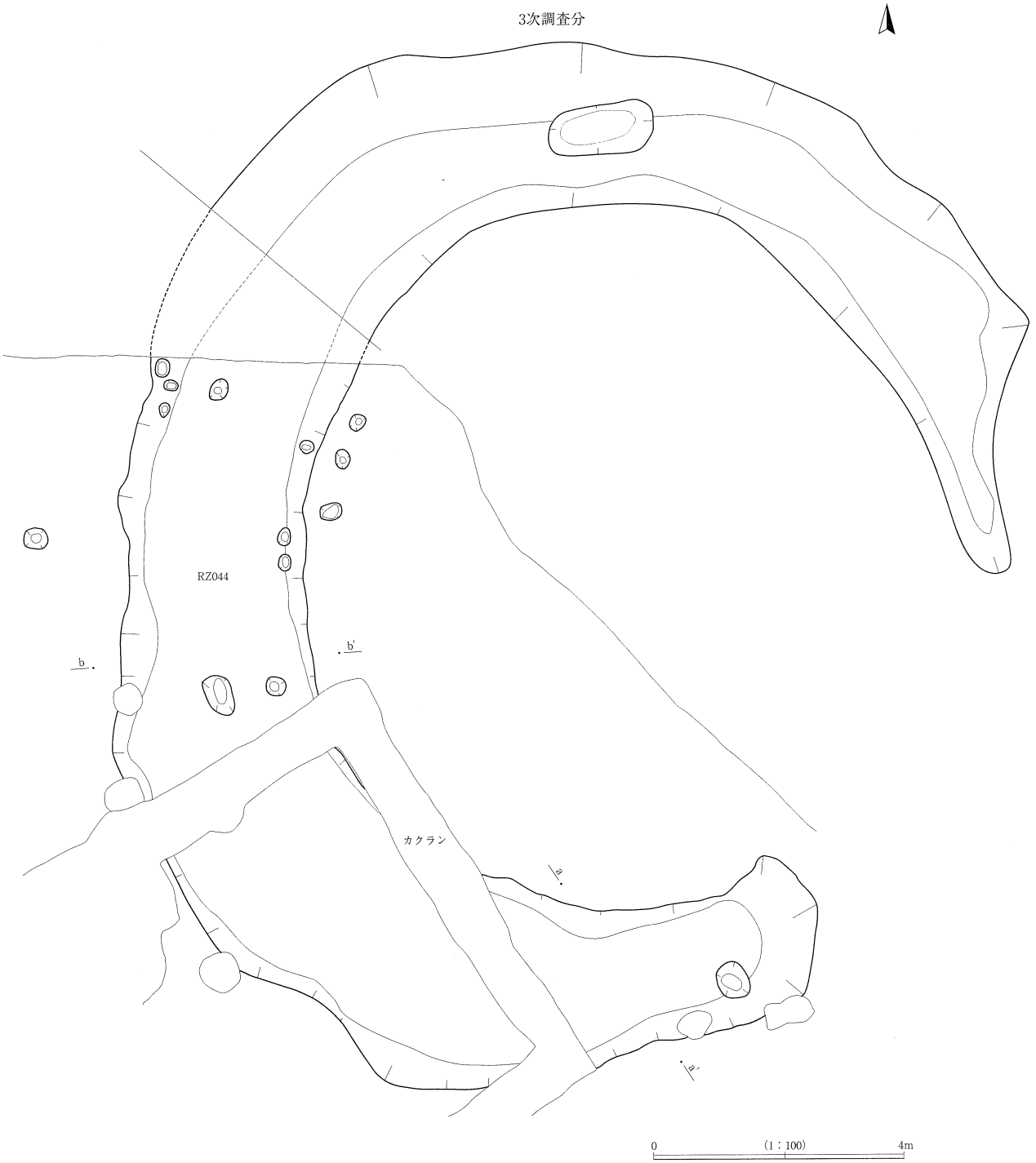
調査区北部、３Ｆ12ｂ～16ｆグリッドに位置する。第３次調査で確認されたものと同一であるため番号を統一した。遺構の一部は住宅基礎によるカクランにより破壊されている。重複が確認できるものとして、RD098・099・100・122・128がある。新旧関係はいずれの土坑よりも本遺構の方が古い。なお、RD128との新旧関係はカクランが及ぶため不明である。検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりと灰白色火山灰ブロックの散在によって確認された。



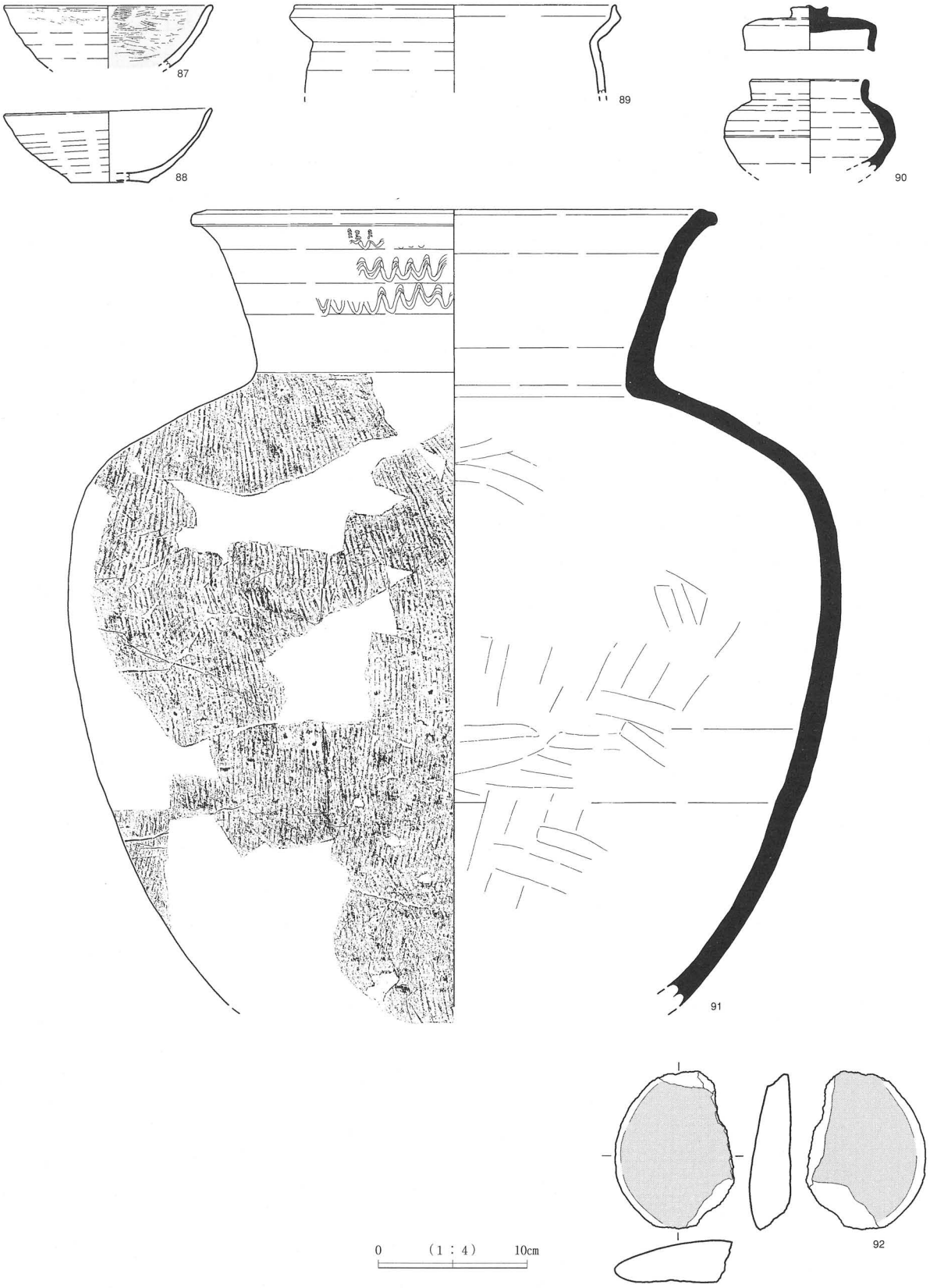
1a. 10YR3/2 黒褐色土　粘性中　締まり密　炭化物微量含む
1b. 10YR2/2 黒褐色土　粘性中　締まりやや疎　粒径10mmの火山灰ブロックで少量、炭化物少量、礫微量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土　粘性中　締まりやや密　炭化物微量含む
3. 10YR3/2 黒褐色土　粘性強　締まりやや密　炭化物微量、黄褐色ローム多量含む
4. 10YR6/8 明黄褐色ローム　粘性強　締まりやや密　黒褐色土多量含む（堀り方）

0　(1：80)　4m

第63図　RZ044古墳



第64図　RZ044古墳（合成）



第65図　RZ044古墳出土遺物

第３次調査分と合わせると、本遺構の平面形は一部断絶するもののほぼ円形を呈する。南東方向に4.6mの幅で、１箇所溝が途切れる部分がある。規模は最大径15mであり、最大上幅が3.6mある。溝の深さは最大で確認面より40cmである。底面は平坦に構築されており、貼り床状に粘土が充填される部分もある。壁はゆるやかに立ち上がるが、途中に段差がつく場合がある。

堆積土は１～４層に区分できる。１～３層は黒褐色土層であり、そのうち１層は火山灰の有無でａ・ｂ層に細分される。火山灰が含まれるのは１ｂ層であり、粒径10mmのブロックが黒褐色土中に含有している。また、１ｂ層の上下には灰白色火山灰が層状にまとまっている部分がある。

遺物は須恵器を中心に9,084ｇ出土しているが、大半が堆積土上層に含まれる。これらのうち６点（428ｇ、90・91を除く）を図化した。このうち90・91は第３次調査分の埋土中から出土し、すでに報告されているが、今回これと新たに破片が接合したしたため再掲載するものである。87・88は土師器坏であり、前者は内面に黒色処理が施され、後者にはない。体部の形状はいずれもゆるやかに内湾するものである。89は土師器甕の口縁部～胴上位にかけての破片である。口縁部の形状は頸部より外反したのち、やや内傾しながら立ち上がる受口状を呈する。90は須恵器薬壺で、蓋は宝珠形の摘みがつく。身の口縁部は短く直口するもので端部は丸くおさめられている。肩部は張り、ここに最大径がある。焼成は良好で堅緻である。胎土は緻密であるが、白色の粒子や砂粒がやや多く含まれている。91は須恵器大甕である。底部を欠損しているもののほぼその全容はしれる。長い頸部をもち、肩部に最大径を有する。頸部には櫛描き波状文が施される。92は玄武岩製の磨石である。

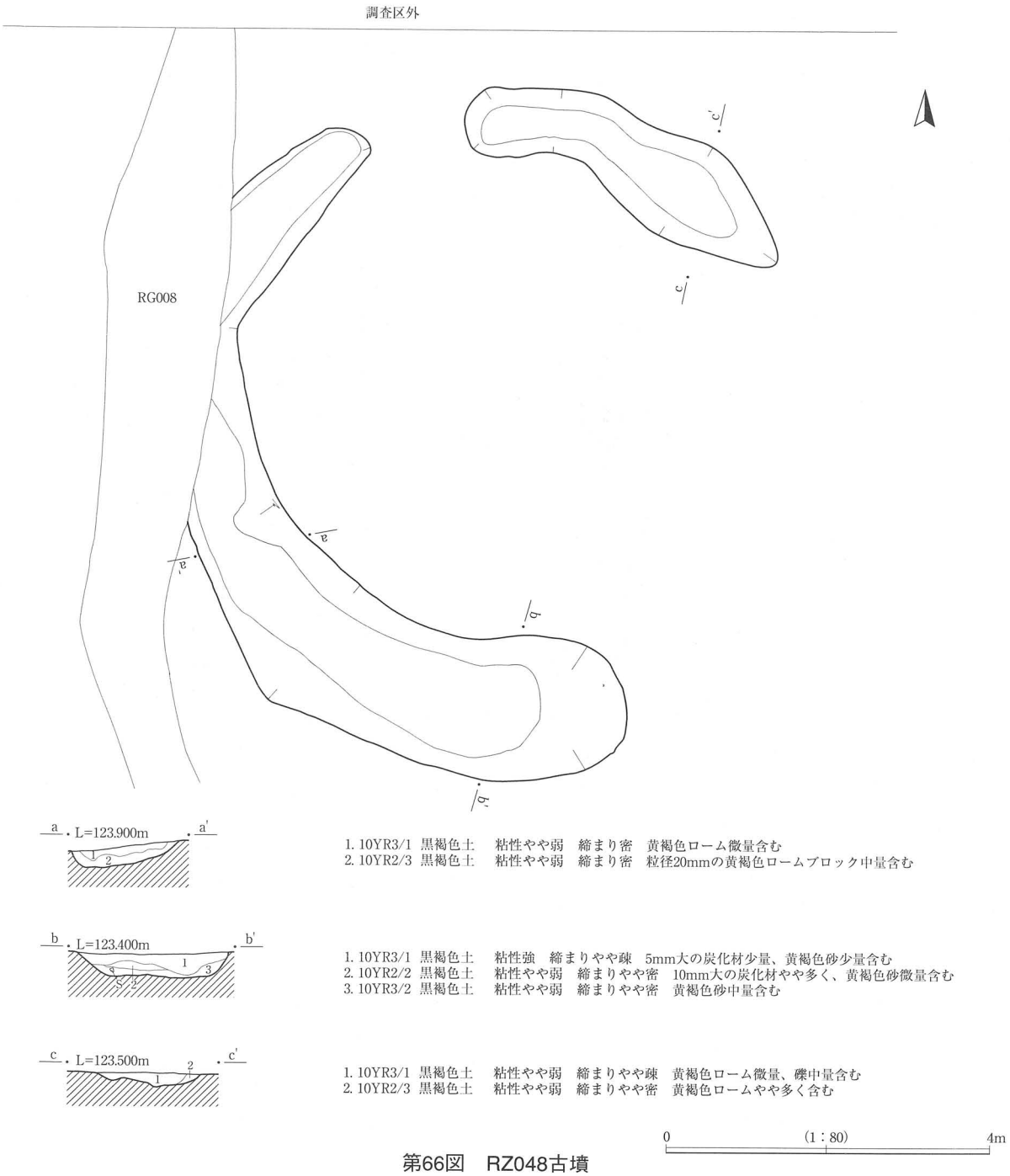
本遺構は、従来、いわゆる「古墳」と呼ばれる遺構であり、墳墓である可能性が高いと考えられている。墳墓であるなら、この円形周溝部分は墳墓の下部に過ぎず、大半が削平されていると考えられる。

時期については、出土遺物の大部分が上層からの出土であるため明確に決めることができない。少なくとも9世紀以前とすることが可能である。

RZ048古墳（第66・67図）

調査区北部、３Ｆ13ｔ～17ｆグリッド間に存在する。RG015と重複しており、新旧関係は本遺構の方が古い。検出はⅢ層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認された。

平面形は現状では「Ｃ」字状と楕円形状の溝跡の２箇所に分断される。しかしながら、削平されていることを考慮すると、これらは同一の遺構であった可能性が高い。ただし、南東方向はRZ044と同様に途切れていたと考えられる。したがって、本来は一部断絶するもののほぼ円形を呈するであろう。規模は最大径8.6m、溝の最大上幅が1.8m、深さは最大で確認面より20cmである。底面は平坦に構築



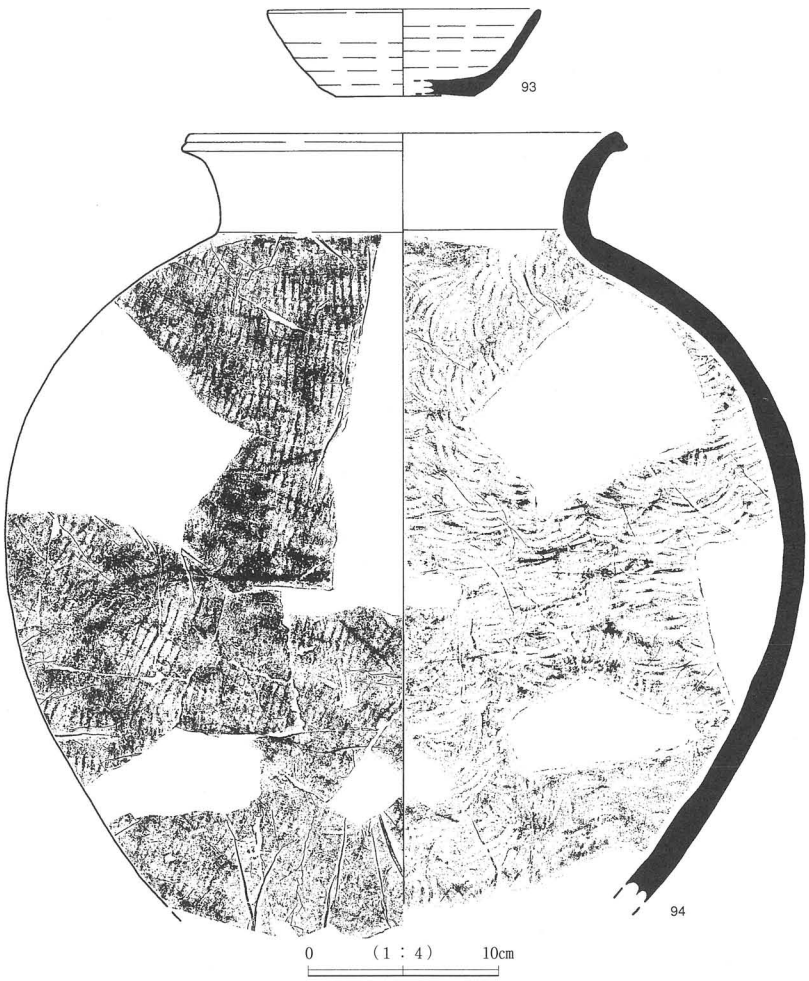
第66図　RZ048古墳

される部分が多く、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は１～３層に区分できる。いずれも黒褐色土層である。

遺物は8,517ｇ出土しているが、大半が堆積土上層に含まれる。これらのうち２点（6,065ｇ）を図示した。93は須恵器坏である。直線気味に開く形状の体部を有する。94は須恵器甕である。体部は球胴状を呈し、口縁部は強く外反する。

本遺構は、いわゆる「古墳」と呼ばれる遺構である。時期については、重複関係から奈良時代を含むそれ以前と考えることができる。出土遺物は上層からの出土であるため構築時期に関連するとは考えにくい。したがって、周溝出土遺物とは年代的に大きな開きがでてくる。これは、周溝がある程度埋没した段階であらためて何らかの行為が行われていたことを示すと考えられる。

（西澤）



第67図　RZ048古墳出土遺物

（7）旧　河　道（第68図）

調査区の東端３Ｈ13ａ～23ｃグリッドに位置する。方向はほぼ南北方向に向き、底面の高低差から南から北へ傾斜していると考えられる。重複遺構はない。検出はⅢ層である。

西岸にあたる部分は水流によってある程度削られたと考えられ、長い傾斜となっている。東岸は調査区端で僅かに確認された。これによると、幅は上幅で最大で4.3m、深さは確認面より70cmである。断面形をみると、ゆるやかに立ち上がる部分と、やや急に立ち上がる部分が認められる。この旧河道跡は前回の調査（５次調査）で確認されたものの続きに相当し、遺跡の境界をめぐるものと推定される。

堆積土は５層に区分できる。１層には下部に火山灰（十和田ａテフラと考えられる）が微量に含まれていた。土師器を中心とする土器が若干出土している。その下の２層黒色土からは弥生土器・石器が比較的多く出土した。その下位には３層暗褐色粘土、４層黒褐色土が堆積している。５層は堆積状況から２層よりは新しいと考えられる。堆積土の状況から、水流がある状況とはいえず、むしろ湿地状を呈していた可能性がある。どの層も粘性が強く、黒褐色土を基本としていることからもそれが窺えよう。

遺物は１・２層を中心に出土しているが、とくに２層から弥生時代の遺物が多く出土している。

弥生土器（第63～66図）

出土数は28,176ｇである。そのうち161点（7,832ｇ）を図示した。これらの土器群は２層からまとまって出土したもので、ある程度一括性が高いと判断された。ただし、旧河川ということもあり、必ずしも一括性を保持していることを強調しているわけではない。なお、便宜上、他遺構出土の弥生土器も合わせて説明する（122、129、133、135、146、201、203、209）。

これらの出土土器は破片が多く、復元できる個体は非常に少ない。したがって、あえて分類することはせず、種類ごとに大まかに分け、それごとに説明するにとどめた。その際にまず器形、文様の順に説明を試みるが、先述のように全容がしれる個体はないため、判明しているもののみを記述する。そのため、すべての器形・文様をあらわしているわけではない。

ａ　器形

甕形土器（以下、甕）

甕は粗製を中心に復元できる個体が比較的多かったが、底部まで残存する例は確認できない。器形がある程度判明する資料には95～106がある。破片でも器形をある程度推定することができるが、全容が判明しないものはあえて触れない。これらをみると、口縁部は波状を呈すものやわずかな突起や刻みがつくものがほとんどである。甕の上半部の器形は脹らんだ胴部から外反する口縁をもつものが多い。胴部の脹らみも強く張るもの（95・100・105など）やわずかに脹らむもの（96・97・98・99）、などがある。106は口縁部のみのため胴が脹らむかは不明である。

壺形土器（以下壺）

壺は全容がしれる資料が少ない（107～110）。このうち108の小型壺だけは唯一完形である。107は頸部が比較的短く外反する口縁で端部を丸くおさめる。胴上位に最大径をもつと推定されるが、この最大径付近の胴の曲線が大きいため、扁平な胴部を有している可能性がある。109は胴部のみであるため、甕の可能性もあるがここでは壺に分類した。110は口縁部から頸部にかけての破片である。直口気味の口縁部をもち、胴上位に最大径をもつ大型の壺の一部と判断できる。完形の108は短く開く

口縁部をもち、肩部があまり張らず、胴中位から下位の部分に最大径を有する。底部は平底で、やや中央が上げ底気味になっている。

その他の器形

甕・壺のほかはあまり器種として判別するものが少ない。そのなかで高坏（111・113）、蓋（112）と判断できるものがある。111は高坏で脚部が欠損している。大きく開く胴部をもち、口縁部は波状口縁である。端部には粘土が貼付され、肥厚している。113は脚部のみであり、低い脚部から皿状の坏部をもつと考えられる。同じ高坏でも108とは別器種として捉えられる。112は蓋と考えられる。摘みの一部が欠損しているが、その形状から蓋と考えた。

b　文様

出土土器の多くは破片土器であるため、施文される部位・文様ごとに区分しその特徴をみてみる。

口縁部文様帯

115～125は口縁部内外面ともに無文のものである。多くはナデ調整が施されている。第69図95～99も口縁部調整はナデのみである。ユビナデのほかヘラ状工具によってナデ調整されるもの（117・123など）もある。126～129も同様の調整であるが、端部に刻みがあるものである。129は端部にも縄文が施される。130～137は口縁部に縄文（地紋）が施されるものである。137には撚糸が、132～134は附加条縄文が施される。それ以外は単節縄文である。130・136は地紋の痕跡が僅かに残ることから、ナデにより磨り消されていると判断でき、実際の調整はナデとすべきものであろう。これに対し135は頸部のみを丁寧にナデが加えられ、地紋であるＲＬ縄文を消し、口縁部のみを残している。131は内面のほとんどが剥離しているがあるいはそこにも地紋があったかもしれない。

138～140は口縁部の内面に縄文が施されるものである。138は内面のみに、139～140は内外面の両方に縄文がある。いずれもＬＲ縄文である。第70図105～106・108にも内面に縄文が施される。外面は壺・甕含めてナデ調整である。106・108は附加条縄文が施されている。

復元できる甕類の文様から推定すると、ここまでの破片土器は甕類に含められるものが多いと考えられる。

141・142はその他の口縁部である。141は強く短く外反する口縁部である。磨滅が激しいが、頸部にＬＲ縄文が確認される。口縁部はナデ調整である。142も基本的にナデ調整（あるいはミガキか）が施される。磨滅が著しいため観察が難しい。口縁部にはまた突帯が貼付されている。

143～146はヘラ描き沈線による弧状文が配されている破片である。いずれも文様の一部のみのため別の文様も含まれている可能性もある。146は弧線文というより波状文かもしれない。また、他の沈線に比べて非常に繊細なものである。

110・147～152は山形文（あるいは三角状文）、菱形文が施文されている。151は菱形が重なった重菱形文であり、口縁直下までこの文様が配されている。110は沈線で菱形を描いたものであるが、曲線的で他とは趣がことなる。また、沈線自体も浅く雑な感じである。縄文は頸部以上にのみ認められることから一応充填を意識しているかもしれないが、明瞭ではない。施文順序は縄文→沈線の順である。その他は三角形の文様が配されるが、全容は不明である。

153～157は直線的な沈線が配されているものである。これらは単独で存在するものと他の文様と組み合わされるものの２者があるが、個々では区別できない。これら155～157は頸部に１～３条の沈線が施される。157は内面にも施文される。これらは壺の可能性がある。158・159は刺突が加えられるものである。158は口縁部直下にヘラ状工具による羽状の刺突が配される。159は棒状工具による刺突で、比較的深く突き刺している。部分的な破片ではあるが、沈線と沈線によって区画された文様の外

側にランダムに充填されている。刺突はこれらのほか173・193にも施される。前者には竹管状の、後者には針状の刺突が施される。なお、159は台付鉢であろう。

体部文様帯

第72・73図は胴部・底部片である。断面図の傾きによって胴部上位（肩部）や中位以下とおおよそ判断できるが不明なものも多い。

160～173は山形文あるいは鋸歯文など三角形を基本とした文様である。これら三角文系の文様には大きさや配置などから様々なバリエーションがあると予想されるが、小破片が多いため一括している。160は三角文のみで構成されるが、それ以外の多くは平行沈線と組み合わさって使用される。162・170は２本一対の工具によって同時施文された平行沈線であるが、全体的に使用された沈線はすべて一本使用である。169の沈線は幅広で深さも浅いなど他のものとはやや異なる。

これら文様の三角形状の形には１線ずつ施文するものや、一筆書きのように連続して施文するものがある。前者には線が重なるもの（168・170など）や線の結びに空白ができるものなど（167・173など）があり、文様自体の多様性のほかに、施文方法の多様性も認められる。

109・174～183は弧線状の文様を基本としたものである。この文様も部分的に観察されるため、他の文様も含まれていると思われるが、全容が不明のため一括しておく。174・175は平行沈線間に細かな波状文が配されている。176～179などは単位が大きい波状文と思われる。このうち179は沈線が浅い。109のようにあまり流麗ではない複線波状文もここに含める。これには充填縄文が省略されており沈線文のみで構成されている。

184～189は１条以上の沈線からなる直線的な文様が施文されるものである。この文様のみで構成されるものはほとんどなく、多くは他の文様と組み合わされる。したがって、これらは文様の一要素のみであるため、詳細は不明といわざるを得ない。185・189は地紋であるＬＲ縄文施文後に沈線が引かれていることが重複関係からわかり、多くは同様の順序で施文されていたと推定される。

190～194は重方形文が施される破片である。いずれも破片のためこの文様の１単位が不明のためどの部分に相当するか判断が難しいが、直角に屈曲する部分が認められる。

195～201は菱形文・三角文が施文され、充填技法を伴うものである。沈線で区画内を縄文の充填、沈線、ミガキ、沈線のように各沈線間を交互に縄文充填とミガキ（磨消し）で構成される201はやや単位が大きく、沈線の深さも浅い。

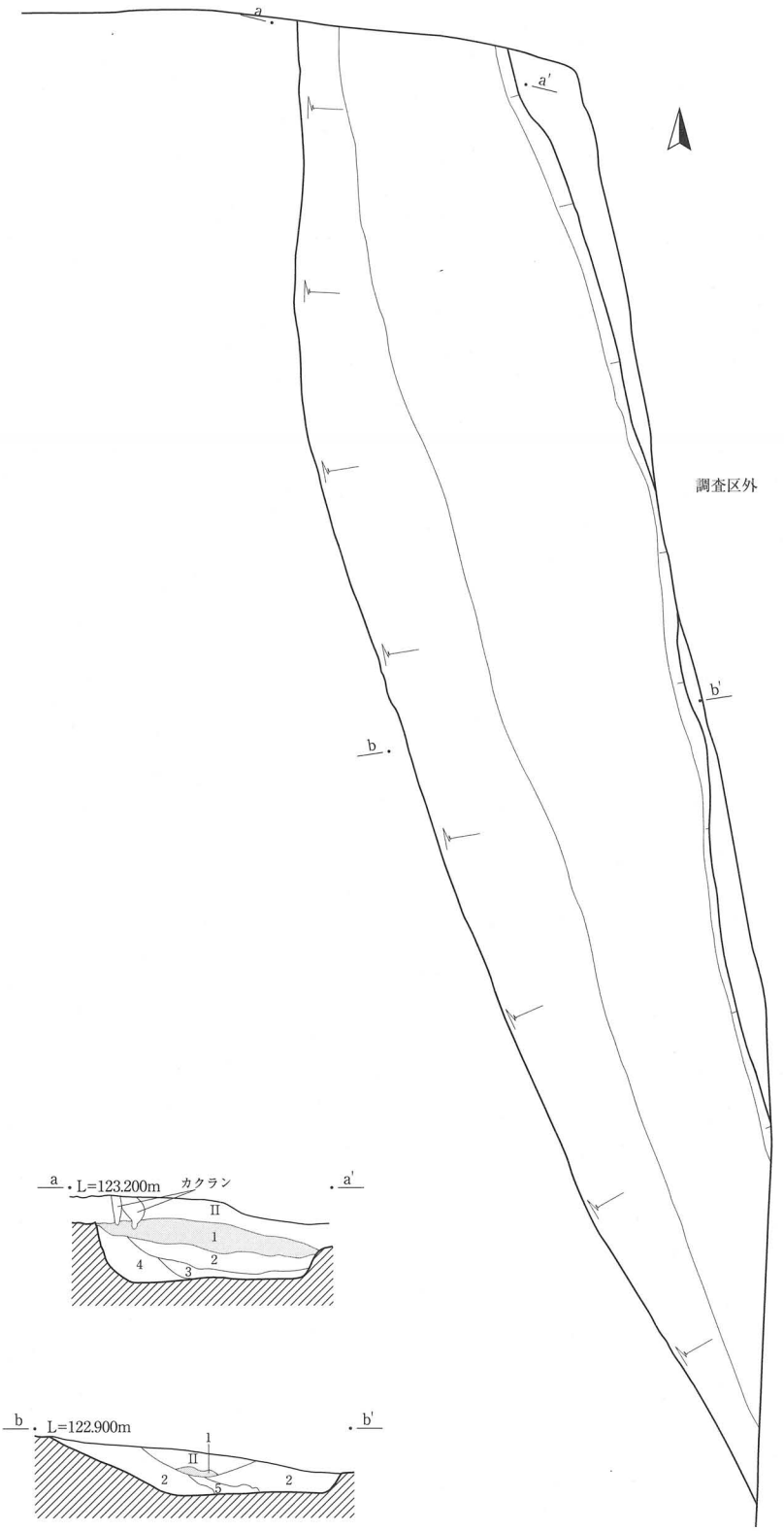
202～204は変形工字文と判断できるものである。198・199は粘土瘤の貼付が認められる。204は残存部分が少なくあるいは変形工字文とは異なるかもしれない。

205～213は、底部片である。

214～255は地文のみの体部片である。単節ＬＲ（214～218・220～225）と単節ＲＬ（219・226～234）、附加条縄文（235～252）である。253～255は短軸絡条体かもしれない。

c　その他

114は土器片円板である。土器の割れ口に磨痕による加工が確認できる。用途不明である。

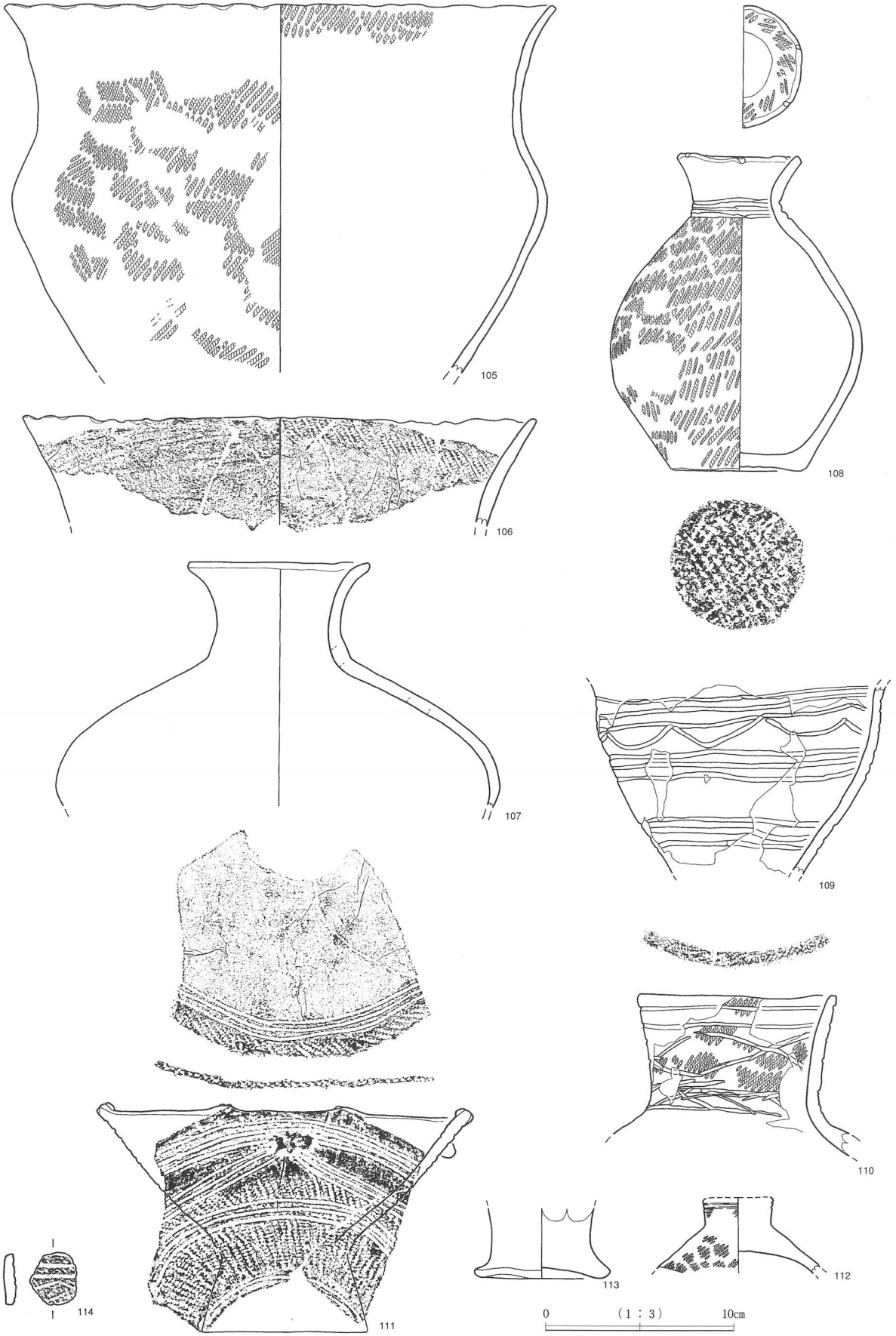


1. 10YR3/2　黒褐色土　　粘性やや弱　締まり密　炭化物微量、下部に火山灰微量、土器少量（土師器、須恵器が多い）含む
2. 10YR2/1　黒色土　　粘性強　締まりやや密　土器（弥生土器）が多量に出土した層、黄褐色砂微量含む
3. 10YR3/4　暗褐色粘土　粘性強　締まり密　褐鉄鉱微量含む
4. 10YR3/1　黒褐色土　　粘性強　締まり密　土器少量、黄褐色砂微量含む
5. 10YR3/3　暗褐色土　　粘性強　締まりやや密

0　(1：100)　5m

第68図　旧河道

第69図　弥生土器１



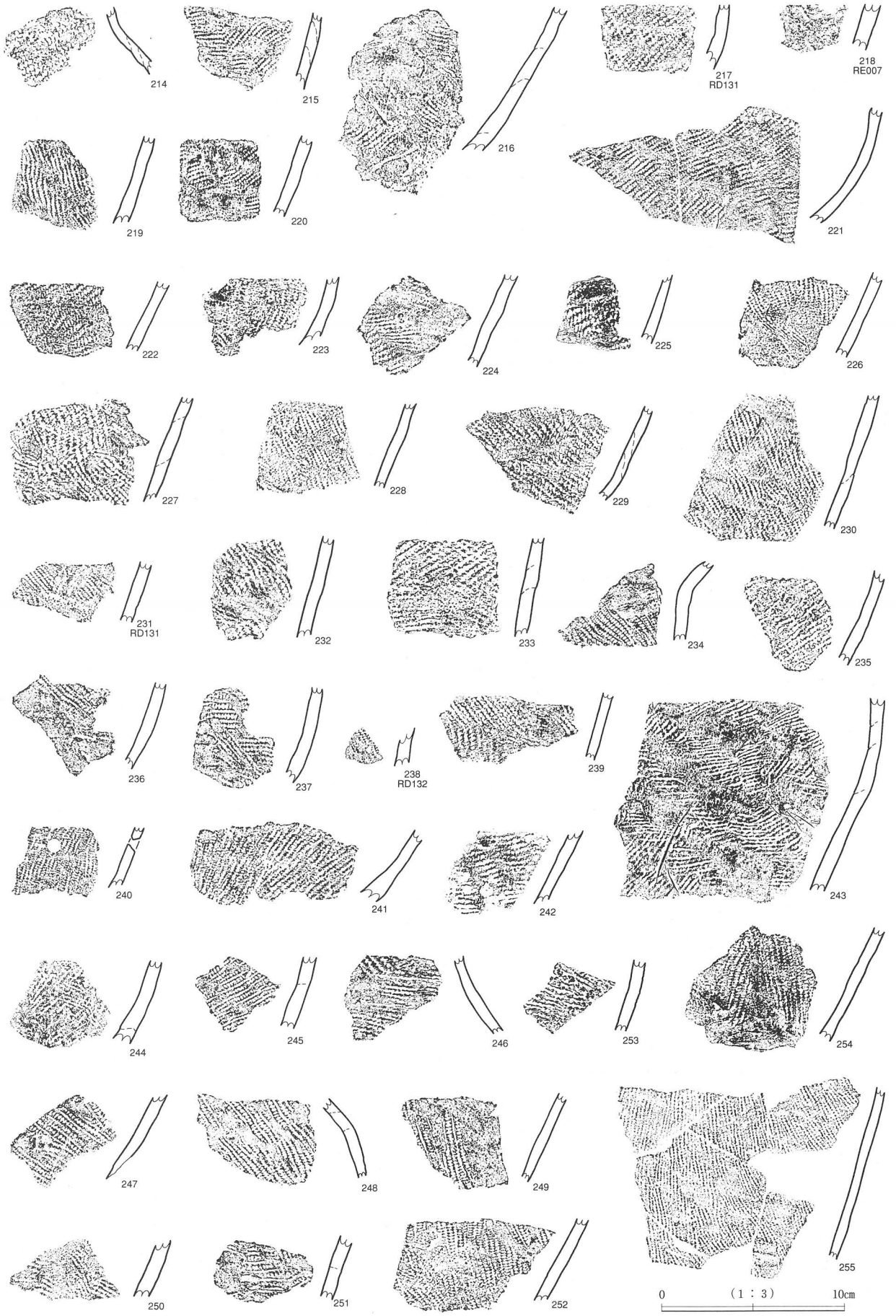
第70図　弥生土器 2

115
116
117
118
119
120
121
122
遺構外
123
124
125
126
127
128
129
RD132
130
131
132
133
遺構外
134
135
136
137
138
141
139
140
142
143
144
145
146
遺構外
147
148
149
154
150
151
152
153
158
155
156
157
159
0
(1：3)
10cm

第71図　弥生土器 3

160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
RD131
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
遺構外
202
203
RD131
204
205
206
207
208
209
遺構外
210
211
RB006
212
213
0
(1：3)
10cm

第72図　弥生土器 4


214
215
216
217
RD131
218
RE007
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
RD131
232
233
234
235
236
237
238
RD132
239
240
241
242
243
244
245
246
253
254
247
248
249
250
251
252
255
0
(1：3)
10cm

第73図　弥生土器５

石器（第74～79図、写真図版45～50）

旧河道、３Ｈ16～18ｂグリッド付近の弥生土器が多量に出土した2～3層中から集中的に石器が出土している。総点数132点（2763.8ｇ）を数え、そのうちトゥールは石鏃９点（7.1ｇ）、石鏃未成品５点、（14.7ｇ）、石錐４点（28.9ｇ）、石錐未成品1点（2.5ｇ）、削器７点（61.5ｇ）、両極石器4点（53.5ｇ）の計30点で、他に石核５点（301.3ｇ）、剥片97点（1359.5ｇ）が確認できた。なお、図化したものはトゥール30点全点、石核6点全点（遺構外1点を含む。）、剥片6点（出土点数の12%）である。

これらの石器群の時期については、出土層位から弥生土器群とは共伴関係にあると考えられ、ほぼ同じ時期のものと推定される。

石鏃（256～269）

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ５㎝以下のものを「石鏃」とした。また、素材や大きさ、二次加工などから石鏃を意図して制作し、途中で断念したと思われるものを「石鏃未成品」とした。前述の通り、石鏃９点（256～262・267・268）、石鏃未成品５点（263～266・269）が見つかっており、見つかったトゥール類全体の47%を占めている。

成品は、基部が欠損している2点を除き、全て中茎を有する、いわゆる「有茎鏃」に相当する。基部の形状から、

「基部が平らなもの（256・258・259）」と、

「基部が突出するもの（257・260・261・262）」とに2分類できる。

また、残存状態を見てみると、「完形品（256・257）」、「先端部と中茎（基部まで）が欠損するもの（258・262・267）」、「中茎（基部まで）が欠損するもの（259・268）」、「片脚を欠損するもの（260）」、「先端部のみを欠損するもの（261）」が確認される。

石鏃未成品は「先端部が作り出されているもの（263・265・266）」、「基部が作り出されているもの（269）」がみられる。また、264は側縁の両面に二次加工が施されているのみである。基部制作途中に先端部とする部分が欠損したために、断念したものであろうか。

石錐（270～274）

二次加工による錐状の端部が作り出されるものを「石錐」とした。また、素材や大きさ、二次加工などから石錐を意図して制作し、途中で断念したと思われるものを「石錐未成品」とした。前述の通り、成品４点（271～274）、未成品１点（270）が見つかっており、出土したトゥール類の17%を占めている。

成品は、形状から、

「基部（つまみ部）を有するもの（271・273）」と

「棒状を呈するもの（272・274）」とに２分類できる。

残存状態は、いずれも完形品である。また、錐部に使用による磨滅痕などを肉眼で確認できなかった。

未成品は形状から、棒状を呈する石錐の製作途中のものと思われ、一端が大きく欠損してしまったため、製作を断念したのではないだろうか。

削器（275～281）

形状が不定形で、縁辺部に二次加工による刃部が作り出されたものを「削器」とした。

7点見つかっており、出土したトゥール類全体の23%を占める。

削器は、刃部の作り出し方法から

「刃部が両面加工により作り出されるもの（278・281）」と
「刃部が片面加工により作り出されるもの（275～277・279・280）」とに2分類できる。

両極石器（282・283・285・286）

一対あるいは、二対の向かい合った縁辺部に、互いに向き合う方向に剥離が生じているもの。いわゆる「ピエス・エスキーユ」、「楔形石器」などを含む。前述の通り、４点見つかっており、トゥール類全体の13%を占める。

形状はいずれも、上下一対のみに両極剥離がみられる。

石核（287～291）

複数回に渡り、剥片剥離作業が行われた残核を「石核」とした。５点出土している。いずれも自然面が残っている。

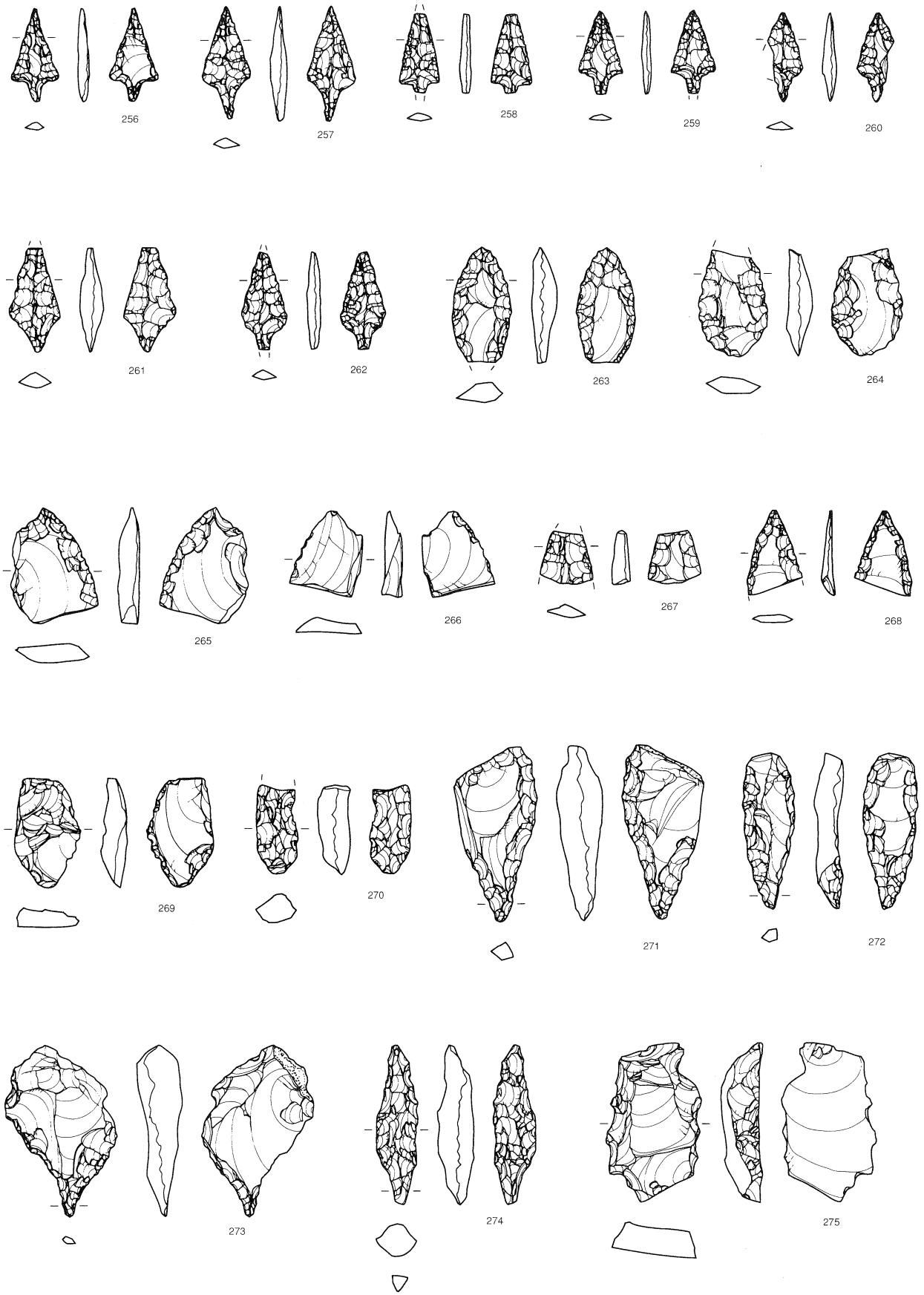
287は調査区北側３Ｆ15ｘグリッドの遺構外から出土した石核であるが、便宜上、ここで説明する。同一作業面に同一方向で剥離作業を行っている。288は円礫を素材とし、両面から剥離作業を行っている。289は大きな縦形剥片を素材とし、その主要剥離面に同一方向から剥離作業を行い、また背面にも同一方向から剥離作業を行っている。290は複数の作業面に同一方向から剥離作業を行っている。291は同一方向か二方向から剥離作業を行う作業面が複数面確認され、数回にわたり、面を変えながら、剥離作業を行ったものと思われる。292は291と同様な作業過程が見いだされるものである。縁辺部に2か所、階段状剥離が確認できた。

剥片（284・293～298）

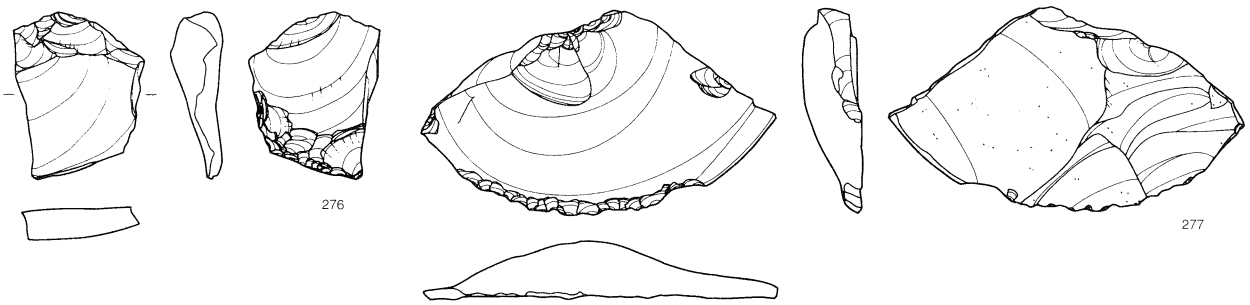
形状が不定形で、剥片剥離作業によって作出されたものを「剥片」とした。大きさなどから、チップとするべきものもこれに含んでいる。また、刃部とは考えられない二次加工が施されているものについては、「リタッチドフレイク（以下Ｒフレイクと略す）」とした。剥片は旧河道から97点（内、Ｒフレイク３点見つかっている。また、そのうち６点（各2点ずつ、計3組）が接合した。図化したのは、接合資料である。

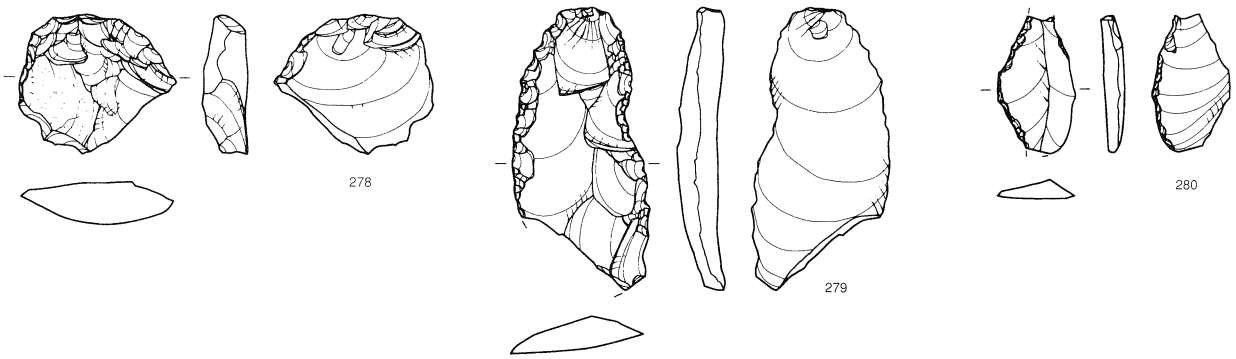
293・294はどちらも自然面の残る縦長剥片で、打面が同一面であり、母岩の同一面に打撃を加え、剥離作業を行ったものと思われる。294には打面に細かい剥離がみられ、母岩から剥離された後の剥離作業によるものと思われる。295・296はどちらも自然面の残る剥片である。どちらも打面が確認できず、剥離作業を推定するのは困難であるが、恐らく、母岩から295を剥離した後、296を剥離したものと思われる。297・298はどちらもＲフレイクで、自然面が残る。297は打面の位置が、298との接合部分とは反対方向にあるので、恐らく、母岩から297を剥離した後、298を剥離したものと思われる。

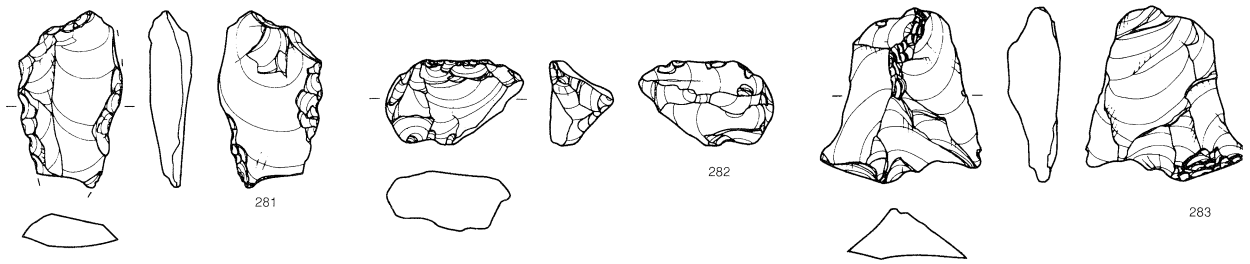
（須原）

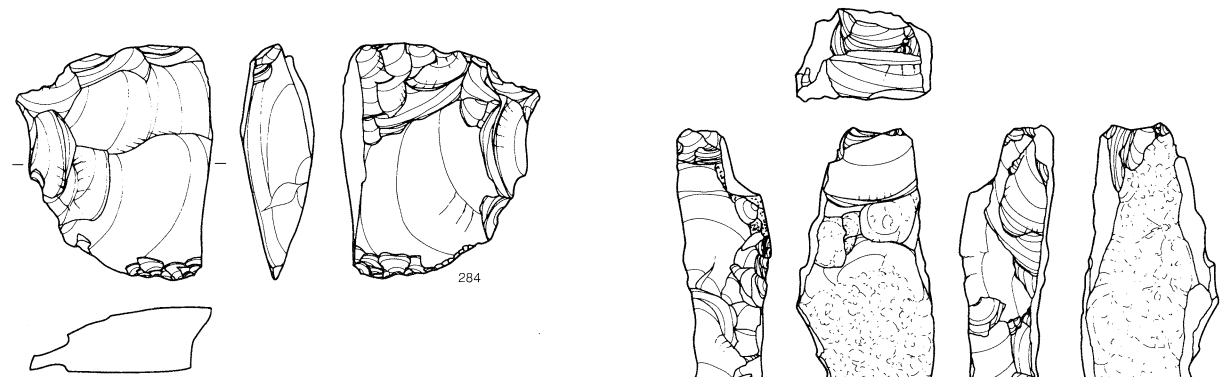

256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
0
(2：3)
5 cm

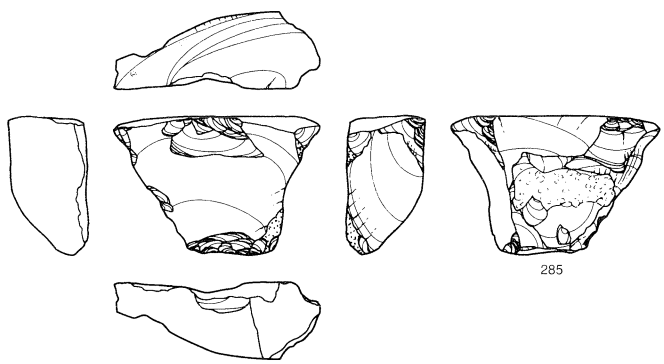
第74図　出土石器１





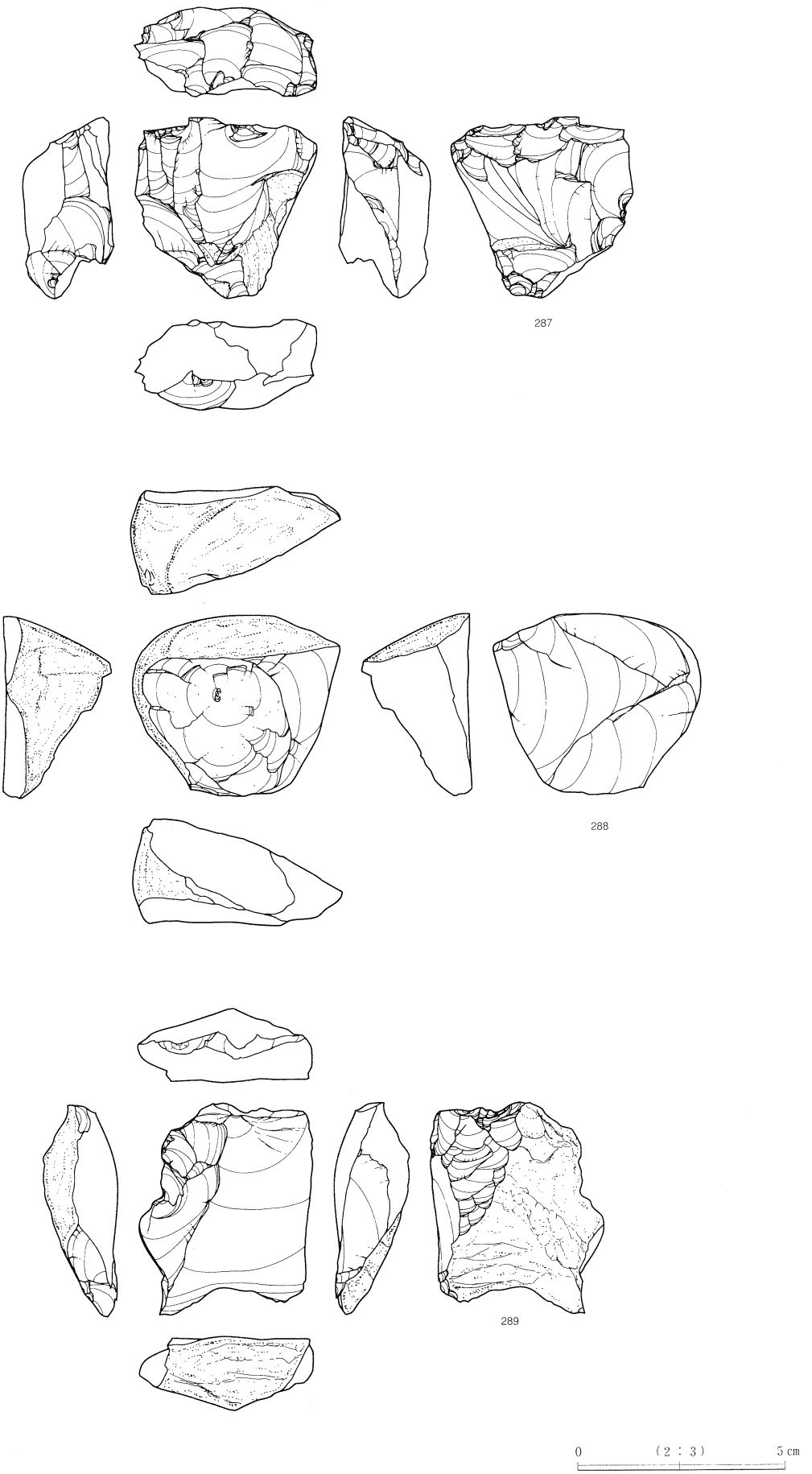




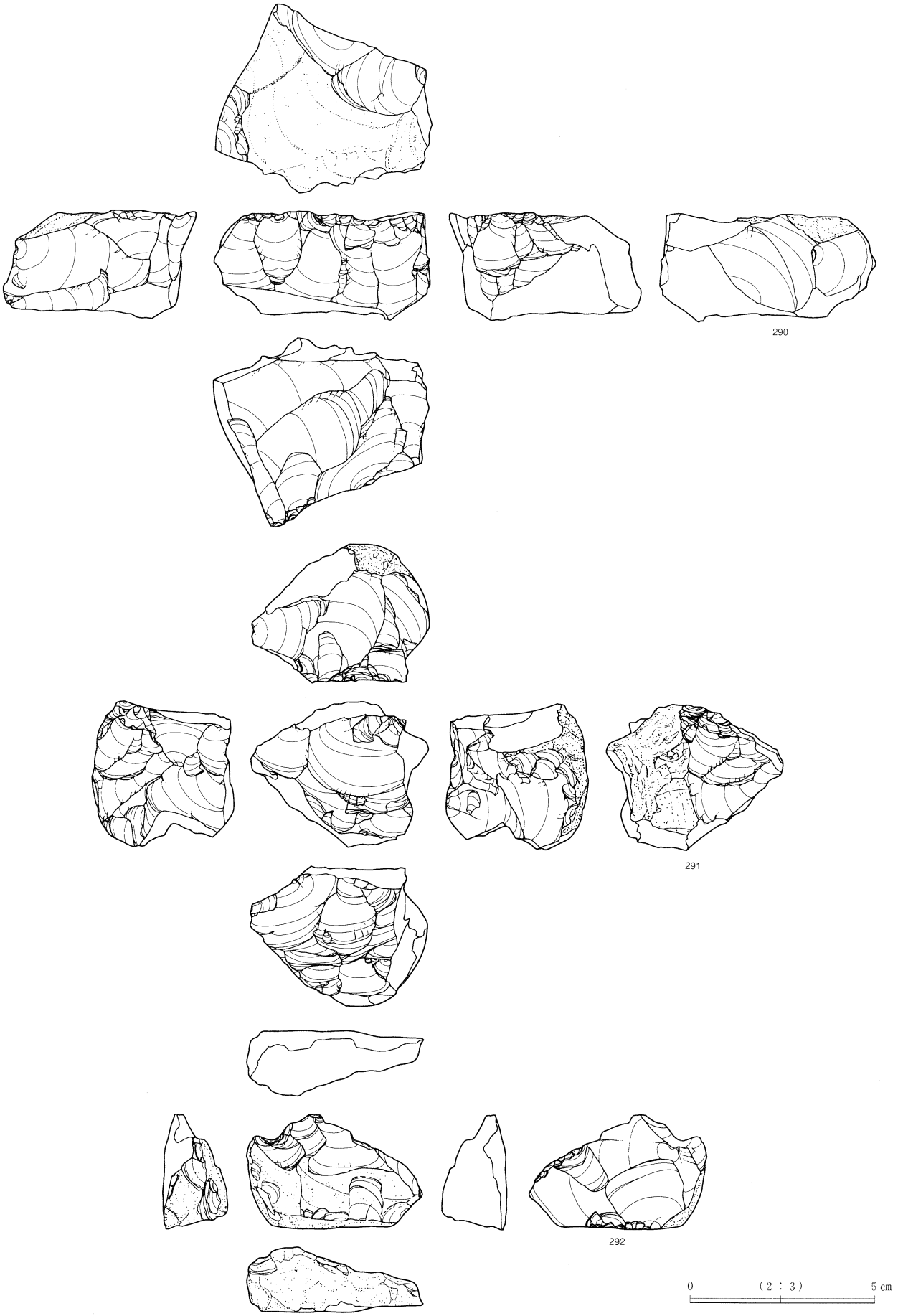


0　（2：3）　5cm

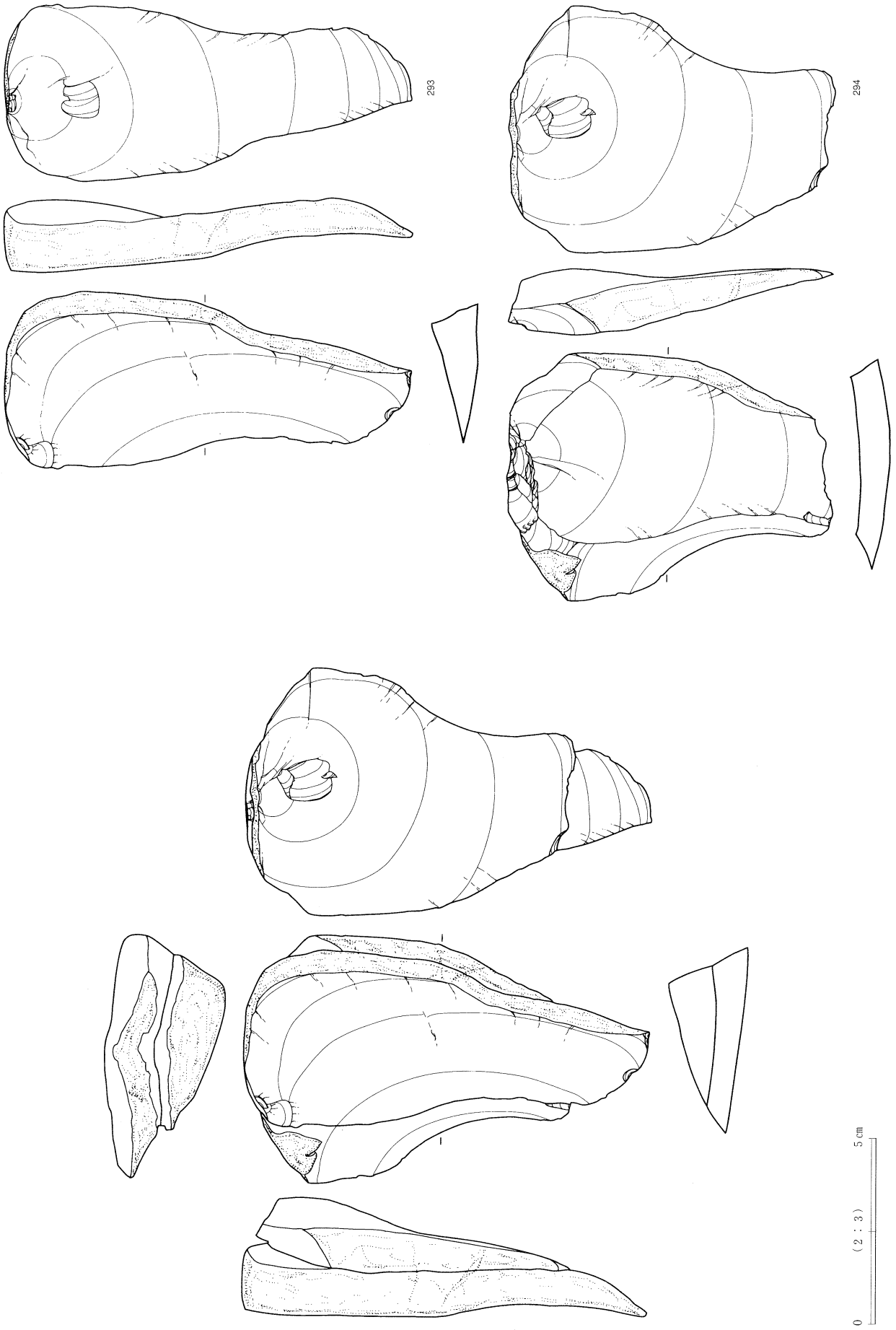
第75図　出土石器２



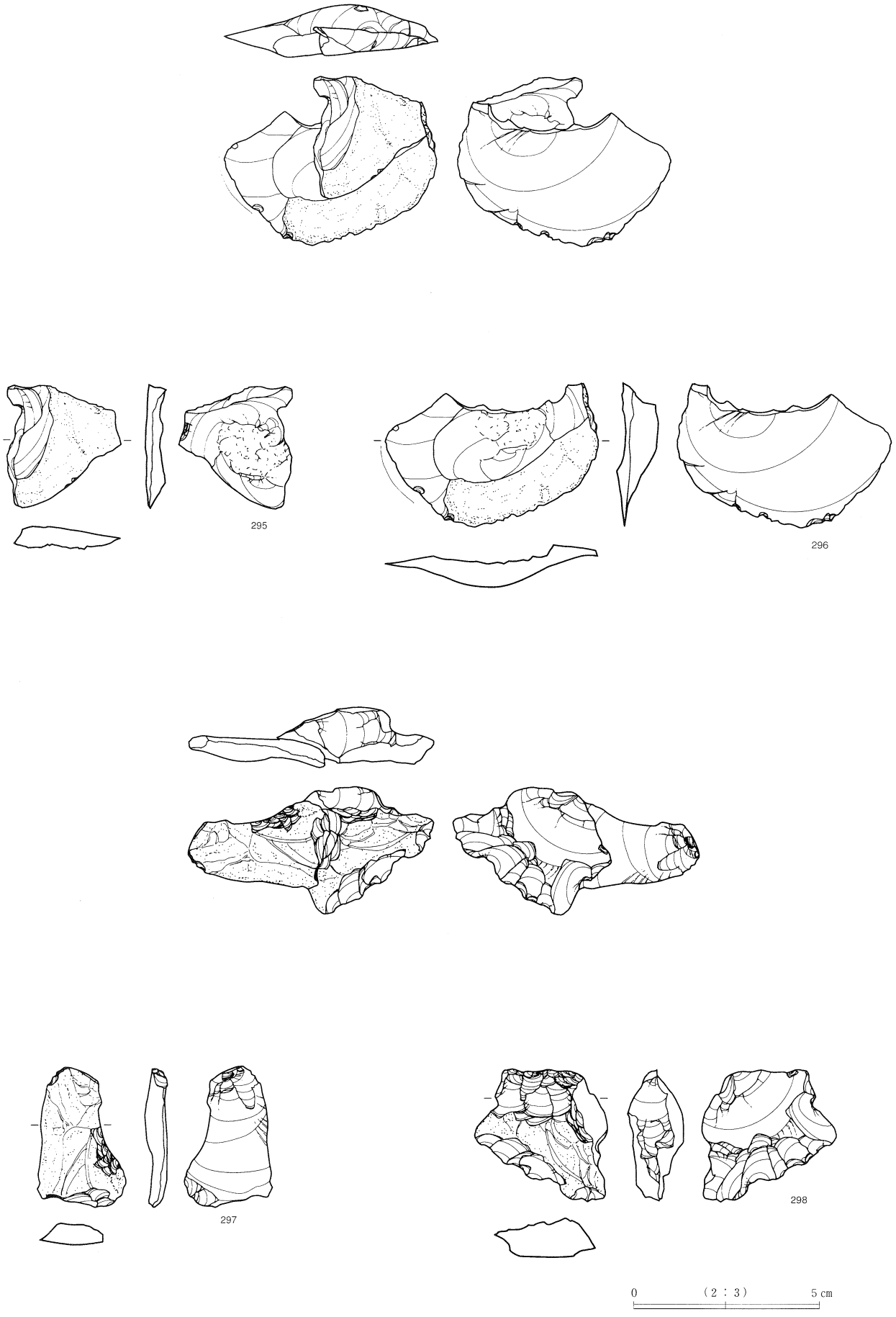
第76図　出土石器 3



第77図　出土石器 4



第78図　出土石器５



第79図　出土石器 6

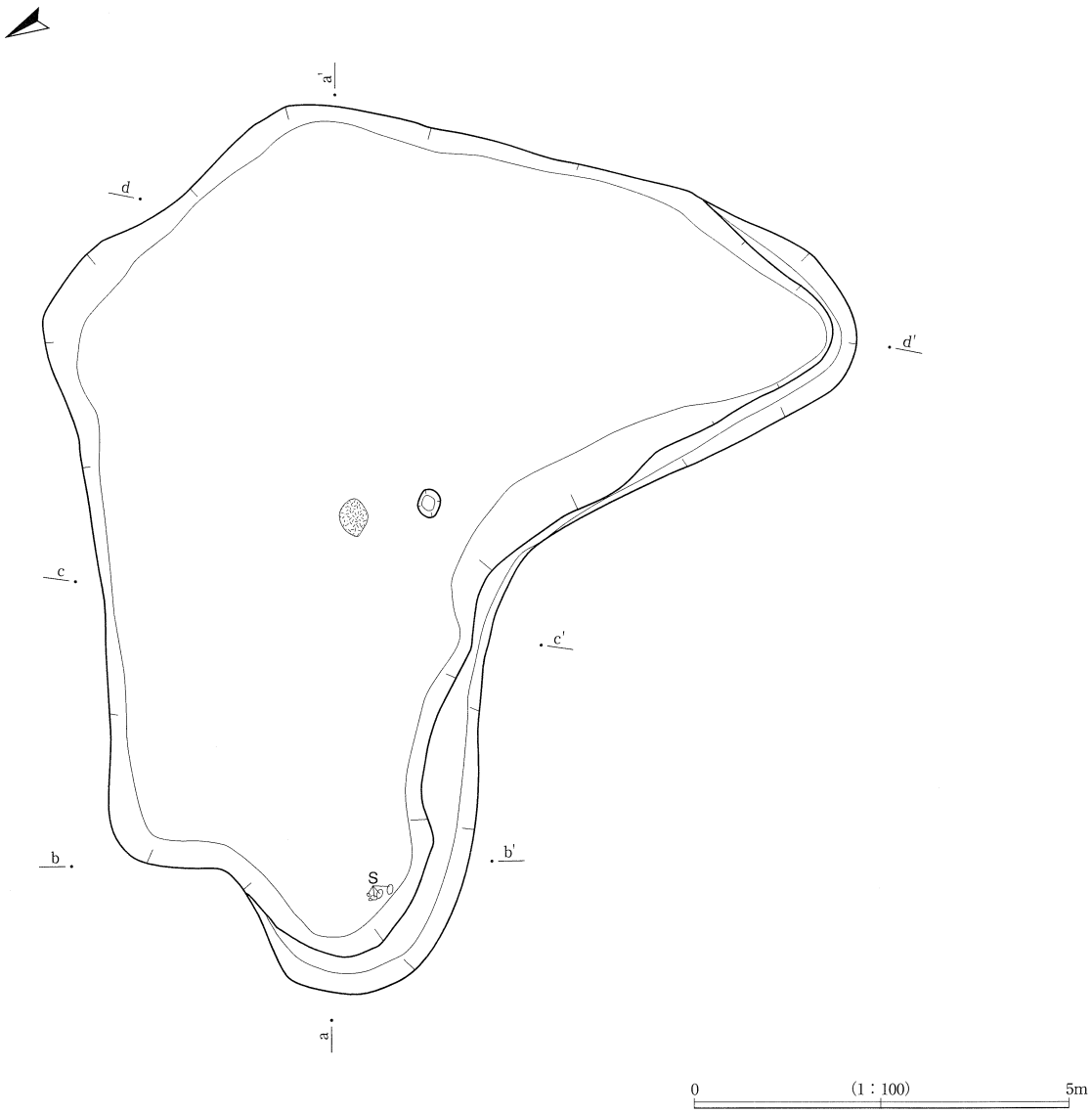
（8）不　明　遺　構（ＲＺ）

形状が不整形で、その性格がよく分からない遺構が1基見つかっている。

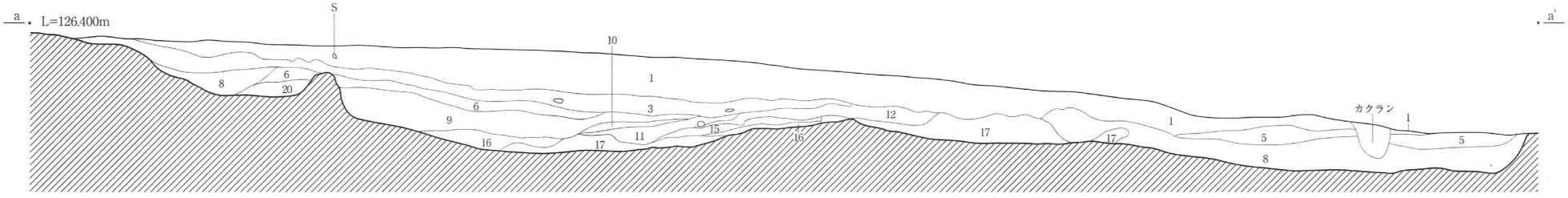
RZ049不明遺構（第80～82図）

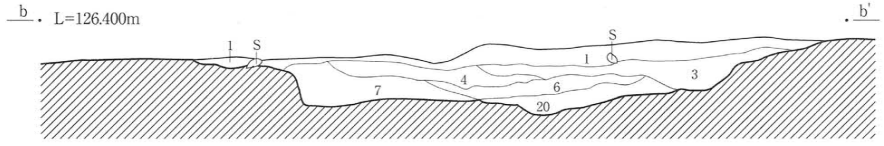
調査区東側、４Ｇ６ｓ～４Ｇ12ｔグリッドに位置する。他遺構との重複はない。南東側にRB003、RD145、南側にRD146、147が隣接する。検出はＶ層上面で、黒褐色土の広がりをもって確認した。遺構検出段階では複数棟の住居跡が重複しているものと想定していたが、堆積土の土層から「切り合い」が確認できず、従って1基の遺構と判断した。

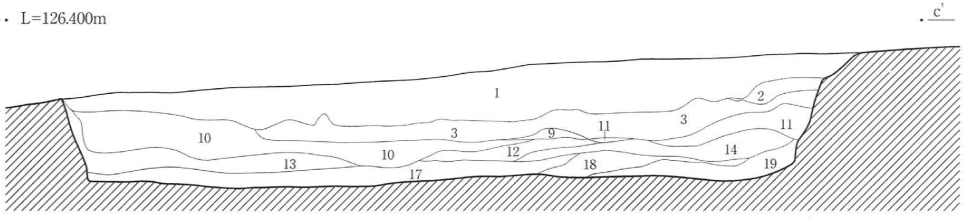
平面形状はいびつで、東西方向に長く、東側がさらに南へと延びる「Ｌ」字状を呈する。規模は最大長が11.9m、幅は北西側は4.9mで、南東側では11.0mを計り、深さは最大で確認面より81cmである。最大長を主軸とした場合の方向はＮ－64°－Ｗであり、地形の傾斜と直交する。底面は西から東に傾斜し、また中央部分が隆起しており、平坦ではない。西端から南端は段状を呈し、床面との比高差は最大で64cmを計る。壁は西壁が緩やかな傾斜の立ち上がりで、それ以外の壁はほぼ直立気味である。

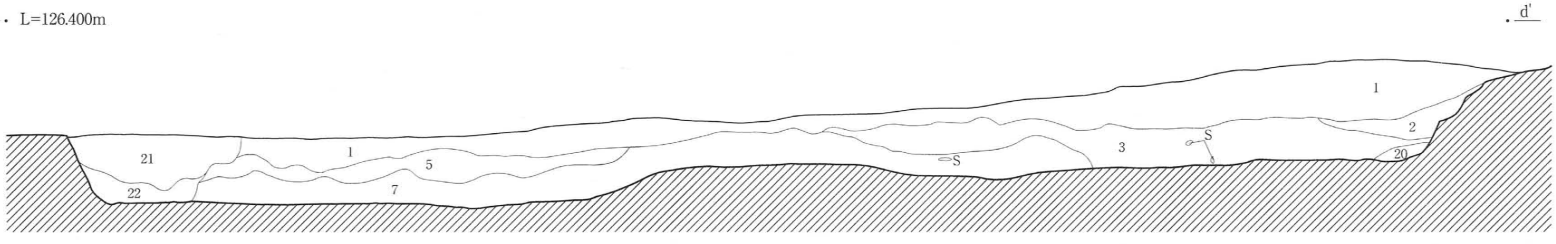


第80図　RZ049不明遺構









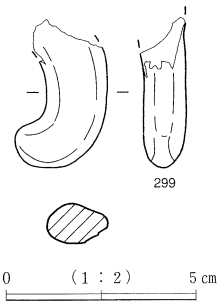
1. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　礫少量含む
2. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　黄褐色砂微量含む
3. 10YR2/3 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　粒径5mmの黄褐色ロームブロック中量、礫少量含む
4. 10YR3/1 黒褐色土　粘性弱　締まりやや密　黄褐色ローム少量、礫少量含む
5. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性やや弱　締まり密　黒褐色土少量含む
6. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性弱　締まり密　黒褐色土中量含む
7. 10YR2/3 黒褐色土　粘性弱　締まり密　黄褐色ローム小量、礫小量含む
8. 10YR5/6 黄褐色ローム　粘性弱　締まりやや密　礫少量含む
9. 10YR2/3 黒褐色土　粘性弱　締まり密　粒径5mmの黄褐色ロームブロック少量、褐色砂やや多く含む
10. 10YR2/1 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　粒径10mmの黄褐色ロームブロック少量含む
11. 10YR4/4 褐色砂　粘性弱　締まり密　粒径10mmの黄褐色ロームブロック少量、黒褐色土含む
12. 10YR3/3 暗褐色土　粘性弱　締まりやや密　粒径5mmの黄褐色ロームブロック少量、黒褐色土少量、礫少量含む
13. 10YR4/6 黄褐色粗砂　粘性弱　締まりやや疎　黒褐色土中量含む
14. 10YR3/1 黒褐色土　粘性やや強　締まり密　黄褐色砂少量含む
15. 10YR3/3 暗褐色土　粘性やや強　締まり密　焼土粒微量、黄褐色ローム少量含む
16. 10YR2/3 黒褐色土　粘性やや強　締まりやや疎　黄褐色ローム微量、礫少量含む
17. 10YR5/6 黄褐色粗砂　粘性弱　締まりやや密　黒褐色土少量含む
18. 10YR3/2 黒褐色土　粘性やや弱　締まりやや密　黄褐色ローム微量、礫少量含む
19. 10YR4/4 黄褐色砂　粘性弱　締まり密　黒褐色土少量、黄褐色ローム少量含む
20. 10YR5/6 黄褐色粗砂　粘性弱　締まりやや疎　礫少量含む
21. 10YR2/2 黒褐色土　粘性やや弱　締まり密　黄褐色砂微量、礫少量含む
22. 10YR2/3 黒褐色土　粘性弱　締まり密　黄褐色砂やや多く、礫少量含む

0　(1：50)　2.5m

第81図　RZ049不明遺構断面

堆積土は22層に区分できる。黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームや黄褐色砂が層状に混ざる。特に、下部に堆積する11・13・17・19・20層は黄褐色砂によるラミナ層であり、本遺構の下部に水が流れていたものと推定される。

底面東端付近に柱穴1個検出した。深さは本遺構底面から約16cmで、堆積土は暗褐色土を主体とする。また、柱穴から北側約100cmに焼土の分布範囲が確認された。分布範囲は50×40cmで、形態は不整形を呈している。焼土の厚さは1cmの厚さで、地床炉とは考えられない。



第82図　RZ049不明遺構出土遺物

遺物は646g出土している。埋土上位に当たる、1～3層からは土師器が出土しており、それ以下からは、縄文土器片が出土する。縄文土器片の時期は中期から晩期まで幅があり、おそらく流れ込みと考えられる。縄文土器は小片であり、今回図示していない。

本遺構は形態が不定形であり、地形の傾斜に沿って下がっていること、また堆積土の下位に水が流れた痕跡がみられることから、特定の遺構というより「沢状の落ち込み」の可能性が高い。ただ、遺構の長軸が地形の傾斜に直交しており、また本遺構の底面から柱穴や焼土が確認できることから、おそらく、古代以前に住居跡のような遺構であった可能性がある。そして遺構が廃棄された後、時間の経過とともに崩落し、今回、検出したような形状になったものと考えられる。

（須原）

（9）遺構外出土遺物（第83図）

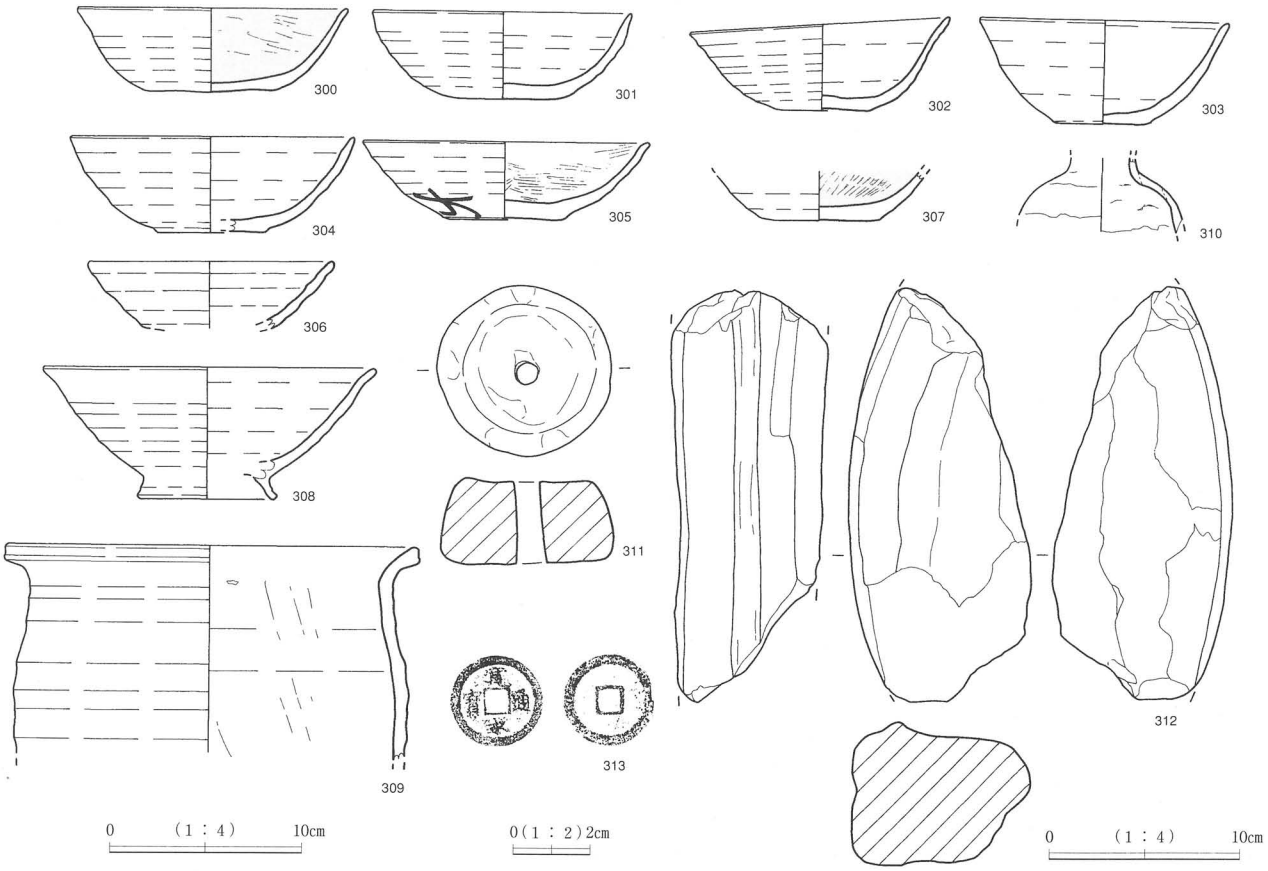
遺構検出中などに遺物がいくつか出土している。これらは正確には遺構に伴わないと考えたもので、まとめて遺構外出土遺物として登録している。

300～307は土師器坏である。このうち300・305・307には内面に黒色処理が施されている。器形をみるといずれもゆるやかに内湾する体部を有する。305の外面には「大」の墨書が認められる。

308は高台坏で、短く「ハ」字状に広がる脚部をもつ。309はロクロ調整の土師器甕である。体部下半部を欠損している。310は土師器小型壺の頸部～肩部にかけての破片と考えられるが詳細は不明である。311は土製の紡錘車である。直径4.5cm、重さ51gである。312は砥石、あるいは磨石と考えられる石製品である。一部のみ残存しているため全容は不明であるが、スリ面がいくつか確認できる。

313は寛永通宝である。3G21yグリットより出土した。

（西澤）



第83図　遺構外出土遺物

Ⅳ　自然科学分析

1　炭化種子同定

吉川純子（古代の森研究舎）

試　料

飯岡沢田遺跡は盛岡市の河岸段丘上に成立した、奈良から平安にかけての集落跡である。発掘担当者が住居の竈焼土を中心に覆土を採取し、水洗選別を行ったところ、6棟の住居から若干の炭化種実を検出した。炭化種実の同定は実体顕微鏡を用いておこない、同定した分類群を出土部位別に第２表にまとめた。同定した炭化種実は乾燥標本として(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管されている。

出土した炭化種実

本遺跡ではイネのほかに栽培種と考えられるシソ属を出土した。それ以外はマメ科の野生種と考えられるツルマメ近似種、ヤブツルアズキ近似種、ハギ属と荒地雑草のエノキグサを出土した。なお、RZ044－To-a付近焼土からは炭化種実を出土しなかった。岩手県内では北上市堰向Ⅱ遺跡、西川目遺跡、高木中館遺跡などでイネにムギ類やキビなどの雑穀を随伴する出土傾向にあるが、本遺跡ではイネのほかに穀類を出土しなかった。イネとシソ属は食用として利用していたと考えられるが、ほかのマメ科3種は種子が大変小さいため食用としていたとは考えにくい。燃料材を運び込む際に付着して持ち込まれたか、火付け材として利用していた残渣とも考えられる。

関東周辺では弥生時代後期頃になるまでイネ以外の雑穀は出土せず、ほとんど利用されていなかったと推測され、平安時代にはイネからムギなどの雑穀類への依存度が高くなる傾向にある(櫛原1999)。しかしながら青森では港湾都市など特殊な集落ではイネのほかにコムギを少し出土してはいるが、アワなどの雑穀が出土しない例もあり、かならずしも雑穀への依存度が高くなっていない地域も存在している（吉川2005）。

第２表　飯岡沢田遺跡第10次調査出土炭化種実

分類群名	番号 地点 部位＼層位	RA023 カマド 焼土	RA024 カマド入り口 焼土	RA025 カマド 焼土	RA026 カマド 焼土	RZ044 To-a付近 焼土	RZ044 カマド 3層焼土	RD065 カマド 焼土
イネ	炭化胚乳		1	1	2			
ツルマメ近似種	炭化種子			1				
ヤブツルアズキ近似種	炭化種子							1
ハギ属	炭化種子				3			
エノキグサ	炭化種子	1	48	2				
シソ属	炭化果実			1				
穀類炭化塊							2	
不明					1		1	

出土分類群の形態記載

イネ(Oryza sativa L.)：炭化胚乳を2粒出土し、いずれもやや焼け膨れていて、頴の痕跡が確認できない。1粒は5㎜近い長さで大変大きく、厚さもあり、東北地方の古代のイネとしてはかなり大きい方ではないかと考えられる。長さは長いが、長さと幅の比率は1.7程度なので短粒系であり、種子の中でも成長の良好な個体が出土したと考えられる。

ツルマメ近似種(Glycine cf.max(L.)Merr.ssp.soja(Sieb. et Zucc.)Ohashi)：炭化種子を出土した。種子はほぼ球形でへそは楕円形でへそ上下に突起などはない。3.2 という種子径からダイズ属の野生種と考えられるが他種との区別は難しい。

ヤブツルアズキ近似種(Vigna cf.angularis var.nipponensis Ohwi)：炭化種子は楕円形で径2.3㎜、へそは中央よりやや偏ってつき、へそ上部に突起が見られるためササゲ属の野生種と同定した。ヤブツルアズキの仲間は互いに交雑種を作りやすく、区別が難しい。

ハギ属(Lespedeza)：炭化種子は扁平な楕円形でへそ上下に明らかな突起がある。このような形態を持つのはハギ属であるが、種の区別は難しい。

エノキグサ(Acalypha australis L.)：炭化した種子を出土した。

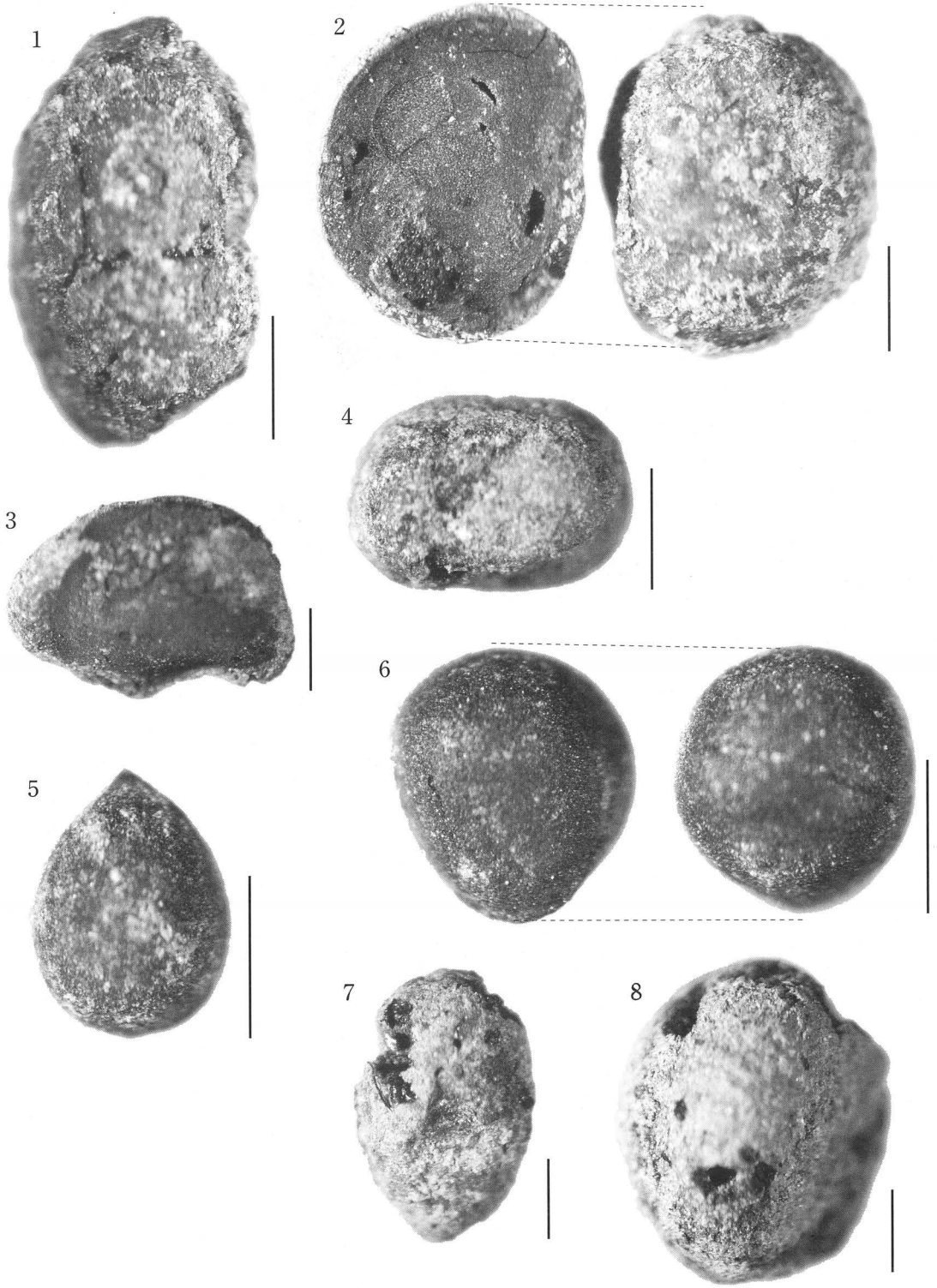
シソ属(Perilla)：炭化果実はほぼ球形で基部が少し突出し、1.5㎜ほどでシソあるいはエゴマと考えられる。不明瞭であるが果実表面に薄い網目が確認できるが、焼けており詳細な観察はできないため、シソ属にとどめた。シソ、エゴマいずれの場合も栽培種で、本遺跡内で利用していたと考えられる。

不明(Unknown)：2種類出土した。小さい不明種は中央に溝のようなものが認められる。大きい不明種は不明瞭であるが一方に稜がある3面形のようである。いずれも内部は炭化した際に発泡しており、わずかながらも脂肪分を含む子葉と考えられる。

引用文献

櫛原功一　1999　「炭化種実から探る食生活」－古代～中世を中心に－　食の復元－遺跡遺物から何を読みとるか．研究集会報告集2,帝京大学山梨文化財研究所．p.81-98

吉川純子　2005　第3節　十三湊遺跡より出土した炭化種実について．十三湊遺跡,青森県埋蔵文化財調査報告書　第398集．青森県教育委員会．p.206-208



第84図　飯岡沢田遺跡より出土した炭化種実

1:イネ、炭化胚乳、RA024カマド入り口焼土．2:ツルマメ近似種、炭化種子、RA025カマド焼土．3:ハギ属、炭化種子、RA026カマド焼土．4:ヤブツルアズキ近似種、炭化種子、RD065焼土．5:エノキグサ、炭化種子、RA025カマド焼土．6:シソ属、炭化果実、RZ044-3層焼土．7,8:不明、RZ044-3層焼土

（スケールは１㎜）

2　出土骨鑑定

はじめに

飯岡沢田遺跡は、岩手県盛岡市飯岡新田に所在し、雫石川右岸の河岸段丘上に位置する。本遺跡では、カマド等を伴う奈良時代の住居跡、7世紀末から9世紀初め頃の古墳、古代の溝跡、江戸時代の掘立柱建物跡などが確認されている。

このうち、奈良時代の住居跡内のカマドからは、骨片が出土した。そこで、動物種を明らかにするため、カマド内から出土した骨同定を実施した。

(1) 試料

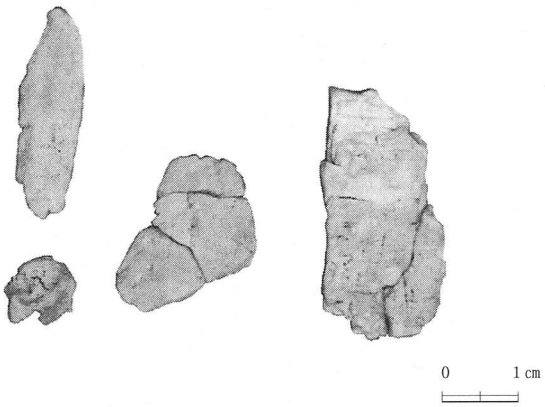
試料は、RA025カマド燃焼部から出土した骨片である。2-3cm程度の骨片が数点、それよりも細かく形状をとどめていない骨片が認められる。いずれも白色を呈しており、大きな破片の表面には細かなひび割れが生じるなど、焼骨の特徴がみられる。

(2) 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。なお、同定および解析には、金子浩昌先生の協力を得た。

(3) 結果および考察

試料は、強く被熱した獣骨である。破損した扁平な骨片で、重なる被熱で骨の原形を保っていない。骨表面に凹凸ができ、亀裂と剥離が見られるのはその痕跡と思われる。これらの骨片は、一部骨片が接合できることから、埋存時1片ないし2片の骨片であったと考えられる。1点ほど骨の原形を保つ破片が認められた。形態からみるとニホンジカ等の脛骨片の可能性があるが、破損した一部であったため、詳細な種類や部位を確認することができない。



第85図　RA025竪穴住居跡カマド燃焼部出土焼骨

以上のことから、カマド内より出土した焼骨片は、大型獣骨が破損した骨の可能性がある。したがって、当時は、大型獣などを食糧資源として利用していたことが推測される。東北地方では、縄文時代頃から、ニホンジカやイノシシが利用されている(例えば、西本,1993,1995;宮古市教育委員会,1995)。おそらく本遺跡の周辺でも、住居が構築された奈良時代頃、これらの大型獣が狩猟されていたと思われる。

引用文献

西本　豊弘　1993　「動物遺体について」『御所野遺跡　縄文時代中期の大集落跡』一戸町文化財調査報告書第32集　一戸町教育委員会

西本　豊弘　1995　「大日向Ⅱ遺跡出土の獣骨鑑定」国道395号改良工事関連遺跡発掘調査『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第2次～第5次調査－第1分冊』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

宮古市教育委員会　1995　『崎山貝塚－範囲確認調査報告書－』宮古市埋蔵文化財調査報告書44

V　考古学分析

1　弥生時代の遺物について

（1）旧河道出土の弥生土器について

ここでは、旧河道より出土した弥生土器・石器について簡単な検討を行っておく。

旧河道２層からは25.7kgの弥生土器が出土している。これは該期の土器としては周辺でもあまり例のない程まとまった出土量となっている。この土器については前章までに触れてきたが、再度その特徴をまとめると以下のようになる。

第一に器形では、完形に復元できる個体が少なく全体像は不明であるが、壺や蓋といった特徴のあるものが認められる点があげられる。第二に文様の多くは沈線による構成をとることにあり、ほとんどが１本使用の工具による沈線となっている点である。また、その施文方法によって描かれる文様には、①変形工字文、②菱形文、③方形文、④弧線文、⑤竹管などによる刺突文があげられる。①には単節のＲＬ縄文がともなうこと、沈線の幅が広いことなどから、宇鉄Ⅱ式など北方系の土器型式との関係が深いと考えられる。②は沈線による菱形区画内に縄文を充填させるものが多い。また、壺類の頸部にはこの菱形の文様を取り入れるものが多い。なお、本来三角文や山形文に別分類されるものもここではこの文様に一括している。③・④は細片が多く文様構成が復元できるものが少ない。とくに④は波状文になるものなど複数の文様に細分される可能性もあるが文様全体が判断できないため一括している。刺突文には竹管状工具によるものと、棒状工具によるものの2種類が観察できる。ただし、これらは点数が少ないため詳細は不明である。

地文をみると、単節のＬＲ縄文とＲＬ縄文がともに認められるが、ＬＲ縄文の方が多い傾向にある。また、附加条縄文も一定量確認できる点が特徴の一つといえる。

このような文様の特徴をまとめると、大きく地文がＲＬ縄文とＬＲ縄文とに2分されることがわかる。このうち沈線の幅が比較的広いものと地文がＲＬ縄文のもの、①の変形工字文は対応関係にある。したがって、おもにＲＬ縄文を地文とする土器群は、上述の文様の特徴ともあわせて宇鉄Ⅱ式あるいはその並行土器型式に比定でき、時期的には中期中葉に位置づけられよう。また地文がＬＲ縄文のものと頸部に菱形文様が多用される土器には対応関係あり、さらに②・③・④の文様をもつものの多くと対応する。このうち頸部に菱形文が施されるという点を重視するとこれらの土器群は宇津ノ台式に比定できる。

後者の土器群は、水沢市・橋本遺跡出土土器と文様の種類、器形の点で類似点が多い。とくに無文の粗製甕類の存在などには類似点が多く注目される。この宇津ノ台式（あるいは並行土器型式）に比定できる一群は量的にも多く、旧河道出土土器の中心となるものであり、いわゆる天王山式以前に位置づけられる土器群のひとつといえよう。

以上の点から旧河道出土の弥生土器は、破片資料が中心であるものの、弥生時代中期中葉から後葉の時期（とくに後葉）にかけての土器群であると判断できる。したがって岩手県内では数少ない時期の土器となる。また、秋田県を中心とした日本海側に広がる宇津ノ台式土器が盛岡市付近で発見される点は当時の交流を考える上では貴重な発見となろう。

（2）旧河川出土の石器について

旧河道から132点の石器が出土している。主に2層から見つかっており、弥生土器とは共伴関係にあるものと考える。若干の考察を行う。

旧河道から出土したトゥール類30点の内訳は、石鏃14点、石錐5点、削器7点、両極石器4点である。器種構成はややバラエティーに乏しく、石鏃が出土点数の約半数を占めるという特徴がみられる。これに石核5点や剥片97点を加えたのが第3表である。圧倒的に剥片が多くなり、また、石核もトゥール類とほぼ同じ点数見つかっていることがうかがえる。旧河道の埋土中から集中的に剥片や石核が出土する点は周辺で石器製作を行い、その際残った剥片や石核を旧河道に廃棄していた可能性が考えられる。

さて、各石器に使われる石材について概観してみる。トゥールに使用されている石材は全て奥羽山脈産の頁岩であることが判明している。さらに本遺跡から出土する頁岩の色調はをおもな基準として母岩分類を行ったのが以下である。

頁岩①：黒色（7.5Y 2/1）を呈するもの

頁岩②：黒色（2.5Y 2/1）を呈するもの。①よりやや赤味を帯びている。

頁岩③：黒褐色（2.5Y 3/1）を呈するもの。

頁岩④：黄灰色（2.5Y 4/1）を呈するもの。

頁岩⑤：灰色（5Y 4/1）を呈するもの。

頁岩⑥：灰色（5Y 5/1）を呈するもの。⑤よりも明るく、白味を帯びている。

頁岩⑦：暗灰黄色（2.5Y 5/2）を呈するもの。

頁岩⑧：褐灰色（10YR 4/1）を呈するもの。

頁岩⑨：灰白色（2.5Y 8/2）を呈するもの。

これらの分類はあくまで肉眼観察であり、さらに細分できる可能性が高い。

観察の結果、石鏃は頁岩①・②・⑨が各4点で、②が2点である。石錐は頁岩⑥が2点で、②・③・⑤が1点ずつある。削器は頁岩⑤がやや多い3点で、②・③・⑥・⑧が1点ずつある。両極石器は②が3点で多く、③が1点であった。出土量が少なく断言はできないが、各トゥール類で選択される母岩には偏りがあるように見受けられる。とくに頁岩②や③の黒～黒褐色系の石材は各石器で確認できるが④・⑦は今回見つかったトゥール類では確認されていない。またトゥール類以外をみてみると、石核は④・⑤が2点ずつ、②が1点あり、トゥール類にはみられなかった④が確認されている。剥片97点は各分類のものがみつかっている。

剥片について、各母岩を重量で比較すると（第4表）、①～③といったトゥール類でよくみられる母岩が多い点が見受けられる。したがって、石器製作の際、排出した剥片類が旧河道内に廃棄された可能性が考えられよう。また、④は今回みつかったトゥール類では使用されていない石材であるが、重量比では最も大きな割合を占める。今回見つかっていないだけで、石器製作には普遍的に利用される石材であるか、あるいは今回は見つからなかった特定の器種によく利用される石材である可能性などが考えられる。

以上、頁岩の分類からみた母岩の選択について、簡単ではあるが概観してみた。当然、石器を作る際、色調のみで石材を選択しているわけではないであろうが、少なくとも何らかの意図が働き、同じ頁岩でも特定のものを好んで選んでいる傾向があるのかもしれない。

また剥片97点（1359.5g）については、その石器製作過程を検討するため、背面と打面の状況によ

る分類である加藤学の方法を用い（加藤1996）観察を試みている。

A類：背面のすべてが自然面（剥離なし）のもの、B類：背面の一部が自然面（一部剥離）のもの C類：背面に自然面なし（すべて剥離面）である。これに打面の調整回数（０類が剥離なし、１類が剥離１回、２類が２回以上）を組み合わせて分類している。

なお、剥離作業などにより打面が欠損しているもの20点（799.２ｇ）は分類不明とし、上記より除外している。

これら分類ごとの重量について、第５表に示した。

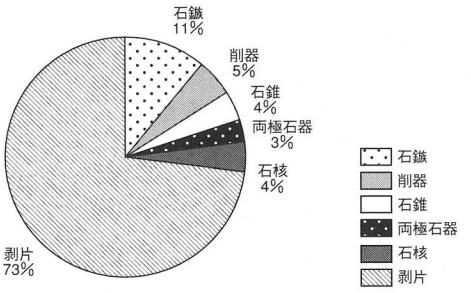
各分類の重量について比較してみると、背面の観察（A～Cの分類）ではＢ類が最も高く、Ｃ類がそれに次ぐ。Ａ類は圧倒的に少なく、全体の５％にすぎない。打面の調整回数（1～3の分類）では２類が最も多い。2つの観察項目の組み合わせでは、最も比率の多いのはB2類で、全体の33%を占める。

Ａ類は背面がすべて自然面となる剥片類であり、石器製作過程においては初期の段階に排出されるものと推定できる。また、Ｃ類はＣ１類を除き、打面にも背面にも自然面の残らない、比較的、石器製作過程が進んだ段階で排出される剥片であると推定できる。そして、その中間に相当するのがＢ類ということになる。したがって、仮に旧河道付近で石器製作が行われていたとして、それが製作初期の段階から行われたのではなく、ある程度進んだ段階から行われたと考えられ、製作初期の段階は別の場所で行うか、あるいは石材産地付近である程度荒割りをした状態でもちこまれた可能性がある。

（川又）

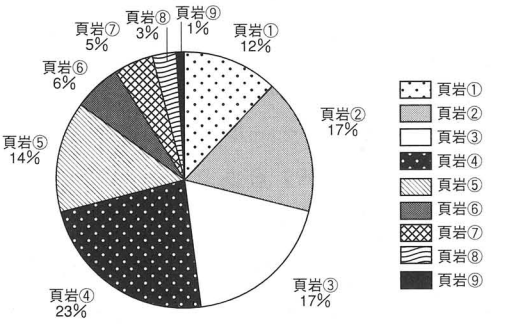
第３表　旧河道出土石器の内訳

石　鏃	14
削　器	7
石　錐	5
両極石器	4
石　核	5
剥　片	97



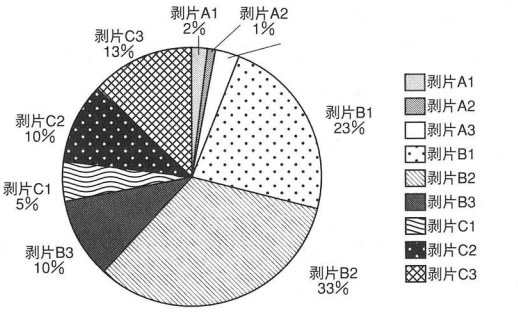
第４表　母岩別重量

石材	総重量
頁岩①	264.2
頁岩②	369.3
頁岩③	382.8
頁岩④	489.3
頁岩⑤	299.4
頁岩⑥	133.5
頁岩⑦	114.6
頁岩⑧	59.9
頁岩⑨	1.1



第５表　剥片の分類

種　別	重量（ｇ）
剥片A1	32.8
剥片A2	9.7
剥片A3	40.7
剥片B1	357.2
剥片B2	503.6
剥片B3	151.7
剥片C1	75.9
剥片C2	154.4
剥片C3	206.8
剥片不明	754.6
総　計	2512.0



2　竪穴住居跡出土の土師器について

前章までに報告したように今回出土した土師器は量的にも少ないが、いわゆる関東系土師器を模倣したと考えられる坏の出土もあり、今後重要な資料となる可能性がある。そのため、ここでは、とくにロクロ土師器導入以前の土器について、過去の調査分も含めてその年代的な位置づけを中心に若干の検討を加える。

A　分類

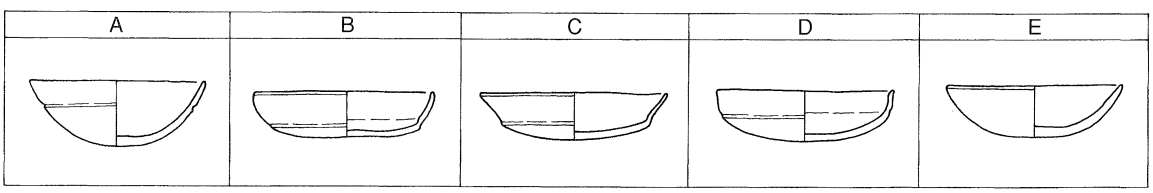
これまでこの地域での土器編年はその大略が発表されているに過ぎず（遠藤・相原1983、八木1992など)、かならずしもその変遷が明らかにされたわけではない。近年では本遺跡も含めて該期の遺跡の調査が増加し資料も蓄積されつつあり、新たな編年案が模索されている状況である。そのため、今回出土土器をこれまでの編年に対応させることには躊躇せざるを得ず、便宜的な位置づけを試みるにとどめたい。その作業として、分類を行い組成をみた後に、周辺での類似例との比較によっておおよその年代を決めていくことにする。なお、分析する資料は前回の調査分や野古A遺跡出土土器を含めて検討している。

坏はまず以下のように３大別５細分する（第86図)。これらは従来単系的に考えられているが、ここでは別系列と考えてもそれぞれが独立して組列をなすことが予想されるためあえて別と考えることにした。この大形式としたものはおもに成形の段階で意識される属性を指標として分類したものである。つぎにおもに口縁部の形態によって細分する。このレベルはおもに調整の段階で意識される属性であると思われる。これらを小形式とする。この段階でそれぞれA～E類と呼称する。このうちE類については数が少なくさらに細分される可能性があるがここでは大まかにひとつの類としてまとめておく。

Ⅰ群（有稜坏）外面の口縁部と体部との間に明瞭な段差がないか沈線上のくぼみや、稜線が認められるもの。・・・A類

Ⅱ群（有段坏）外面の口縁部と体部との間に段差があるもの。口縁部の形状により４つに細分される。
口縁部が内湾するもの（B類）
口縁部が外傾・外反するもの（C類）
口縁部が直口するもの（D類）

Ⅲ群（無段坏）外面の口縁部と体部との間に段がないもの（E類)。体部の形状が内湾傾向のものと直線的に開くものなどがあるが例数が少ないのでここでは細分を行わない。



第86図　坏の分類

飯岡沢田遺跡出土資料のうち、Ⅱ群の有段坏については変化の方向を理解し易いため、この類に限定してその変化の方向を考えよう。Ⅱ群については口縁部形態の違いをもって細分したわけであるが、これらは「段」をもつという共通性がある。この「段」という属性はこれまでの研究から段の退化という方向で変化していくと考えられている。具体的には内面の段の消失過程と外面の段の省略化ということになる。これらは成形時における作業の簡略化と言い換えることができる。変化を示す属性としては他にもあり、口径が18cmを超える大型のものから15～16cmのものに変わるというものである(宇部2002)。

以上のような特徴をまとめると、内外に段差をもち、口径の大きなもの（１段階）から口径が小さくなる段階をへて（２段階)、内面の段差が消失する（３段階）という流れになる。２段階は過渡的なもので、内外面に段差が残りつつも口径の大きなものと小さなものが混在するものである。なお、内面の段差消失と口径の縮小とが対応するかは検証を行っていないため、内面の段差がなく、口径が大きい（もしくは内外面に段差があり、口径が縮小する）という段階が間に想定されるかもしれない。

このうち、今回の出土土器をみると、１段階は存在せずおおむね２・３段階に相当すると考えられる。

坏類の調整をみると、Ａ類は１・２段階においても全面にミガキ調整が施される。これらは馬淵川流域遺跡の出土例との類似性が認められる。

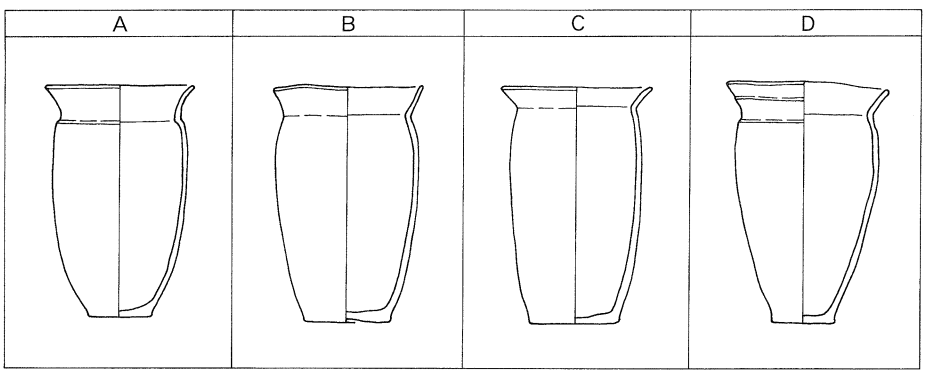
坏Ｂ類では全面にミガキがはいるものが多いが、Ｃ類には体部にはケズリが施されるものが多い。これらは２段階になるとハケメ(1) に変わり、ケズリやミガキの数が極端に少なくなる傾向がある。口縁部が外傾し、体部下半がケズリ調整されるもの（Ｃ類）は宮城県北部から岩手県中部（水沢市付近）の坏と特徴が類似していることから、これらの地域と関係が深い類型といえる。

次に甕形土器（以下甕とする）の分類を行う。甕の大形式は機能の差が考えられるため、法量で、小型、中（大）型に２大別されるが、このうち小型甕は多様なものがあるため今回は除外する。中型甕は全容を知り得る個体が少ないため口縁部の形態によって４つに細分する（第87図)。今回は大まかな分類にとどめるが、さらには口縁端部、体部、底部の形状などによって細分される。

Ａ類　頸部がやや長く、口縁部がゆるやかに外反するもの。

Ｂ類　頸部がなく、口縁部が外反するもの。

Ｃ類　口縁部が短く、強く鋭く外反し、頸部がないもの。



第87図　甕の分類

第６表　組成表

		坏								甕						その他		
	住居名	A２	B２	C２	D２	A３	B３	C３	D３	E	A	B	C	D	E	球胴	高坏	甑
1期	S002	2								1	1			1				
	S015	1			1													
	N050			1								1	1					
	N053				1						2		1	1				
	N035		1							1						○		
	S019			1														
	S004	1		1		1					2						○	
	N047	1	3	3		4		2		2	2			4	2	○	○	○
	S022	1																
	S025	1		1		1					1							
	N032			2		1				1						○		
2期	N046					1				1	1			1				
	N036					1				2					1			
	N026									1					3			
	S006					1			1		1					○		
	S007					3	1		2									
	S008						1					2			1	○		
	S010						1	3				1	1			○		
	S013					3	2					1	1		1		○	○
	N048					2						5				○	○	
	N015						1								1			
	N044							1										
	N014						1				2	3						
	N038					1	1	1							1	○	○	
	S028							1							1			

＊N：野古Ａ、S：飯岡沢田、数字は住居番号

Ｄ類　口縁部が２段に外反し、口縁部に稜線が入るもの。受け口状のものも含む。

甕の変化は従来から言及されてきたように体部形態が脹らむものから縮小し、長胴化するという大きな流れがあると考えられる。またそれに加えて新器種の追加や消失といった特徴もある。今回の出土例をみると長胴化するものが多く、胴が張るものや下膨れのものが極めて少ない。そのため、甕のみでは大きな変化の方向を捉えがたいので、ある程度のまとまりとしてここでは捉えておく。

また、外面調整をみると縦位のハケメが圧倒的に多い。ハケメのあとにヘラミガキを施したものもあるが、これは極めて少ない。調整についてもあまり差異を見出せない。

次に分類ごとの同時性をみていくため飯岡沢田遺跡、野古Ａ遺跡の各遺構出土土器の組成をみたのが第６表である。

これをみると、まず坏全体ではＡ～Ｃ類がそれぞれ主体的に出土しており、そのうち量的にはＡとＢ類でその大半を占める。Ｄ・Ｅ類はその出土量は少なく主体的とは言えない。坏類のなかで口径が18cmを超えるような大型の坏類の出土は非常に少ない（１段階が存在しない）。２段階と３段階の坏は共伴する例が認められるものの、２段階から３段階へ変化するという仮定とは矛盾しない。坏類の組成を基にして、２段階が主体で３段階のものが共伴する時期を１期、３段階のもののみの時期を２期とする。高坏は１・２期ともにそれぞれ付随する傾向がある。

甕類ではいずれの類においても各住居跡から共伴するため、あまり明確に組成の特徴を見いだすことができない。そのなかでもＡ類が組成の主体となっていることは判断できよう。各分類の出土量による差は認められないが、Ｄ類はその出土する遺構は限定されるようである。時期的な差か否かは不明であるが、出土の特徴となる。

このように、組成をみるとそれぞれの遺構に極端な差が認められないことから時期的に近接したも

のであると考えられる。これは各遺構とも重複がなく立地（空間配置）にも矛盾がないことからも裏づけられるかもしれない。

B　周辺の遺跡と比較と年代

本遺跡においては、坏A・B類に口径が17～8cmを超える大型の坏がないこと、2段階のものが少なく、3段階のものが多いことが時期的な特徴を示すと考えられる。このような特徴を示す土器群を隣接遺跡に探すと野古A遺跡、台太郎遺跡出土例の一部などがある。野古A遺跡はこれまで調査された遺構をみると組成の状況が本遺跡と類似点が多い。これら遺跡で年代を決定する資料はほとんどないが、近年、湖西窯産須恵器や、いわゆる「関東系土師器」との供伴が確認されてきた。非常に限られた資料ではあるが時期を決定する重要な資料であるためここでその供伴資料と比較しよう。

いわゆる「関東系土師器」が出土しているのは台太郎遺跡RA180・235・580である。坏B類との供伴は、RA580ではB1類（口径が17cm）、RA235ではA・E類、RA180ではA類であり、B類との供伴例が少ない。RA580の場合7世紀第3四半期とされる「関東系土師器」との供伴からこれをこの時期と仮定すると、沢田のB2・B3類は1段階～2段階後出すると考えられる。湖西窯産須恵器を出土したRA507では有段坏である坏B～D類が供伴していないため時期が決めがたい(2)。ただし、A類の様相をみると1・2段階のものがあるため、RA580と同じ時期で捉えても良かろう。したがって、飯岡沢田遺跡出土土器（1・2期）は、7世紀中葉以降の年代が与えられる。

一方で、馬淵川流域をみると、酒美平遺跡ではII群土器が「2・3段階」に対応すると考えられ、この時期は7世紀後葉～8世紀前葉の時期が想定されている。盲堤沢（3）遺跡でも同様である。ちなみに2段階を7世紀中葉～後葉と想定されている。

これらを総合すると、2～3段階のうち、3段階が主体となる飯岡沢田遺跡出土坏類（1・2期）の年代は上記の例に対比させるならば、7世紀でも後ろから8世紀に一部入る時期、つまり7世紀後葉～8世紀前葉の時間幅で捉えることができよう。

RA023からは「関東系土師器」を模倣したと考えられる坏が出土している（第14図）。胎土、調整技法、発色は在地である。関東系土師器の出土はこれまで7世紀中葉以降に限られるため、模倣という点を考慮して1段階後出して考えると、7世紀後葉以降となり、上述の検討と矛盾しない。

甕はこの限られた時期内では変化が乏しいが、胴部の脹らみが少なく、ハケメ調整のものが大半を占める状況はこれらの時期と対応すると考えられる。

C　まとめ

以上周辺の遺跡と比較しつつ飯岡沢田遺跡出土土器のうち、坏を中心に年代を想定してきた。時間幅が少ないため前後関係から明確な時期を想定しにくいこともあるが、おおよその時期に限定できたと思われる。これらの年代は、隣接する台太郎遺跡の初期段階よりは後出するものであり、周辺において集落が広がり始めた段階に相当すると思われる。集落ごとに時期関係を明らかにすることによってその消長関係や同時性など明らかになる点が多い。今後はこれらの点に留意して、さらなる土器編年の整備に向けて検討を重ねなければならない。

［注］

（1）ここではハケメとするが，これは通常甕などに施されるハケとは異なり幅が広く，ミガキで使用する工具を束ねた様な痕跡を残す調整痕である。古川市教育委員会高橋氏や矢本教育委員会佐藤氏のご教示による。なお，今回の出土土器についてはこの両氏から多大なご教示を賜っている。

（2）この報告ではこの時期を8世紀前半としている。これは須恵器の時期がこれまでこの地域の土師器年代観とずれがあり，土師器の方にしたがって年代を決定したためである。現在はこれを訂正して考えたほうが良いと考えている。

3　飯岡沢田遺跡のいわゆる「古墳」について

（1）は　じ　め　に

飯岡沢田遺跡は今回の調査で10次目となるが、これまでに墓制に関連する遺構が数多く発見されている。なかでも周溝をめぐらす7世紀から9世紀にかけての墳墓遺構は、「末期古墳」・「終末期古墳」、または「円形周溝」ともよばれ、この地域では数少ない墳墓の集積地となっている。

ここでは飯岡沢田遺跡から発見された「墳墓遺構群」のうち、これらいわゆる「古墳」[1]と呼ばれる遺構を中心にその内容を簡単に触れておきたい。

（2）立 地 と 範 囲

検出された「墳墓遺構群」は北西～南東方向に流れる2条の旧河道付近の幅約70～100mの範囲内に密集しており、重複例も見受けられる。住居跡との重複例はないが近接している例は存在する。調査区境の状況から考えるとさらに南北方向に広がっていることが推定される。このような状況から「墳墓遺構群」はある程度限定された範囲内に造営されたことがわかる。

検出面の多くが地山であるため、遺構の大半が削平されていることが考えられ、本来の地形の状況は不明である。現状でみたかぎりでは旧河道にはさまれた微高地上から斜面にかけての位置に立地しているものが多い。

（3）遺構の一覧と構造

これまでに発見されたものを大別すると以下のようになる。

周溝をもつ	主体部あり（深い位置にある）	5
	主体部なし（浅い位置にある）	84
周溝をもたない	主体部のみ	41

このうち問題となるのは周溝をもつ遺構のうち主体部の有無である。もともと無い可能性も考えられるが、この種の遺構を墳墓とする場合、なんらかの施設があるはずであるため、本来は存在したが後世に削平されたと考えるべきであろう。

検出段階によるこのような差は、何に起因するのであろうか。これまで地山面に達するくらい主体部を掘り込んでから墳丘を構築するものと墳丘盛土内に主体部を構築するものとの違いとされており、これは相対的な主体部の位置の差（または墳丘の高さの差）に起因すると考えられる（高橋1996，小谷地2005など）。

また、単に削平の進行度が異なるため主体部の有無の差が現れてくるとも考えられる。RZ036のように、主体部がかろうじて残存していた例もある。前者の場合、構築方法の差は葬送儀礼の差にも関係するため重要な点となるが、地山面がどの程度削平されているか判明しない以上、主体部の相対的な位置は不明といわざるを得ない。近年、青森県阿光防古墳群から、墳丘築造後に主体部が構築される例が発見されているという（小谷地2005）。今後の調査の進展により明らかにされていくと思われる。

周溝の構造

周溝は開口部のあるものとないものに2大別できる。このうち後者の開口する数については１箇所である場合がほとんどである。開口部が１箇所以上あるものも存在するが削平度による差も考えられるためここでは触れないでおく。開口位置は主軸の判明するものについては主軸方向にあるものが多いが、それ以外のものもある。周溝平面形は円形や楕円形を基調とするものがほとんどであるが、方形を基調とするものも存在する（RZ003・039など）。周溝断面形は逆台形状を呈するものが多く、これは底面が比較的平坦であることをあらわす。貼床状に粘土を充填される例が多いからであり、意識して底面が成形されていると考えられる。堆積土には十和田ａテフラと考えられる火山灰が堆積している例が多く確認できる。いずれも上位層からであり、直接遺構の時期を判断するものではないが、下限を示す重要な証拠 となる[2]。

内部主体の構造

周溝をもつ遺構で内部主体が残存するものが5例確認できる（RZ027・028・036）。すべていわゆる「土壙型」（八木1996）の主体部が確認されている。棺を使用した痕跡は、鉄釘が出土しないことと合わせてこれまでのところ確認できないが、他遺跡の類例などからおそらくこの種の掘りかたは木棺直葬であると推定される。こういった主体部は、平面形が長方形状を呈するものが多く、長さは1.6～2.8ｍ、幅は0.5～1.6ｍの間におさまる。この長さであれば木棺が存在しても矛盾はない。深さは確認面から40㎝程度であり、削平されているため全容は不明である。床面に貼り床が施されているものが多くほぼ平坦な状態である。主軸方向はすべて38°から56°程度西に傾く。例数がすくないが、そのうち40°前後と50°前後西に傾くものとに大別できるかもしれない。

主体部内の土層堆積状況をみると、ほぼ水平に堆積している主体部もあるが、自然堆積を示すと思われるいわゆるレンズ状の堆積を示すものも存在する。また、上面には十和田ａテフラのブロックを包含するものもある。堆積土は黒色から黒褐色を呈するものがほとんどであるため層序の把握が困難と思われることや多くが削平されていることからから判断が難しいものの主体部のうちすくなくとも上層部は自然堆積であることがわかる。埋葬施設の場合このような堆積はにわかに考えがたいが堆積状況の1例としてあげておく。

周溝の底面レベルと主体部の底面レベルの関係を比較すると、飯岡沢田遺跡例だけを見る限りにおいて、多様である。主体部が周溝より深いものもあるが（RZ009･025）、周溝の方が深いもの（RZ036）も確認できるのである。前者においてもそれぞれの差は大きなものではない。

土壙墓の構造

これまでの調査では70例が土壙墓の可能性があるとして認定されている（半澤2003）。今回では、RZ044付近にあり、ある程度の大きさを有し、断面形が箱形を呈するもの14基を墓壙ではないかと考えている。したがって合計84例がその可能性があるとして確認することができる。

これらの土壙墓は周溝をもたずに単独に構築されているものである。これらの平面形は長方形を基調とする形状を呈するものが多く、長楕円形を呈するものがそれに続く。長さは小さいもので１ｍ以下のものがあるが、多くは1.6～2.5ｍの間におさまり、上記の主体部と類似した規模である。土層の堆積状況は多くが削平されており判断がつかないが、最下層の土層の入り方を見ると人為堆積のものが多く観察できる。なかには上位層に十和田ａテフラをブロック状に混入しているものなど「古墳」主体部と類似している。

長軸方向は多くは西に傾くものが多い。詳細にみるといくつかのまとまりに大別できそうである。とくに40°と50°前後に傾くものがもっとも多い傾向にある。これは上記の主体部と対応する軸方向

である。さらに、南北や東西方向に軸を向けるもの、70°前後に軸を向けるものなど主体部の軸方向よりも多様である。

この軸方向のある程度の一致を考えるとこれらの土壙墓群も周溝をもつ墳墓群と同様の背景に造営されていると考えてもよかろう。

土壙墓と考えられているものには、このほか周溝内に存在するものや側壁抉込土坑と呼ばれるものが含まれている。周溝内に存在するものは以前に触れられているように追葬の可能性が考えられる（半澤2003）。

周溝内における土坑（RD027・RD054・RD056）については明確に墓壙とする根拠に乏しいが、その平面形・堆積土の状況など、RD027から出土した底部穿孔の須恵器長頸瓶は副葬品と考えられることと合わせて埋葬施設であると考えられる。

側壁抉込墓と考えられるものは1例（RD009）のみが確認できる。平面形は不整形な楕円形を呈しており、短辺側の壁に堀込みをもつ。この堀込み内からは鉄釘が出土しており木棺の存在が予想される。近年宮城県内でも検出例が増えているがこれも墓壙の一つとして考えられており、関東との関わりが想定されている（佐久間2005）。いわゆる「末期古墳」との関わりでみると青森県丹後平古墳群からも発見されている遺構である（宇部則保ほか1991）。

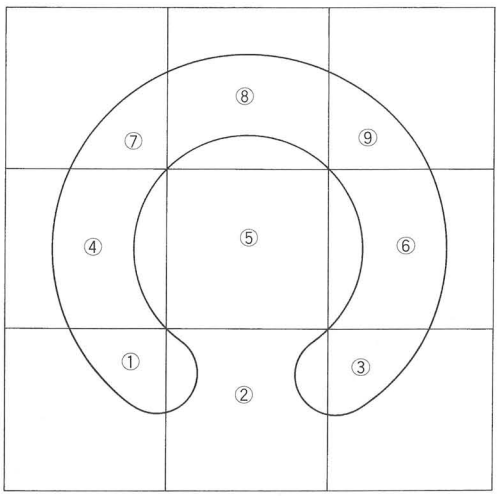
（4）時　　期

これらの遺構の築造時期は、飯岡沢田遺跡においては直接年代を決定する根拠が非常に少なく、明確に時期を付与できたものはない。そのようななかで出土遺物や重複例からある程度限定してみることにする。第７表は出土遺物一覧である。

第７表　出土遺物一覧表

遺構名（ＲＺ）	出土施設	出土位置	遺物内容
００３	周溝	③	ロクロ坏2
００５	周溝	③	非ロクロ坏1、土製品
００６	周溝	?	土師器甕1・ロクロ坏1、須恵器甕1
００７	周溝	?	土師器甕
００８	周溝	?	土師器甕1
００９	主体部	-	鉄刀片、刀装具
０１１	周溝	?	土師器甕1
０１４	周溝	?	ロクロ坏1
０１５	周溝	④⑥	ロクロ坏1・高台坏1、須恵短頸壺1
０１８	周溝	?	ロクロ坏1・土師器甕1
０２４	周溝	?	ロクロ坏1、須恵器大甕1・長頸瓶1
０２５	主体部	―	上層：ロクロ坏1、下層：刀子片
０２６	周溝	①④⑥	ロクロ坏4、須恵器長頸瓶2・大甕1
０２７	周溝	?	ロクロ坏1、須恵器坏1
０２８	周溝	①	須恵器長頸瓶1
	主体部	―	上層：須恵器坏1
０２９	周溝	?	ロクロ坏1、須恵器坏1
０３０	周溝	⑥	土師器甕1、鉄鎌1
０３３	周溝	?	ロクロ坏１
０３４	周溝	①④⑥	ロクロ坏４、須恵器坏１・長頸瓶４
０３６	周溝	④⑧	ロクロ坏１、須恵器甕１・大甕１、長頸瓶１
０３７	周溝	④⑥	ロクロ坏1、須恵器坏蓋1、刀子片、火葬骨
０３８	周溝	④⑥	須恵器長頸瓶1・甕1・坏1
０３９	周溝	?	ロクロ坏1
０４２	周溝	?	須恵器坏1
０４４	周溝	③	薬壺1

この表をみると、この種の遺構ではとくに周溝からの出土が大半を占めることがわかる。主体部内でとくに埋葬に直接かかわる（底面近く）遺物としては鉄刀片・刀装具などの鉄製品のみであり、土器が副葬されている痕跡はない。主体部の検出例の低さもあるが土器の多くは周溝から出土である。ここで問題となるのはその出土層位である。多くの遺物は堆積土上位から出土している[3]。したがって、十和田ａテフラの堆積状況と同様に直接築造時期を決定する根拠とはならず、下限を示すものとして考えるべきであろう。平面的な出土位置をみると（第88図参照）、とくに①・③や④・⑥の位置すなわち開口部の両脇や両側面からの出土が多いことがわかる。RZ034出土の長頸瓶やRZ044薬壺のように明器と考えられる遺物や出土位置がある程度限定されることは、これらの場所で祭祀行為が行われていた可能性を示す。ただ先にも触れたが出土層位が高いことは築造時期からある程度年代が降った時期にそれが行われていたかもしれない。したがって、周溝出土遺物からはその利用時期の下限のみが判断できるのである。



第88図　遺物の出土位置

次にこれらの遺構の重複例をみてみよう。これまでの調査では８例が確認できる。このうち「古墳」どうしの重複例が４例であり、その他は溝跡や土坑と重複するのみであり、竪穴住居跡と直接重複する例は認めることができない。このことは先に触れた築造範囲とともに何らかの規制の存在が確認できる。重複関係によってある程度時期が限定できるのはら竪穴住居跡とRG008を介して重複するRZ048のみである。RA016・022・026・028竪穴住居跡は7世紀後葉から8世紀前葉の間の時期と捉えているが、RZ048とRG008は重複関係からそれ以前となる。したがって、RZ048の築造時期は少なくとも8世紀前半以前ということになろう。1例からではあるがこの主体部が削平されている「古墳」の築造時期は8世紀前葉以前と考えることができるかもしれない。今回の調査ではRZ048の周溝からは9世紀以降の須恵器のみが出土しており、重複がなければこれを下限とする時期になる可能性がある。たんに周溝からの出土遺物をもって（層位を考慮せずに）年代を決定することは非常に困難であるといえる。

上記のように飯岡沢田遺跡の「古墳」の築造年代は決定することが困難である。しかし，利用時期については十和田ａテフラや周溝内出土土器からおおまかに9世紀代[4]を下限と捉えることができ、さらに少なくとも一部には8世紀前半を下限とする頃に築造時期が限定されるものが存在することがわかる。

第８表　重複例

No.	重複例	新旧関係
1	RZ036とRZ037	?
2	RZ026とRZ027・RG002・RZ006・RZ023・RD034・RZ029	RZ026が新
3	RZ033とRZ034	?
4	RZ010とRZ018・017・009・008・012	RZ010が新
5	RZ039とRZ038・RZ042	RZ038が新
6	RZ048とRG008・RA028・RA022・RA026・RA014	RZ042が古
7	RG001とRZ004・RZ007・RA002	RA002・RZ004が新
8	RZ030とRG005・RD055	RZ030・RA055が新

（5）ま　と　め

以上、飯岡沢田遺跡から検出された「古墳」について構造・出土遺物など簡単に触れてきた。ここで再度触れつつまとめとしたい。

飯岡沢田遺跡内においては今回おもに取り上げた「古墳」以外にも様々な墳墓関連遺構が造られているが、その造営範囲は限定されており、他遺構と重複する例はあまりない。とくに竪穴住居跡と重複する例は皆無であることは、この範囲が「墓域」として広く認識されていたからかもしれない。このような「墓域」は集落の営みが開始される7世紀末頃には存在していた可能性があり、12世紀のかわらけが出土したRZ010方形周溝が築かれる時期まで、断絶があるかもしれないが、一貫して意識されていたと思われる。

「古墳」については簡単にその構造について触れたが、とくに主体部の構造については不明の点を残すこととなった。今回の「古墳」は八木のいう土壙型（八木1996）の範疇に含まれるものであるが，木棺の痕跡や頭位の推定も困難である。主体部の相対的な位置（高さ）についても不明のままとなっている。ここでは他遺跡との比較を行わなかったが，いずれ検討していく必要があろう。

このように明らかとなった事実は少ないが，この遺跡が墓域として長期間存在していることを確認できたことは大きな成果のひとつとなる。さらに特筆すべきことはこれらに火葬墓が内包することである。畿内をはじめとして列島各地の終末期古墳群からは終末期の群集墳とともに火葬墓が内包される例が多々ある。個々の「古墳」の構造は異なるもののその群としての構造には類似点も多くあると思われる。この点は「古墳」築造の契機について重要な示唆を与えてくれるかもしれない。

今後の問題点としては先に触れたようにまず名称の問題がある。これまで「末期古墳」、「終末期古墳」、「円形周溝」などと呼ばれてきた。そしてこれらが示す内容には微妙な違いが存在している。また，内部主体に石室を有するものとの関係まで含めるとさらに不明確になる。これはこれまでこの種の遺構について明確に定義づけがなされていないためであり、一種の混乱状態にもあるともいえる。近年、藤沢敦はこれらをあらたに定義づけようと試みている（藤沢2004･2005）。このように，名称の問題は個々の「古墳」のみならずその背景にまで関連してくるものであり，この地域の社会全体を見通した上で解決しなければならない問題であるといえる。また逆にいえば，「古墳」の研究にはそのような社会全体をも定義づけることができる重要な遺構であるといえる。

この問題を解決するのは簡単ではないが、正しい情報をもたらす正確な調査と各遺構・遺物などの個別の研究，より高位の理論的な枠組みの研究とが相俟って発展していく必要がある。

［注］

(1) 名称については様々な見解があり統一はない。一般的には主体部のあるものを「古墳」、ないものを「円形周溝」とする場合が多いが、主体部が削平されたものも想定できるためこの分類法は適当ではない。また、円形周溝という名称自体この種の遺構を指す名称としては適当ではない。それは、この遺構は、周溝が主になるのではなく、周溝に囲まれた内部に主体がある可能性を考えるからである。さらに、あきらかに平安期に存続する円形にまわる周溝を狭義の「円形周溝」と呼ぶ場合がある。ここではとくに名称について定義をせず、いわゆる「末期古墳」や「円形周溝」をも含めてひろく「古墳」と便宜的に呼称する。いずれ構造や時期によって区分できるならば名称も当然区別すべきである。

(2) これらの火山灰がすべて1次堆積と判断されたものはなく、多くは2次堆積と考えられる。とはいえ年代的に大きな開きがあるとは考えにくく、この層は降下時期に近接した時期が想定される。

(3) 本遺跡の第３次・５次の発掘調査報告書（半澤2003）では土器の出土層位の具体的な記述がないが、写真図版を観察すると土器の多くは浮いている状態である。そのため出土遺物の多くは堆積土上位から出土していると考えられる。

(4) 周溝内出土遺物には8世紀にまでさかのぼる可能性があるものも含まれるが（薬壺など）、下限を重視しておおまかに9世紀代としておく。

Ⅵ 総　　括

1 概　　要

本遺跡は、過去の調査成果から、古代の集落と大規模な墓域とが混在する遺跡であることが判明していた。したがって今回の調査でも集落と墓域がどのように広がっているのかを確認することが大きな調査目的であった。そして今回の調査で、古代に関する遺構では、いわゆる「古墳」2基、竪穴住居跡10棟、竪穴状遺構1棟、土坑65基、溝6条を確認した。またその他に、近世の建物跡6棟・弥生時代の土器や石器を内包する旧河道を検出し、古代のみならず長きに渡る人々の生活の痕跡を見つけることができた。

2 古 代 以 前

〈弥生時代〉

旧河道の埋土中から弥生時代中期中葉から後葉にかけての土器、石器が出土した。旧河道という遺構の性格から考えて、厳密な意味での一括資料とは言い難く、また破片資料が多いものの該期の土器がまとまって出土した事例は盛岡市内でも類例が少なく、特にその内容は宇鉄Ⅱ式（並行期）や日本海側を中心に広がる宇津ノ台式に相当し、盛岡市域における該期の土器様相を知る上で、貴重な資料となりうる。また、石器も土器と出土層位、地点が同じであり、弥生時代中期の遺物として認定できうるものである。出土石器は、トゥール類の他に、剥片や石核が多量に出土しており、旧河道周辺で石器製作が行われていた可能性も考えられる。ただし、本遺跡からは弥生時代の遺構は見つかっておらず、旧河道に遺物を廃棄した集団の生活拠点は別の場所に存在するものと考えられる。例えば稲荷遺跡や本宮熊堂A遺跡では該期の土器が見つかっており、それほど遠くない隣接地のいずこかに存在したとも考えられる。

ここで、旧河道について若干触れておきたい。

過去の調査成果では、過去の調査区との隣接部分から2条の旧河道が今回の調査区の東西両端に続くものと推定されていた。それらは調査の遺構検出段階で確認しており、まずトレンチをいれ、埋土の様相や遺物の有無を確認した。その結果、弥生時代の遺物が出土した調査区東端のものは、埋土の様相（明瞭な立ち上がり、水性の土壌、褐鉄鉱の沈着など）からも、旧河道と認知出来うるものであったのに対し、調査区西端のものは、埋土は暗褐色を呈するシルト質土の単層で、遺物を含まず、また、立ち上がりも不明瞭で旧河道と認知する要素に欠けていた。恐らく、後者は古代以前の浅い窪地状の地形に序々に暗褐色土が堆積していったものにすぎず、いわゆる河川や沢として機能していたものではないと考えられる。堆積した暗褐色土も遺構埋土ではなく、所謂「地山土」として認知するものである。平成16年度の調査では本遺跡の他に、向中館跡や本宮熊堂A遺跡において、古代の旧河道が見つかっている。いずれも埋土は、水気を帯びた粘土を主体とし、細砂を主体とするラミナ層が混ざる。また酸化した鉄分である「褐鉄鉱」の堆積がみられるなどの特徴がある。以上のような埋土様相を示すのであれば旧河道と認知出来うる。また、このような旧河道には遺物が含まれやすく、注意を要することが今回の調査からもうかがい知れる。

3 古　　代

〈古墳〉

「古墳」を２基確認した。そのうち１基は第３次調査で確認されたRZ044の未調査分で、今回新しく見つかったのはRZ048の１基である。

本遺跡における古代の墓域は、第３次調査区で確認されている。また試掘調査の結果から墓域はさらに南へとのびることも判明している。それに対し、第３次調査区の東側に隣接する第５次調査区からは「古墳」は確認されず、墓域は東へは広がっていなかった。

今回の調査区は第３次調査区の東南側に位置し、墓域からはやや東へと外れている。従って、今回の調査において、新たな「古墳」が１基しか検出しなかった事によって、墓域の広がりは東南方向にものびていない事が分かった。

墓域が東側に広がらない理由は第５次調査の報文中でも述べられているように、地形と関係がある。墓域は標高が周辺と比べ、やや高い、微高地上に形成されている。今回の調査区もRZ044が見つかった場所は墓域の東端に相当し、墓域以外は１～1.5m低い。ただし、今回見つかったRZ048は墓域からやや外れた一段低い、奈良時代の竪穴住居跡が密集した地点に立地している。RZ048は第３次調査で見つかったものと比べて規模や形態に大差はなく、なぜ１基だけ低い位置を選んで構築されたのか不明である。共伴遺物は、ほとんどが埋土上位から出土しており、厳密には時期決定の資料と成り得ない。従って、推定の域を脱しないが、現状では８世紀ごろの所産と考えられる。

〈竪穴住居跡〉

検出した10棟のうち、7棟が奈良時代、3棟が平安時代に比定される。

まず奈良時代の竪穴住居跡についてであるが、平面規模は一辺３～４ｍが大半を占め、最小で2.4×2.6m（RA024）、最大では6.4×5.6m（RA025）であった。カマドの位置は、全て北西壁の中央部に付設されている。本遺跡の第３・５次調査でも、一辺３～４ｍの住居跡が最も多く、またカマドの位置はやはり全て北西壁の中央部であったことから、今回検出した住居群は本遺跡において、突出したものではないと言える。住居跡の位置は調査区北西側の墓域より一段低い、浅い窪地状を呈する地形に重複することなく、南北方向に並ぶように立地している。出土遺物の検討から、７棟には時期幅があまり見られないものの、溝跡との重複関係から７棟全てが同時期存在していた訳ではないことが分かった。

平安時代の竪穴住居跡は３棟確認した。うち１棟は第５次調査で未調査であったRA020の一部であり、もう１棟は撹乱により激しく壊されている。したがって全容の分かる住居跡はRA029１棟のみであった。規模は3.9×3.4mで、本遺跡にみられる平安期の住居跡と比較して、最も平均的な規模の住居跡であると言える。カマドは北西壁の中央部に付設する。この位置にカマドがつく平安期の住居跡は、本遺跡においては初出であった。平安時代の竪穴住居跡は調査区の東側からみつかっており、奈良期の住居跡に比べ、各住居跡がやや分散して立地している。ただし、隣接する第３・５次調査区でも平安時代の住居跡が近い場所から見つかっており、合わせて本遺跡における平安期の住居エリアととらえることができるかも知れない。

平安時代の遺構としては、他に竪穴状遺構を１棟確認した。同じ平安時代の竪穴住居跡であるRA029と重複し、床面上からは土師器坏が多く散在した状態で見つかっている。土師器出土量は竪穴住居跡よりも多く、特に完形個体が多い。カマドはなく、また床面も硬くしまっていないので、人が

住むための施設とは考えにくく、むしろ土器などを収納、あるは廃棄する施設であったと考えられる。隣接するRD153からも土師器坏が多量に出土している。こちらは撹乱にほとんど壊されており、遺構の形状が分からなく、土坑と判断したが竪穴状遺構と同様の機能を有する遺構の可能性がある。

〈土坑〉

土坑は、調査区北西端と調査区北側中央部から集中的に見つかっている。遺物を伴うものが少なく、埋土の様相にも明確な特徴がないため、時期性格ともに、不明といわざるを得ないものが多い。ただし、調査区北西端は「古墳」が立地する墓域に相当し、この場所で確認された土坑群は、墓に関わる機能、用途（墓壙）が考えられよう。特にRD091と092、RD097と102、RD104と106は、長軸方向が同じで並行しており、また長軸方向の両端がやや深く掘りくぼめられている点で共通する。何らかの意図があって、二基一対で構築されたと考えられる。

4　近　　世

〈掘立柱建物跡〉

6棟の掘立柱建物跡が確認された。出土遺物などから、いずれも近世の建物跡であろうと思われる。遺構は調査区東側の微高地上に立地する。ちょうど、本遺跡でみつかった奈良時代の住居群と平安時代の住居群との間に位置し、このエリアが近世の生活領域であったことがうかがえる。ただし、各建物跡の分布や長軸方向に規則性はなく、同一集団によって建てられたものであるかは不明である。

建物跡の規模はRB003・004が大きく、両方とも三間六間で下屋が付属する、居住用の建物であったことがうかがえる。この両建物跡は柱間の長さも同じで、同時期の建物の可能性が高いが、ただし、RB004はRB006と重複しており、RB004の方が新しい。二間三間のRB006は位置関係から、（物置小屋のような）付属施設である可能性が高く、そうすれば、RB003とRB004は同時存在ではないものと思われ、重複関係などを考慮すれば、RB004はRB003の建て替えととらえられそうである。

（須原）

引用・参考文献

石川日出志2001「弥生後期湯舟沢式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号

伊東信雄1974「第4章　弥生時代」『水沢市史』１原始－古代　水沢市

宇部則保ほか1991『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集

宇部則保2002「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀を祝う会

遠藤勝博・相原康二1983「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢Ⅰ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

大野　亨ほか2001『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第88集

大野　亨2002『盲堤沢(3)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第92集

小田野哲憲1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第5号

加藤学1996「C　石器」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集

小谷地肇2005「「末期古墳」の展開」『前方後円墳以後と古墳の終末』第10回東北・関東前方後円墳研究会　発表要旨資料

坂川　進・渡　則子2002『丹後平古墳群』八戸市埋蔵文化財調査報告書第93集

佐久間光平2005「古代の「側壁抉込土坑」について」『宮城考古学』第7号

佐藤敏幸ほか2001『赤井遺跡Ⅰ－牡鹿柵・郡家推定地－』矢本町文化財調査報告書第14集

佐藤嘉広・伊藤博幸1992「岩手県水沢市橋本遺跡出土土器について」『岩手県立博物館研究報告』第10号

佐藤嘉広ほか1995「岩手県水沢市橋本遺跡出土資料について（補遺）」『岩手県立博物館研究報告』第13号

須藤　隆1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』33-3

須藤　隆1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56-2

高橋信雄1987「岩手県における末期古墳群の再検討」『北奥古代文化』18

高橋信雄1996「蝦夷文化の諸相」『古代蝦夷の世界と交流　古代王権と交流１』名著出版

玉川英喜1990「岩手県内の円形周溝と方形周溝」『紀要』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

西澤正晴・小針大志2005『西川目・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集

半澤武彦2003『飯岡沢田遺跡第3次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第418集

藤沢　敦2004「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」『古墳の政治構造』青木書店

藤沢　敦2005「「末期古墳」と倭の「古墳」」『古代閉伊地方の末期古墳と鉄生産－房の沢古墳と古代鉄生産遺跡－資料集』岩手県考古学会

盛岡市教育委員会　2000『盛岡遺跡地図（2000年版）』

八木光則1992「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会　資料集』

八木光則1998「陸奥における土師器の地域性」『岩手考古学』第10号

八木光則1996「東北北部の終末期古墳群」『岩手考古学』第8号

第９表　古代土器観察表

挿図No.	遺物No.	出土遺構	層位	種別	器種	色調	焼成	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様・調整等 外面	内面	底部	胎土	備考
1	29	RA020	床直	土師器	坏	淡橙	良	13.5	5.0	6.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		28と重なって出土（下）
2	31	RA020	埋土、カマド	土師器	坏	浅黄橙	甘い	(15.0)	4.7	(5.8)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。小赤スコを含む。	
3	30	RA020	P1、3G13x焼土付近	土師器	坏	橙	良	13.9	6.5	4.7	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。	うるし？付着
4	28	RA020	床直	土師器	坏	橙	良	14.0	4.8	5.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	29と重なって出土(上)	
5	32	RA020	P2	土師器	坏	淡黄橙	軟	―	(3.6)	4.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。赤スコ・小砂粒含む。	
6	317	RA020	床直、土坑上部	土師器	坏	にぶい黄橙	良	(12.3)	(4.4)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	緻密	外面にスス付着
7	55	RA020	カマド袖、カマド埋土	土師器	甕	明赤褐	良	(19.8)	(11.3)	―	口：ナデ／体：ケズリ	ヘラナデ	―	密。砂粒（φ1mm）、極小白色粒子・赤スコを含む。	
8	2	RA022	床面	土師器	坏	橙	良	(13.8)	5.4	―	ヘラミガキ	ヘラミガキ	―		内黒
9	1	RA022	カマド内	土師器	甕	にぶい橙	良	(12.7)	10.8	7.4	口：ヨコナデ／体：マメツ（ハケメ）	口：ヨコナデ→ハケメ／体：粗なハケメ	ハケメ	肩部に粘土紐	
11	87	RA023	火山灰層下	土師器	坏	にぶい黄橙	良	(11.8)	(3.2)	―	口：ヨコナデ／体：マメツ（ミガキ）	ミガキ	―	密。	内黒
12	3	RA023	床直・火山灰層・カマド周辺	土師器	鉢	淡橙	やや良	―	(14.4)	8.2	マメツ	マメツ（ヘラナデ）	マメツ（ナデ？）		
14	4	RA024	P2	土師器	甕	赤褐(内面は暗赤褐)	良	(18.0)	(10.1)	―	口：ヨコナデ／体：ナデ基本（ヨコハケ→ナデ）	口：ヨコナデ／体：ナデケズリ	―		
15	13a	RA025	カマド床直、カマド北袖	土師器	坏	にぶい黄褐	良	(18.0)	4.0	―	口：ヨコナデ／体：ハケメ	ミガキ（ややマメツ）	―	やや粗。砂粒少量。	内黒。井桁状のミガキか？
16	14	RA025	P5・カマド北袖	土師器	坏	明黄褐	良	(16.5)	4.7	―	口：ヨコナデ／体：ヘラナデ（ハケメ）	ミガキ（口：横位／体：タテ）	―	比較的細かい砂粒少々入る	内黒
17	7	RA025	P1・床直	土師器	皿	にぶい黄褐	良	17.1	4.2	―	口：ヨコナデ（タテハケ→ヨコナデ）／体：ハケメ	ヨコミガキ	ハケメ		内黒
18	5	RA025	P3	土師器	甕	にぶい褐	良	(17.7)	(16.5)	―	口：タテハケ→ヨコナデ／体：斜位ヨコハケ	口：ヨコナデ／体：ヨコハケ	―		
19	6	RA025	床直・埋土	土師器	甕	にぶい橙	良	16.0	21.2	6.8	口：ハケメ→ヨコナデ／体：タテハケ	口：ハケメ→ヨコナデ	ナデ	やや粗。赤スコ・φ2～3mmの砂粒含む。	非ロクロ。内面に粘土紐痕。
20	8	RA025	P4・燃焼部（埋土、カマド支脚脇、カマド南脇、貯蔵穴RA028 4・5層、カマド5層、西側旧河道検出面）	土師器	鉢	にぶい黄橙	良	―	(30.3)	(7.7)	口：ヨコナデ／体：タテハケ	口：ヨコナデ／体：ヨコハケ	ナデ		
21	9	RA026	火山灰層上、RG015埋土、3F20r付近	土師器	坏	橙	良	12.6	(4.2)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	砂粒多いが緻密。	

挿図No.	遺物No.	出土遺構	層位	種別	器種	色調	焼成	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様・調整等 外面	内面	底部	胎土	備考
22	10	RA026	火山灰層上・下	土師器	坏	にぶい橙	良	(12.2)	(6.5)	—	口：ヨコナデ／体：ヘラナデ	ヨコミガキ	—	やや粗。赤色等の砂粒含む。	内黒
23	86	RA026	火山灰層上・下	土師器	坏	明黄褐	良	—	(4.8)	4.0	上：ヨコナデ／下：ミガキ（マメツ）	ミガキ	—	密。砂粒（φ1mm以下）を少量含む。	内黒
24	17	RA028	埋土	土師器	坏	暗褐	良	(17.6)	4.2	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	やや粗。砂粒含む。	内黒（外面似る）
25	11	RA028	床直・P8・埋土、RA029床直	土師器	鉢	にぶい橙	良	(16.3)	(8.5)	—	上：ヨコミガキ（太い）／下：斜位ミガキ（太い）	ヨコヘラナデ（ハケ）	—	粗く、砂粒多い。	
26	12	RA028	床直P1～4・P6・埋土、3F16pⅡ層、3F20pⅡ層	土師器	甕	橙	良	(20.7)	30.7	(8.4)	口：ヨコナデ／体：タテミガキ	口：ヨコナデ／体：ヘラナデ	—		ヘラナデはやや幅の狭い工具(0.9cm幅)
29	15a	RA029	カマド袖・煙道	土師器	坏	黒褐色	良	(15.6)	4.8	(6.2)	回転ナデ→ヨコミガキ（マメツ多い）	マメツ	底部再調整？ヘラケズリ	緻密。砂粒ほとんどなし。	内・外面黒色処理
30	20	RA029	燃焼部・煙道	土師器	坏	にぶい黄橙	良	(15.4)	4.5	(6.4)	回転ナデ	マメツ（ミガキ）	ヘラケズリ再調整	密。金雲母	内黒
31	24	RA029	P6	土師器	坏	にぶい褐	良	(15.4)	4.3	(5.6)	マメツ（ヨコミガキ）	ミガキ（マメツ）	ミガキ	やや粗。金雲母入る。	黒色処理見えない。剥落か？
32	16	RA029	埋土	土師器	坏	にぶい黄褐	良	—	(2.6)	(6.5)	回転ナデ	ミガキ	糸切り	やや密。砂粒含む。	内黒
33	23	RA029	燃焼部、煙道、P1・4	土師器	坏	にぶい橙	やや軟	13.8	5.1	5.3	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密	スス付着
34	26	RA029	埋土、P6、RE006床直	土師器	坏	橙	やや軟	(15.0)	5.4	6.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	密だが砂粒多い。赤スコ有。	
35	25	RA029	カマド周辺、カマド袖上、北側検出面、埋土	須恵器	坏	明褐灰	やや軟	14.5	5.1	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		
36	22	RA029	埋土、燃焼部、P3・5・14	土師器	坏	淡橙	甘く、軟質	15.0	6.2	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密。砂粒やや多い。長石含む。	内面にオコゲ
37	18	RA029	床下土坑	土師器	坏	にぶい橙	やや軟で甘い	(15.0)	5.0	(6.4)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。砂粒ほとんどなし。	
38	19	RA029	床下土坑	土師器	小甕	淡橙	やや軟	—	(5.0)	(6.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	緻密。赤色砂粒・雲母含む。	
39	21	RA029	P9・12・13貼床面、埋土	土師器	高台坏	橙	やや軟	17.0	6.1	7.9	回転ナデ	回転ナデ	ナデ（わずかに手切りの痕跡）	緻密。Φ3mmの大きめの砂粒少量含む。基本的には微小砂粒。	
40	27	RA029	埋土	土師器	甕	にぶい赤褐		—	(7.5)	(9.8)	ヘラケズリ	マメツ	木葉痕	やや粗く、砂粒多い。金雲母含む。	
41	313	RA029	P2	土師器	甕	橙	良	(13.2)	(6.7)	—	口：ヨコナデ	マメツ	—	やや粗。砂粒（φ2～3mm）多く含む。	内面にスス、外面にコゲ付着。
42	44	RE006	P2	土師器	坏	赤褐	良	13.5	5.0	4.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	やや粗。Φ2～3mmの砂・赤スコ・金雲母含む。	墨書
43	47	RE006	P4、埋土、RD153埋土	土師器	坏	にぶい黄橙	良	14.2	5.3	5.4	回転ナデ	回転ナデ	糸切りスノコ痕？	密。極小白色粒子を含む。	
44	46	RE006	P5、埋土	土師器	坏	淡黄橙	良	(14.5)	4.9	4.9	回転ナデ	回転ナデ		密。1mm前後の砂粒、1mm以下の白・黒・赤粒子を含む。	

挿図No.	遺物No.	出土遺構	層位	種別	器種	色調	焼成	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様・調整等 外面	内面	底部	胎土	備考
45	42	RE006	埋土、床直、貼床	土師器	坏	にぶい黄褐	良	14.4	6.2	(6.1)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密。砂粒多い。	
46	43	RE006	P1	土師器	坏	にぶい褐	良	15.0	4.8	5.8	回転ナデ	太いミガキ	糸切り	緻密。1mm以下の白・黒粒子を含む。	内黒
47	45	RE006	P3	土師器	坏	淡橙	やや良	―	(2.9)	5.1	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密。Φ1mm以下の赤・白粒子、金雲母片を含む。	
48	48	RE006	P6	土師器	坏	にぶい橙	良。2次焼成を受けている。	14.6	5.5	6.1	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密。Φ1mm以下の砂粒を含む。	外面にスス付着。
55	323	RB006	埋土	土師器	坏	橙	良	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	―	密。赤色砂粒(φ2mm位)を含む。	
60	319	RD097	埋土	土師器	鉢	明赤褐	良	―	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	―	やや粗。砂粒(φ1mm以下)多い。	
61	320	RD108	埋土	土師器	坏	黄橙	やや軟	―	―	―	マメツ	マメツ	―	密。砂粒(φ1～2mm)含む。	
62	321	RD121	埋土	土師器	坏	橙	良	―	―	―	回転ナデ	回転ナデ	―		
64	337	RD132	床直	土師器	ナベ(鉢)	淡橙	良	―	―	―	口：回転ナデ／体：ヘラケズリ	口：回転ナデ／体：ハケメ?ヘラナデ	―	やや粗。砂粒(φ1～2mm)の砂粒含む。	
65	322	RD134	埋土	土師器	坏	橙	良	(14.2)	(4.8)	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密	
66	324	RD144	埋土	土師器	坏	にぶい橙	ややムラあり	(14.2)	(4.9)	(6.9)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密	外面にスス、内面にコゲあり。
67	34	RD153	P4	土師器	坏	にぶい褐	良	13.9	4.5	5.1	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。極小赤スコ・白色砂粒を含む。	
68	38	RD153 RE006	埋土	土師器	坏	黄褐	良	(14.2)	4.5	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。極小赤スコ・白色砂粒を含む。	
69	41	RD153	5層、カクラン	土師器	坏	にぶい橙	良	13.5	4.7	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り→ナデ	やや粗。砂粒・金雲母含む。	
70	40	RD153	埋土、カクラン	土師器	坏	にぶい褐	良	(13.8)	5.1	5.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。極小白色砂粒・金雲母含む。	
71	37	RD153	5層、埋土	土師器	坏	黒褐色	良	(14.8)	5.6	6.0	ヨコミガキ(マメツ)／下：ヘラケズリ	ミガキ(マメツ)	ヘラの再調整。切り離しは不明。	緻密。極小長石等を含む。	両黒。外面に刻書。
72	36	RD153	3層、底面付近、P3	土師器	坏	にぶい褐	良	(14.2)	5.2	5.6	回転ナデ	放射状十横位ミガキ(マメツ)	糸切り	緻密	内黒。うるし・スス付着。
73	33	RD153	P1	土師器	坏	にぶい褐	良	13.5	4.4	5.3	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	やや粗。砂粒多い。金雲母含む。	
74	35	RD153	1層	土師器	坏	淡橙	良	13.5	4.6	5.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。赤スコ・砂粒多い。	
75	39	RD153	3層、カクラン内	土師器	坏	にぶい黄褐	良	14.2	5.1	5.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	やや粗。砂粒・金雲母片含む。	
76	335	RD153	カクラン	土師器	坏	にぶい黄橙	良	(14.4)	(4.0)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	密	
77	331	RD153	カクラン	土師器	甕	橙	良	―	(1.7)	(9.2)	ヘラナデ		砂底	やや粗。砂粒(φ1mm)多く含む。	「砂底」土器

挿図No.	遺物No.	出土遺構	層位	種別	器種	色調	焼成	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様・調整等 外面	内面	底部	胎土	備考
78	340	RD153		土師器	坏	黄橙	良	(14.8)	(3.8)	―	回転ナデ	ミガキヨコ→タテ	―	緻密。粒子(φ1mm以下)を含む。	内黒。口縁にスス・コゲ付着。
79	328	RD153	カクラン	土師器	ナベ	浅黄橙	良	(37.3)	(8.8)	―	口：回転ナデ／体へラケズリ	口：回転ナデ／体：ヘラナデ	―	やや粗。砂粒(φ1mm前後)多い。	
82	49	RG016	埋土上位	土師器	坏	淡橙	良	(14.6)	4.4	5.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	白色砂粒、φ2mm程度の砂を少量含む。	
83	363	RG016		土師器	壺	黄橙	やや軟	(6.0)	(4.6)	―	マメツ	マメツ	―		
84	341	RG016	埋土、3G15m II 層	土師器	鉢	浅黄橙	良	(21.4)	(6.1)	―	口：ヨコナデ／体：ハケメ	口：ヨコナデ／体：ヨコハケ	―	やや粗。砂粒(φ2～3mm)を含む。	
85	343	RG017		土師器	甕	にぶい橙	良	―	(2.5)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	密。砂粒(φ1mm以下)の砂粒多い。	
87	344	RZ044	埋土上位	土師器	坏	橙	良	(14.2)	(4.3)	―	口：ミガキ／体：回転ナデ	ミガキ	―	密。粒子(φ1mm以下)、砂粒(φ2mm前後)少量を含む。	内黒
88	50	RZ044	Ⅰb層、埋山土上位、火灰層上	土師器	坏	にぶい赤褐	良	(14.2)	5.0	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	―	緻密。砂粒少ない。	
89	54a	RZ044	To-a層	土師器	甕	淡橙	やや良	(22.0)	(6.0)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	緻密。砂粒(φ2～3mm)を含む。	
90	189	RZ044	中位	須恵器	薬壺	灰	良	(7.7)	(6.3)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	緻密	
91	53a	RZ044	埋土、検出面、Ⅰa層、底面付近、火山灰層、3F16a、3F14x、カクラン	須恵器	甕		良	―	(42.4)	―	口縁に波状文／タタキ	コビナデ	―	緻密。白色砂含む。	ISD-01のNo.278・不掲載遺物2点と接合。
93	51	RZ048	埋土	須恵器	坏	灰白色	良	(14.4)	(7.4)	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密。白色砂粒(φ1mm以下)を多く含む。	
94	52	RZ048	埋土、3F14p・3F15k1～2層	須恵器	甕	褐灰	良	(22.0)	(41.2)	―	口：回転ナデ／体：平行タタキ(幅広)	口：回転ナデ／体：青海波文	―	緻密。砂粒(φ1mm)を少量含む。	
300	69	3H16～17b	3層	土師器	坏	にぶい褐	やや良	(14.2)	4.5	6.7	回転ナデ	ヨコミガキ(マメツ)	糸切り→ヘラケズリ再調整	緻密。白色粒子・赤スコ・金雲母を含む。	内黒
301	72	3H18b	2～3層	土師器	坏	浅黄橙	やや良	(13.4)	4.7	5.1	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	緻密。砂粒(φ1mm以下)を含む。	
302	73	3H16～17b	3層、3H18b 2～3層 旧河道検出面	土師器	坏	にぶい黄橙	良	(13.6)	5.1	4.9	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	密。砂粒(φ1mm以下)が多い。	
303	74	3H19b	2～3層	土師器	坏	橙	良	(13.2)	5.6	5.2	マメツ(回転ナデ)	回転ナデ	回転糸切り	緻密。白色粒子・砂粒(φ1mm以下)を含む。	
304	71	3H18b	2～3層	土師器	坏	淡橙	やや良	(15.0)	5.2	(5.8)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	緻密。Φ1mm以下の粒子を含む。雲母なし。	
305	75	3H19b	2～3層	土師器	坏	にぶい橙	良	(15.1)	4.2	6.5	回転ナデ	ヨコミガキ	回転糸切り	密。ふつうの雲母片含む。墨書。	
306	338	RD173	埋土	土師器	坏	橙	良	(12.7)	(3.5)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	緻密。赤色粒・砂粒(φ1mm以下)を含む。	
307	359	3H16～17b 3H19b	2～3層	土師器	坏	にぶい黄橙	良	―	(2.4)	6.2	回転ナデ	ミガキ	糸切り	緻密。砂粒少ない。	内黒

挿図No.	遺物No.	出土遺構	層位	種別	器種	色調	焼成	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	文様・調整等 外面	内面	底部	胎土	備考
308	70	3H16～17b	旧河道検出面	土師器	坏	橙	やや良	(17.6)	7.0	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	―	密。極小白色粒子を含む。	
309	354	3H18b	2～3層	土師器	甕	明黄褐	良	(21.7)	(11.1)	―	回転ナデ	回転ナデ	―	やや粗	やや粗。砂粒(φ1mm前後)を含む。
310	358	3H18b	2～3層	土師器	小型壺	にぶい橙	良	―	(3.9)	―	―	―	―	緻密	

第10表　陶磁器観察表

挿図番号	登録No.	出土地点	層位		器種	口径	器高	底径	産地	年代	備考
50	82	RB003	pit11	陶器	腰折碗	(9.1)	5.2	3.9	大堀相馬産		
51	83	RB003Pit5	埋土	陶器	擂鉢	―	―	―			
53	81	RB004	pit19	磁器	紅皿	4.7	1.4	1.6	産地不明		
56	85	RB006	pit19	青磁	碗	―	―	―			外側のみ青磁。内面に染付の圏線。
57	80	RB006	pit24	磁器	碗か?	―	(2.0)	4.0	肥前	19世紀?	
63	79	RD154	埋土	磁器	徳利	―	―	―	産地不明（切込か?）		
86	84	RG017		陶器	不明	―	―	―			

第11表　縄文・弥生土器観察表

挿図No.	登録No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	文様・特徴	備考
80	102	RD153	埋土	縄文	深鉢	胸部	外面：単節RL縄文・結節縄文	
95	68a	3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ＋突起，口縁部：ナデ／内面：ナデ	
96	76	3H18b	2～3層	弥生	鉢？	口縁～体部	端部：キザミ，口縁部：ナデ，体部：ナデ／内面：ナデ	
97	239	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁～体部	端部：キザミ，口縁部：ナデ，体部：ナデ／内面：ナデ	
98	179	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	体部：RL縄文	補修孔あり
99	178	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁～体部	口縁部：ナデ，体部：LR縄文	
100	144	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	肩部	外面：附加条／内面：ナデ	
101	62	3H16～17b	2～3層	弥生	甕	口縁～体部	端部：突起，キザミ口縁：ナデ，体部上半：撚糸／内面：ナデ	
102	134	トレンチ		弥生？	甕	頸～体部	外面：ナデ／内面：ナデ	
103	199	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	頸～体部	外面：ＬＲ縄文／内面：ナデ	
104	63	3H18b	2～3層	弥生	鉢	底部	外面：条痕／内面：ナデ，底面：タタキ	
105	67	3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁～体部	外面：LR／内面：LR	
106	242	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	外面：ナデ／内面：附加条	スス付着
107	65	3H16～17b	3層	弥生	壺	口縁～体部	口縁：ミガキ／体部：ミガキ	
108	78	旧河道	2～3層	弥生	壺	上位完形	口縁部：刻み／頸部：並行沈線／体部：ＬＲ縄文／口縁内面：ＬＲ縄文	
109	61	3H16～17b	3層	弥生	壺	頸部～体部	外面：弧状沈線，平行沈線／内面：ナデ	
110	64	3H16～17b	3層	弥生	壺	口縁～頸部	頸部：菱形文，ＬＲ縄文／端部：ＬＲ縄文	
111	180	旧河道3H16～17b	3層	弥生	口付鉢	口縁～体部	外面　口縁：突起　体部：RL，変型縄文，突起　内面：ナデ 口縁：沈線突起	
112	137	3G15C	1層	弥生	甕	―	外面：LR，沈線	
113	77	3H16～17b	3層	弥生	高杯？	脚部	不明	
114	234	旧河道3H16～17b	3層	弥生	土器片円甕	―	外面：RL，沈線	
115	240	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	内外面：ナデ	
116	181	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	口縁：小波状口縁，ナデ	
117	241	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	内外面：ナデ	
118	165	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	内外面：ナデ	
119	248	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	内外面：ナデ	

挿図No.	遺物No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	文様・特徴	備考
120	245	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺	口縁	端部：キザミ、口縁部：ナデ／内面：ナデ	
121	188	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ、ナデ	
122	132	調査区北側トレンチ		弥生？	甕	口縁	口縁：小波状、ヨコナデ	
123	150	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	頸部	内外面：ナデ	
124	272	旧河道3H19b	2～3層	弥生	甕	口縁	端部：折り返し、内外面：ナデ	
125	198	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	口縁：波状口縁、ヨコナデ	スス付着
126	243	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ、ナデ	
127	244	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ、ナデ	
128	195	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	口縁：小波状口縁、ヨコナデ	
129	109	RD132　埋土	埋土	弥生？	壺	口縁	内外面ナデ	
130	249	旧河道3H18b	2～3層	弥生	甕	口縁	端部：突起・キザミ、口縁：ナデ消し／内面：ナデ	
131	197	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：縄文、口縁：ＬＲ／内面：縄文（剥離）	
132	155	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：突起、口縁：附加条／内面：ナデ	
133	138	3G18r　Ⅰ層	Ⅰ	弥生？	甕	口縁	外面：ＬＲ縄文／内面：ナデ	
134	187	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ、口縁：ＬＲ縄文、内面：ナデ	
135	133	調査区北側トレンチ		弥生？	長頸甕	口縁	口縁：ＲＬ縄文、頸部：ナデ／内面：ナデ	
136	182	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	外面：ナデ消し／内面：ナデ	
137	191	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：撚糸、口縁：撚糸、内面：一部に撚糸	
138	273	旧河道3H19b	2～3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ、外面：ナデ／内面：ＬＲ縄文	
139	173	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	口縁：ナデ消し／内面：ＬＲ縄文	
140	192	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：キザミ、外面：ＬＲ縄文＋ナデ消し／内面：ＬＲ縄文	
141	251	旧河道3H18b	2～3層	弥生	長頸甕	口縁	口縁：ナデ／頸部：ＬＲ縄文／内面：ナデ	
142	250	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺	口縁	外面：隆帯、ミガキ／内面：ナデ	
143	157	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口頸	端部：縄文／頸部：弧状沈線文／ナデ	
144	184	旧河道3H16～17b	3層	弥生	甕	口縁	端部：突起／口縁部：弧状沈線、撚糸／内面：ナデ	
145	193	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	端部：刻み／口縁：弧状沈線／内面：ナデ	
146	139	3G24r　Ⅰ～Ⅱ層	Ⅰ～Ⅱ	弥生？	？	口縁	口縁：波状沈線文、直線文／内面：ナデ	
147	194	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	口縁：波状沈線文／内面：ナデ	
148	151	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	口縁：山形文（鋸歯状文）／内面：ナデ	
149	160	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	口縁：山形文（鋸歯状文）：内面／ナデ	
150	141	旧河道　埋土	埋土	弥生	長頸甕	口頸	口縁：山形文（波状文））／内面：ナデ	
151	247	旧河道3H18b	2～3層	弥生	長頸甕	口頸	口頸部：重菱形文／内面：ナデ	
152	175	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	端部：刻み／口縁：平行沈線、山形文	
153	183	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	端部：刻み／口縁：平行沈線／内面：ナデ	
154	153	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	外面：弧状沈線／内面：ナデ	
155	169	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	口縁部	端部：キザミ、口縁部：ナデ、頸部：１条の沈線／内面：ナデ	
156	185	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	口縁部	口縁：ナデ、頸部：３条の沈線／内面：ナデ	
157	186	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	口縁	端部：キザミ、ＲＬ縄文、口縁：ナデ、頸部：３条以上の沈線／口縁内面：ＲＬ縄文	
158	196	旧河道3H16～17b	3層	弥生	？	口縁	外面：羽状刺突文、4条の沈線／内面：ナデ	
159	174	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁～体部	口頸部：刺突文、2条の沈線／体部：弧状沈線／内面：マメツ	
160	210	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	体部上位	外面：山形文（鋸歯状文）／内面：ナデ	
161	149	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	外面：山形文／内面：ナデ	
162	161	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	肩部	外面：2条の沈線、山形文／内面：マメツ	
163	170	旧河道3H16～17b	3層	弥生	？	肩部	外面：3条の沈線、山形文／内面：マメツ	
164	177	旧河道3H16～17b	3層	弥生	？	体部	外面：弧状沈線文／内面：マメツ	

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	文様・特徴	備考
165	159	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	頸部～肩部	頸部：平行沈線文／肩部：山形文／内面：ナデ	
166	152	旧河道3H16～17b	3層	弥生	鉢	口縁	外面：2条の沈線，山形文／内面：マメツ	
167	208	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	体部	外面：4条の沈線，山形文（2条）／内面：ナデ	
168	266	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺	体部	外面：2条以上の沈線，山形文（2条）／内面：マメツ	
169	206	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：1条以上の沈線，山形文（1条）／内面：マメツ	
170	232	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：山形文（2条）／内面：ナデ	
171	106	RD131		弥生？	壺／甕	体部	外面：山形文，3条の沈線，ＬＲ縄文／内面：ナデ	
172	227	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：弧状沈線，平行沈線／内面：ナデ	
173	207	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：竹管状刺突，1条の沈線，山形文／内面：マメツ	
174	233	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：3条以上の沈線，山形文／内面：マメツ	
175	229	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：平行沈線，弧状沈線／内面：ナデ	
176	140	旧河道　検出面		弥生	壺／甕	体部	外面：弧状沈線文，平行沈線文／内面：ナデ	
177	218	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	肩部	外面：刺突文（ヘラ状工具）＋平行沈線（６条）＋弧状沈線／内面：ナデ	
178	143	旧河道3H13a	埋土	弥生	壺／甕	体部	外面：平行沈線＋弧状沈線／内面：ナデ	
179	142	旧河道		弥生	壺／甕	体部	外面：平行沈線＋弧状沈線／内面：マメツ	
180	257	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部	弧状沈線文，平行沈線文	
181	168	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：弧状沈線文，ＬＲ縄文	
182	217	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：沈線＋山形文の一部，ＲＬ縄文／内面：ナデ	
183	270	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部		
184	231	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	肩部	外面：ナデ，沈線／内面：ナデ	
185	200	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：３条の沈線，山形文の一部／内面：ナデ	
186	255	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部	外面：１条の沈線／内面：ナデ	
187	226	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：ナデ，沈線／内面：ナデ	
188	267	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部	外面：沈線，ＲＬ縄文／内面：ナデ	
189	258	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部	外面：平行沈線，ＬＲ縄文／内面：ナデ	
190	189	旧河道3H16～17b	層	弥生	壺／甕	体部	外面：重方形文／内面：ナデ	
191	209	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：重方形文，ＬＲ縄文／内面：粘土紐痕明瞭	
192	263	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部	外面：重方形文，ＬＲ縄文／内面：粘土紐痕明瞭	
193	162	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部		
194	268	旧河道3H18b	2～3層	弥生	壺／甕	体部	外面：重方形文，ＬＲ縄文／内面：ナデ	
195	220	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	頸部～体部	外面：重菱形文（磨り消し）	
196	163	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	体部	外面：菱形文（磨り消し），ＲＬ縄文	
197	215	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺	体部	外面：菱形文（磨り消し）／内面：ナデ	
198	212	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：菱形文（磨り消し）／内面：ナデ	
199	158	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部		
200	223	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部		
201	136	風倒木内		弥生？	壺／甕	体部	外面：菱形文（磨り消し）／内面：ナデ	
202	190	旧河道3H16～17b	3層	弥生	高杯	口縁	端部：突起，縄文，体部：粘土瘤＋変形工字文（３条）／口縁内面：ＲＬ縄文，体部上：３条の沈線	
203	108	RD131		弥生？	？	体部	外面：粘土瘤＋キザミ（刺突）＋円形浮文，４条の沈線（変形工字文？）	
204	228	旧河道3H16～17b	3層	弥生	壺／甕	体部	外面：直線沈線＋弧状沈線（変形工字文？）	
205	66	3H16～17b	3層	弥生	鉢	底部	外面：ＬＲ縄文／内面：ナデ／外底面：網代痕	
206	238	旧河道3H16～17b	3層	弥生	？	底部	底面：網代痕	
207	166	旧河道3H16～17b	3層	弥生	？	底部	外面：ナデ／内面：マメツ	
208	236	旧河道3H16～17b	3層	弥生	？	底部	外面：ＬＲ／内面：ナデ／底面：ケズリ	

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	文様・特徴	備考
209	131	調査区北側トレンチ		弥生？		底部	底面：綾杉状の圧痕	
210	235	旧河道3H16～17b	3層	弥生		底部	底面：網代痕	
211	101	RB006　埋土		弥生？		底部	外面：ＬＲ、2条の沈線	
212	164	旧河道3H16～17b	3層	弥生		底部	底面：網代痕	
213	237	旧河道3H16～17b	3層	弥生		底部	底面：網代痕	
214	167	旧河道3H16～17b	3層	弥生		頸部	ＬＲ縄文	
215	205	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ	
216	146	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ縄文	
217	105	RD131		弥生？		体部	ＬＲ	
218	104	RE007		弥生？		体部	ＬＲ	
219	214	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＲＬ，撚糸	
220	269	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	ＬＲ	
221	253	旧河道3H18b	2～3層	弥生	鉢	体部	ＬＲ	
222	148	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ縄文	
223	213	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ	
224	147	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ縄文	
225	225	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ	
226	156	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	外面：ＲＬ縄文／	
227	203	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＲＬ	コゲ付着
228	202	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＲＬ	
229	204	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＲＬ	
230	219	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＲＬ	
231	107	RD131		弥生？		体部	ＲＬ	
232	176	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＲＬ縄文	
233	135	風倒木内		弥生？		体部	ＲＬ縄文	
234	264	旧河道3H18b	2～3層	弥生		頸部	ＲＬ	
235	145	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	外面：附加条／内面：ナデ	
236	256	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
237	265	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
238	110	RD132　埋土	埋土	弥生？		？	ＲＬ	
239	221	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	附加条	
240	216	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	附加条	孔
241	271	旧河道3H18b	2～3層	弥生		底部	附加条	
242	171	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	ＬＲ縄文	
243	230	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	撚糸＋附加条	
244	224	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	附加条	
245	261	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
246	222	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	附加条	
247	254	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
248	262	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
249	259	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
250	172	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	附加条	
251	260	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	附加条	
252	154	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	外面：附加条／内面：ケズリ	
253	211	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	短軸絡条体	
254	201	旧河道3H16～17b	3層	弥生		体部	短軸絡条体	
255	252	旧河道3H18b	2～3層	弥生		体部	短軸絡条体	

第12表　石器観察表

No.	器種	出土地点	石材	産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
10	礫石器	RA022　S2	安山岩	奥羽山脈・新第三期	171.0	113.5	53.1	1353.7	片面に磨痕あり
13	礫石器	RA023　pit2　埋土	安山岩	奥羽山脈・新第三期	(64.9)	(80.3)	60.3	400.3	被熱
92	礫石器	RZ044　3層	玄武岩	奥羽山脈・第四期	108.9	(83.0)	31.3	192.9	両面に磨痕あり
256	石鏃	旧河道3H18b　検出面	頁岩①	奥羽山脈・新第三期	25.0	12.8	3.2	0.6	完形/先端角38°
257	石鏃	旧河道3H18b　埋土	頁岩⑨	奥羽山脈・新第三期	30.8	12.8	4.8	1.0	完形/先端角35°
258	石鏃	旧河道3H18b　埋土	頁岩⑨	奥羽山脈・新第三期	21.4	10.7	3.3	0.5	先端・中茎欠損
259	石鏃	旧河道3H18b　3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	22.5	11.8	2.7	0.5	中茎欠損/先端角38°
260	石鏃	旧河道3H18b　3層	頁岩①	奥羽山脈・新第三期	23.9	9.8	4.0	0.6	基部欠損/先端角47°
261	石鏃	旧河道3H18b　3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	27.8	13.8	6.5	1.4	先端欠損
262	石鏃	旧河道3H18b　埋土	頁岩①	奥羽山脈・新第三期	26.0	12.0	3.9	0.9	先端・中茎欠損/先端角38°
263	石鏃	旧河道3H18b　埋土	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	30.9	15.8	6.7	2.7	未成品
264	石鏃	旧河道3H16～17b　3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	28.5	18.4	7.1	3.0	未成品
265	石鏃	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑨	奥羽山脈・新第三期	31.1	23.5	5.8	4.0	未成品
266	石鏃	旧河道3H18b　2～3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	23.1	19.4	5.7	1.8	未成品
267	石鏃	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑨	奥羽山脈・新第三期	14.4	13.8	4.9	0.8	先端・基部欠損
268	石鏃	旧河道3H18b　2～3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	22.7	14.7	3.9	0.8	基部欠損/先端角52°
269	石鏃	旧河道3H16～17b　3層	頁岩①	奥羽山脈・新第三期	29.1	17.7	7.0	3.2	未成品
270	石錐	旧河道3H18b　2～3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	23.9	11.2	8.8	2.5	未成品
271	石錐	旧河道3H16～17b　3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	46.5	21.7	12.0	9.8	完形/先端角39°
272	石錐	旧河道3H18b　2～3層	頁岩⑥	奥羽山脈・新第三期	41.4	13.9	7.8	4.1	完形/先端角34°
273	石錐	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑥	奥羽山脈・新第三期	45.6	29.9	12.0	11.1	完形/先端角32°
274	石錐	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑤	奥羽山脈・新第三期	42.4	11.4	9.9	3.9	完形/先端角26°
275	削器	旧河道3H18b　2～3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	42.4	25.2	11.4	10.4	完形/素材：縦形剥片
276	削器	旧河道3H18b　2～3層	頁岩⑤	奥羽山脈・新第三期	33.1	25.5	10.3	7.5	完形/素材：縦形剥片
277	削器	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑧	奥羽山脈・新第三期	40.4	69.1	11.6	21.7	完形/素材：横形剥片
278	削器	旧河道3H18b　2～3層	頁岩⑤	奥羽山脈・新第三期	27.5	30.8	9.1	6.9	完形/素材：横形剥片
279	削器	旧河道3H18b　2～3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	55.5	27.0	9.6	8.6	完形/素材：縦形剥片
280	削器	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑤	奥羽山脈・新第三期	27.0	15.5	4.7	1.6	完形/素材：縦形剥片
281	削器	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑥	奥羽山脈・新第三期	34.8	20.5	8.6	4.8	完形/素材：縦形剥片
282	両極石器	旧河道3H16～17b　3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	16.8	26.5	12.5	5.2	
283	両極石器	旧河道3H16～17b　3層	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	34.5	31.2	10.4	7.0	
284	Rフレ	旧河道3H18b　2～3層	頁岩④	奥羽山脈・新第三期	46.3	38.5	14.7	23.4	素材：不明
285	両極石器	旧河道3H18b　2～3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	27.4	40.6	15.5	12.4	被熱
286	両極石器	旧河道3H18b　2～3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	56.9	26.7	18.3	28.9	熱
287	石核	遺構外（3F15xグリッド）	頁岩③	奥羽山脈・新第三期	44.6	44.6	22.2	37.7	素材：礫
288	石核	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑤	奥羽山脈・新第三期	44.6	51.2	26.6	39.8	素材：礫
289	石核	旧河道3H16～17b　3層	頁岩④	奥羽山脈・新第三期	52.0	42.6	18.3	33.1	素材：礫
290	石核	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑤	奥羽山脈・新第三期	30.0	58.9	52.2	93.5	素材：礫
291	石核	旧河道3H16～17b　3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	40.2	48.5	38.5	72.4	素材：礫
292	石核	旧河道3H16～17b　3層	頁岩④	奥羽山脈・新第三期	31.8	48.6	18.6	24.8	素材：礫
293	剥片	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑥	奥羽山脈・新第三期	120.5	48.5	20.5	73.4	Ｂ１類・294と接合
294	剥片	旧河道3H18b　3層	頁岩⑥	奥羽山脈・新第三期	97.5	67.5	18.2	80.1	Ｂ１類・293と接合
295	剥片	旧河道3H16～17b　3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	43.5	30.5	5.5	6.4	分類不明・296と接合
296	剥片	旧河道3H16～17b　3層	頁岩②	奥羽山脈・新第三期	49.5	57.8	11.2	14.8	分類不明・295と接合
297	Rフレ	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑧	奥羽山脈・新第三期	48.4	24.1	6.1	5.0	Ａ３類・298と接合
298	Rフレ	旧河道3H16～17b　3層	頁岩⑧	奥羽山脈・新第三期	41.4	36.3	15.4	14.8	Ａ３類・297と接合

第13表　土製品・石製品観察表

No.	仮No.	器種	出土地点	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	備　考	重量（g）
27	3	紡錘車	RA028　カマド付近4層	48.5	47.8	25.5		62
28	4	紡錘車	RA028　Pit6埋土上位	54.0	55.0	23.0		77
58		砥石	RB006　pit5　埋土	(87.3)	61.2	28.8		
299	1	勾玉		(39.0)	24.5	10.5		10
311	2	紡錘車	3F14p　II層	45.9	45.8	43.5		51
312	5	砥石	3G14x　I層	109.0	48.0	38.0		

第14表　金属製品観察表

No.	仮No.	器種	出土地点	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	備　考	重量（g）
49	2	軸？	RE006	84.0	4.8	4.0		8
52	10	寛永通寶	RB003　Pit7	28.4	24.0			2
54	6	不明（鉄）	RB004　Pit6a埋土	88.0	8.0	8.0		20
59	9	寛永通寶	RB007	23.6	24.0	(1.0)		3
81	1	鉄小刀	RG014　埋土	230.0	22.4	6.0		
313	11	寛永通寶	3G21y（RA029付近）	24.0	24.0	(1.0)		3

写　真　図　版

1　遺跡遠景　北を臨む

2　調査区全景（南から）

写真図版1　航空写真 1

1　調査区全景（北から）

2　竪穴住居跡群　密集地点（北から）

写真図版２　航空写真２

1　調査前状況

2　調査前状況

3　基本層序

写真図版３　遺跡状況・基本層序

1　RA020　完掘

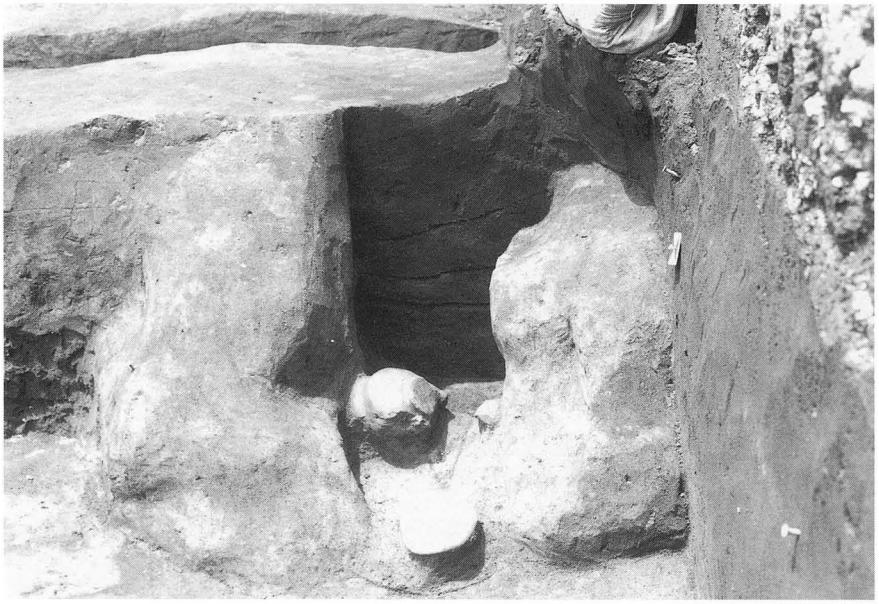
2　RA020　遺物出土状況

3　RA020　土層断面

写真図版 4　RA020竪穴住居跡

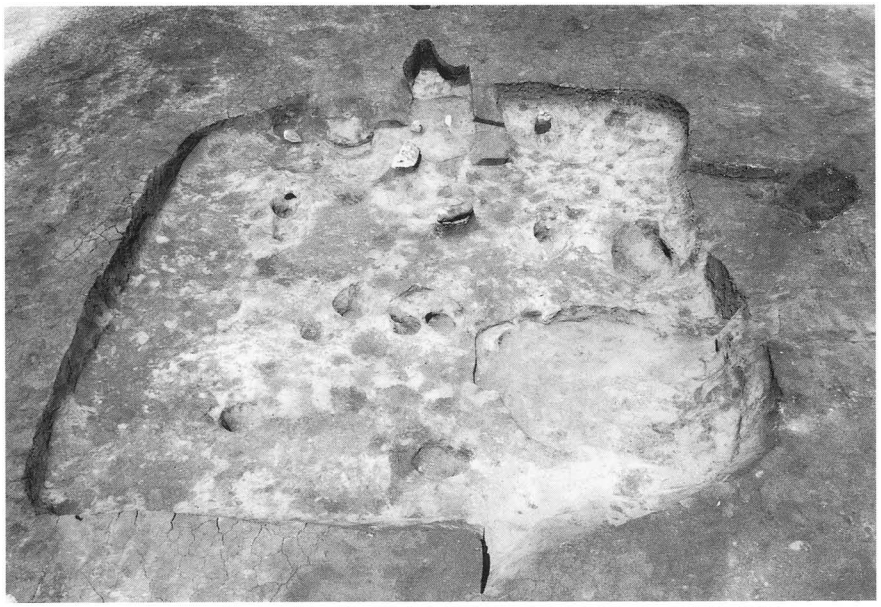
1　RA022　完掘

2　RA022　カマド



3　RA022　炭化材
出土状況

写真図版５　RA022竪穴住居跡



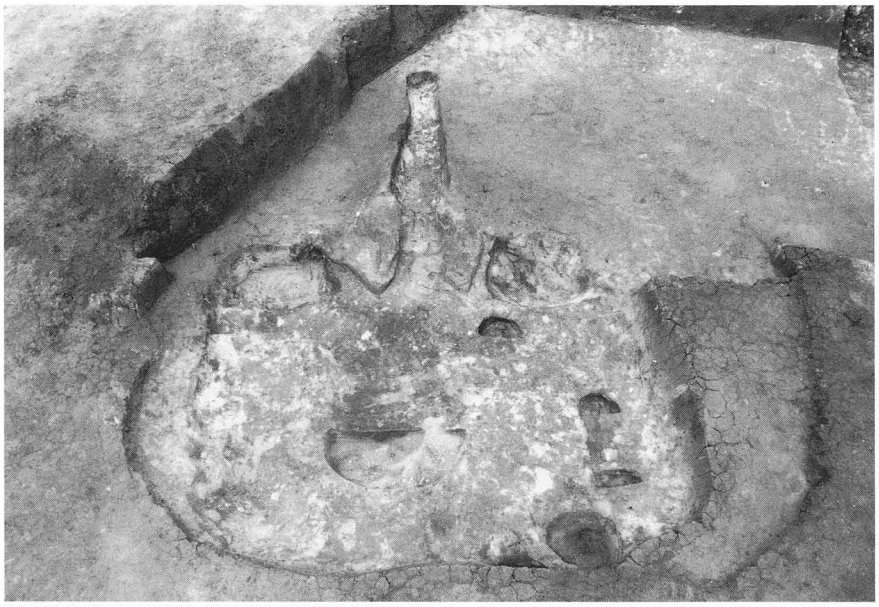
1　RA023　完掘

2　RA023　カマド

3　RA023　土層断面

写真図版 6　RA023竪穴住居跡

1　RA024　完掘



2　RA024　カマド

3　RA024　堀りかた

写真図版７　RA024竪穴住居跡

1　RA025　完掘

2　RA025　カマド

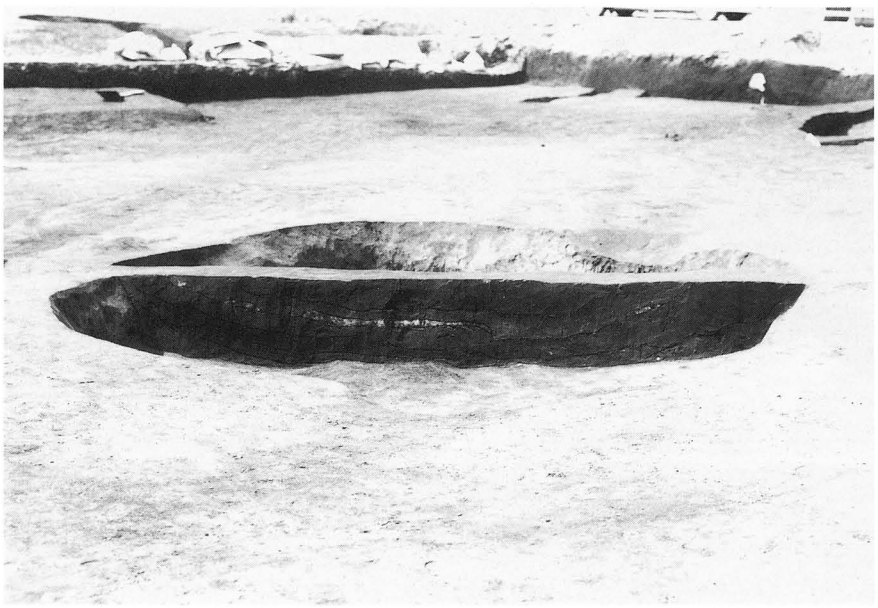
3　遺物出土状況

写真図版 8　RA025竪穴住居跡

1　RA026　完掘

2　RA026　堀りかた

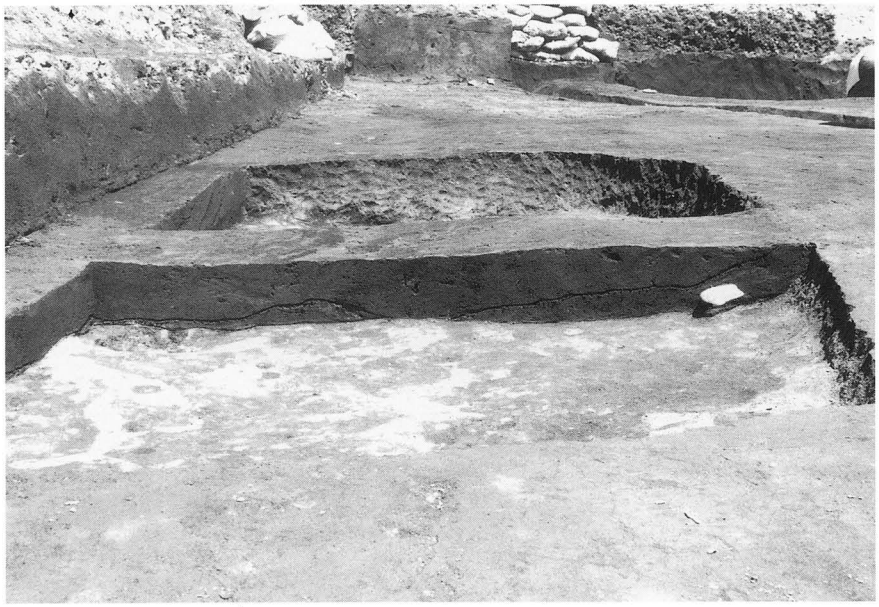
3　RA026　土層断面



写真図版 9　RA026竪穴住居跡

1　RA027　完掘

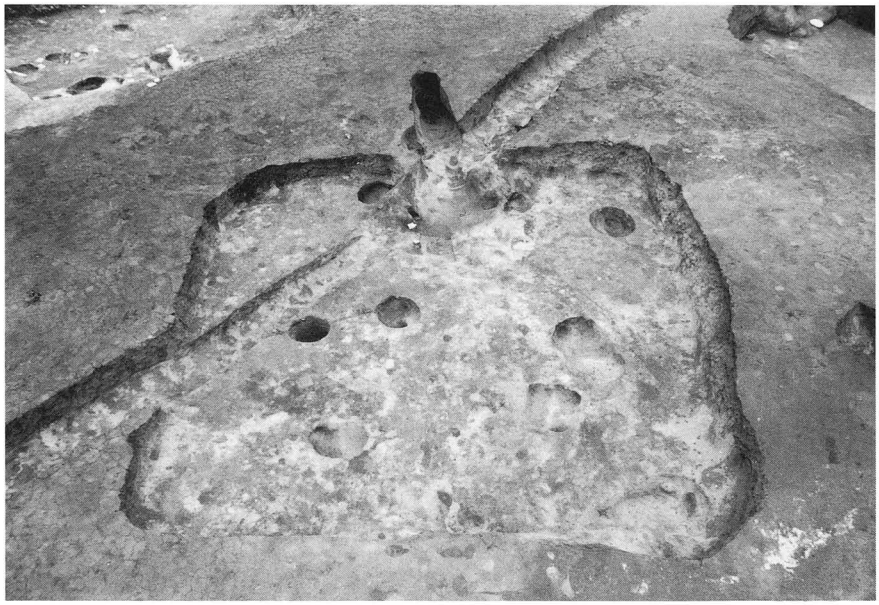
2　RA027　カマド



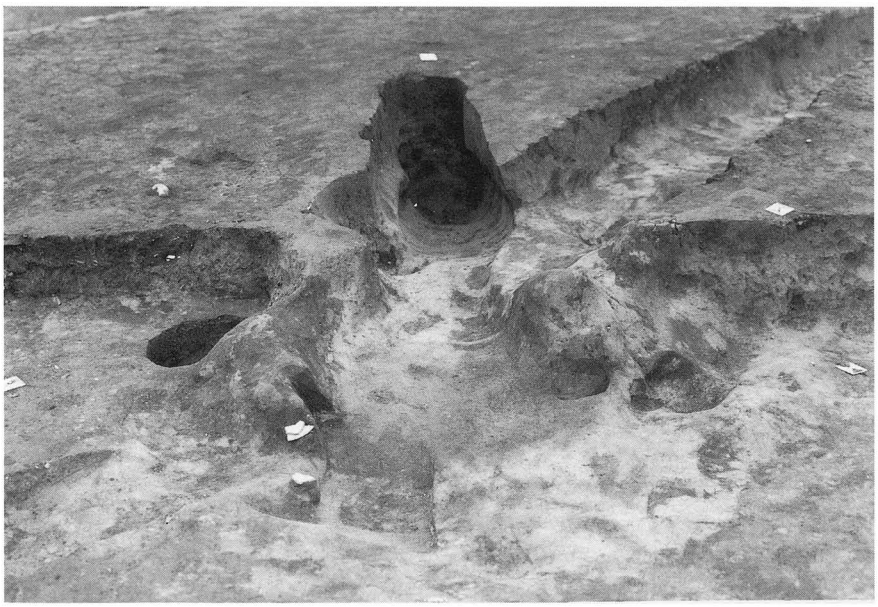
3　RA027　土層断面

写真図版10　RA027竪穴住居跡

1　RA028　完掘

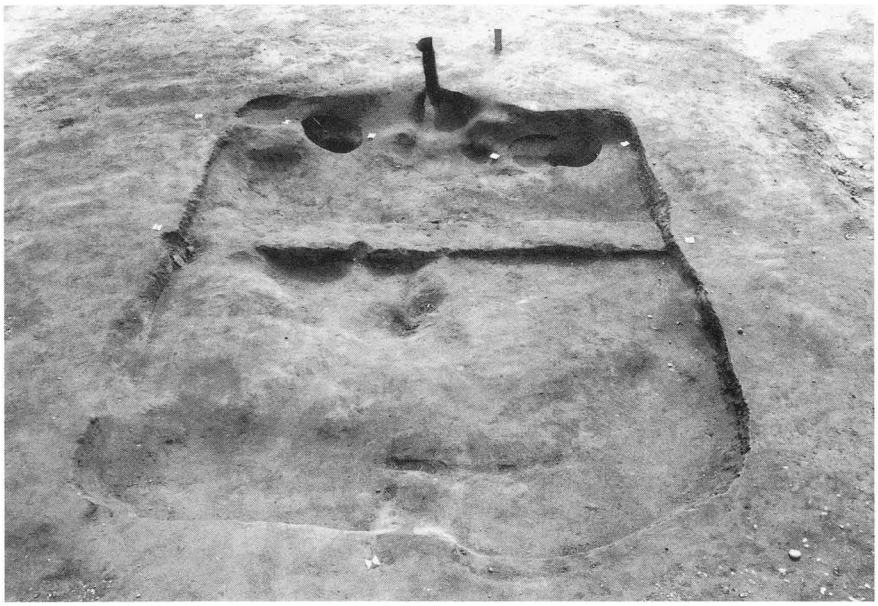


2　RA028　カマド



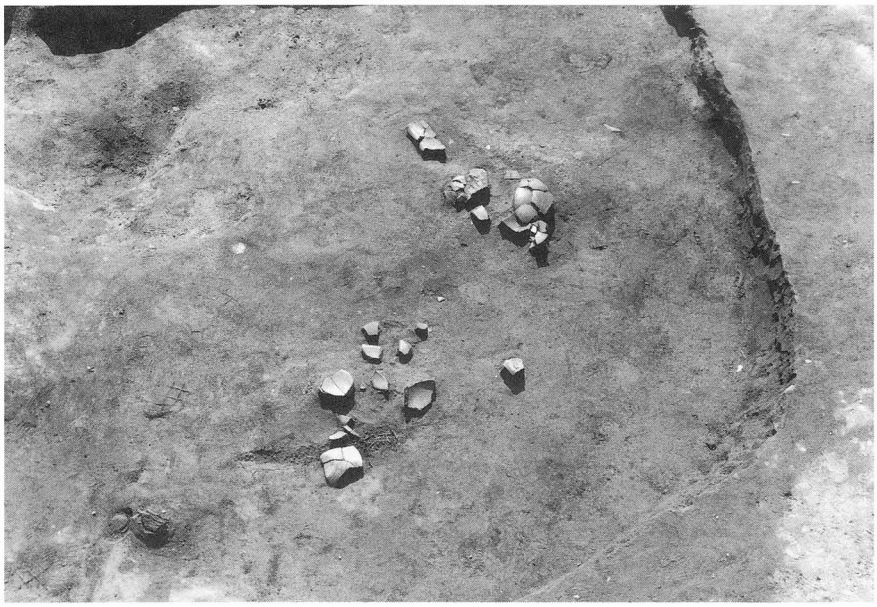
3　RA028　土層断面

写真図版11　RA028竪穴住居跡



1　RA029　完掘

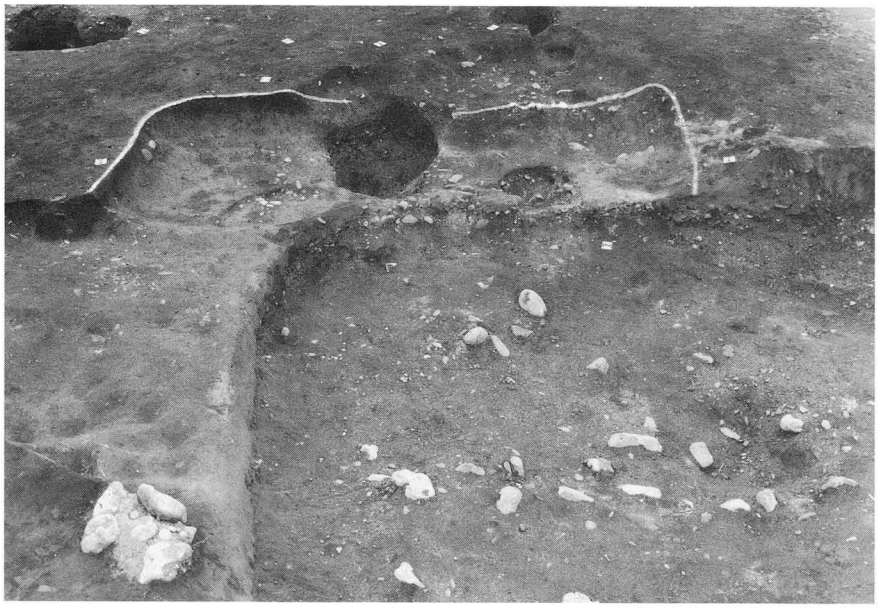
2　RA029　遺物出土状況



3　遺物出土状況

写真図版12　RA029竪穴住居跡

1　RA030　完掘

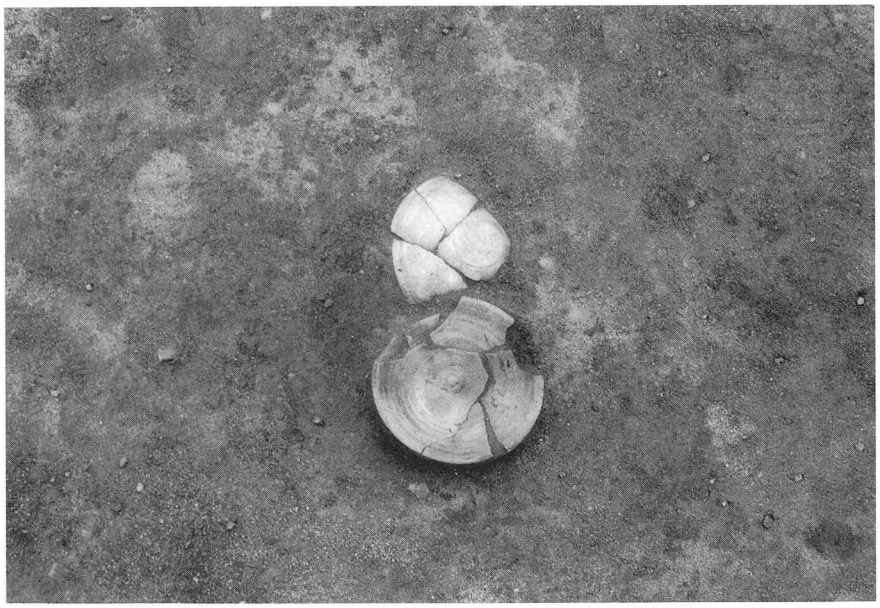


2　RA030　土層断面

3　作業風景

写真図版13　RA030竪穴住居跡

1　RE006　完掘

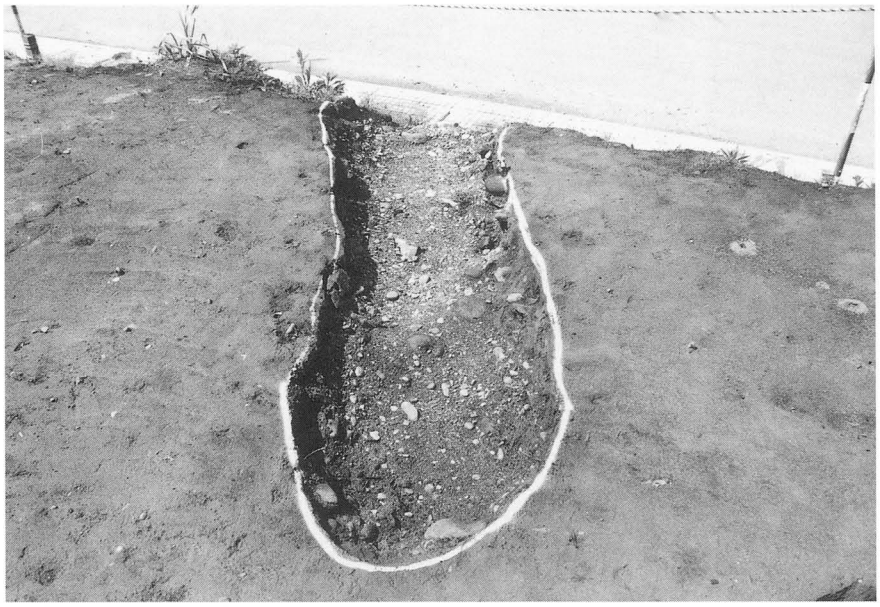


2　RE006　遺物出土状況

3　調査区北西完掘状況

写真図版14　RE006竪穴状遺構

1　RG013



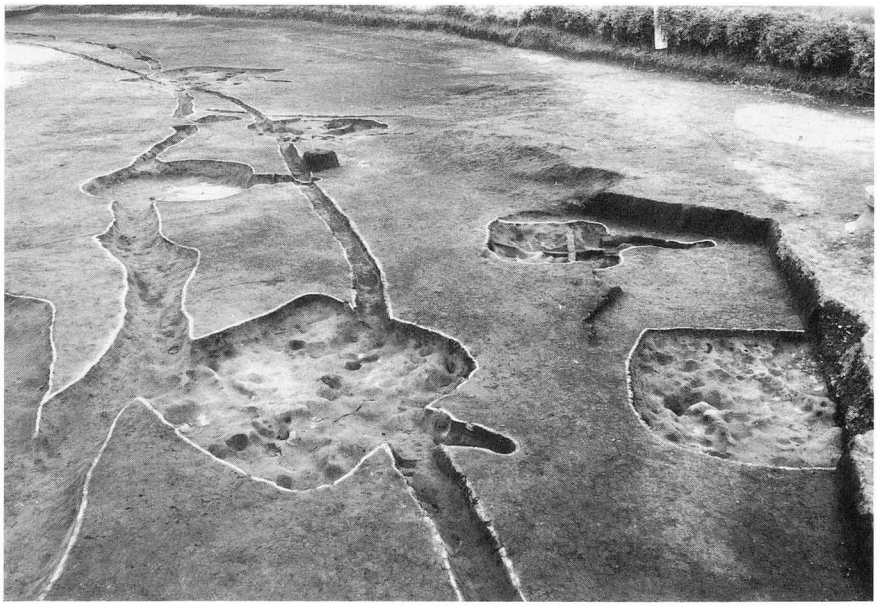
2　RG014

3　RG014　遺物出土状況

写真図版15　RG013・014溝跡

1　RG008・014

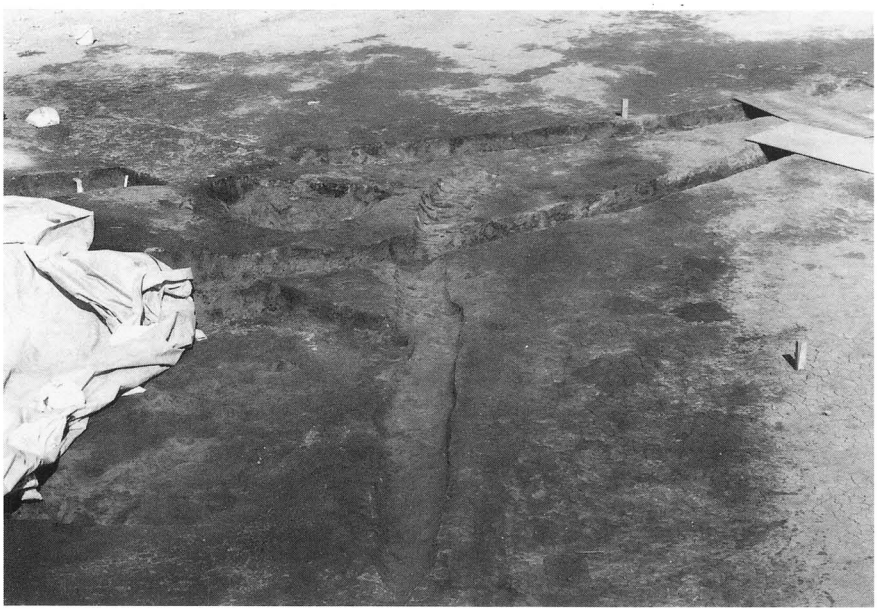
2　RG014



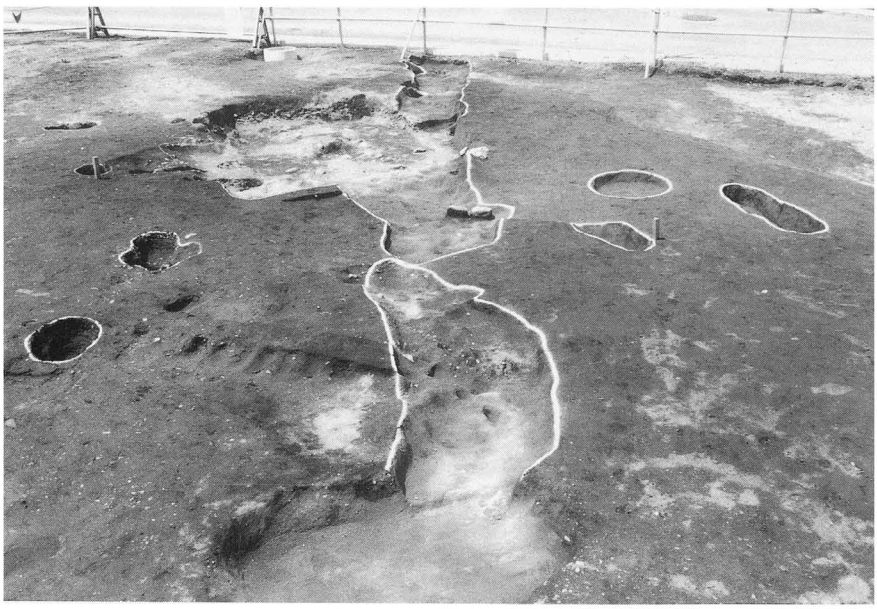
3　調査区北西完掘状況

写真図版16　RG008・014溝跡

1　RG016



2　RG017



3　RG018

写真図版17　RG016～018溝跡

1　RB003　完掘

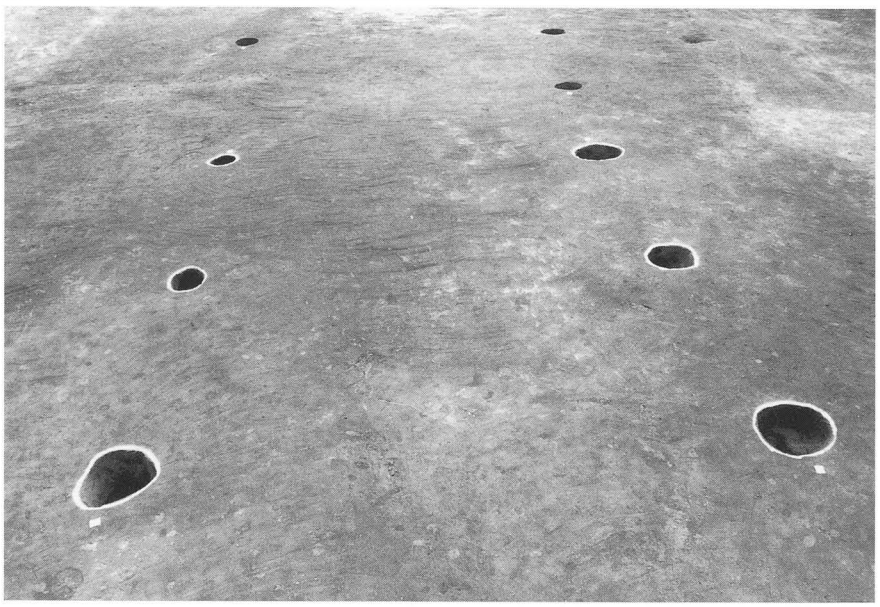
2　RB004　完掘

3　RB005　完掘

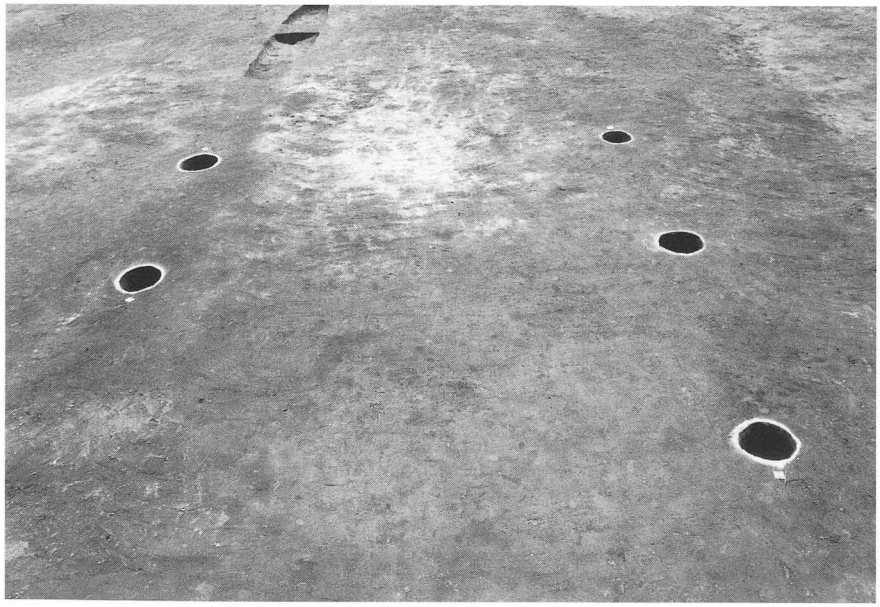
写真図版18　RB003～005掘立柱建物跡

1　RB006　完掘

2　RB007　完掘



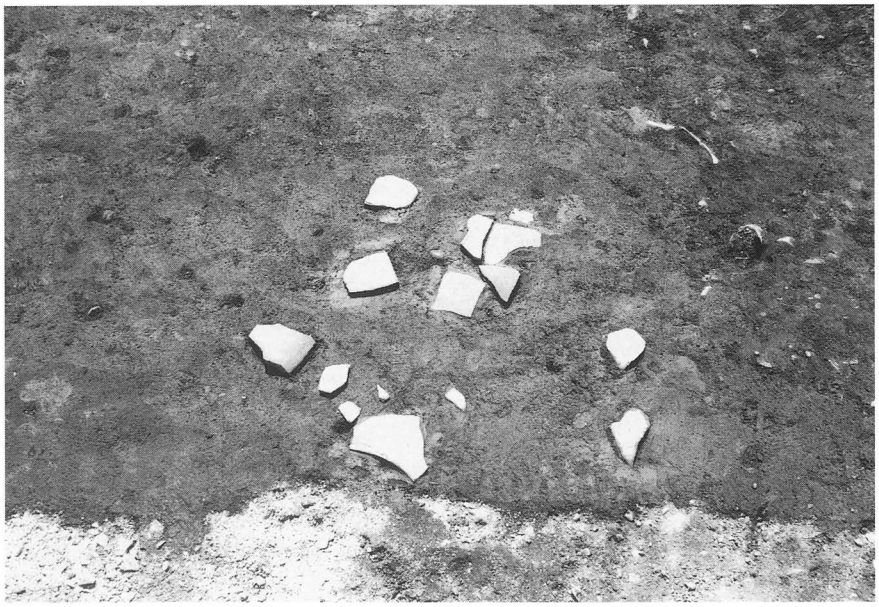
3　RB008　完掘



写真図版19　RB006～008掘立柱建物跡

1　RZ044　完掘

2　RZ044　灰白色火山灰
検出状況

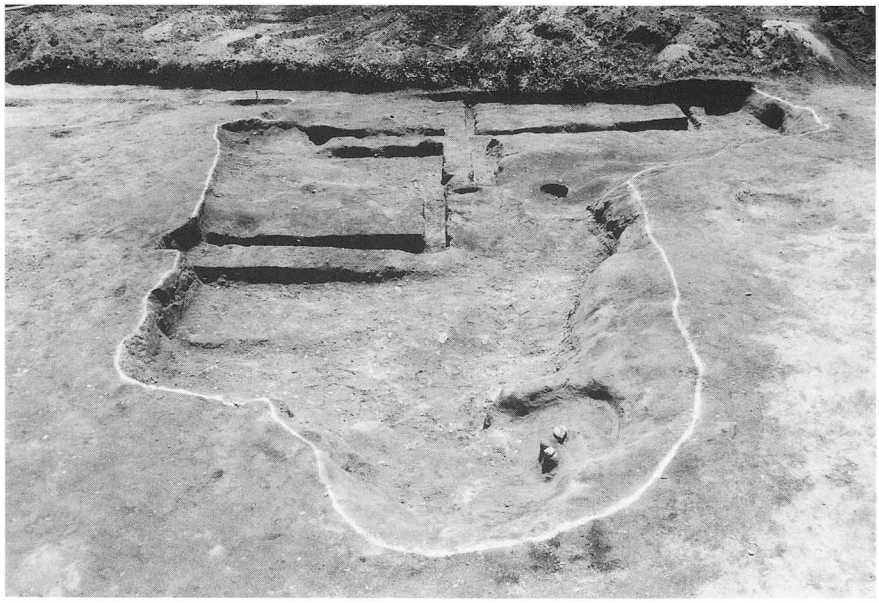


3　RZ044　遺物出土状況

写真図版20　RZ044古墳

1　RZ048　完掘

2　RZ049　完掘

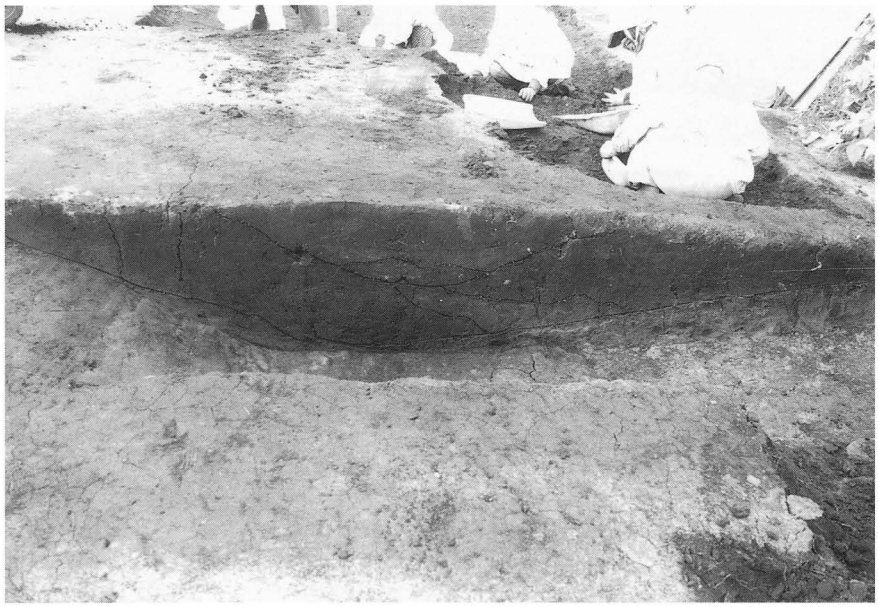


3　RZ049　土層断面

写真図版21　RZ048・049古墳

1　旧河道　完掘

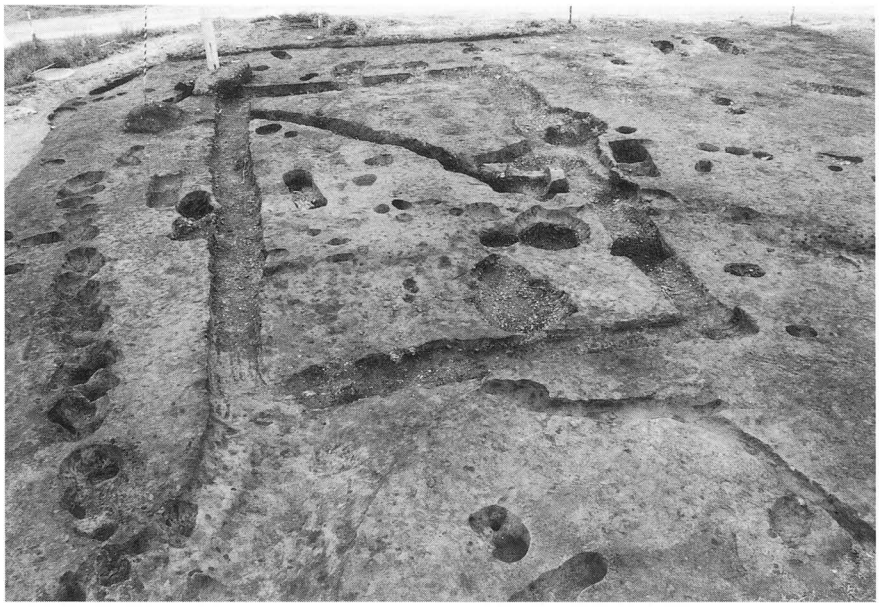
2　旧河道　遺物出土状況



3　旧河道　土層断面

写真図版22　旧河道

1　調査区北西部完掘状況



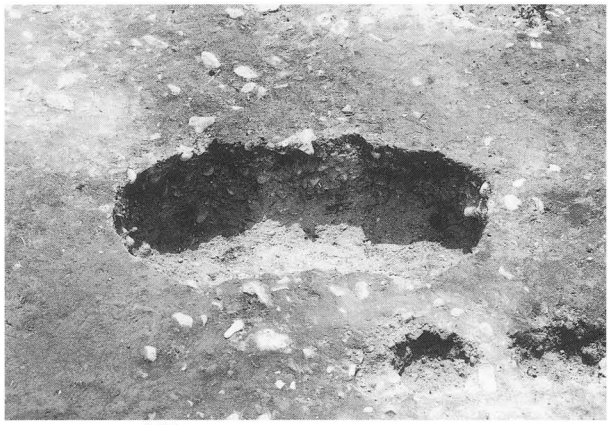
2　現地説明会　1

3　現地説明会　2

写真図版23　現地説明会

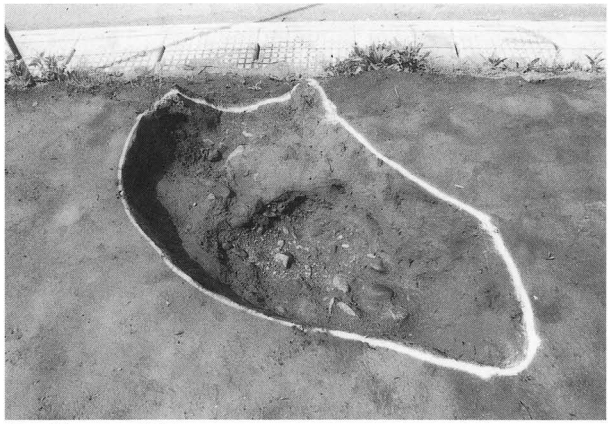
1　RD090　完掘

2　RD091　完掘



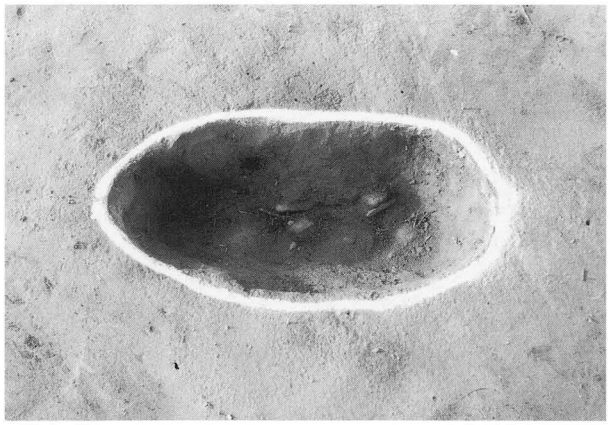
3　RD092　完掘

4　RD093　完掘



5　RD094　完掘

6　RD095　完掘

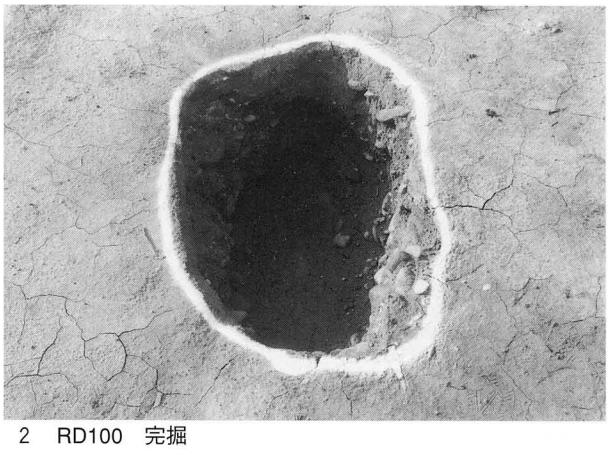


7　RD096　完掘

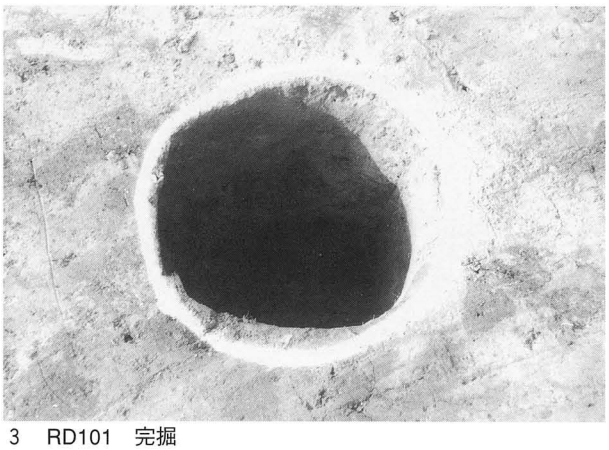
8　RD097　完掘

写真図版24　RD090～097土坑

1　RD098　完掘



2　RD100　完掘



3　RD101　完掘

4　RD103　完掘

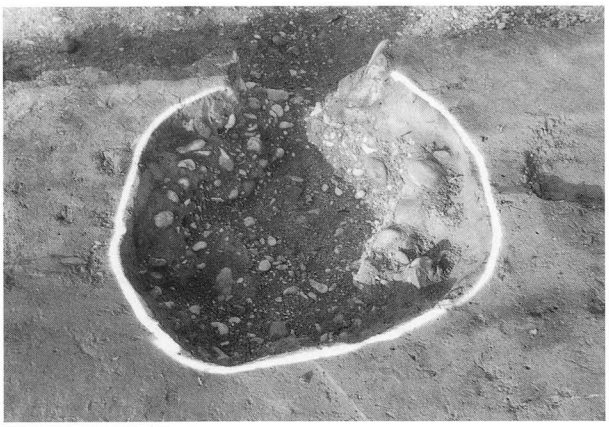
5　RD104　完掘

6　RD105　完掘

7　RD106　完掘

8　RD107　完掘

写真図版25　RD098～107土坑



1　RD108　完掘

2　RD109　完掘

3　RD110　完掘

4　RD111　完掘

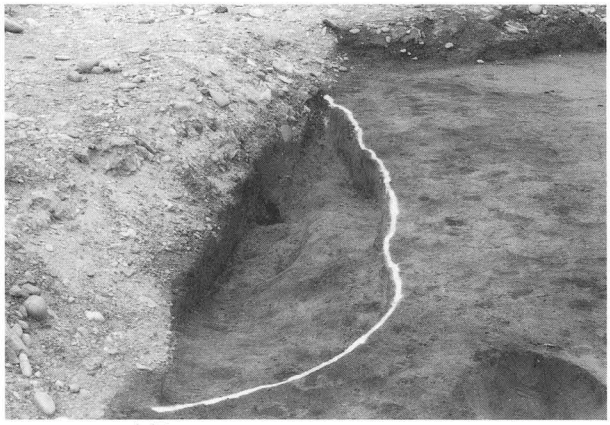
5　RD112　完掘

6　RD113　完掘

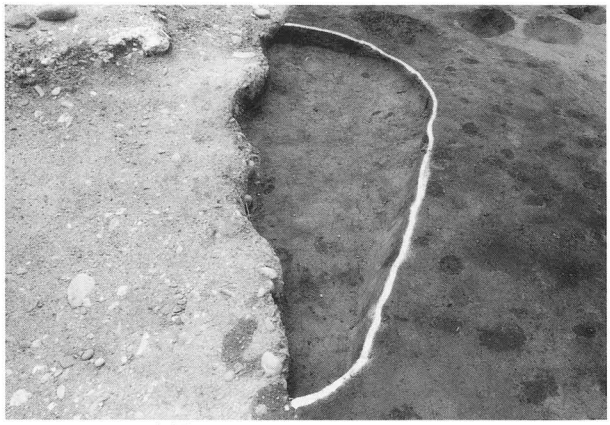
7　RD114　完掘

8　RD115　完掘

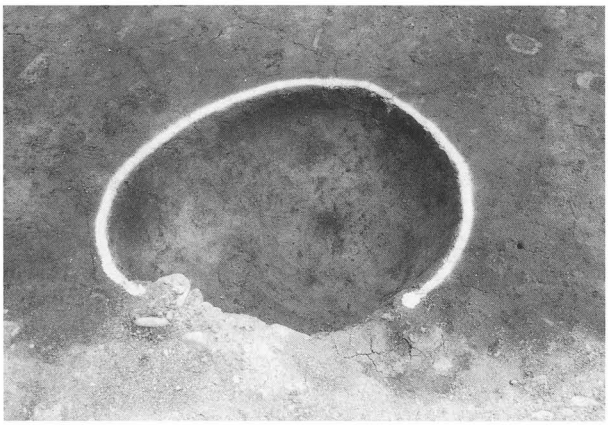
写真図版26　RD108～115土坑



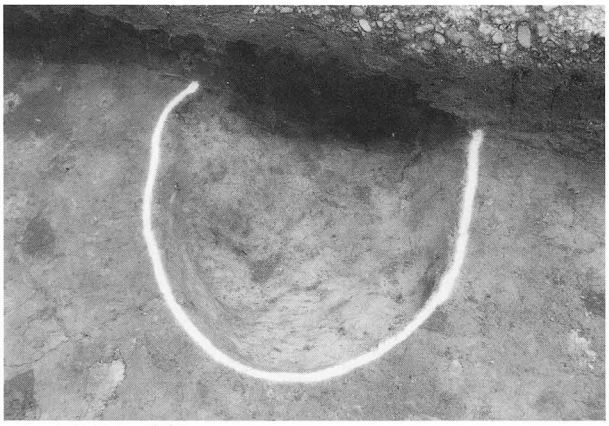
1　RD116　完掘



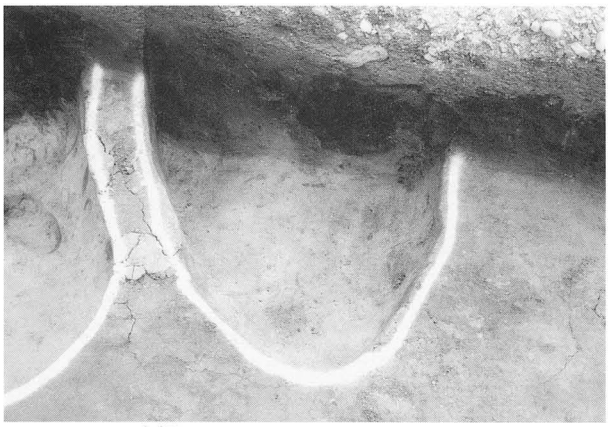
2　RD117　完掘



3　RD118　完掘

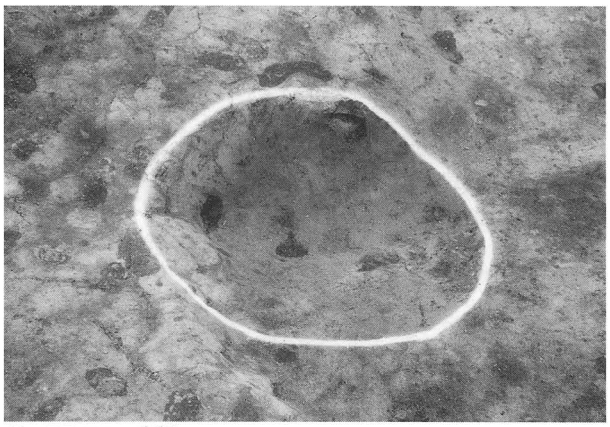


4　RD119　完掘

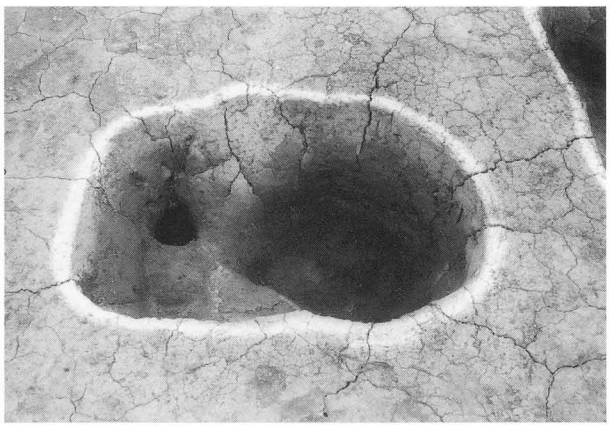


5　RD120　完掘

6　RD121　完掘

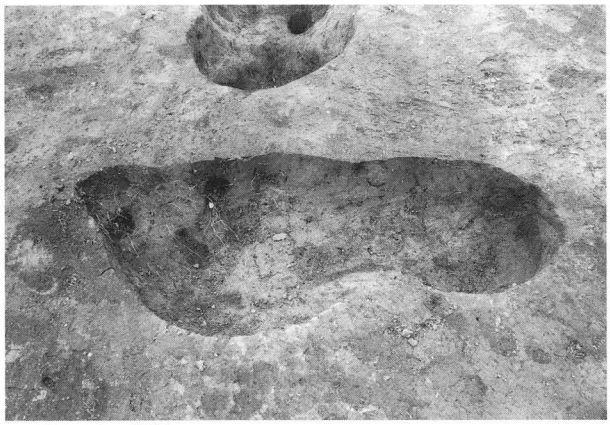


7　RD122　完掘



8　RD123　完掘

写真図版27　RD116～123土坑



1　RD124　完掘

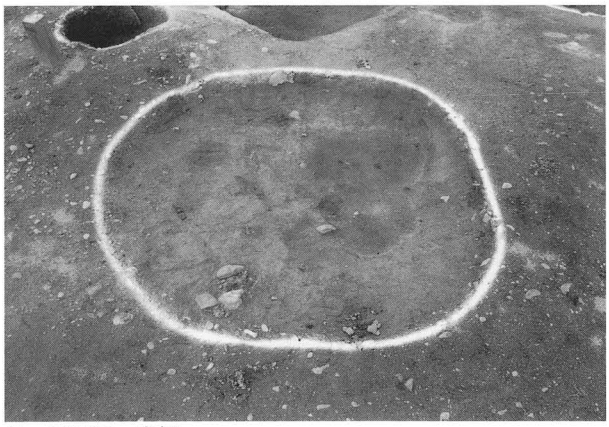
2　RD127　完掘

3　RD128　完掘

4　RD129　完掘

5　RD131　完掘

6　RD132　完掘

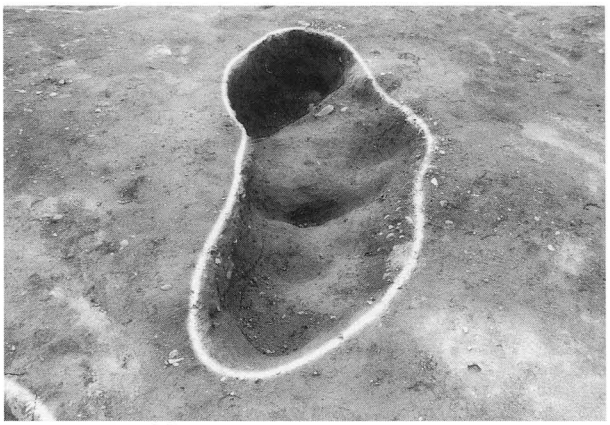


7　RD134　完掘

8　RD136　完掘

写真図版28　RD124～136土坑

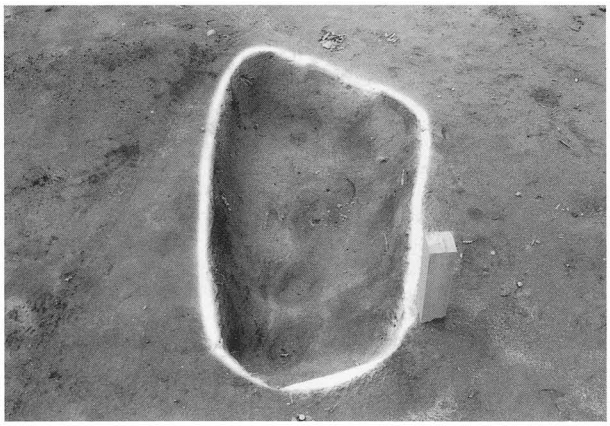
1　RD138　完掘



2　RD139　完掘

3　RD141　完掘

4　RD143　完掘



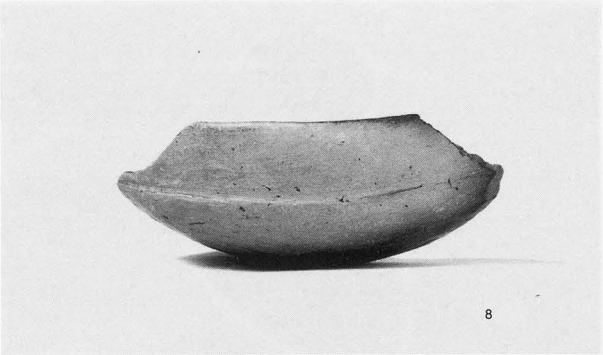
5　RD144　完掘

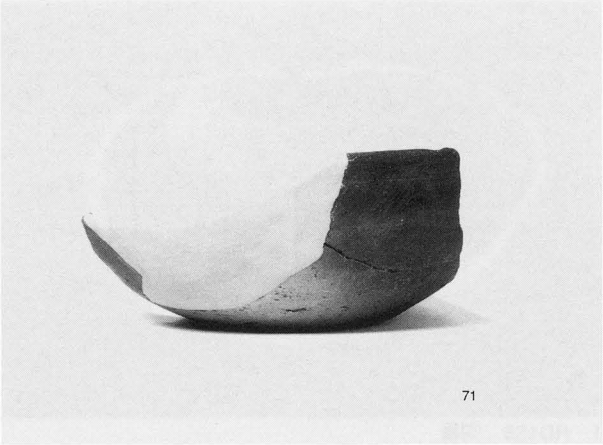
6　RD152　完掘

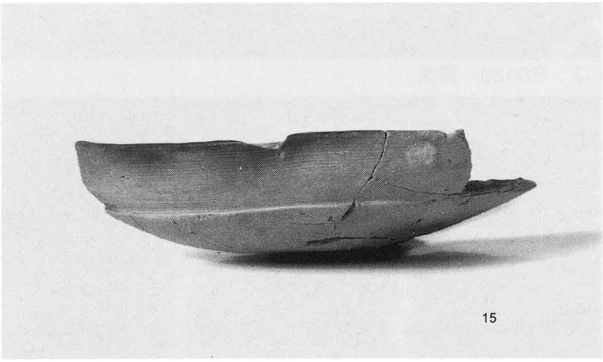
7　RD153　完掘

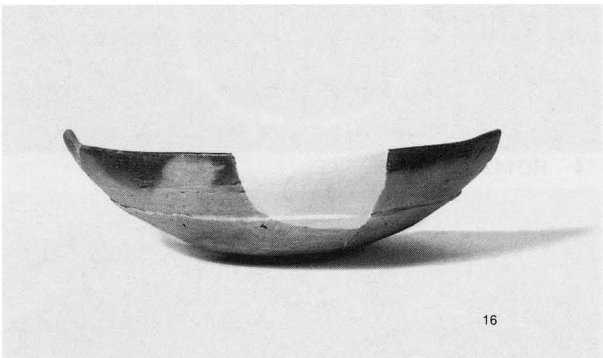
8　RD153　遺物出土状況

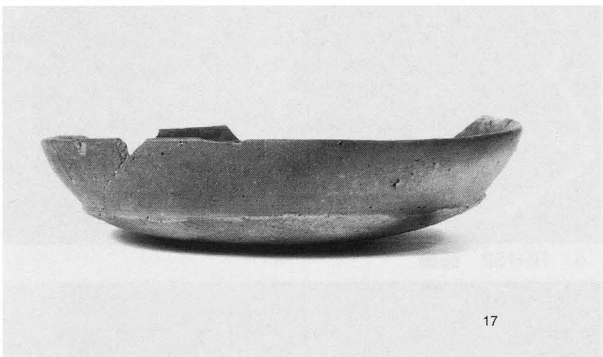
写真図版29　RD138～153土坑

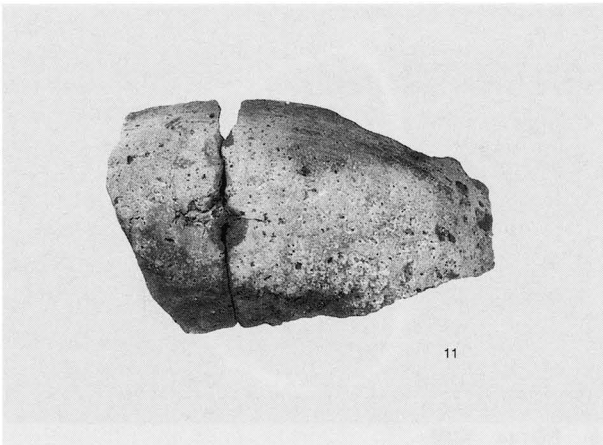


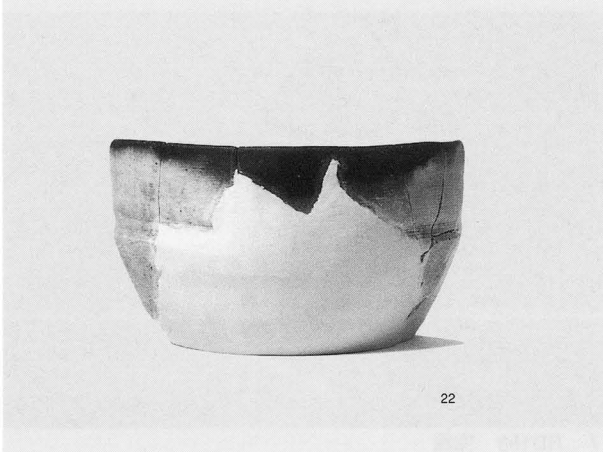




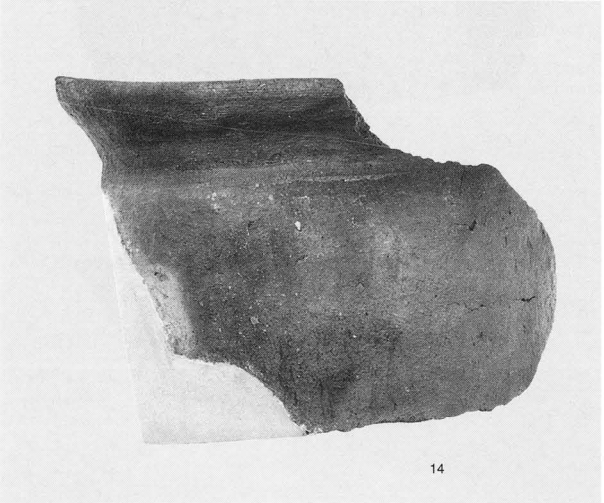




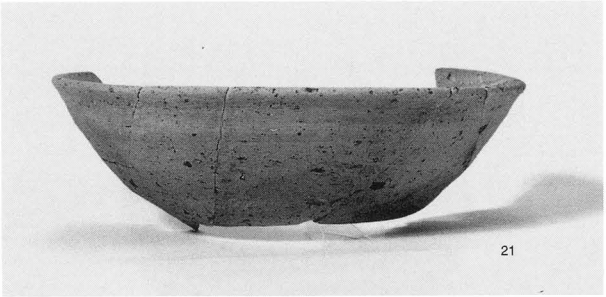


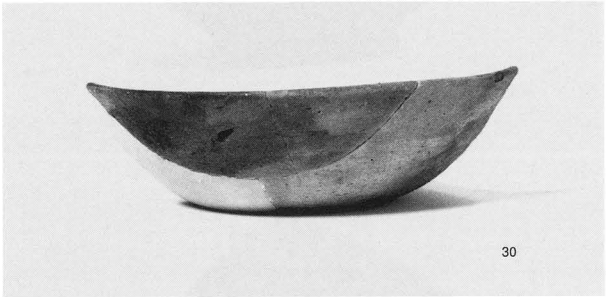


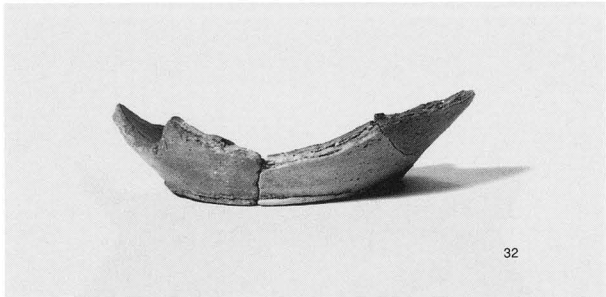
写真図版30　出土土器１

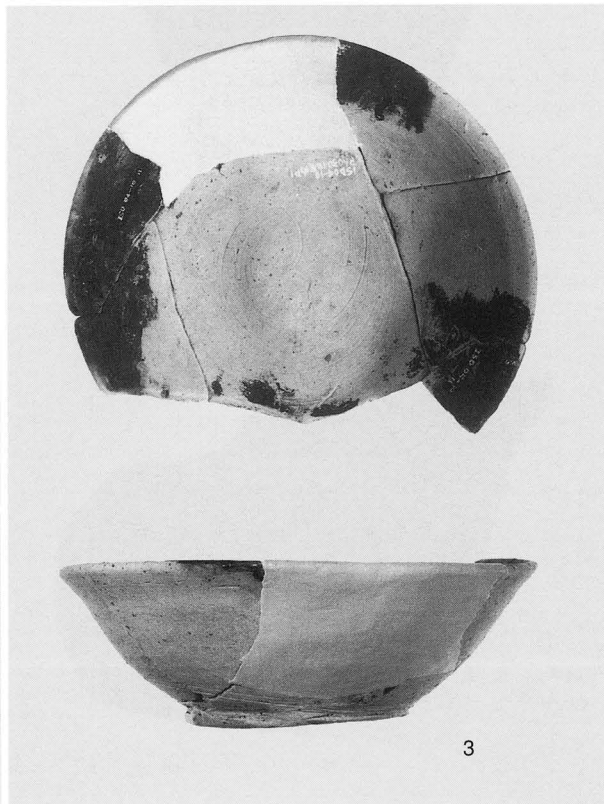


写真図版31　出土土器２

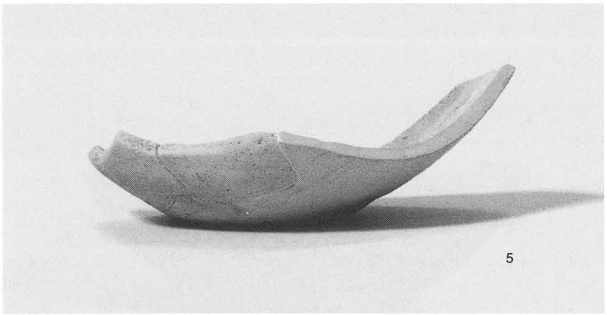


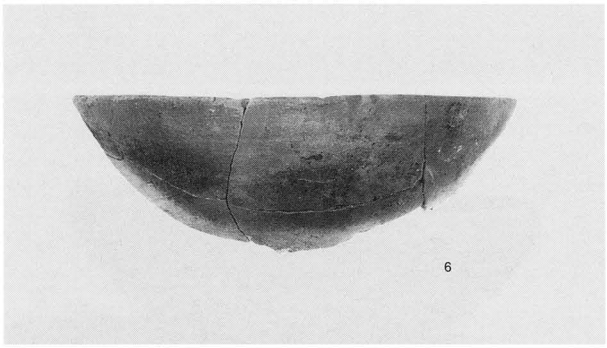


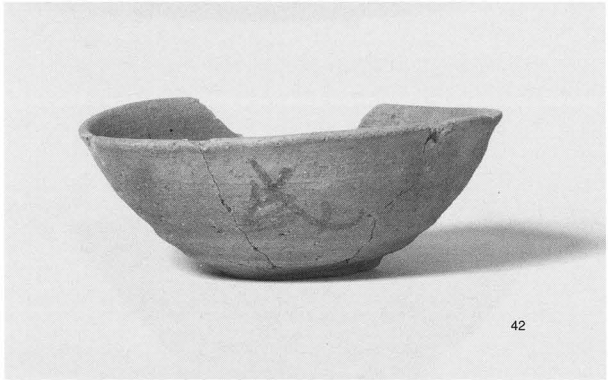


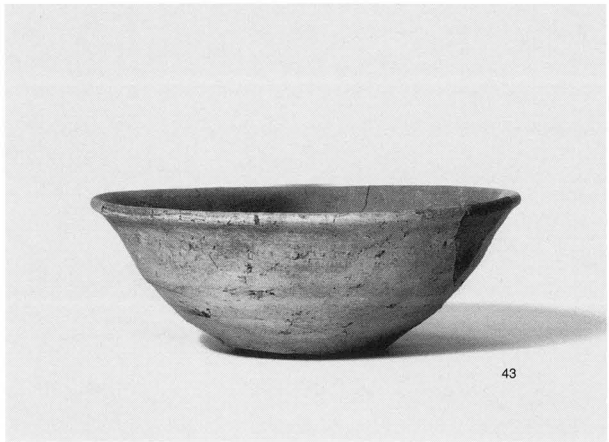


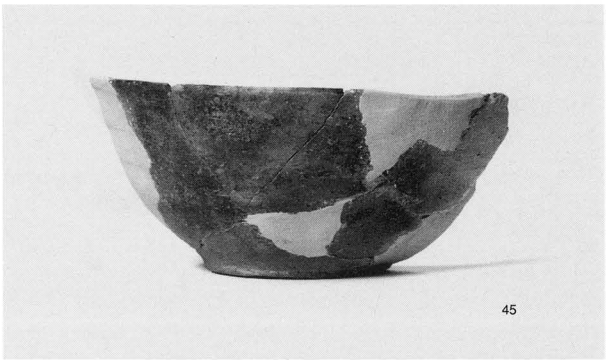
写真図版32　出土土器 3

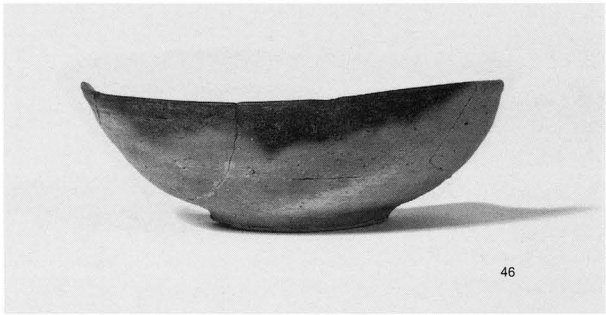




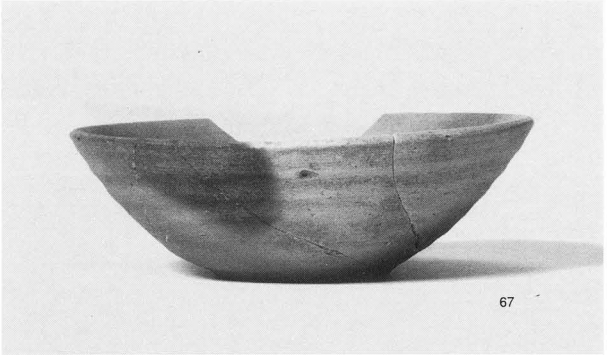




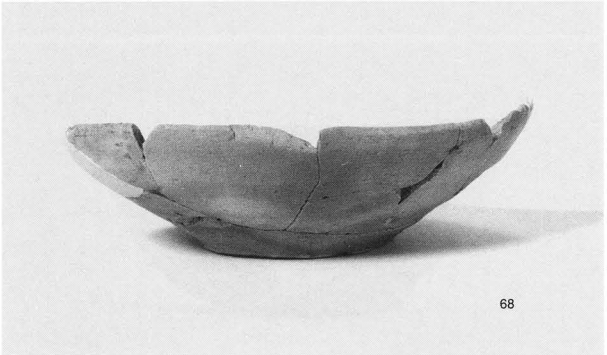




写真図版33　出土土器 4


67

72


68

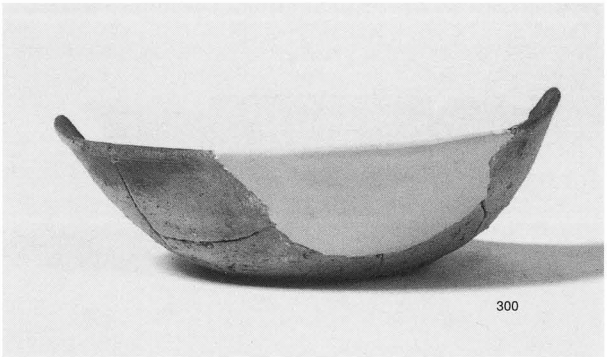
73

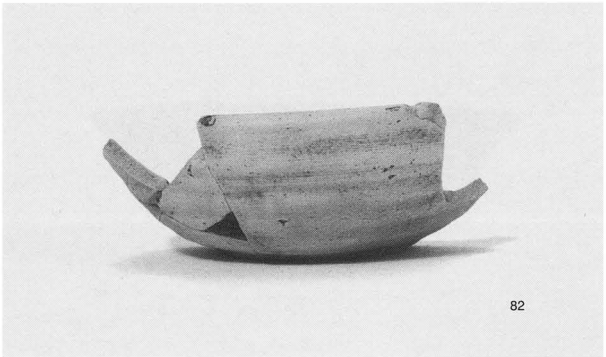
69

74

70

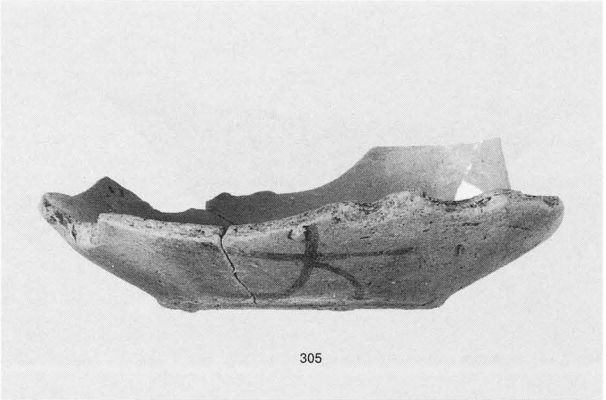
75

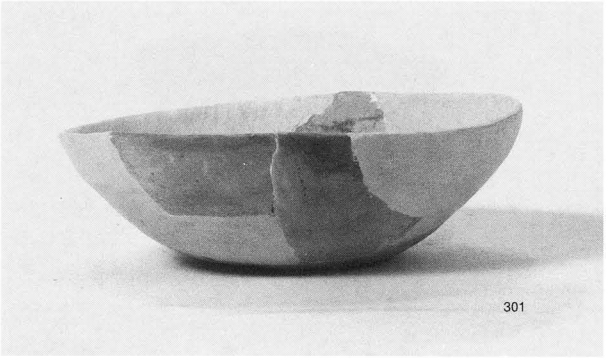

300


82

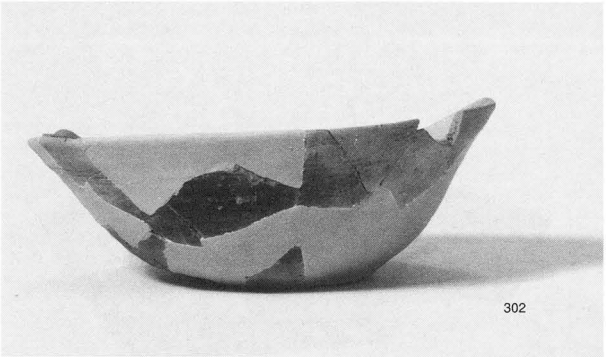
写真図版34　出土土器 5

88

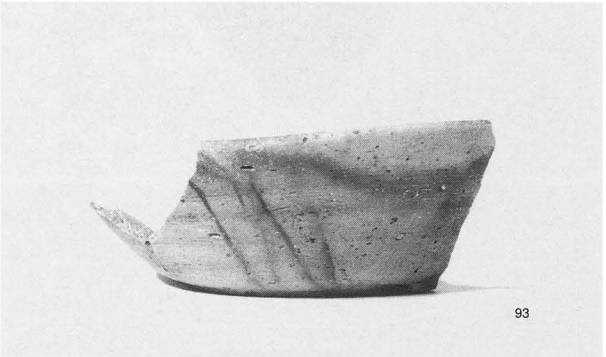

305


301

305


302

303


93

304

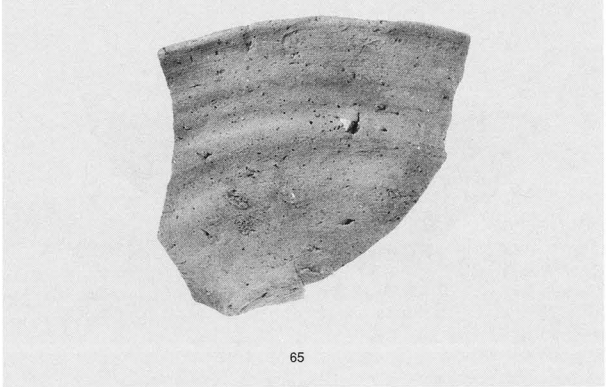
35

写真図版35　出土土器 6

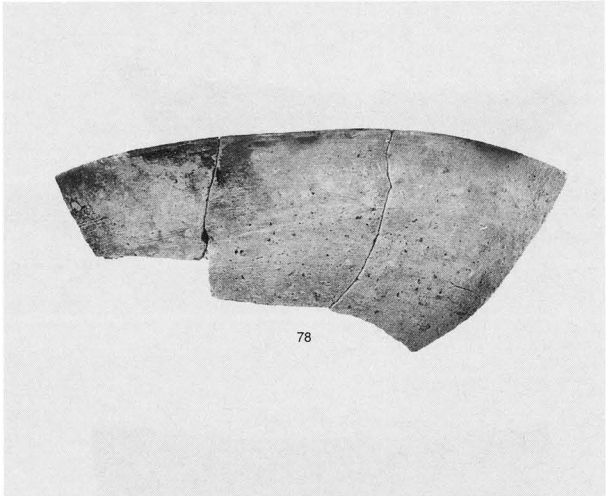
39

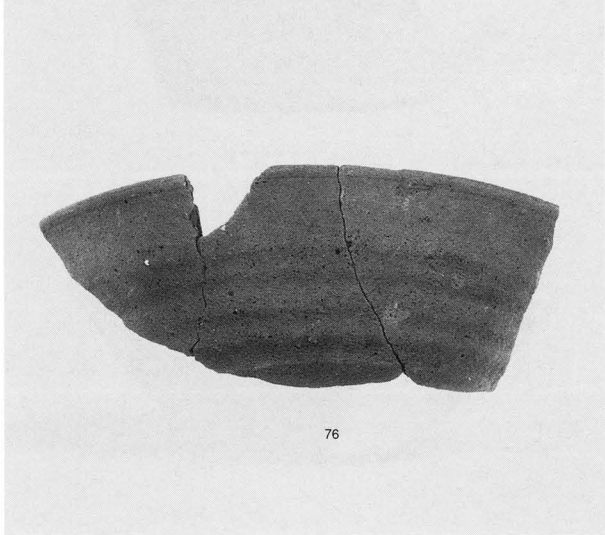
308

48


65

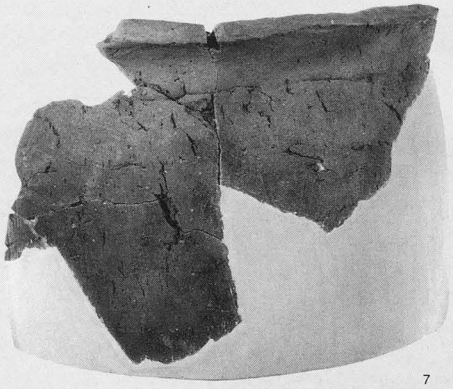
66


78

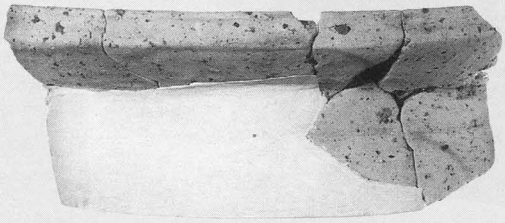

76

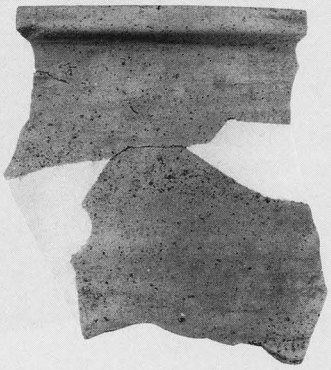
87

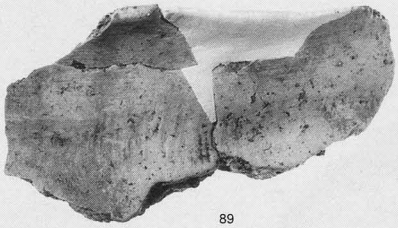
写真図版36　出土土器 7


7

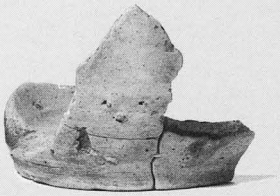
41

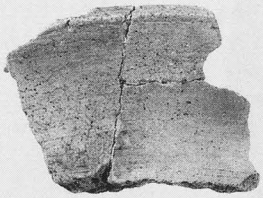

89

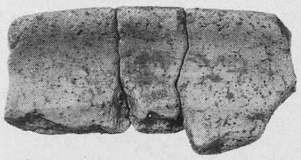

309

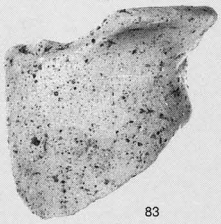

89

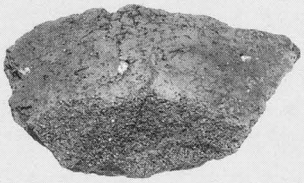
40

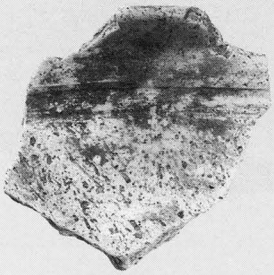

38

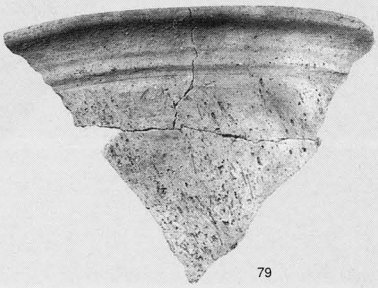

60


85

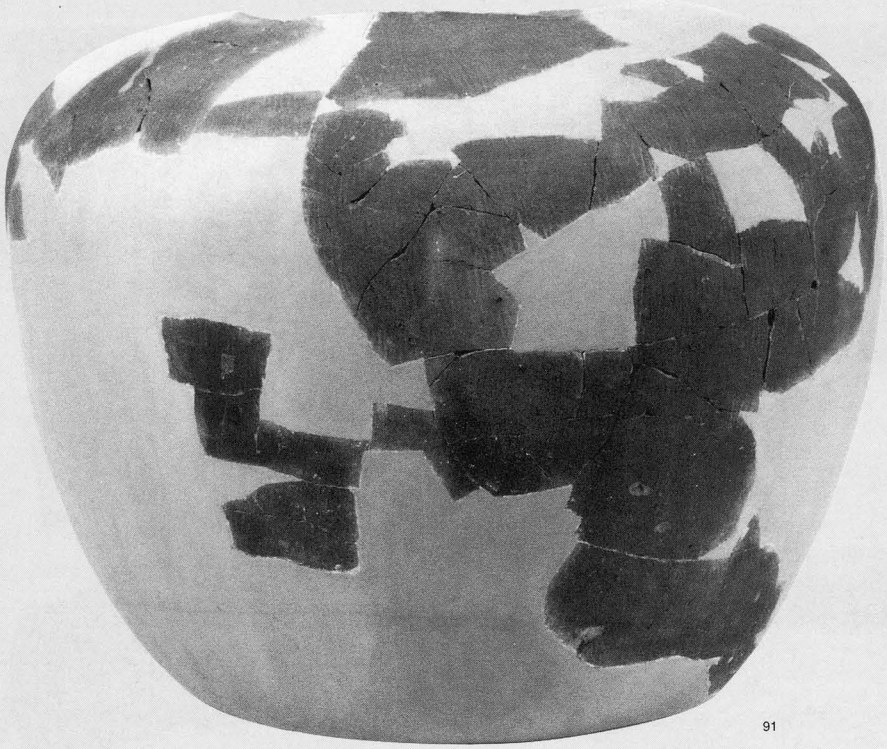

83


77

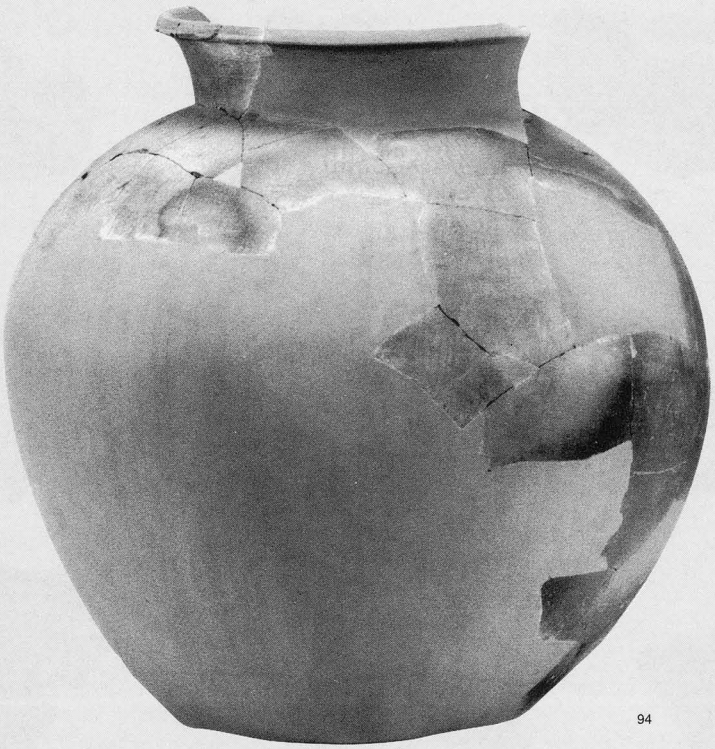

64


79

写真図版37　出土土器 8

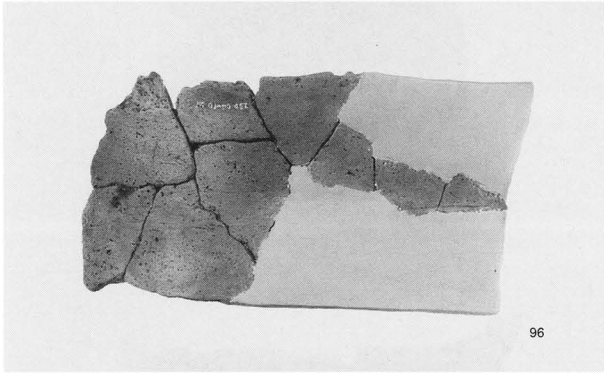


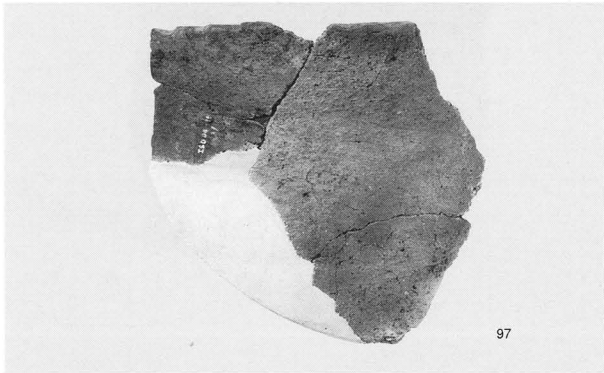
91

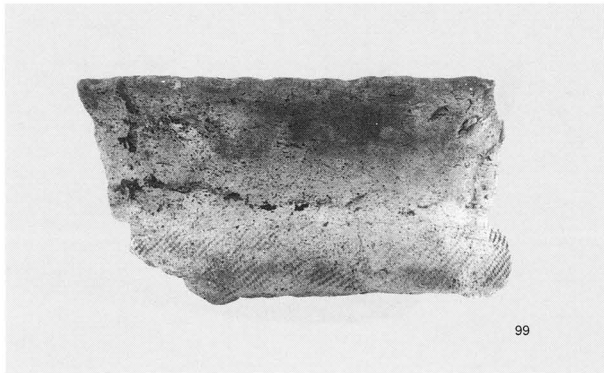


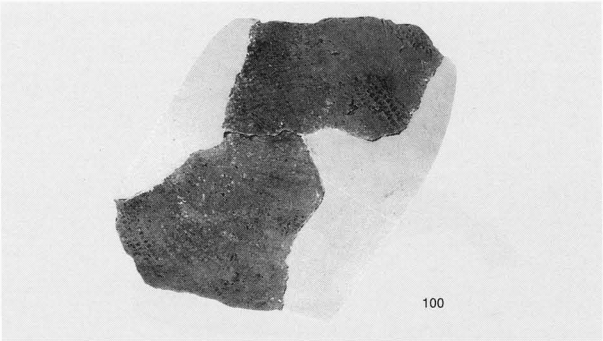
94

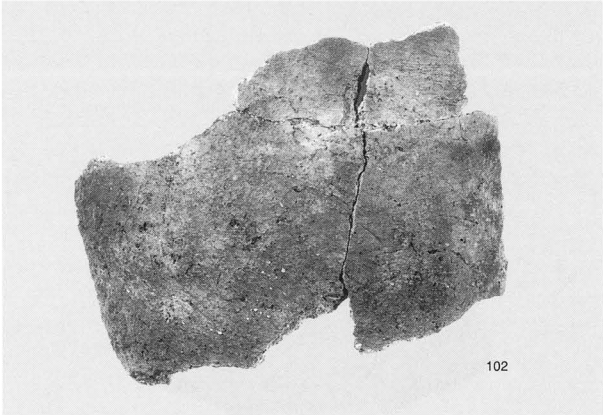
写真図版38　出土土器 9

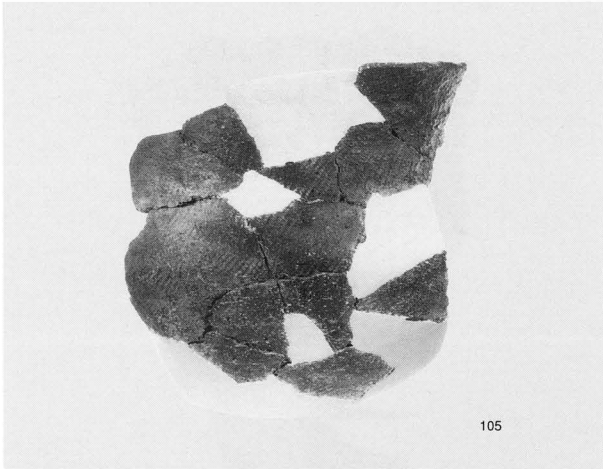


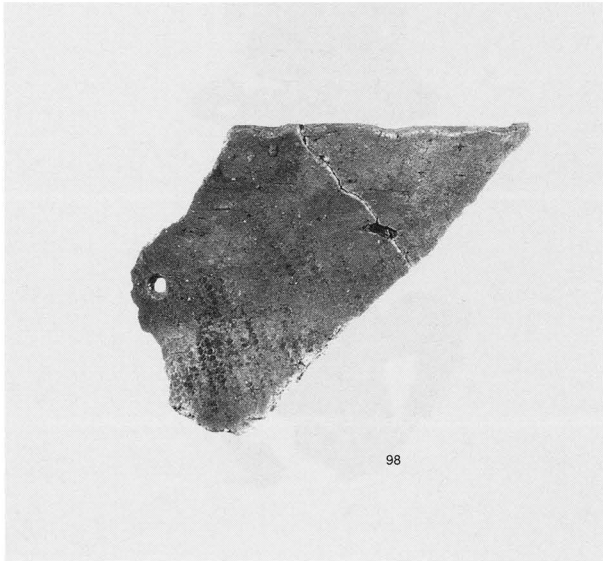




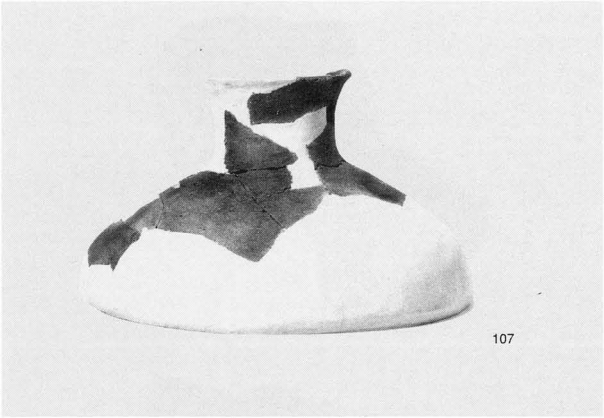


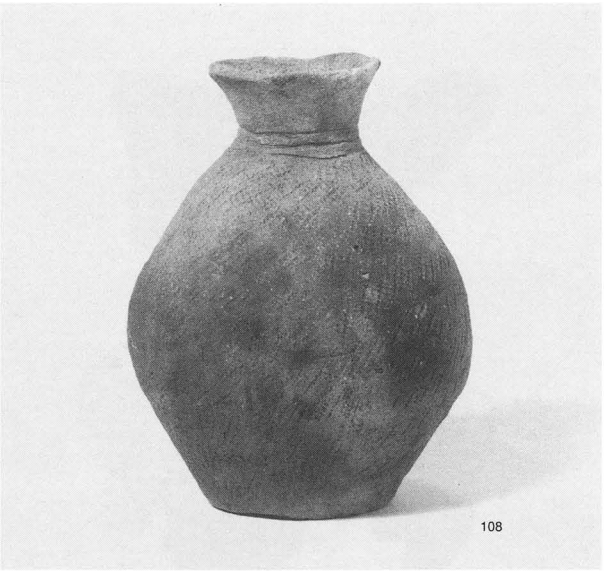


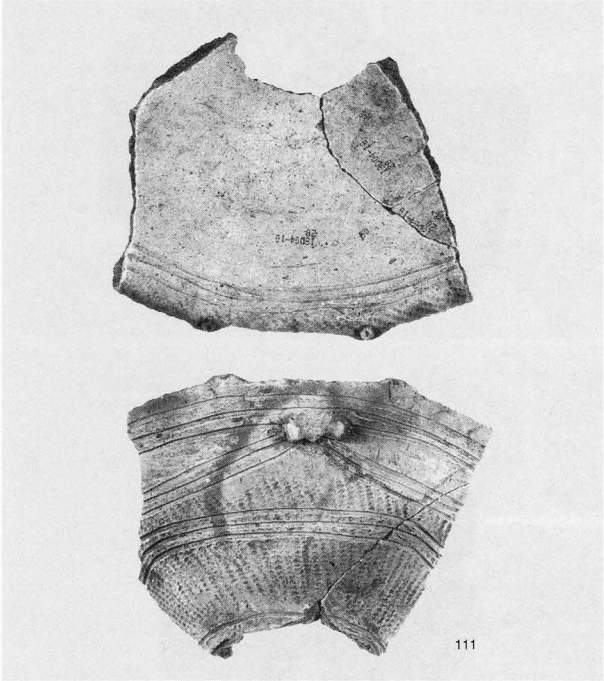


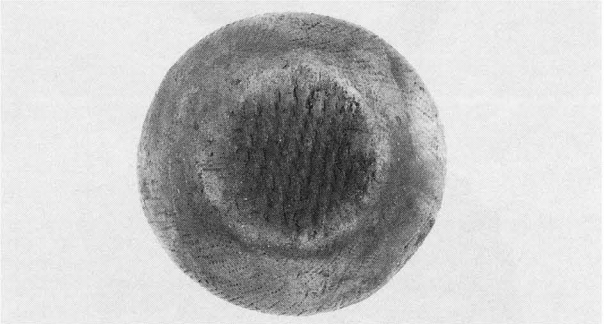


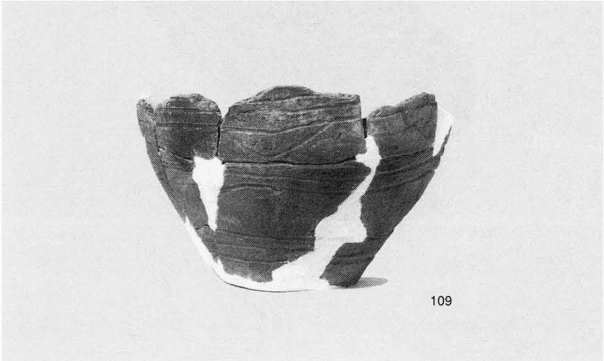
写真図版39　出土弥生土器１

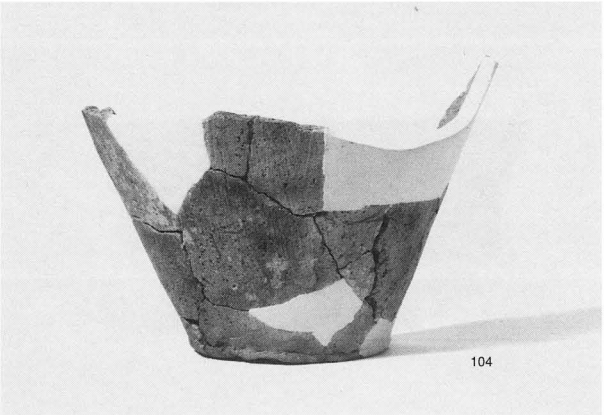




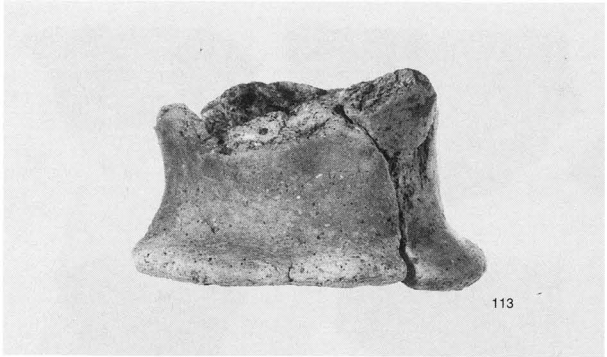


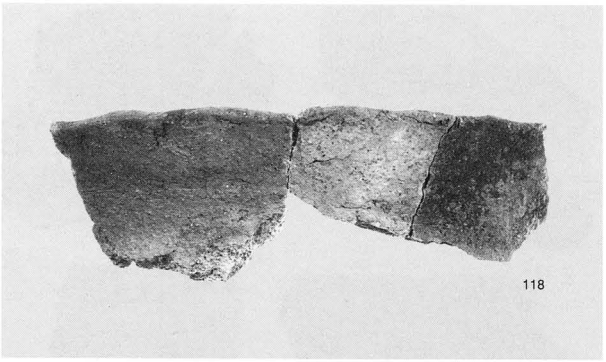


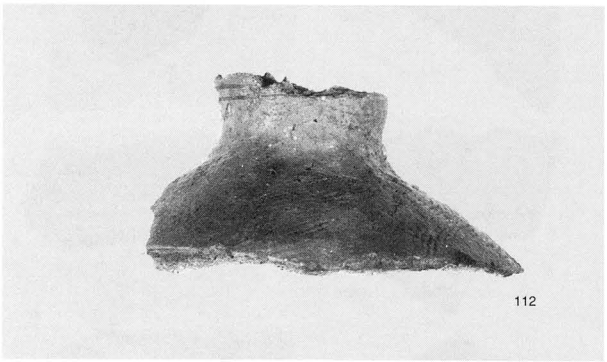


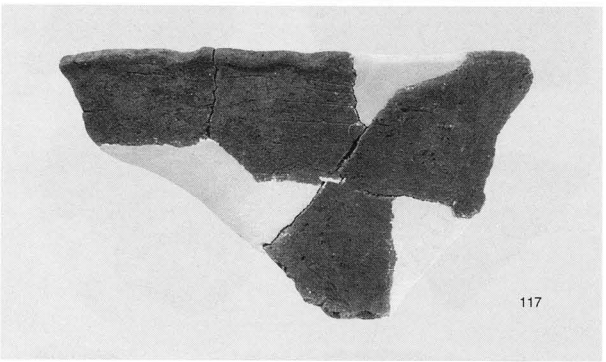


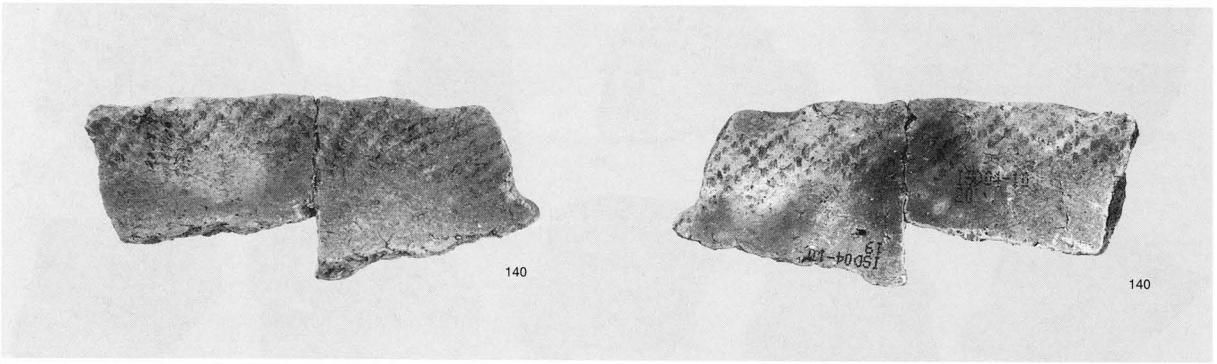
写真図版40　出土弥生土器 2

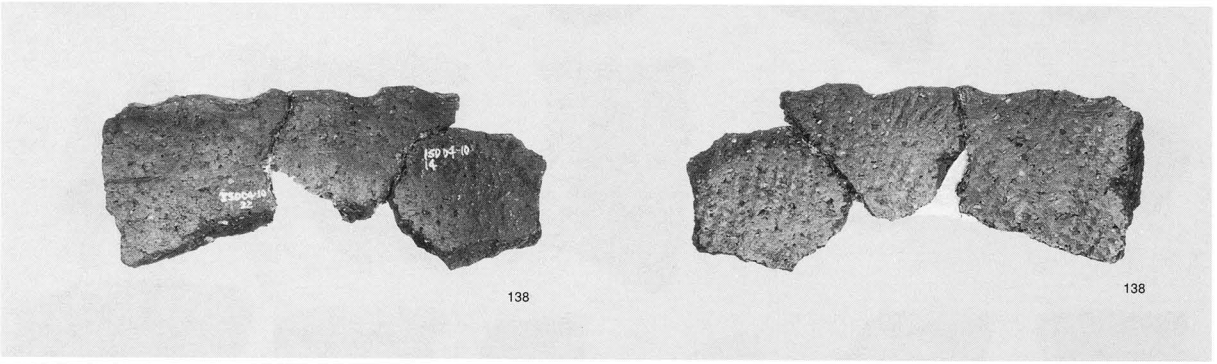


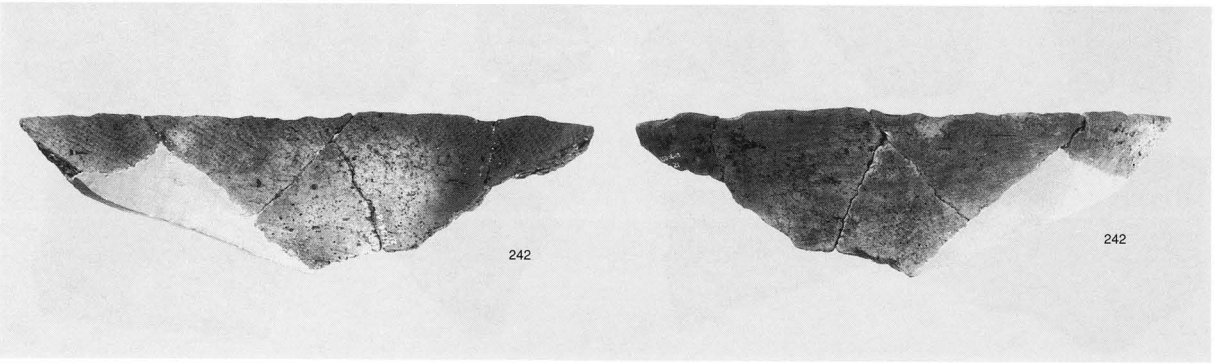




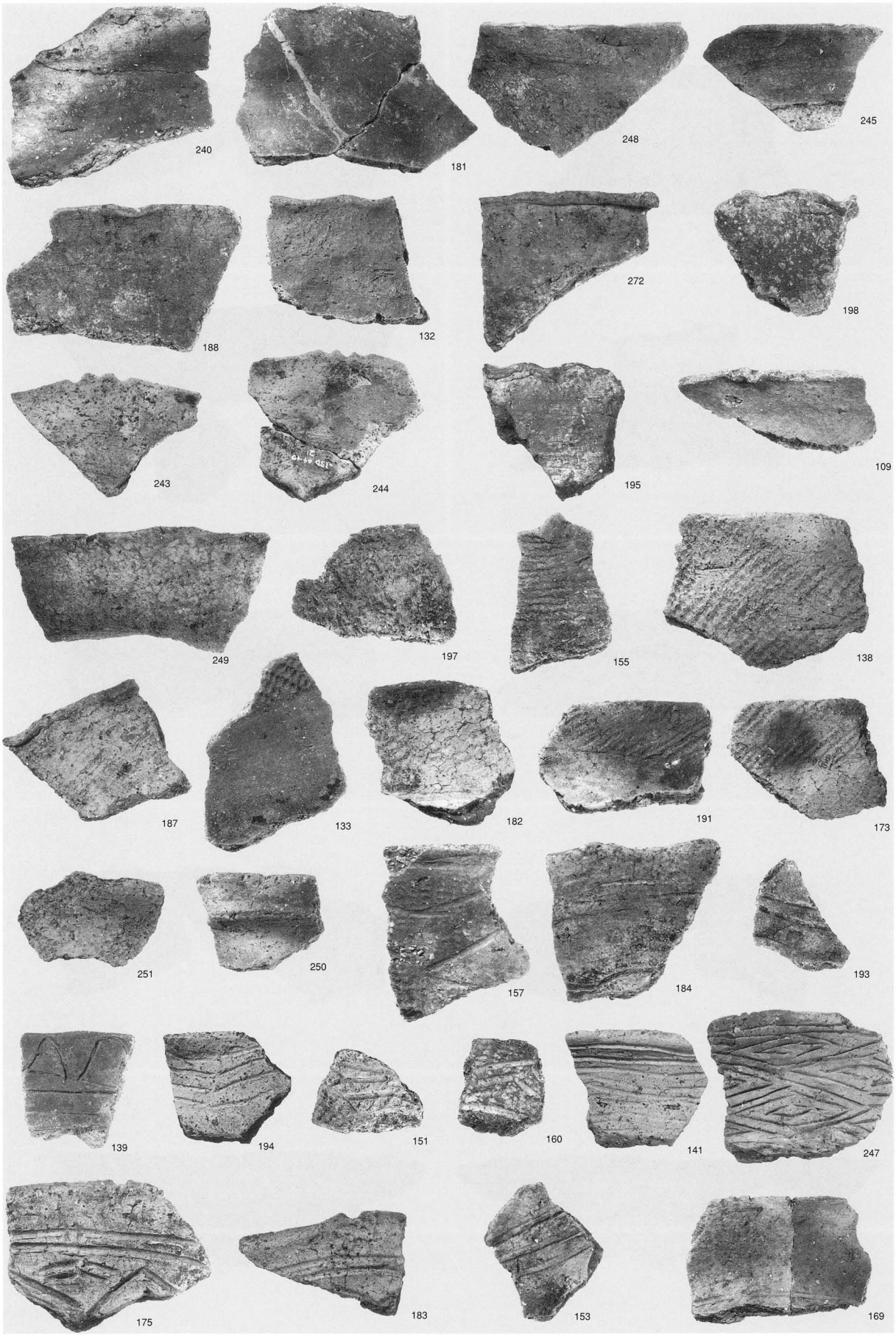




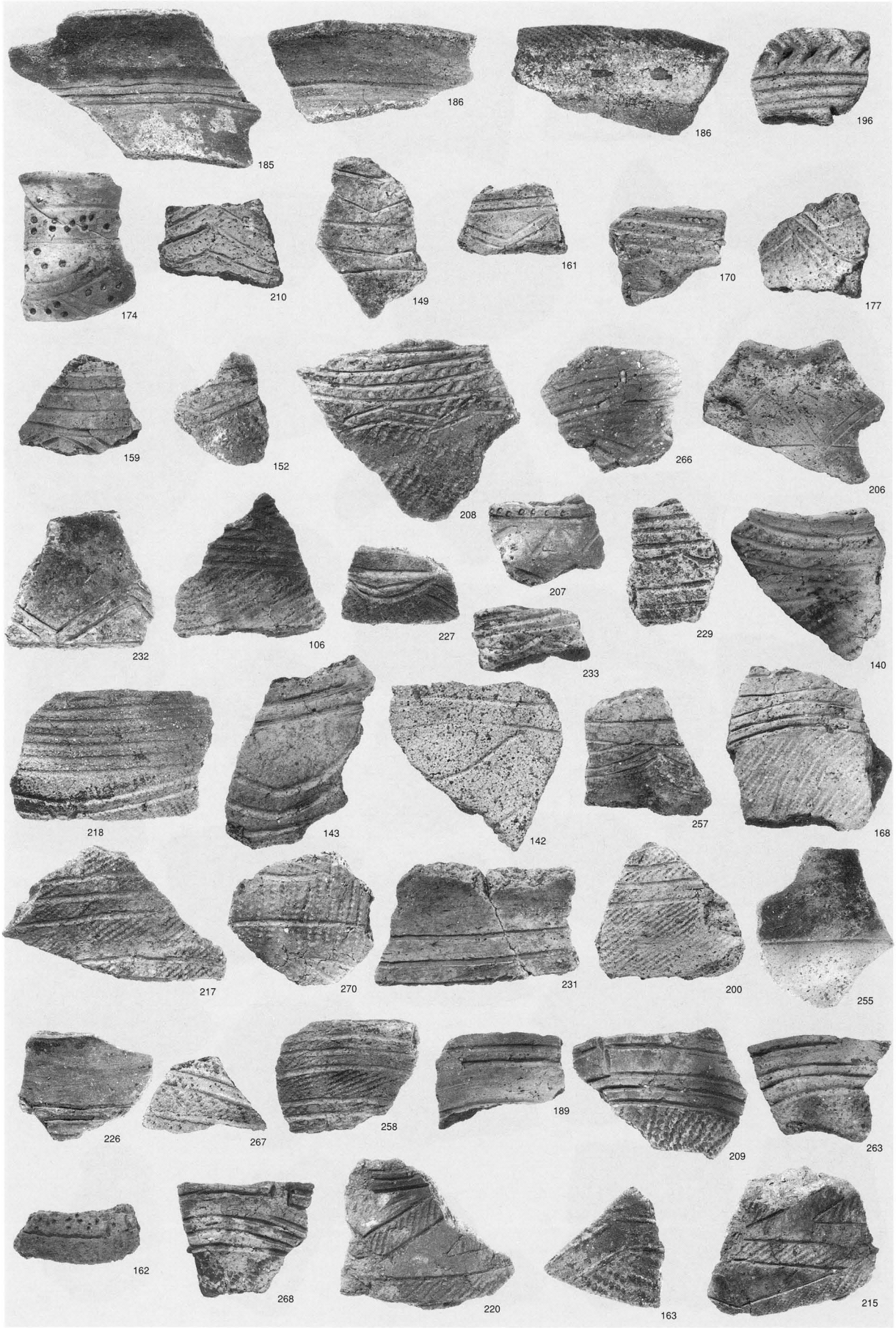




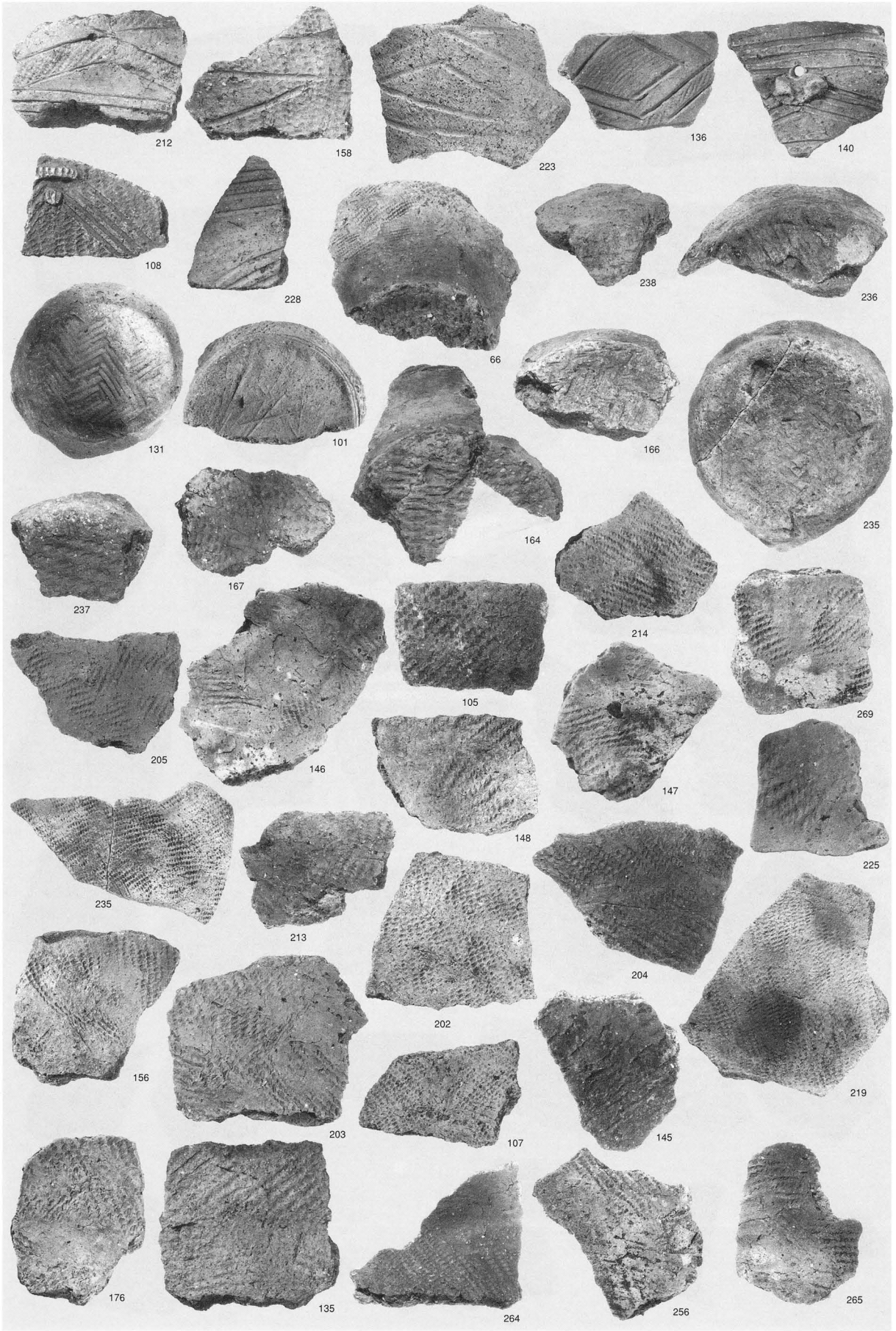
写真図版41　出土弥生土器 3



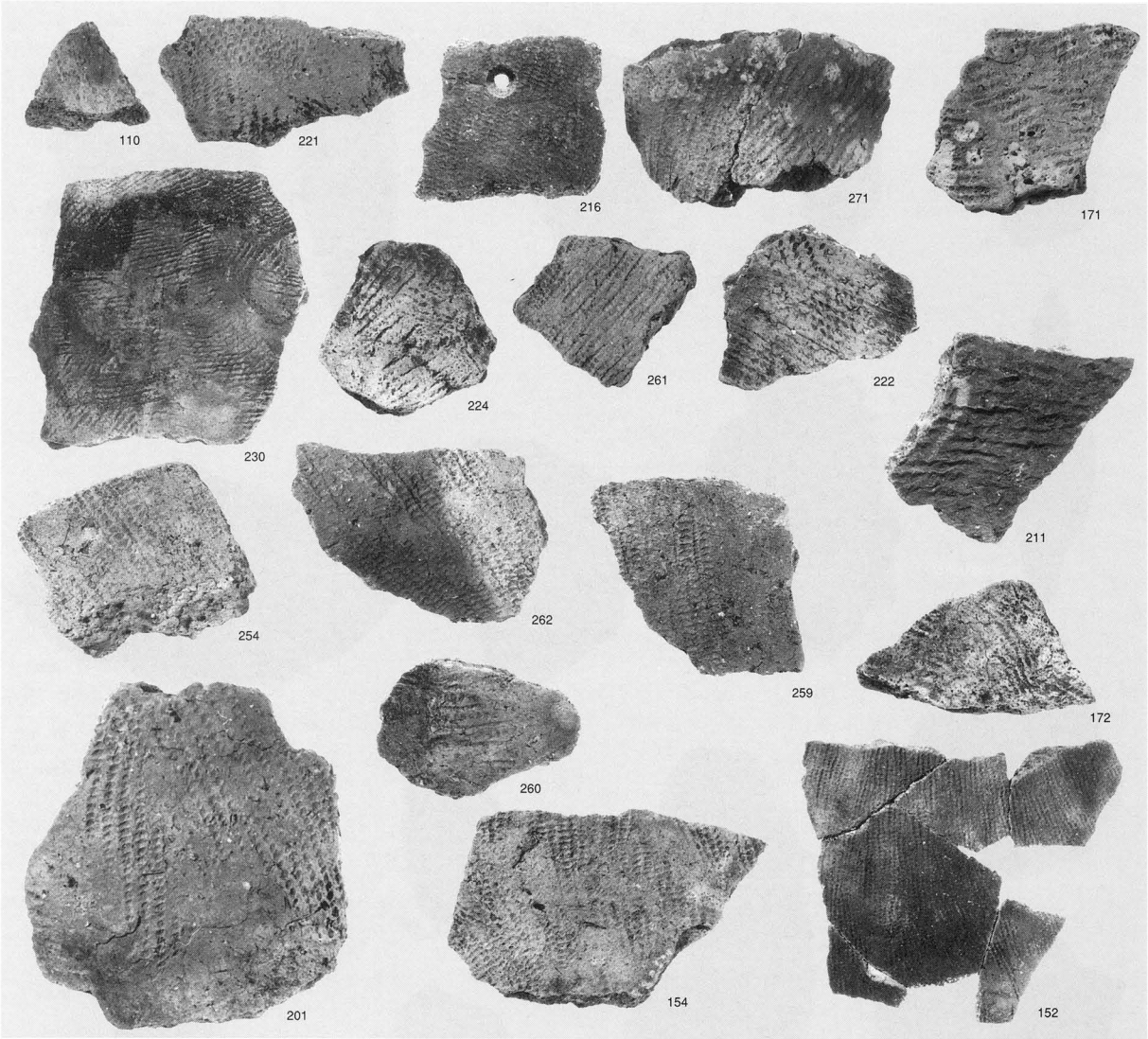
写真図版42　出土弥生土器 4

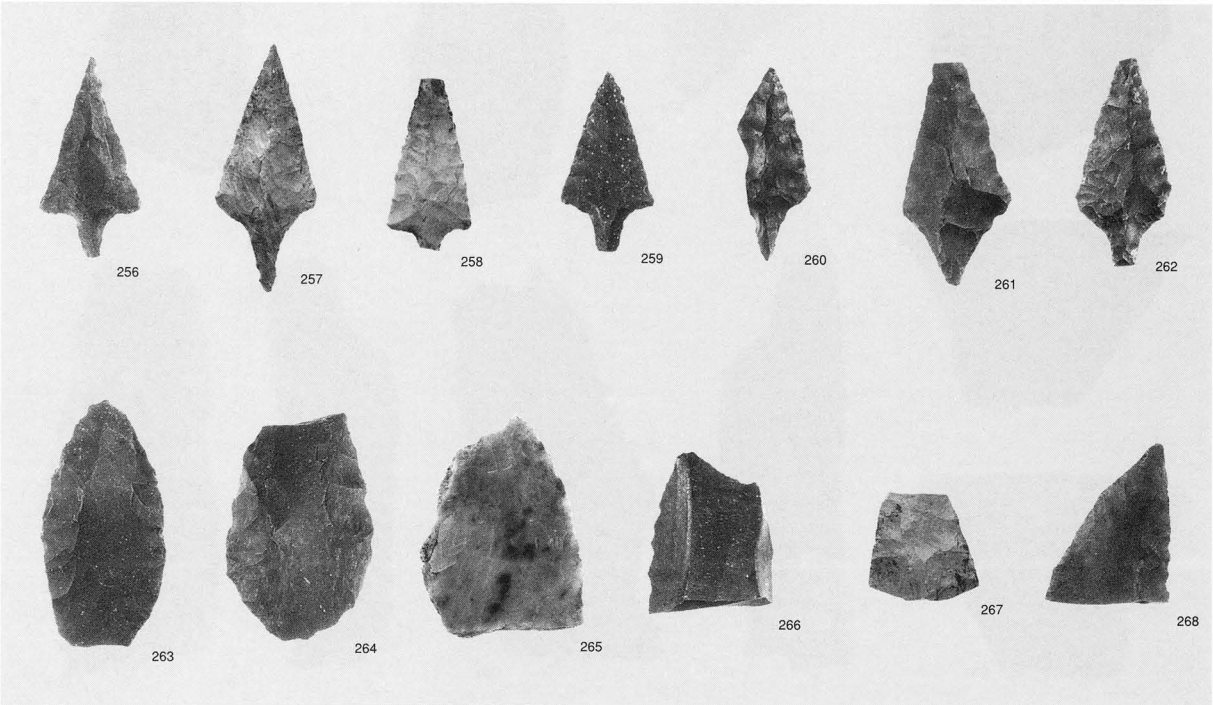


写真図版43　出土弥生土器 5

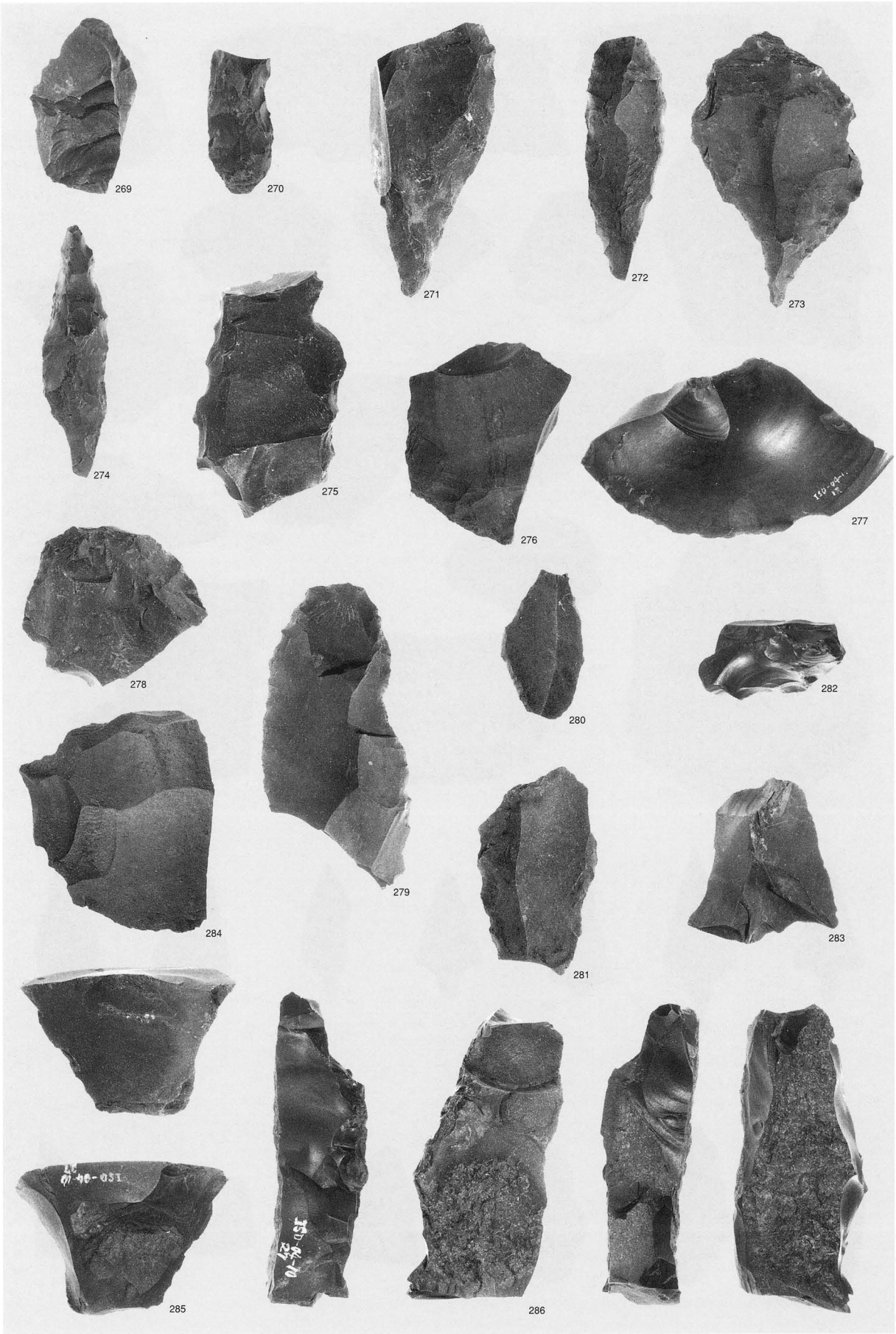


写真図版44　出土弥生土器 6

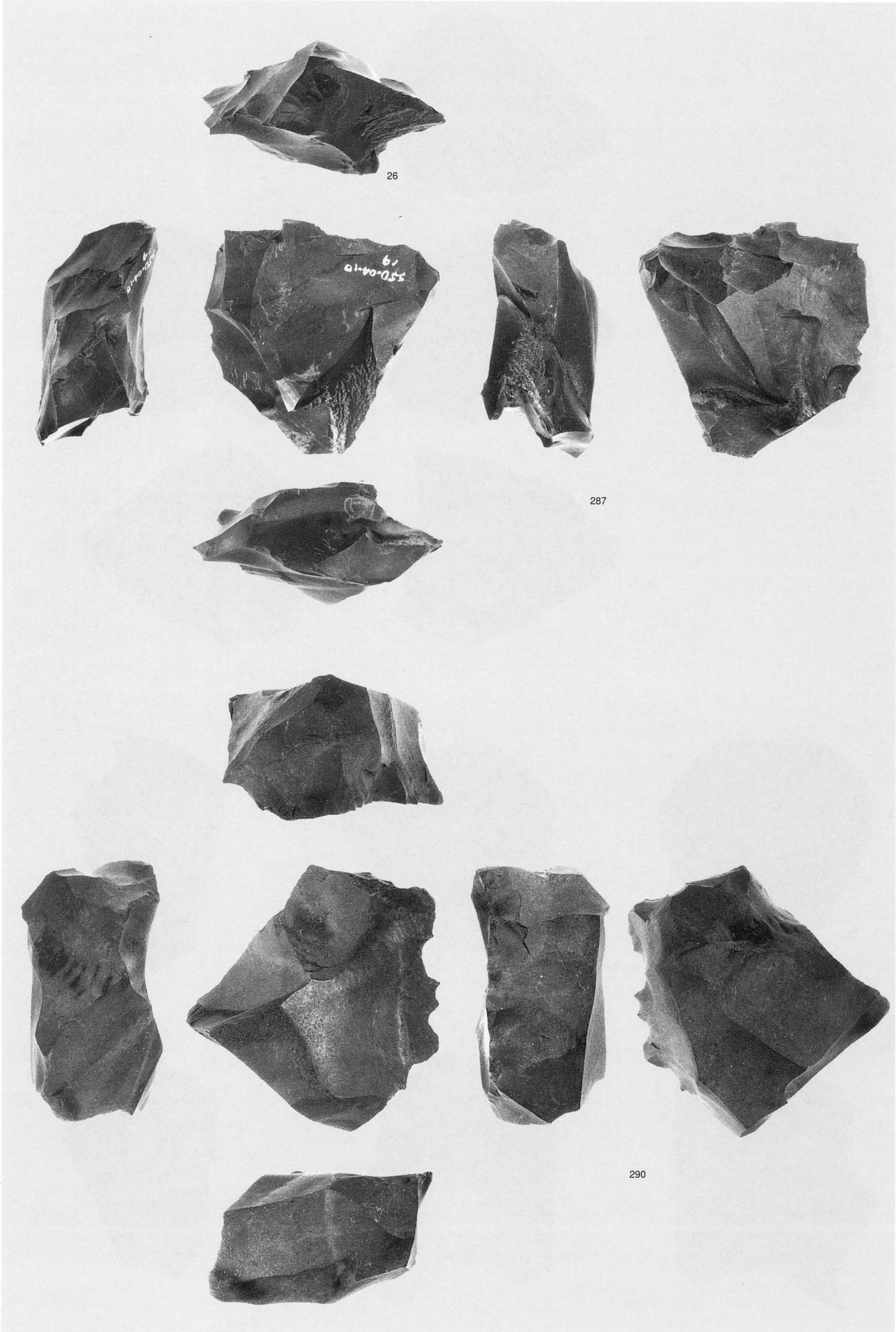




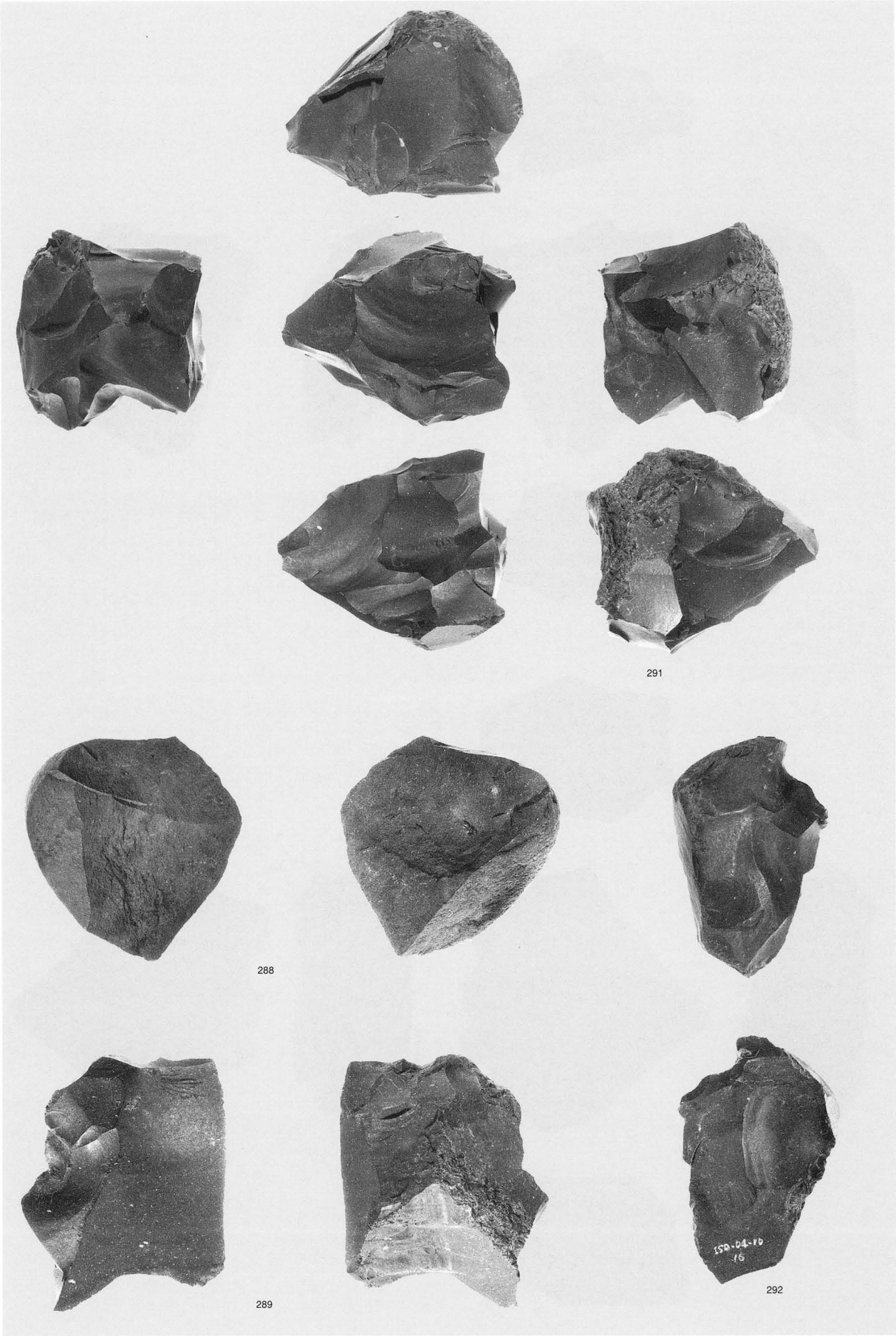
写真図版45　出土弥生土器7・出土石器 1



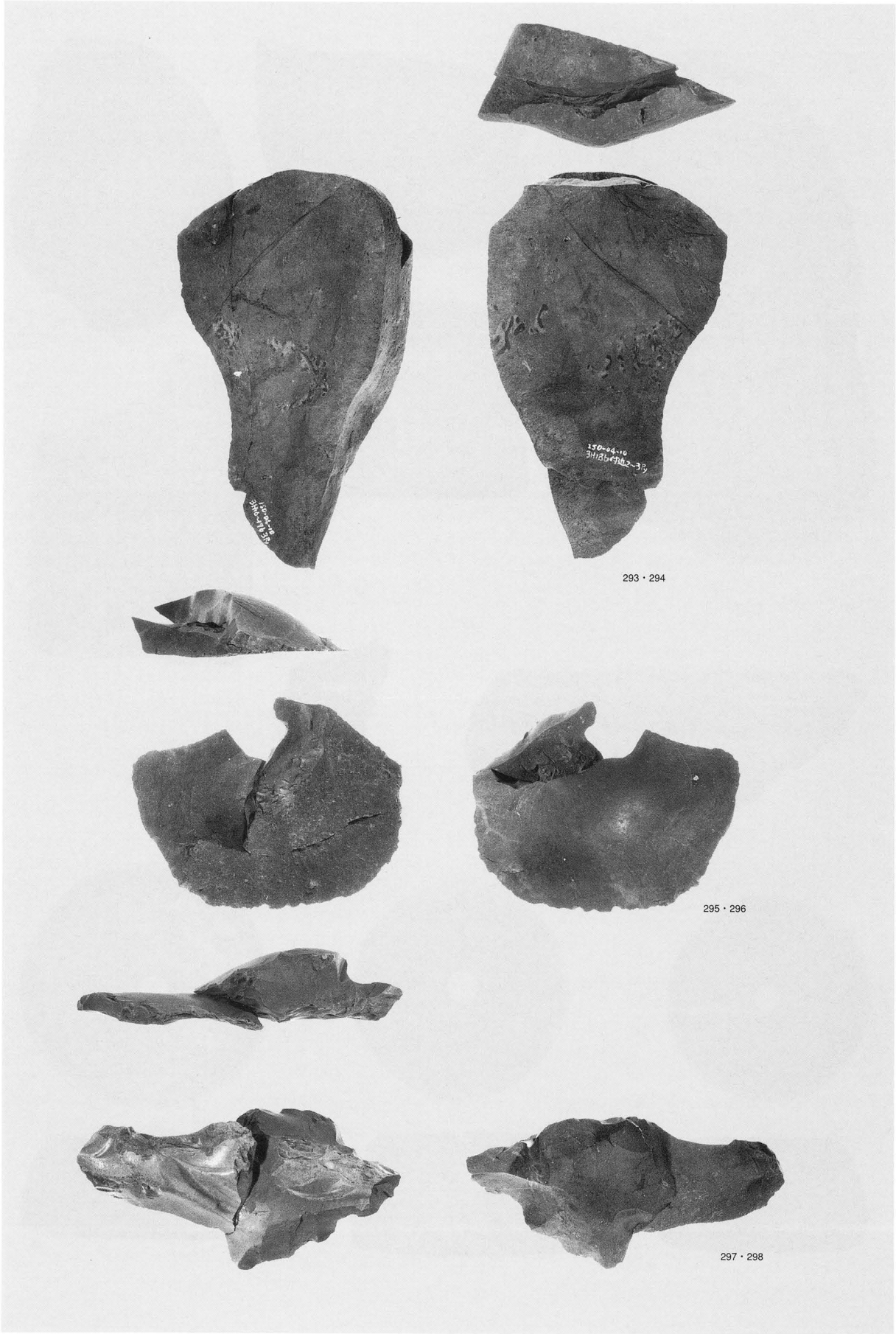
写真図版46　出土石器 2



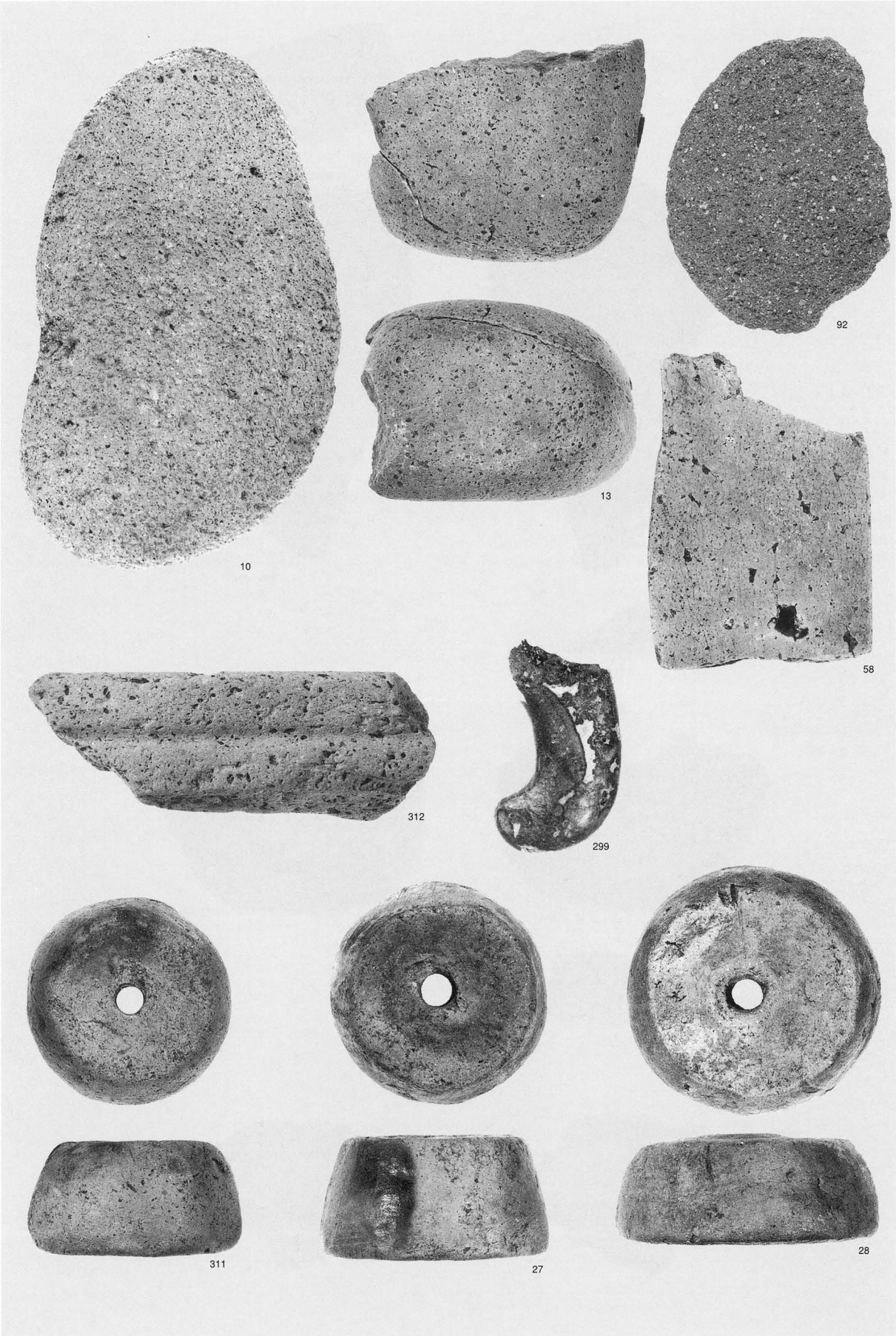
写真図版47　出土石器 3



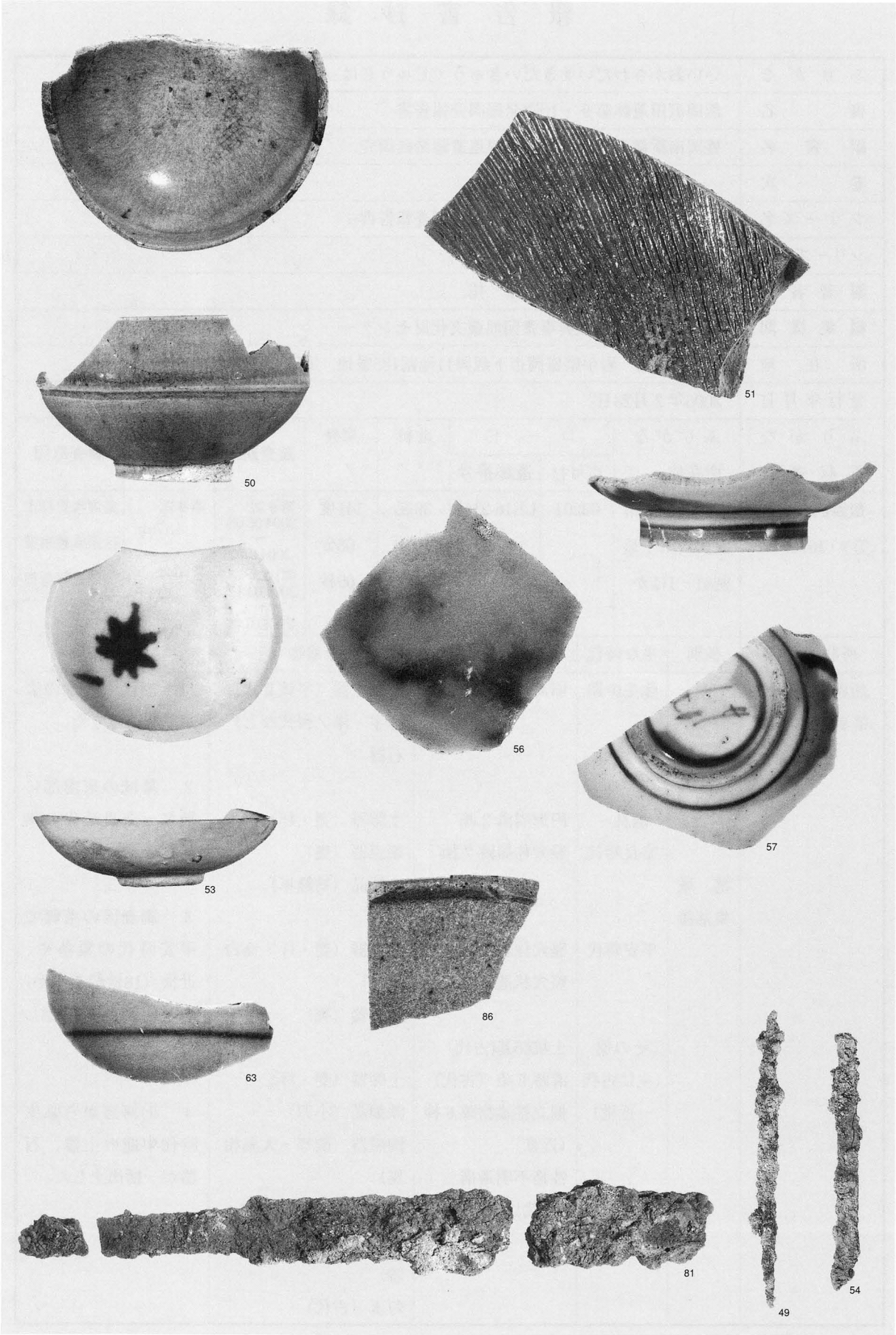
写真図版48　出土石器4



写真図版49　出土石器 5



写真図版50　出土土製品・石製品



写真図版51　出土陶磁器・鉄器

報告書抄録

ふりがな	いいおかさわだいせきだいきゅう・じゅうじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	飯岡沢田遺跡第９・10次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第489集
編著者名	西澤正晴・川又　晋・須原　拓
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	2006年２月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
飯岡沢田遺跡 第９・10次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田１地 割81－1ほか	03201	LE16-2169	39度 40分 44秒	141度 08分 09秒	第９次 2004.06.06 ～ 2004.07.06 第10次 2004.04.12 ～ 2004.07.06	第９次 1,179㎡ 第10次 4,626㎡	盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯岡沢田遺跡 第９・10次調査	墓域 集落跡	弥生中期	旧河道	弥生土器（宇鉄Ⅱ式併行宇・津ノ台式など） 石器	１　古代の墓域の広がりを確認した。 ２　墓域の東南部に飛鳥～奈良時代の集落を確認した。 ３　調査区の東側で平安時代の集落や、近世（18世紀ごろか）の建物跡群を確認した。 ４　旧河道から弥生時代中期の土器、石器が一括出土した。
		飛鳥～奈良時代	円形周溝２基 竪穴住居跡７棟	土師器（甕・坏） 須恵器（甕） 土製品（紡錘車）	
		平安時代	竪穴住居跡３棟 竪穴状遺構１棟	土師器（甕・坏・高台付坏） 須恵器（甕）	
		その他（主に古代～近世）	土坑65基(古代) 溝跡６条（古代） 掘立柱建物跡６棟（近世） 性格不明遺構（古代以前か）	土師器（甕・坏） 鉄製品（小刀） 陶磁器（碗等・大堀相馬） 古銭（寛永通寶） 土器（縄文土器～土師器） 勾玉（古代）	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第489集

飯岡沢田遺跡第９・10次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成18年２月22日
発　行　平成18年２月28日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話（019）638－9001
ＦＡＸ（019）638－8563

印　刷　㈲ジロー印刷企画
〒020-0066　岩手県盛岡市上田二丁目17番４号
電　話（019）651－6644

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006